

山 梨 県 大 月 市

# 大月遺跡第7・8次調査

— 大月バイパス建設に伴う発掘調査報告書 —



2 0 0 0 ・ 3

山 梨 県 教 育 委 員 会  
建設省関東地方建設局甲府工事事務所

山 梨 県 大 月 市

# 大月遺跡第7・8次調査

— 大月バイパス建設に伴う発掘調査報告書 —

2 0 0 0 ・ 3

山 梨 県 教 育 委 員 会  
建設省関東地方建設局甲府工事事務所

# 序

大月市大月に所在する大月遺跡は、古くより縄文時代の遺跡として知られている遺跡ですが、この度、建設省による大月バイパス建設のため、その南端部分が発掘調査されることになりました。

調査の結果、縄文時代、奈良・平安時代、中・近世の各時代にわたる遺構や遺物の存在が明らかとなりましたが、この内縄文時代では後期を中心とする大規模な配石群や埋甕、そして谷内に廃棄されたと見られる多量の遺物群などが見つかりました。また奈良・平安時代では掘立柱建物跡1棟や土坑群が、中世では多数の土坑が見つかっており、これらは先年の調査で見つかっている本遺跡内の遺構と密接に関係するものだと考えられます。

こうした大月遺跡の各地点との調査結果を総合することによって、この遺跡に去来した各時代における人々の土地利用の仕方が具体的に明らかとなってきました。

また発見された遺物の中には、多数の土器や石器などがありますが、その中の一種である縄文時代の磨石や石皿といった食料加工を行う道具に対して残存脂肪分析をしたところ、これらはイノシシやタヌキ、モズやツグミといった動物の卵や肉などをつぶすのに使用されたことがわかってきました。このことは当時こうした動物質の食料が肉団子のような食品に加工されて食べられていたことを推測させます。また現代の急須のような形で液体を入れる容器である注口土器に対しても同様の分析をした結果、イノシシとニホンジカの脂肪を半々に混ぜたものが入っていたことが判明し、その利用方法の一端が具体的にわかってきました。

こうしたことは今回の発掘調査で明らかになった成果のごく一部に過ぎず、この他にも多くの新たな事実を明らかにすることができました。

この発掘調査にあたっては、建設省甲府工事事務所、大月市関係者各位、地元の皆様などから多大なご配慮・ご考慮をいただきました。また足かけ3カ年にもわたる長期間でしたが、最初の年には40度近い猛暑の中で、そして最終年度には記録史上初めてという1mを越す積雪の中での調査となりました。こうした暑さ寒さをいとわず連日の屋外作業に従事された地元作業員の皆様など、お世話になった多くの方に改めてお礼を申し上げたいと思います。

平成12年（2000年）3月

山梨県埋蔵文化財センター

所 長 大 塚 初 重

# 例 言

- 1 本書は、山梨県大月市大月二丁目10-1161・662外に所在する、大月遺跡第7・8次調査における埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、建設省による大月バイパス建設に先立って実施されたもので、調査期間は、第7次調査が平成7年(1995年)9月25日～平成8年(1996年)1月19日(I区・II区)、および平成9年(1997年)9月16日～平成10年(1998年)2月13日(II区)、第8次調査が平成8年(1996年)6月5日～8月30日および同年12月4日～平成9年(1997年)1月21日である。  
なお、平成7年度(1995年度)および平成9年度(1997年度)に実施した発掘の調査次数は、年報(山梨県埋蔵文化財センター1996)においては第6次としていたが、その後改めて調整した結果、第7次とする事となった(山梨県埋蔵文化財センター1997、山梨県1998)ので、本書で訂正しておきたい。
- 3 発掘調査は第7次調査を小林公治・高野佳起・大谷満水・長田雅巳(山梨県埋蔵文化財センター文化財主事)が、第8次調査を笠原みゆき・伊藤伸一(山梨県埋蔵文化財センター文化財主事)が担当した。また本書の挿図作成・原稿執筆は、第7次調査については小林が、第8次調査については笠原が中心となって行ったが、この他、小林広和・野代幸和・古屋勝之・保坂康夫(山梨県埋蔵文化財センター文化財主事)、三田村美彦(山梨県立考古博物館学芸員)、網倉邦生(山梨県埋蔵文化財センター嘱託)の助力を得た。また全体的な編集は小林が行った。なお、文末には執筆者名を記載した。
- 4 発掘調査および整理作業にあたっては、下記の各位・諸機関から多大なるご指導・ご協力をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する次第である(敬称略・五十音順)。  
石井寛、上杉陽、榑原功一、杉本正文、鈴木稔、富岡直人、奈良泰史、福田正人  
大月市教育委員会、大月市都市計画課、都留市教育委員会、山梨県教育委員会学校施設課、山梨県立都留高等学校
- 5 発掘調査および報告書作成作業は、小林安典・雨宮一二三・伊藤順子・井上武・井上久子・今泉久・奥野久代・小澤千夏子・小俣吉広・加藤寿亀子・小鷹侑子・近藤みち子・佐々木栄子・佐々木富士子・佐藤あさ子・佐藤友紀・佐藤美須子・佐野洋介・清水真寿美・清水光子・清水満・志村君子・志村恵子・白川義明・鈴木美智恵・鈴木八重子・高鳥英子・高鳥はま子・田代源次・中込星子・中込みち子・中村九二・中山京子・名取洋子・西室春子・平井大三・平川涼子・藤本しおり・古屋和喜子・松村恭子・宮武亨・吉村公子・渡辺和子・渡辺麗子が従事した(敬称略)。
- 6 今次の大月遺跡に関しては、本報告に先立つものとして年報・遺跡発表会要旨・新聞記事等があるが、本報告書の内容が正式なものとなる。
- 7 遺構の所属時期については、主に遺構検出面によって判断している。しかしながら奈良・平安時代と中世の遺構に関しては、この時期の出土遺物ごく僅少であるため、その分離が不確実な可能性がある。
- 8 第7次調査においては、多量の出土遺物の出土状況に対する調査後の再検討を可能とするため、基本的に光波測距機を利用したコンピュータシステムにより3次元データとして記録した。利用システムは、発掘調査時の記録には、平成7年度が「サイトII」(コンピューターシステム社(京都):BASIC版)を、平成9年度は「遺跡管理システム」(シン技術コンサル(札幌):ウィンドウズ版)を利用し、整理作業時は前者のデータを後者に統合して図化等を行った。
- 9 調査範囲面積および掘立柱建物跡の柱穴内範囲面積については、プランメータ(TAMAYA Planix5000)を使用して測定した。
- 10 挿図で使用したスクリーントーンの凡例については必要に応じて図中に示した。また遺物の分布図で黒丸(●)は土器、黒四角(■)は石器を意味する。
- 11 本発掘調査・報告書に関わる記録図面・写真・出土遺物・電子記録等は、山梨県埋蔵文化財センターに保管している。
- 12 第7次調査出土石器の石材同定は、帝京大学山梨文化財研究所河西学氏に委託し、肉眼観察による同定結果を得た。
- 13 出土遺物に対する残存脂肪分析は、(株)ズコーシャに委託し分析結果を得た。
- 14 土層注記の色調表現は、『新版標準土色帳』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修)に準拠した。
- 15 挿図上における北は、すべて座標北を示している。
- 16 図示した遺構の縮尺は、溝・敷石住居跡・掘立柱建物跡1/60、土坑1/40、焼土遺構1/40、集石1/40、遺構全体図1/200を基本とし、遺物の縮尺は、縄文時代土器は1/3を基本として大形品は1/4・1/6で、小形石器(石鏃等)は2/3、大形石器(打斧・磨石・石皿等)は1/3を基本とし、大形品は1/4、奈良・平安時代土器・鉄製品・陶磁器類は1/4、古銭は1/2で行った。
- 17 焼土遺構としたのは、土坑内・確認面上などで焼土が検出された遺構である。このため、形状的には土坑の範疇に入るものも含まれている。
- 18 発掘調査時には調査次数ごと、また時代の新しい方から調査順に遺構名を付けていったが、本報告に当た

り全体を統合するため遺構名が重複するものが生じ混乱をきたすので、新たに調査次数および地区ごとに遺構番号を振り直した。調査時点の旧遺構名・番号と本報告書内での新遺構名・番号の対応関係は以下の通りとなっている。

### 第7次調査時と本書での遺構名対応表

#### 縄文時代ⅠA区

調査年度	発掘調査時の遺構名⇒本報告書中の遺構名	調査年度	発掘調査時の遺構名⇒本報告書中の遺構名
H7(1995)	第1号焼土遺構(SF1)⇒第1号焼土遺構(SF1)	H7(1995)	第57号土坑(SK57)⇒第5号土坑(SK5)
H7(1995)	第2号焼土遺構(SF2)⇒第2号焼土遺構(SF2)	H7(1995)	第58号土坑(SK58)⇒第6号土坑(SK6)
H7(1995)	第3号焼土遺構(SF3)⇒第3号焼土遺構(SF3)	H7(1995)	第59号土坑(SK59)⇒第7号土坑(SK7)
H7(1995)	第4号焼土遺構(SF4)⇒第4号焼土遺構(SF4)	H7(1995)	第60号土坑(SK60)⇒第8号土坑(SK8)
H7(1995)	第5号焼土遺構(SF5)⇒第5号焼土遺構(SF5)	H7(1995)	第61号土坑(SK61)⇒第9号土坑(SK9)
H7(1995)	第6号焼土遺構(SF6)⇒第6号焼土遺構(SF6)	H7(1995)	第62号土坑(SK62)⇒第10号土坑(SK10)
H7(1995)	第49号土坑(SK49)⇒第1号土坑(SK1)	H7(1995)	第63号土坑(SK63)⇒第11号土坑(SK11)
H7(1995)	第54号土坑(SK54)⇒第2号土坑(SK2)	H7(1995)	第64号土坑(SK64)⇒第12号土坑(SK12)
H7(1995)	第55号土坑(SK55)⇒第3号土坑(SK3)	H7(1995)	第65号土坑(SK65)⇒第13号土坑(SK13)
H7(1995)	第56号土坑(SK56)⇒第4号土坑(SK4)		

#### 縄文時代ⅡA区

調査年度	発掘調査時の遺構名⇒本報告書中の遺構名	調査年度	発掘調査時の遺構名⇒本報告書中の遺構名
H9(1997)	第1号敷石住居跡(SI01)⇒第1号敷石住居跡(SI01)	H7(1995)	第23号土坑(SK23)⇒第17号土坑(SK17)
H7(1995)	第1号焼土遺構(SF1)⇒第7号焼土遺構(SF7)	H7(1995)	第24号土坑(SK24)⇒第18号土坑(SK18)
H7(1995)	第2号焼土遺構(SF2)⇒第8号焼土遺構(SF8)	H7(1995)	第25号土坑(SK25)⇒第19号土坑(SK19)
H9(1997)	第3号焼土遺構(SF3)⇒第9号焼土遺構(SF9)	H7(1995)	第26号土坑(SK26)⇒第20号土坑(SK20)
H9(1997)	第3号焼土遺構(SF2)⇒第10号焼土遺構(SF10)	H7(1995)	第27号土坑(SK27)⇒第21号土坑(SK21)
H9(1997)	第4号焼土遺構(SF4)⇒第11号焼土遺構(SF11)	H9(1997)	第22号土坑(SK22)⇒第22号土坑(SK22)
H9(1997)	第5号焼土遺構(SF5)⇒第12号焼土遺構(SF12)	H9(1997)	第23号土坑(SK23)⇒第23号土坑(SK23)
H9(1997)	第6号焼土遺構(SF6)⇒第13号焼土遺構(SF13)	H9(1997)	第24号土坑(SK24)⇒第24号土坑(SK24)
H9(1997)	第7号焼土遺構(SF7)⇒第14号焼土遺構(SF14)	H9(1997)	第25号土坑(SK25)⇒第25号土坑(SK25)
H9(1997)	第8号焼土遺構(SF8)⇒第15号焼土遺構(SF15)	H9(1997)	第26号土坑(SK26)⇒第26号土坑(SK26)
H9(1997)	第9号焼土遺構(SF9)⇒第16号焼土遺構(SF16)	H9(1997)	第27号土坑(SK27)⇒第27号土坑(SK27)
H9(1997)	第1号集石遺構(SS1)⇒第1号集石遺構(SS1)	H9(1997)	第28号土坑(SK28)⇒第28号土坑(SK28)
H9(1997)	第2号集石遺構(SS2)⇒第2号集石遺構(SS2)	H9(1997)	第29号土坑(SK29)⇒第29号土坑(SK29)
H9(1997)	第3号集石遺構(SS3)⇒第3号集石遺構(SS3)	H9(1997)	第30号土坑(SK30)⇒第30号土坑(SK30)
H7(1995)	第18号土坑(SK18)⇒第14号土坑(SK14)	H9(1997)	第31号土坑(SK31)⇒第31号土坑(SK31)
H7(1995)	第21号土坑(SK21)⇒第15号土坑(SK15)	H9(1997)	第32号土坑(SK32)⇒第32号土坑(SK32)
H7(1995)	第22号土坑(SK22)⇒第16号土坑(SK16)	H9(1997)	第33号土坑(SK33)⇒第33号土坑(SK33)

#### 奈良・平安時代ⅠA区

調査年度	発掘調査時の遺構名⇒本報告書中の遺構名	調査年度	発掘調査時の遺構名⇒本報告書中の遺構名
H7(1995)	第36号土坑(SK36)⇒第34号土坑(SK34)	H7(1995)	第46号土坑(SK46)⇒第42号土坑(SK42)
H7(1995)	第37号土坑(SK37)⇒第35号土坑(SK35)	H7(1995)	第48号土坑(SK48)⇒第43号土坑(SK43)
H7(1995)	第38号土坑(SK38)⇒第36号土坑(SK36)	H7(1995)	第50号土坑(SK50)⇒第44号土坑(SK44)
H7(1995)	第40号土坑(SK40)⇒第37号土坑(SK37)	H7(1995)	第51号土坑(SK51)⇒第45号土坑(SK45)
H7(1995)	第41号土坑(SK41)⇒第38号土坑(SK38)	H7(1995)	第52号土坑(SK52)⇒第46号土坑(SK46)
H7(1995)	第42号土坑(SK42)⇒第39号土坑(SK39)	H7(1995)	第53号土坑(SK53)⇒第47号土坑(SK47)
H7(1995)	第43号土坑(SK43)⇒第40号土坑(SK40)	H7(1995)	第5号溝(SD5)⇒第5号溝(SD5)
H7(1995)	第45号土坑(SK45)⇒第41号土坑(SK41)		

#### 中世ⅠA区

調査年度	発掘調査時の遺構名⇒本報告書中の遺構名	調査年度	発掘調査時の遺構名⇒本報告書中の遺構名
H7(1995)	第1号土坑(SK1)⇒第48号土坑(SK48)	H7(1995)	第21号土坑(SK21)⇒第68号土坑(SK68)
H7(1995)	第2号土坑(SK2)⇒第49号土坑(SK49)	H7(1995)	第22号土坑(SK22)⇒第69号土坑(SK69)
H7(1995)	第3号土坑(SK3)⇒第50号土坑(SK50)	H7(1995)	第23号土坑(SK23)⇒第70号土坑(SK70)
H7(1995)	第4号土坑(SK4)⇒第51号土坑(SK51)	H7(1995)	第24号土坑(SK24)⇒第71号土坑(SK71)
H7(1995)	第5号土坑(SK5)⇒第52号土坑(SK52)	H7(1995)	第25号土坑(SK25)⇒第72号土坑(SK72)
H7(1995)	第6号土坑(SK6)⇒第53号土坑(SK53)	H7(1995)	第26号土坑(SK26)⇒第73号土坑(SK73)
H7(1995)	第7号土坑(SK7)⇒第54号土坑(SK54)	H7(1995)	第27号土坑(SK27)⇒第74号土坑(SK74)
H7(1995)	第8号土坑(SK8)⇒第55号土坑(SK55)	H7(1995)	第28号土坑(SK28)⇒第75号土坑(SK75)
H7(1995)	第9号土坑(SK9)⇒第56号土坑(SK56)	H7(1995)	第29号土坑(SK29)⇒第76号土坑(SK76)
H7(1995)	第10号土坑(SK10)⇒第57号土坑(SK57)	H7(1995)	第30号土坑(SK30)⇒第77号土坑(SK77)
H7(1995)	第11号土坑(SK11)⇒第58号土坑(SK58)	H7(1995)	第31号土坑(SK31)⇒第78号土坑(SK78)
H7(1995)	第12号土坑(SK12)⇒第59号土坑(SK59)	H7(1995)	第32号土坑(SK32)⇒第79号土坑(SK79)
H7(1995)	第13号土坑(SK13)⇒第60号土坑(SK60)	H7(1995)	第33号土坑(SK33)⇒第80号土坑(SK80)
H7(1995)	第14号土坑(SK14)⇒第61号土坑(SK61)	H7(1995)	第34号土坑(SK34)⇒第81号土坑(SK81)
H7(1995)	第15号土坑(SK15)⇒第62号土坑(SK62)	H7(1995)	第35号土坑(SK35)⇒第82号土坑(SK82)
H7(1995)	第16号土坑(SK16)⇒第63号土坑(SK63)	H7(1995)	第1号溝(SD1)⇒第1号溝(SD1)
H7(1995)	第17号土坑(SK17)⇒第64号土坑(SK64)	H7(1995)	第2号溝(SD2)⇒第2号溝(SD2)
H7(1995)	第18号土坑(SK18)⇒第65号土坑(SK65)	H7(1995)	第3号溝(SD3)⇒第3号溝(SD3)
H7(1995)	第19号土坑(SK19)⇒第66号土坑(SK66)	H7(1995)	第4号溝(SD4)⇒第4号溝(SD4)
H7(1995)	第20号土坑(SK20)⇒第67号土坑(SK67)		

#### 奈良・平安時代、中世ⅡA区

調査年度	発掘調査時の遺構名⇒本報告書中の遺構名	調査年度	発掘調査時の遺構名⇒本報告書中の遺構名
H7(1995)	第1号掘立柱建物跡(SB01)⇒第1号掘立柱建物跡(SB01)	H9(1997)	第3号土坑(SK3)⇒第103号土坑(SK103)
H7(1995)	第1号土坑(SK1)⇒第83号土坑(SK83)	H9(1997)	第4号土坑(SK4)⇒第104号土坑(SK104)
H7(1995)	第2号土坑(SK2)⇒第84号土坑(SK84)	H9(1997)	第5号土坑(SK5)⇒第105号土坑(SK105)
H7(1995)	第3号土坑(SK3)⇒第85号土坑(SK85)	H9(1997)	第6・7号土坑(SK6)⇒第106号土坑(SK106)
H7(1995)	第4号土坑(SK4)⇒第86号土坑(SK86)	H9(1997)	第8号土坑(SK8)⇒第107号土坑(SK107)
H7(1995)	第5号土坑(SK5)⇒第87号土坑(SK87)	H9(1997)	第9号土坑(SK9)⇒第108号土坑(SK108)
H7(1995)	第6号土坑(SK6)⇒第88号土坑(SK88)	H9(1997)	第10号土坑(SK10)⇒第109号土坑(SK109)
H7(1995)	第7号土坑(SK7)⇒第89号土坑(SK89)	H9(1997)	第11号土坑(SK11)⇒第110号土坑(SK110)
H7(1995)	第8号土坑(SK8)⇒第90号土坑(SK90)	H9(1997)	第12号土坑(SK12)⇒第111号土坑(SK111)
H7(1995)	第9号土坑(SK9)⇒第91号土坑(SK91)	H9(1997)	第13号土坑(SK13)⇒第112号土坑(SK112)
H7(1995)	第10号土坑(SK10)⇒第92号土坑(SK92)	H9(1997)	第14号土坑(SK14)⇒第113号土坑(SK113)
H7(1995)	第11号土坑(SK11)⇒第93号土坑(SK93)	H9(1997)	第15号土坑(SK15)⇒第114号土坑(SK114)
H7(1995)	第12号土坑(SK12)⇒第94号土坑(SK94)	H9(1997)	第16号土坑(SK16)⇒第115号土坑(SK115)
H7(1995)	第13号土坑(SK13)⇒第95号土坑(SK95)	H9(1997)	第17号土坑(SK17)⇒第116号土坑(SK116)
H7(1995)	第14号土坑(SK14)⇒第96号土坑(SK96)	H9(1997)	第18号土坑(SK18)⇒第117号土坑(SK117)
H7(1995)	第15号土坑(SK15)⇒第97号土坑(SK97)	H9(1997)	第19号土坑(SK19)⇒第118号土坑(SK118)
H7(1995)	第16号土坑(SK16)⇒第98号土坑(SK98)	H9(1997)	第20号土坑(SK20)⇒第119号土坑(SK119)
H7(1995)	第17号土坑(SK17)⇒第99号土坑(SK99)	H9(1997)	第21号土坑(SK21)⇒第120号土坑(SK120)
H7(1995)	第20号土坑(SK20)⇒第100号土坑(SK100)	H9(1997)	第1号溝(SD1)⇒第5号溝(SD5)
H9(1997)	第1号土坑(SK1)⇒第101号土坑(SK101)	H9(1997)	第2号溝(SD2)⇒第6号溝(SD6)
H9(1997)	第2号土坑(SK2)⇒第102号土坑(SK102)	H9(1997)	第3号溝(SD3)⇒第7号溝(SD7)

# 目 次

序	i
例言	iii
本文目次	v
挿図目次	vi
挿表目次	vi
図版目次	vi
第1章 序説	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の概要	1
第1項 調査の方法	1
第2項 遺跡の概要	3
第3節 遺跡の立地と環境	4
第1項 遺跡の立地	4
第2項 大月遺跡周辺の遺跡	5
第2章 検出された遺構	7
第1節 縄文時代の遺構	7
第1項 第7次調査Ⅰ区	7
第2項 第7次調査Ⅱ区	15
第3項 第8次調査	23
第2節 奈良・平安時代から中世の遺構	28
第1項 第7次調査Ⅰ区	28
第2項 第7次調査Ⅱ区	45
第3節 近世以降の遺構	52
第1項 第8次調査	52
第3章 出土遺物	55
第1節 縄文時代の遺物	55
第1項 第7次調査Ⅰ区	55
第2項 第7次調査Ⅱ区	69
第3項 第8次調査	80
第2節 奈良・平安時代の遺物	88
第1項 第7次調査	88
第2項 第8次調査	88
第3節 中・近世の遺物	88
第1項 第7次調査	88
第2項 第8次調査	88
第4章 まとめ	89
引用・参考文献	90

# 挿 図 目 次

第1図	調査区割り設定図	2	第45図	第106～112号土坑平・断面図	49
第2図	大月遺跡第1～8次調査区の位置	3	第46図	第113～120号土坑平・断面図	51
第3図	大月遺跡の位置と周辺の遺跡(1/50,000)	5	第47図	第8次調査近世遺構平・断面図(1)	53
第4図	IA区縄文時代遺構全体図	7	第48図	第8次調査近世遺構平・断面図(2)	54
第5図	IA区配石遺構平・断面図	8	第49図	IA区焼土遺構出土縄文土器	55
第6図	第1～6号焼土遺構平・断面図	9	第50図	IA区縄文土坑出土縄文土器	55
第7図	第1～6号土坑平・断面図	10	第51図	IA区縄文時代遺構外出土縄文土製品	56
第8図	第7～12号土坑平・断面図	11	第52図	IA区縄文時代遺構外出土縄文土器(1)	57
第9図	第13号土坑平・断面図	12	第53図	IA区縄文時代遺構外出土縄文土器(2)	58
第10図	IIA区縄文時代遺構全体図	13	第54図	IA区縄文時代遺構外出土縄文土器(3)	59
第11図	第1号敷石住居跡平・断面図	14	第55図	IA区縄文時代遺構外出土縄文土器(4)	60
第12図	第1号敷石住居跡炉平・断面図	15	第56図	IA区縄文時代遺構外出土縄文土器(5)	62
第13図	第1～3号集石遺構平・断面図	16	第57図	IA区縄文時代遺構外出土縄文土器(1)	63
第14図	第7～13号焼土遺構平・断面図	17	第58図	IA区縄文時代遺構外出土縄文土器(2)	64
第15図	第14～16号焼土遺構平・断面図	18	第59図	IA区縄文時代遺構外出土縄文土器(3)	65
第16図	第14～18号土坑平・断面図	19	第60図	IA区縄文時代遺構外出土縄文土器(4)	66
第17図	第19～22号土坑平・断面図	20	第61図	IA区縄文時代遺構外出土縄文土器(5)	67
第18図	第23～30号土坑平・断面図	21	第62図	第1号敷石住居跡出土縄文土器	68
第19図	第31～33号土坑平・断面図	22	第63図	第1号敷石住居跡出土縄文土器	68
第20図	IIA区包含層遺物出土状況図	22	第64図	IIA区縄文時代遺構出土縄文土器	69
第21図	第8次調査遺構全体図	24	第65図	IIA区縄文時代遺構出土縄文土器(1)	70
第22図	第8次調査縄文遺構平・断面図(1)	25	第66図	IIA区縄文時代遺構出土縄文土器(2)	70
第23図	第8次調査縄文遺構平・断面図(2)	26	第67図	IIA区縄文時代遺構外出土縄文土製品	71
第24図	第8次調査縄文遺構平・断面図(3)	27	第68図	IIA区縄文時代遺構外出土縄文土器(1)	71
第25図	IA区奈良・平安時代遺構全体図	29	第69図	IIA区縄文時代遺構外出土縄文土器(2)	72
第26図	第34～38号土坑平・断面図	30	第70図	IIA区縄文時代遺構外出土縄文土器(3)	73
第27図	第39～41号土坑平・断面図	31	第71図	IIA区縄文時代遺構外出土縄文土器(4)	74
第28図	第42～47号土坑平・断面図	32	第72図	IIA区縄文時代遺構外出土縄文土器(5)	75
第29図	第5号溝平・断面図	33	第73図	IIA区縄文時代遺構外出土縄文土器(1)	76
第30図	IA区中世遺構全体図	34	第74図	IIA区縄文時代遺構外出土縄文土器(2)	77
第31図	第48～51・53・78号土坑平・断面図	35	第75図	IIA区縄文時代遺構外出土縄文土器(3)	78
第32図	第52・54～57・69号土坑平・断面図	36	第76図	IIA区縄文時代遺構外出土縄文土器(4)	79
第33図	第63～68・70号土坑平・断面図	37	第77図	IIA区縄文時代遺構外出土縄文土器(5)	80
第34図	第72～74・80号土坑平・断面図	38	第78図	遺構外出土縄文土器	80
第35図	第58～62・71・75～77・79号土坑平・断面図	39	第79図	第8次調査出土縄文土器(1)	81
第36図	第81・82号土坑平・断面図	40	第80図	第8次調査出土縄文土器(2)	82
第37図	第1～4号溝平・断面図	41	第81図	第8次調査出土縄文土器(3)	83
第38図	II区奈良・平安時代、中世遺構全体図	42	第82図	第8次調査出土縄文土器(4)	84
第39図	第1号掘立柱建物跡平・断面図	43	第83図	第8次調査出土縄文土器(1)	84
第40図	第5・7号溝平・断面図	44	第84図	第8次調査出土縄文土器(2)	85
第41図	第6号溝平・断面図	45	第85図	第8次調査出土縄文土器(3)	86
第42図	第83～88号土坑平・断面図	46	第86図	第8次調査出土縄文土器(4)	87
第43図	第89～97号土坑平・断面図	47	第87図	第7次調査出土中・近世遺物	88
第44図	第98～105号土坑平・断面図	48			

# 挿 表 目 次

第1表	大月遺跡周辺の遺跡	6	第4表	縄文時代土器観察表	91
第2表	第8次調査縄文時代土坑一覧表	23	第5表	縄文時代石器観察表	93
第3表	縄文時代土製品観察表	91	第6表	中・近世遺物観察表	94

# 図 版 目 次

図版表紙	遺跡遠景		図版7	第7次調査出土縄文土製品・土器
図版1	IA区配石遺構検出状況、第1号敷石住居跡		図版8	第7次調査出土縄文土器
図版2	第1号掘立柱建物跡、第5・6号溝		図版9	第7次調査出土縄文土器
図版3	第1号敷石住居跡、焼土遺構、土坑、集石遺構		図版10	第7次調査出土縄文土器・中世鉄製品、銭
図版4	完掘状況、遺物出土状況、土坑		図版11	第8次調査出土土器
図版5	第8次調査表土剥ぎ、B区作業風景		図版12	第8次調査出土土器
図版6	第8次調査土坑、集石、配石、ピット群、遺物出土状況			

# 第1章 序 説

## 第1節 調査に至る経緯

大月市を東西に横断する国道20号線（甲州街道）は、古くより江戸と甲州を結ぶ幹線として重要な役割を担ってきた。しかし、近年車両交通量が膨大に増加するにつれ、渋滞が頻繁に起こるようになったため、新たなバイパスの建設が必要となった。そこで現在の市街地を避ける形で国道南側の山地裾際を通すように、同市市街地東端の駒橋から中央自動車道大月インターチェンジのある花咲までバイパスが計画され、建設省によって建設されることになった。当事業は桂川より東を第Ⅰ期工事区間としているが、この予定地内には当初からいくつもの遺跡の存在が明らかであった。また本事業の実施に伴い大月市教育委員会によって平成5年2～3月にかけて試掘確認調査が実施された結果、各遺跡の分布状況が明らかとなった。この調査結果に基づき路線内各遺跡の本調査が計画され、まず同市駒橋に所在する御所遺跡の発掘調査が山梨県教育委員会によって平成7年（1995年）5月～9月にかけて実施された。大月遺跡の発掘調査はその二番目のものとして、山梨県埋蔵文化財センターが、買収済の用地約2,482㎡に対して平成7年（1995年）9月25日～平成8年（1996年）1月19日（Ⅰ区・Ⅱ区）、平成9年（1997年）9月16日～平成10年（1998年）2月13日（Ⅱ区）、平成8年（1996年）6月5日～8月30日および同年12月4日～平成9年（1997年）1月21日（A～C区）の足かけ3カ年の間に実施したものである。なお、平成7年度（1995年）に発掘調査された御所遺跡は平成9年度（1997年度）に報告書が刊行された（山梨県教育委員会1998）。

なお、今回の大月遺跡の調査では、担当者が年度および地区によって変わったため、主たる調査者の担当範囲ごとに第7次調査（Ⅰ・Ⅱ区）、第8次調査（A・B・C区）とした。

## 第2節 調査の概要

### 第1項 調査の方法

調査地には、南側山裾を東西に走る五ヶ堰用水から引水された用水路が、調査区を南北に分断するように2本走っていた。そこでこれらの水路を避け、また破損しないように余裕をとってⅠ・Ⅱ、A～Cの五つの調査区を設定した。さらに調査地内にはこの他に、使用中の電柱やそれを支える支線などが存在していたり、調査によって生ずる排土の置き場や作業関連車の駐車場も調査範囲内に設ける必要があったため、さらに各区を細分して調査区を設定し、調査にあたった。こうした各調査区を図面上で最終的に統合し、区分し直したのが第1図である。各区の面積は第7次調査ⅠA区（約356㎡）、ⅠB区（約125㎡）、ⅡA区（約790㎡）、ⅡB区（約26㎡）、第8次調査区A区（約484㎡）、B区（約642㎡）、C区（約59㎡）の合計約2,482㎡である。

調査を開始するにあたっては、まず公共座標に基づいた地区設定を行う必要があった。またこれには当面の調査範囲はもちろん、今後調査される可能性がある遺跡範囲全体もできるだけ含めて考える必要性から、地形に基づき遺跡範囲の推定を行うこととした。すなわち、調査地の南側はすぐに急峻な山地となり、また西側は富士急行鉄道により削平され、その西隣に並行して走る国道137号線を越えると桂川の段丘崖となっているため、遺跡範囲は主に北東方向に広がると予想された。そこでⅠ区の南西を基点（ $X=0$ 、 $Y=0$ ）とし、南北方向をX軸、東西方向をY軸とする国土座標系に合わせたメッシュを全体にかけた。さらに調査に際してはX・Y両軸の5mごとの交点に杭を打ち測量用に使用した。この基点の国土座標値は、 $X=-43815.000$ 、 $Y=40120.000$ である（第1図）。なお、調査時には基点から北に向かって5mごとに01から順に番号を割り当て、基点から東に向かっては同じく5mごとにAから順にアルファベットを振り、両者を総合して各スクエアの名前とし、遺物を取り上げる際などの補助とした。

調査区設定の後、重機により耕作土・攪乱層などの表土を除去し、引き続いて遺構確認を行なった。Ⅰ・Ⅱ区の南際は近代以降に山裾を切り取って造成したため現代の盛土層を除去すると直下にローム層が現れたが、

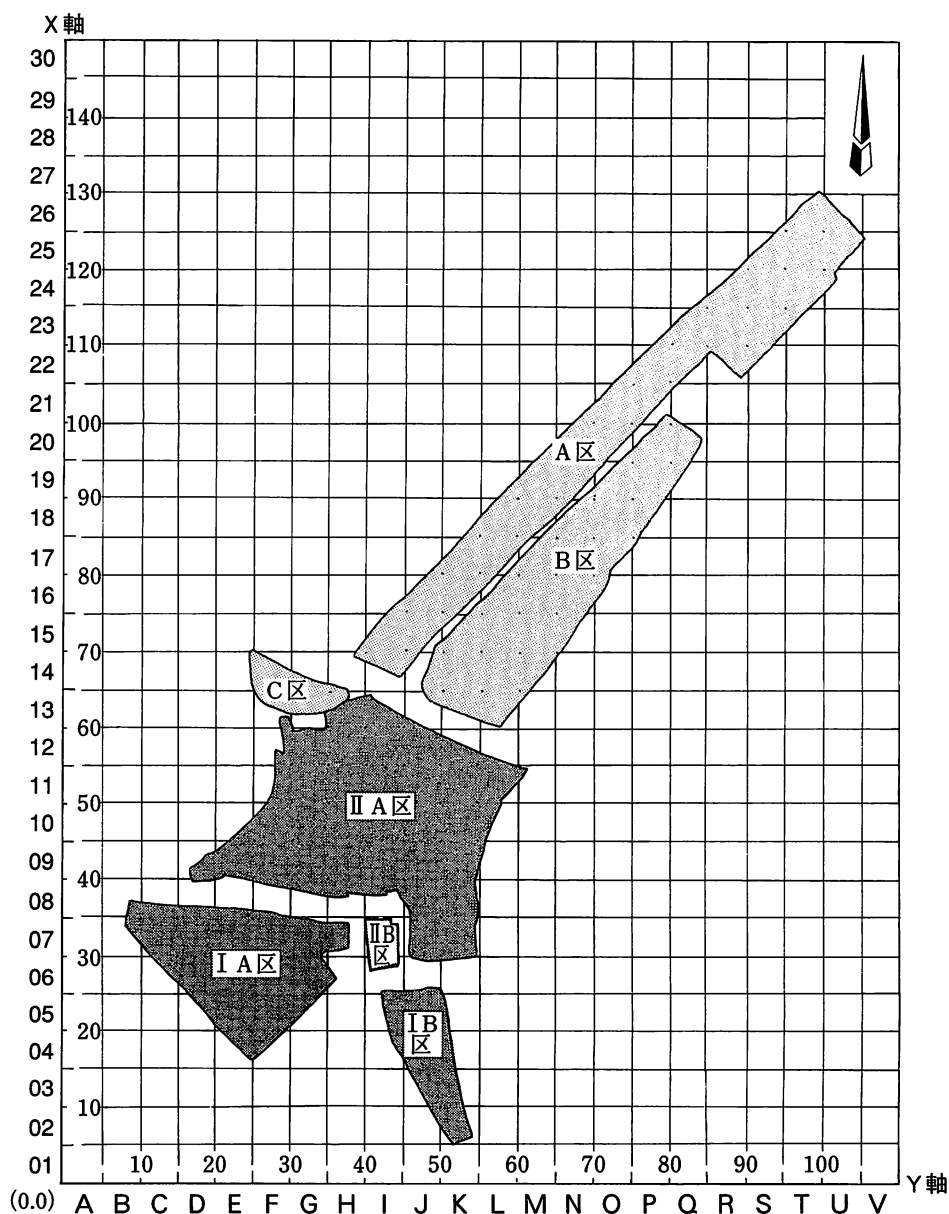


北側に向かうにつれ黒色土がかなり厚く堆積していた。さらに中世面以下の堆積土中には、かなり多量の遺物が厚い包含層となって形成されており、これらを移植ゴテ等による手掘り作業によって遺物を取り上げながら徐々に掘り下げていった。最終的に一部ではローム層上面まで下げたところ、Ⅱ区北端付近ではローム層上面がかなり急激に傾斜しており、本来は斜面地もしくは谷となっていた可能性がでてきた。こうした傾斜地にはその後かなり黒味の強い土壌が厚く堆積しており、そこには縄文時代後期の遺構が掘り込まれていたことから、こうした斜面ないしは谷の埋積は縄文時代後期以前に起きたと考えられる。またⅠA区の西側でもローム層上面は鉄道線路に向かって緩やかに傾斜する傾向が見られ、当初は川に向かって徐々に高度を下げていたものと推測される。しかし、縄文時代後期以後は各地区共に現在の地形に見られるようなかなり水平な地形面となっていたようであり、奈良・平安時代、中世の遺構はほぼ同じレベルで確認されている。

このように、第7・8次調査の各区は現地形が形成されるまでの過程が予想していたよりも複雑であり、また削平などのため、遺構が確認される面は堆積土の厚さや質的な違いから区ごとに若干異なっている。これについて簡単に記すと、第7次調査のⅠ区では上から中世面、古代面、縄文面（2面）の合計4面となり、同Ⅱ区では中世・古代面、縄文面（3面）の合計4面となっている。また第8次調査では基本的に一面であるが、C区ではⅡ区と同様である。も

っともⅡ区で縄文時代の確認面が3面存在したのは西側寄りの厚い堆積層が形成されている地点においてであって、東寄りではローム層まで縄文時代層が比較的薄いため、中世・古代面と縄文面（2面）の合計3面となっている。さらに縄文時代の下位面で確認された遺構が本来どの面から掘り込まれていたものなのかという点については明確でない。そこで本書では、同時代で複数の確認面がある場合には時代ごとにまとめて、提示することにしたい。

表土剥ぎ終了後、上面から遺構確認作業に入り、確認された遺構には種別に番号を付け、順次移植等による掘り下げ、図・写真による記録作業を行なった。遺構図および遺物微細図は平板および簡易やり方を適宜選択して実測し、出土した遺物は基本的に光波測距機によって個別に取り上げデジタル記録化した他、遺存状況の良好な場合には微細図によってもそれぞれ図化した。



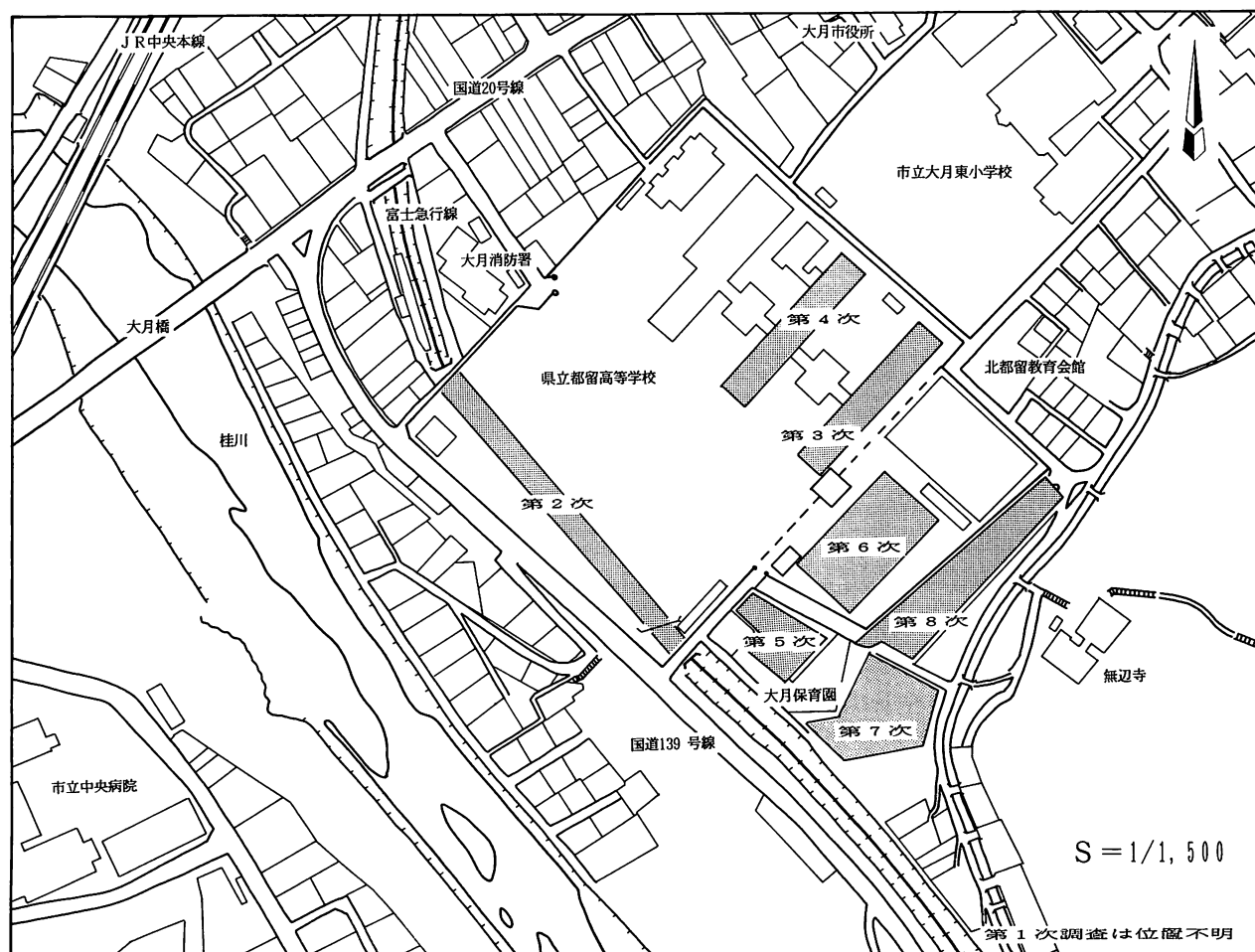
第1図 調査区割り設定図

## 第2項 遺跡の概要

大月遺跡は、大月市大月2丁目に所在する。山中湖に端を発した桂川は、大月市花咲で笹子川を併せ東遷するが、本遺跡はこの合流地点より600mほど上流、同河川右岸段丘面上に広がる現在の大月市街地西端に立地する。

大月遺跡の最初の調査は戦前に遡り、現在までに様々な主体者によって各地点の発掘が実施されてきた。しかしながら各地点の調査は種々の開発や契機によるものであり、調査地点が不明なものも存在しているため、一度それらすべてを実施年や主体者別に整理し、調査回数をつけて今後の調査での混乱を防ぐ必要が生じた。そこで笠原が年報（山梨県埋蔵文化財センター1997）および山梨県史資料編1遺跡編の編纂に際して、本遺跡の調査史を調べ、第6次調査までの回数をつけた（第2図）（山梨県1998：398-403）。本書で報告する調査はこれ以後に実施したため第7・8次調査としているが、この調査と一時的に並行し、第5次と第6次調査地の中間地点が大月市教育委員会によって平成8年（1996年）6～7月発掘され、これを第9次調査とし、やはり同じ平成8年（1996年）12月～同9年（1997年）1月まで山梨県教育委員会によって実施された県立都留高等学校の渡り廊下およびポンプ室地点の発掘調査を第10次調査としている（仁科1928・1935、山梨県1998、山梨県教育委員会1974・1992・1997、山梨県埋蔵文化財センター1997）。

こうした過去の調査の結果、本遺跡は縄文時代中・後期および奈良・平安時代の集落跡を中心とする遺跡であることが明らかとなってきた。第1次から第6次調査までに確認された遺構を列記すると、縄文時代の遺構には竪穴住居跡7軒、敷石住居跡7軒、配石遺構13ヶ所、石囲炉7基、環状遺構1ヶ所、土坑7基、集石遺構2ヶ所があり、奈良・平安時代の遺構としては竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡3棟、土坑数十基、溝1条が検出されている。また遺物には中期後半（加曾利E・曾利期）や後期（称名寺・堀之内・加曾利B期）の土器類



第2図 大月遺跡跡第1～8次調査区的位置

を中心とし、この他石器などが多数出土している。

さて、第7次調査IA区(約356m<sup>2</sup>)、IB区(約125m<sup>2</sup>)、IIA区(約790m<sup>2</sup>)、IIB区(約26m<sup>2</sup>)、および第8次調査区A区(約484m<sup>2</sup>)、B区(約642m<sup>2</sup>)、C区(約59m<sup>2</sup>)の合計約2,482m<sup>2</sup>を調査した結果、縄文時代中・後期、奈良・平安時代、中世、近世の各時代の遺構・遺物が検出された。以下、時代別に遺構と遺物に分けて、地区ごとの内容を列記したい。

縄文時代の遺構は、IA区ではほぼ調査区全面に広がる大規模な配石遺構、土坑13基、焼土遺構6ヶ所が検出されたが、IB区では表土層の中から背後の山地から転げ落ちたと見られる多数の大形礫が出土したに過ぎず、遺構は全く確認できなかった。IIA区では敷石住居跡1軒、土坑20基、焼土遺構9ヶ所、集石遺構3ヶ所、ピット27ヶ所が検出された。IIB区では遺構は確認されなかった。第8次調査では、土坑17基、焼土遺構2ヶ所、集石遺構3ヶ所、ピット29ヶ所が確認された。

本遺跡のこの地点の主たる特徴は、縄文時代遺構の僅少さと、対称的な極端に多量の遺物が集中して出土していることである。これらの遺物は時間的に可能な限り個別に3次元データを記録し取り上げたが、その総点数は4万5千点以上にも上る。この他に遺構内一括で取り上げた物などがあるので遺物総数はさらにこれを上回る。種別には土器類が圧倒的多数を占めており、個別に取り上げた遺物だけでも3万7千点ほどであるが、これに続いて石器類が8千点ほどとなっている。

時代別にはほとんどすべてが縄文時代のものであり、その中でも後期のものがかなりの比率をしめている。また、特徴的なのはこれらの土器類は遺構にほとんど伴わずに平面的に出土していることで、しかも多くは断片的な破片資料であり、時間的な問題もあるが接合作業により完形品近くまで復元されたものは相対的にかなり少ない。こうした遺構と遺物の在り方はこの地点が遺跡全体の中でどのような土地利用をされていたかを考える良好な材料であると言えるであろう。

奈良・平安時代の遺構は、IA区では土坑14基、溝1条、ピット47ヶ所、IIA区では掘立柱建物跡1棟、土坑38基、溝3条、ピット81ヶ所が検出された。このうちIA区の第5号溝とIIA区の第5号溝は方向および形状が類似しており、同一の溝であると考えられる。一方遺構に対し、奈良・平安時代の出土遺物は質・量ともにごくわずかである。遺構に伴うものはほとんどなく、多くは包含層中からの出土で、縄文時代遺物と混ざって出土している。このため時間的な問題や、甕については小破片識別の困難さから、この時代の遺物抽出は充分でなく、総数等は明らかではない。しかしながら、この時代の遺物はほぼすべて甲斐型の坏類などの土器類および須恵器壺・甕類の破片で、いずれもごく小さな破片である。

中世の遺構には、IA区では土坑35基、溝4条、ピット75ヶ所、IB区ではまったく検出されず、IIA区では上述のように確認面が奈良・平安時代遺構と同一であり、相互の分離が困難であることから、その種類と実数は明らかでないがあまり多くはないものと予想される。

中世の遺物としては、中国からの渡来銭および火打金といった金属製品を主体としているほか、陶器類の壺・甕類が若干あるに過ぎない。

近世では、第8次調査でピット列と配石遺構3ヶ所が確認されたにとどまり、遺物は寛永通寶1点のみである。

## 第3節 遺跡の立地と環境

### 第1項 遺跡の立地

大月遺跡は、現在大月市街地がのっている桂川右岸のやや広い段丘面西端に立地している。

遺跡の西側は現在は富士急行線の線路および国道139号線で隔てられているが、切り立った段丘崖となっており、桂川現水面高とはおよそ数十mの比高差を持つ。一方、北側および東側はほぼ水平な段丘面が広がっている。

このように本遺跡の周辺地形は南側に山地が、西側は段丘崖となっており、その範囲は主に北もしくは東に

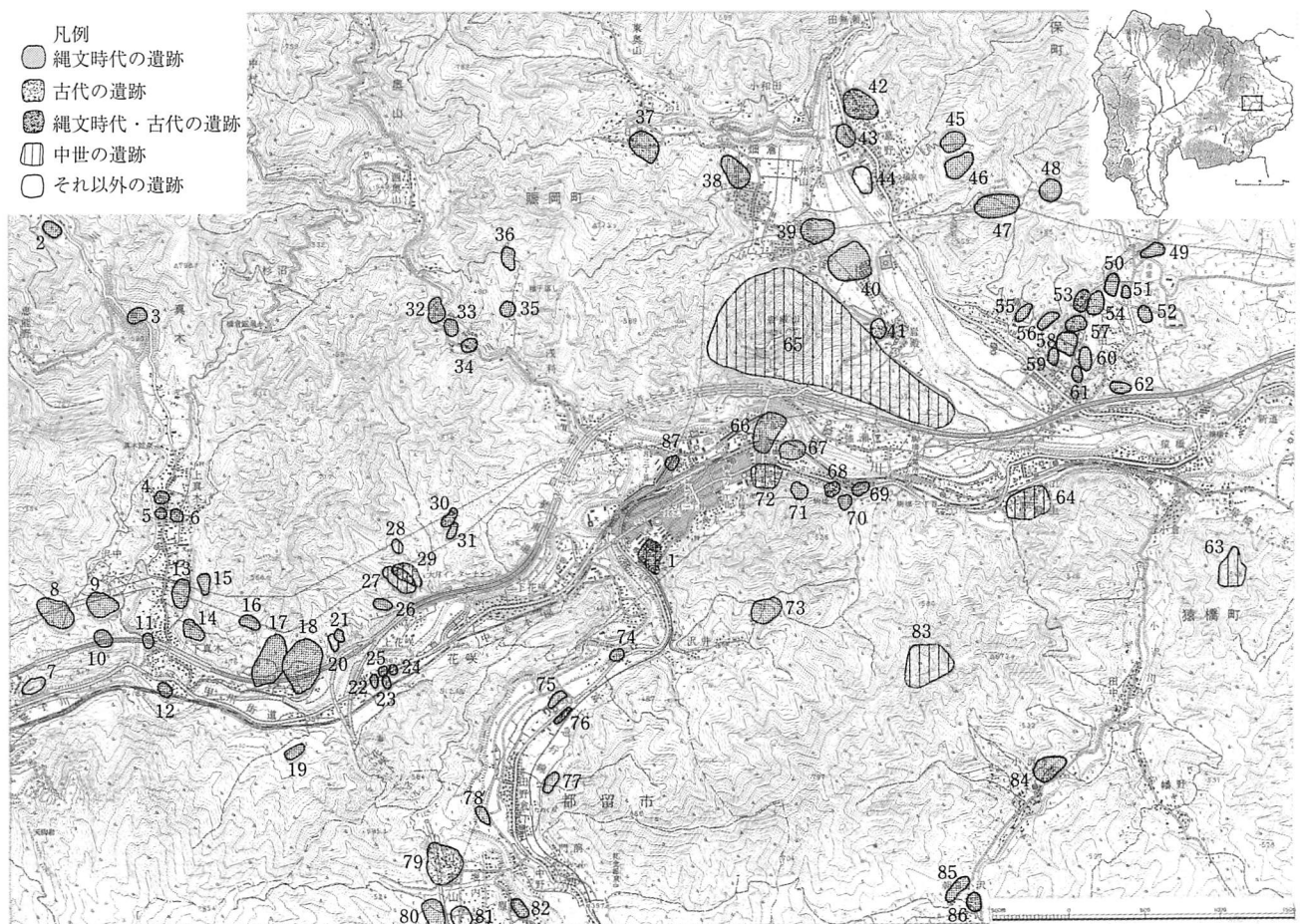
向かって広がっていると予想される。実際、過去の調査状況からすれば、現在の都留高校敷地内にその中心があることはほぼ確実であろうが、さらにそれが東側にどの程度広がっていくのかという点については明らかでない。

なお、南側の山地傾斜面に沿って江戸時代初期（寛永年間頃、1600年代前半）、都留藩谷村城主秋元泰朝の時代に、都留市田野倉、大月市大月・駒橋・殿上・猿橋の五ヶ村によって、灌漑用水および飲料用水供給を目的として開削されたという五ヶ堰用水が流れている。

## 第2項 大月遺跡周辺の遺跡

第3図は大月遺跡の位置および近隣に分布する遺跡の位置・範囲を、大月市遺跡分布図（大月市教育委員会1995）、都留市史（都留市1986）などによって記入したものである。この図に基づき、大月遺跡で主たる遺構・遺物が検出された縄文時代後期および中世に絞って、遺跡分布状況を簡単に見てみたい。なお、縄文時代中期および奈良・平安時代については御所遺跡発掘調査報告書（山梨県教育委員会1998）において概観したので参照されたい。

**縄文時代後期** この地域における縄文時代後期の遺跡数は中期と比較すると少ないものの、割合と多い。それらは大月遺跡と同様、桂川およびその支流の河岸段丘面上にはほぼ一様に分布している。そこで上流側から見てみたい。まず笹子川を遡っていくと、大月遺跡から2～3kmほど上流の左右両岸に遅郷1～4遺跡（22～25）と原平A・B遺跡（17・18）がある。後者からは土器などが出土しているという（山梨県1998:411）。さらに1kmほど遡るとやや規模の大きな権現原・沢中原A遺跡（9・10）があり、そこから北に折れた真木川流域には太田屋敷・根の神・上真木辻の各遺跡（4～6）がかたまって分布している。一方大月遺跡から南に桂川をたどっていくと、0.5～1kmほど遡った右岸に先ノ宮・神出・桃園の中小規模遺跡（74～76）が分布している。次



第3図 大月遺跡の位置と周辺の遺跡（1/50,000）

第1表 大月遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	縄文時代	古代以降	番号	遺跡名	縄文時代	古代以降	番号	遺跡名	縄文時代	古代以降
1	大月	中・後	奈良・平安・中世	30	孝道Ⅰ	前	平安	59	和田原	中	
2	石神原	中		31	孝道Ⅱ	前		60	八幡2	中	
3	大藪遊仙橋	中		32	岩下	中		61	八幡1	中	
4	太田屋敷	中・後		33	指平	中		62	お弥かげ	早	
5	根の神	中・後		34	浅利入		奈良・平安	63	猿橋の城山		中世
6	上真木辻	中・後		35	浅利平石1	不明		64	丹後屋敷(鍛冶屋敷)		中世
7	川向		窯跡?	36	浅利平石2	不明		65	岩殿山城		中世
8	沢中原C	中		37	日影	中		66	四本木	中	
9	権現原	中・後		38	畑倉ヤスバ	中		67	柳田	後	
10	沢中原A	早・前・中・後		39	木戸狩	中・後		68	御所	早・前・中・後・晩	奈良・平安・近世
11	小佐野	中		40	岩殿中倉	早・中		69	中組	不明	
12	青木原	中		41	円通寺跡		平安	70	清水入	不明	
13	中曾根	早・前・中		42	葛野小泉	早・前・中・後	平安	71	延命寺	不明	
14	後小路	中		43	沖平	早		72	妾婦屋敷		中世
15	梅久保	中		44	七保中学校校庭			73	地藏窪	不明	
16	鏡神	中		45	正原1	不明		74	先ノ宮	前・中・後	
17	原平B	早・前・中・後		46	正原2	不明		75	神出	前・中・後	
18	原平A	早・前・中・後		47	太田1	早・前・中		76	桃園	前・中・後	平安
19	幸ノ田	前・中		48	太田2	中		77	山梨	中	
20	西ノ上C			49	クグド	早・中		78	中野原	中	
21	西ノ上B	前	平安	50	東梨木戸1	中		79	堀之内原		奈良・平安
22	遅郷4	後		51	東梨木戸2	中		80	宮脇	前・中	
23	遅郷1	中・後		52	東井尻原	中		81	松葉	前・中	
24	遅郷2	後		53	寺原2	早・中・後・晩	平安	82	原	中	
25	遅郷3	後		54	西梨木戸	中		83	駒橋御前山		中世
26	後林	前		55	大境	前・中		84	下小沢	中	
27	花咲鐘撞堂		中世	56	花輪	不明		85	むらさき	中	
28	寺床		中世	57	寺原1	中		86	朝日小沢	中	
29	芝草		平安・中世	58	下畠	前・中・後		87	天神	後	

に下流側を見ていくと、1kmほど桂川下流の左右両岸に柳田・御所遺跡(67・68)が分布している。このうち御所遺跡では遺構は確認されていないが称名寺・堀之内各式の土器が出土している(山梨県教育委員会1998)。さらに1.5kmほど下っていくと、桂川と葛野川との合流地点左岸に寺原2・下畠遺跡(53・58)が、そこから葛野川を1.5~2kmほど遡った地点には木戸狩・葛野小泉の2遺跡(39・42)が分布している。残念ながらこれらの後期遺跡は多くが未調査でその内容は不明なものが多いものの、第3図のように大月遺跡周辺には河川に沿った平坦地に1~数km程度の間隔を置いて後期遺跡が分布している様子を認めることができる。また注目されるのはこの地域のこれら21ヶ所の後期遺跡うち17遺跡で中期の遺物もしくは遺構が確認されているという点である。このことは中期から後期にかけての居住活動が立地や生業などでかなり共通点を持っていた可能性を示していると見られよう。

中世 この範囲で中世の遺跡として周知されているものは大月遺跡を含めて9遺跡であるが、本遺跡と寺床・芝草遺跡の3遺跡を除く6遺跡はいずれも中世城館として認められているものである。このうち岩殿山城(65)は16世紀に小山田越中守信有が構築したとされるものであるが、その規模や位置、また歴史的にも本地域で中核的な存在である。1997年度大月市教育委員会によって、全域に対する測量と山頂主郭部などに対して部分的な発掘調査が行われ、掘立柱建物跡や茶壺、明代青花、瀬戸・美濃産陶器、常滑産陶器などが検出されている。他の中世城館については発掘調査も実施されておらず不明な点が多い。この他大月遺跡から1.5kmほど笹子川を遡った位置にあり花咲鐘撞堂遺跡と近接する芝草遺跡(29)では、5基の地下式土坑や北宋銭・李氏朝鮮銭を出土した隅円方形の竪穴遺構が検出されている(山梨県1998:406)。

(小林公治)

## 第2章 検出された遺構

発掘調査の結果、各区から縄文時代の配石遺構・焼土遺構・集石・土坑など、奈良・平安時代の掘立柱建物跡・土坑などが、また中世の土坑やピット群が検出された。そこでこれらについて、各時代ごとに記載して行く。

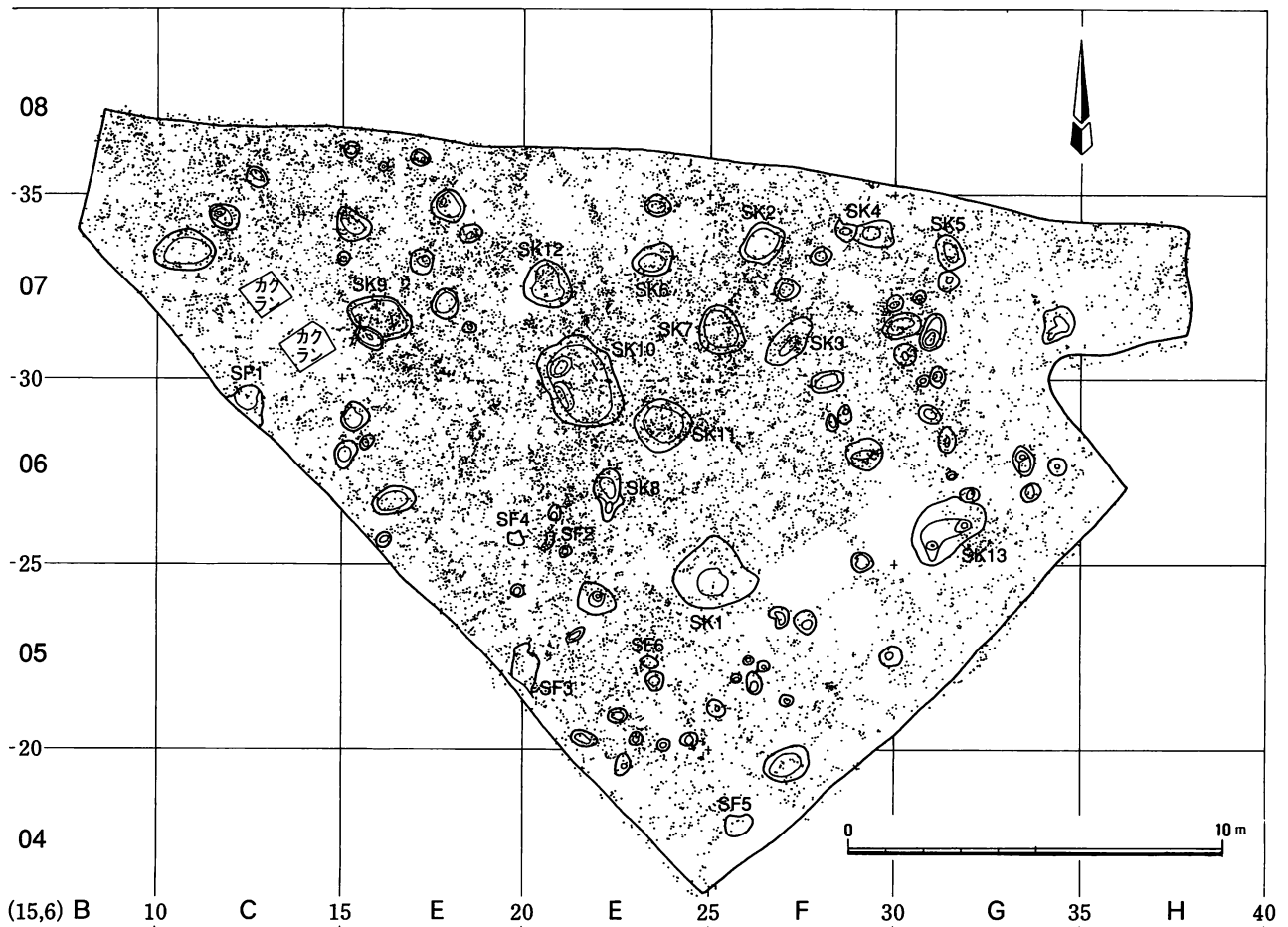
### 第1節 縄文時代の遺構

#### 第1項 第7次調査I区(第4図)

本区の縄文時代遺構には配石遺構、焼土遺構、土坑、ピット群がある。これらのうち焼土遺構は中央部南寄りにやや集中するようだが、土坑はほぼ全体に分布している。なお、IB区では遺構は確認できなかった。

##### (1) 配石遺構(第5図)

奈良・平安時代面を掘り下げたところ、IA区の南西寄りから調査区外にかけて全面的に確認された。配石遺構は直径十数cm程度から40~50cm程度の礫で構成されるが、平均して直径30cmほどのものが多い。またこれらは、河川礫・山地礫・溶岩の3種類に分けられるが、量的には河川礫が最も多く、山地礫、溶岩の順に減少する。ただし意図的に石材を種別配置した様子は窺われない。配石の構成はかなり散漫かつ企画性には乏しいもので、部分的には礫を数個から十数個程度直線的に並べているような所もある。こうした全体的な傾向の中でD06・07、E06・07スクエアではやや企画性が窺われ、多数の礫が二重の半円状に並べられているように見受けられる。この内側サークルの直径は約4m、外側サークルはあまり明瞭ではないものの直径8mほどと推測される。また、これらの配石はごく一部で上下に重なっている部分があったが、若干の上下レベル差はあるも



第4図 IA区縄文時代遺構全体図

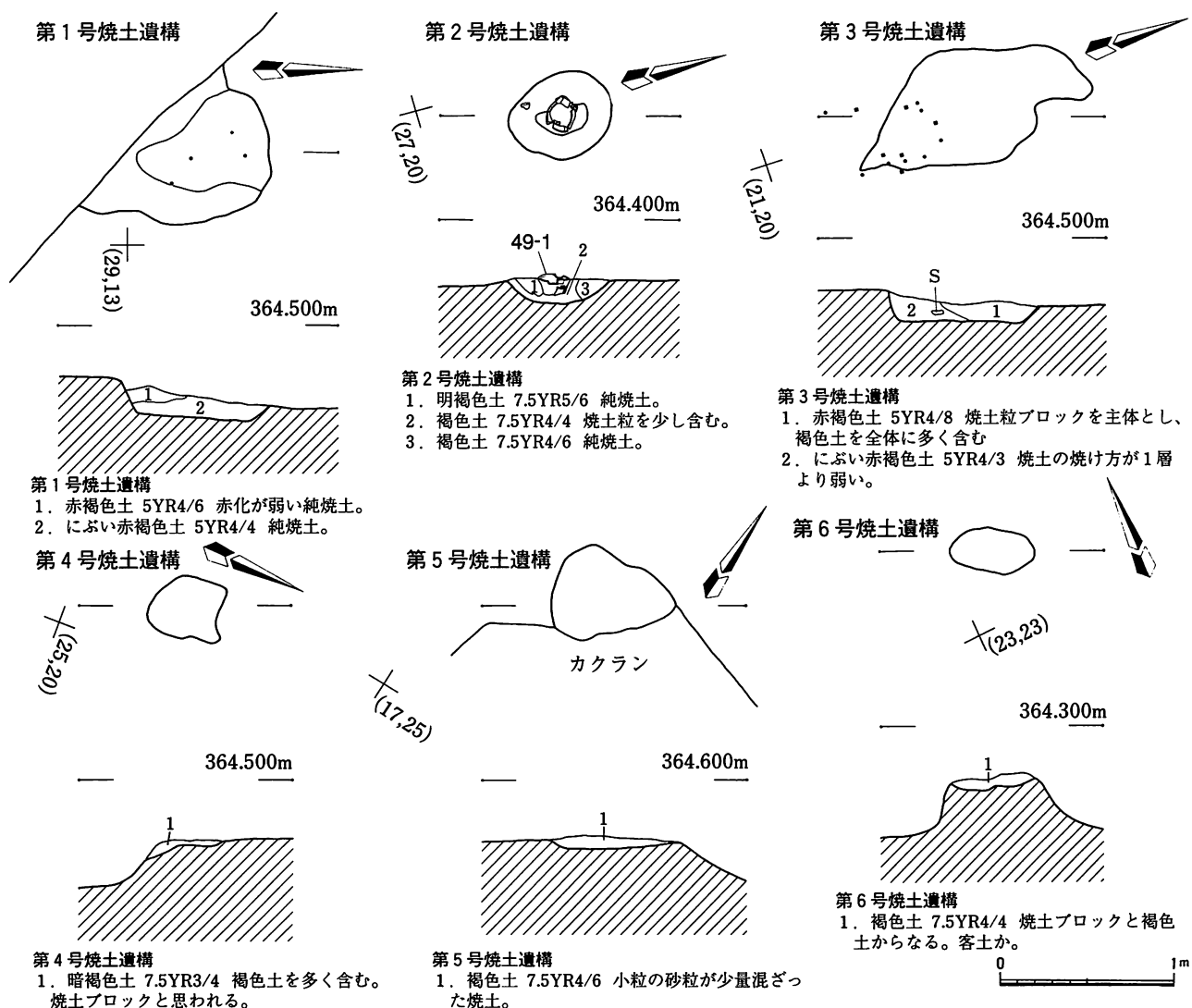


第5図 IA区配石遺構平・断面図

の、多くは同一層準といえる範囲内でほぼ水平に出土している。このような出土状況から推測すると、この配石遺構は形成された後、人為・被人為的な移動作用によって元来の形態からある程度変容を受けた上で埋没したものと見られよう。

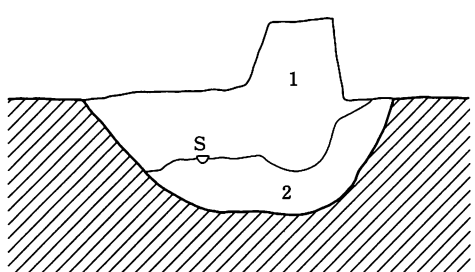
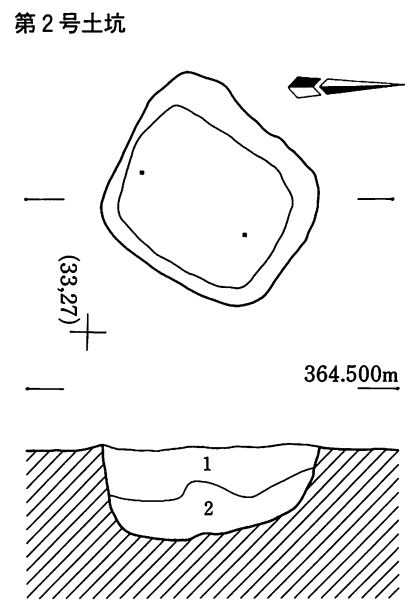
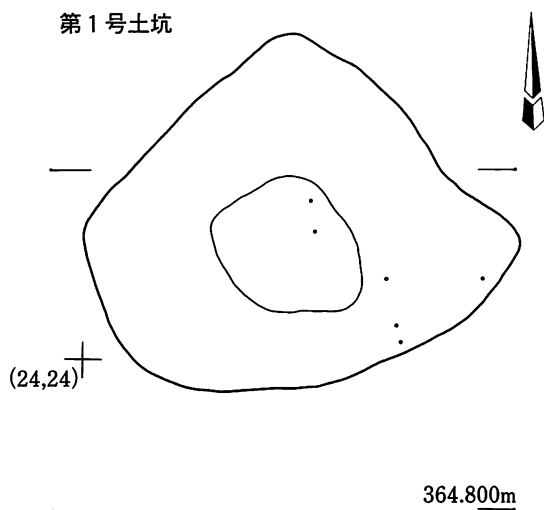
## (2) 焼土遺構 (第6図)

焼土遺構は6ヶ所確認された。第1号焼土遺構はX=29、Y=13ポイント周辺にあり一部は調査範囲外に及ぶ。確認面上で焼土面が検出され、焼土範囲プランは略円形、長軸長で1m前後を測る。焼土面は厚さ10cm程度あり、被熱の痕跡はかなり顕著であった。第2号焼土遺構はX=27、Y=20ポイント付近にあり、長軸長約60cm、短軸幅約50cm、深さは15cmほどで楕円形プランを持つ。ほぼ中央に埋甕が設置されその周囲に焼土が存在している。半裁したところ、最下層は褐色土でその上に土器が埋められその周囲を純焼土が取り巻いていた。土器内土は赤化していない。こうした状況から、土坑内に埋甕を設置しその周囲を焼土で埋めた可能性と、土坑内に埋甕を設置しその後この場所で火を焚いた可能性の二つが考えられようが、現状ではそのどちらとも判断できない。第3号焼土遺構はX=22、Y=20ポイントにあり一部は調査範囲外に及ぶ。確認面上で焼土面が検出された。平面プランは不定形で焼土範囲は比較的広く、長軸長で1.4m前後ほどある。焼土面は厚さ10cm強だが上層は比較的赤化が強いいためこの場で直接火を焚いたと考えられる。第4号焼土遺構はX=26、Y=20ポイント付近にある。確認面上で焼土面が検出され焼土範囲は不定形、規模は長軸長で50cm前後である。焼土面は厚さ5cmほどであるが、褐色土を全体的に多く含んでおり、この場で火を焚いたのではなく焼土の廃棄であると考えられる。第5号焼土遺構はX=18、Y=26ポイントにあるが南側は攪乱により失われている。確認面上で焼土面



第6図 第1～6号焼土遺構平・断面図



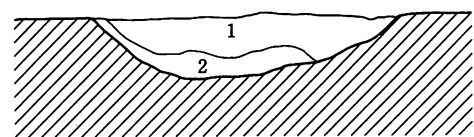
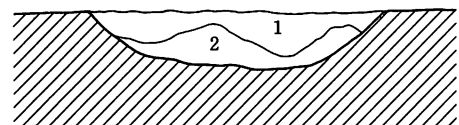
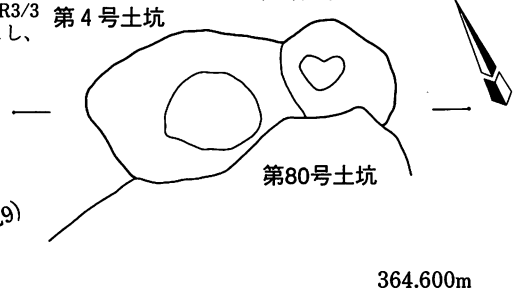
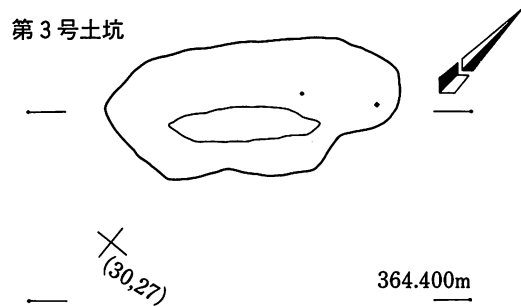


第1号土坑

1. 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒を全体に多く含む。
2. 暗褐色土 7.5YR3/3 ローム土を主体とし、砂粒を少し含む。

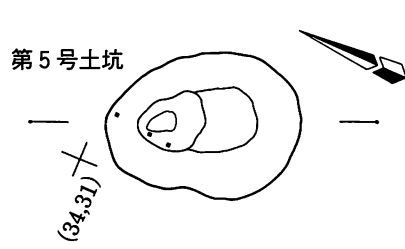
第2号土坑

1. 黒褐色土 5YR2/2 ローム質土を主体とし、ロームブロックを多く、砂粒を少し含む。
2. 黒褐色土 5YR3/1 黒褐色土を主体とし、ロームブロックを一部に含む。



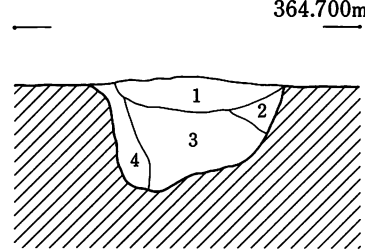
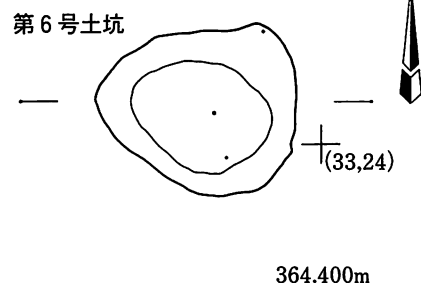
第4号土坑

1. 極暗褐色土 7.5YR2/3 地山砂質土に褐色土を含む。
2. 褐色土 7.5YR3/4 地山砂質土を主体とし、1層を少し含む。



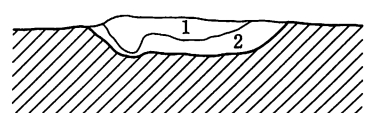
第3号土坑

1. 褐色土 7.5YR4/4 地山砂質土に褐色土を含む。
2. 褐色土 7.5YR3/4 地山砂質土を主体とし、1層を少し含む。



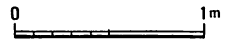
第5号土坑

1. 褐色土 7.5YR4/3 ローム粒をやや多く含む。
2. 褐色土 7.5YR4/6 地山砂質土と3層が混ざった土。
3. 褐色土 7.5YR4/4 地山砂質土を主体とし、1層を少し含む。
4. 褐色土 7.5YR4/6 1層と同じ土を主体とするが、ローム粒は少ない。2層ブロックを一部に含む。

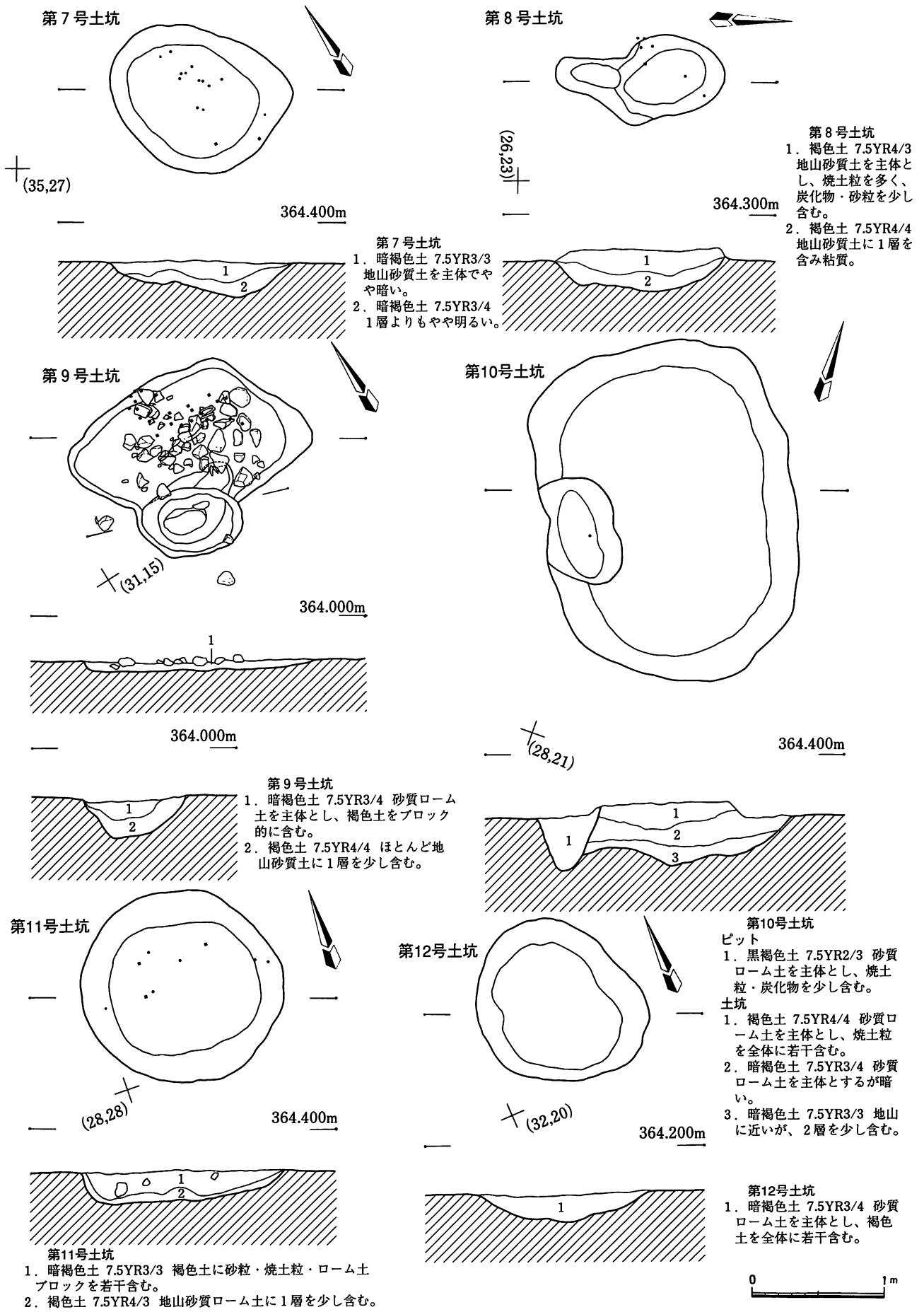


第6号土坑

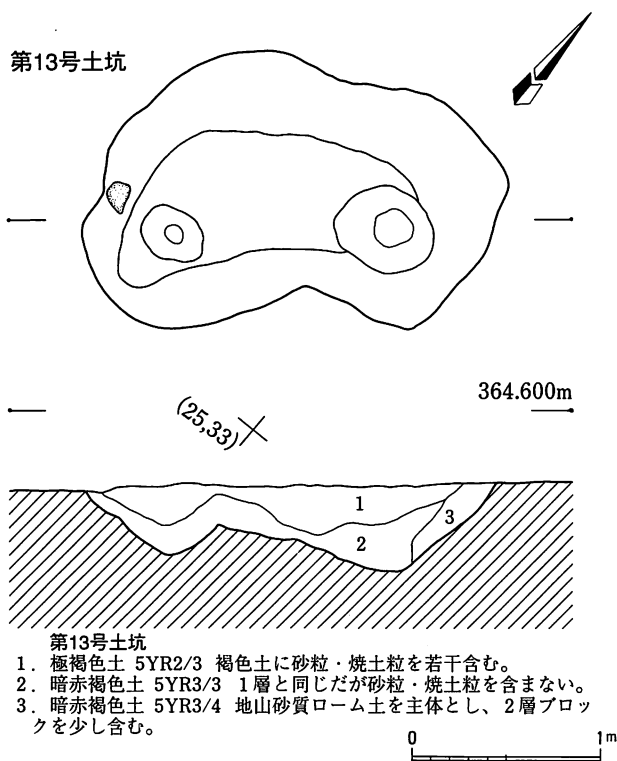
1. 暗褐色土 7.5YR3/4 ローム粒を多く砂粒を少し含む。
2. 褐色土 7.5YR4/4 地山砂質土を主体とし、多少暗い。



第7図 第1～6号土坑平・断面図



第8図 第7～12号土坑平・断面図



第9図 第13号土坑平・断面図

東西方向に長く土坑が2つほど連結したような形態であるが、覆土は共通しており少なくとも同一の過程で埋没したと考えられる。規模は長軸長約1.6m、短軸幅約70cm、深さ約30cmを測る。第5号土坑はX=33、Y=31ポイント付近にある。おおよそ南北方向に長軸を持つ楕円形で、規模は長軸長約1.05m、短軸幅約80cm、深さ約60cmを測る。底面は北寄りピット状で深く、そこから一段立ち上がった後ほぼ垂直に立ち上がっている。第6号土坑はX=33、Y=23ポイント付近にある。東西方向に長軸を持つ不整楕円形で、規模は長軸長約1.05m、短軸幅約85cm、深さ約20cmを測る。底面はほぼ水平で緩やかに立ち上がる。

第7号土坑はX=36、Y=28ポイント付近にある。おおむね南北方向に長軸を持つ不整な楕円形で、規模は長軸長約1.4m、短軸幅約1.05m、確認面からの深さ約25cmほどである。緩やかな擦り鉢状に掘り込まれている。第8号土坑はX=27、Y=22ポイント付近にある。南北方向に長軸を持ち不整形で2つの土坑が切り合っているような形態であるが、セクションの観察から同一の埋没過程を経たと考えられる。規模は長軸長約1.3m、短軸幅約65cm、深さ30cmほどである。底面は段を持ち、緩やかに立ち上がる。第9号土坑はX=32、Y=16ポイント付近にある集石土坑である。東西方向に長軸を持つ不整な菱形状で、2つの土坑が切り合っている可能性が高い。覆土から多数の礫がほぼ水平に出土しているが、これらには微妙に赤化したものもあるようで被熱の可能性はある。規模は長軸長約1.9m、短軸幅約1.2m前後、深さは5cmほどとごく浅い。第10号土坑はX=30、Y=22ポイント付近にある。南北方向に長軸を持つ長方形で、西壁ほぼ中央をピットによって切られている。規模は長軸長約2.6m、短軸幅約1.9m、深さ約50cmである。第11号土坑はX=29、Y=29ポイント付近にある。ほぼ正円形で規模は直径約1.5m前後、深さ約25cmである。第12号土坑はX=33、Y=21ポイント付近にある。不整な円形で、規模は直径約1.2m前後、確認面からの深さ約20cmほどである。

第13号土坑はX=26、Y=31ポイント付近にある。不整な長円形で、規模は長軸長約2.3m、短軸幅約1.3m、深さは最深部で45cmほどである。

#### (4) ピット群 (第4図)

IA区ではほぼ全域からピットが検出されているが、中央部にやや少なく、東寄りと西寄りに若干集中する傾向がある。しかしながら、これらは掘立柱建物跡のような構造物には復元できない。

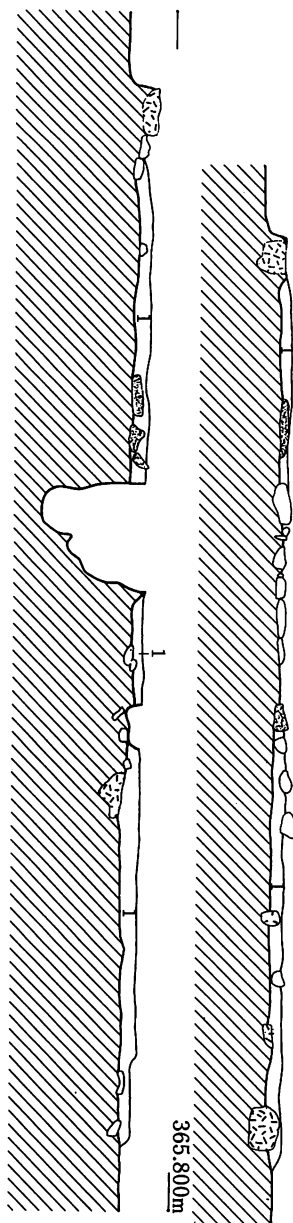
が検出されたが焼土範囲プランは不明、規模は検出部分の残存長で70cm強、焼土面は厚さ10cm弱である。第6号焼土遺構はX=22、Y=23ポイントに周辺にある。確認面上で焼土が検出され焼土範囲は楕円形、規模は長軸長約50cm、短軸幅約25cm、焼土面の厚さは5cmほどと薄い。褐色土と焼土が混ざっており、ここでの被熱ではなく、焼土の廃棄であると考えられる。

#### (3) 土坑 (第7～9図)

第1号土坑はX=25、Y=25ポイント付近にある。東西方向に長軸を持ちやや大形で不整三角形であり、規模は長軸長約2.3m、短軸幅約1.9m、深さ約60cmである。第2号土坑はX=34、Y=27ポイント付近にある。南東・北西方向に長軸を持つ略方形の企画的な土坑で、規模は長軸長約1.05m、短軸幅約95cm、深さ約50cmを測る。第3号土坑はX=31、Y=27ポイントを中心に位置する。平面プランは、大略南北方向に長い長円形で、規模は長軸長約1.55m、短軸幅約70cm、確認面からの深さ約30cmを測る。第4号土坑はX=36、Y=30ポイントを中心とする。

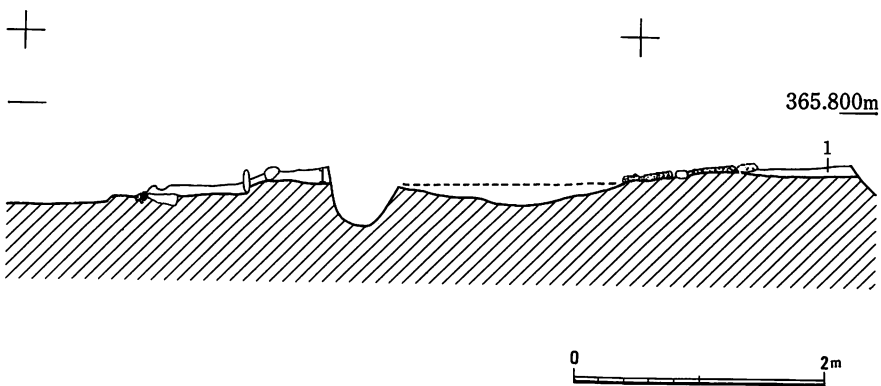
第10図 II A区縄文時代遺構全体図





第1号敷石住居跡  
覆土

1. 黒褐色土 7.5YR2/2



-  溶岩
-  河川礫
-  焼石
-  山地礫

第11図 第1号敷石住居跡平・断面図

## 第2項 第7次調査Ⅱ区(第10図)

本区の縄文時代遺構には、敷石住居跡、集石遺構、焼土遺構、土坑、ピット群がある。なお、IIB・IID区では遺構は確認できなかった。

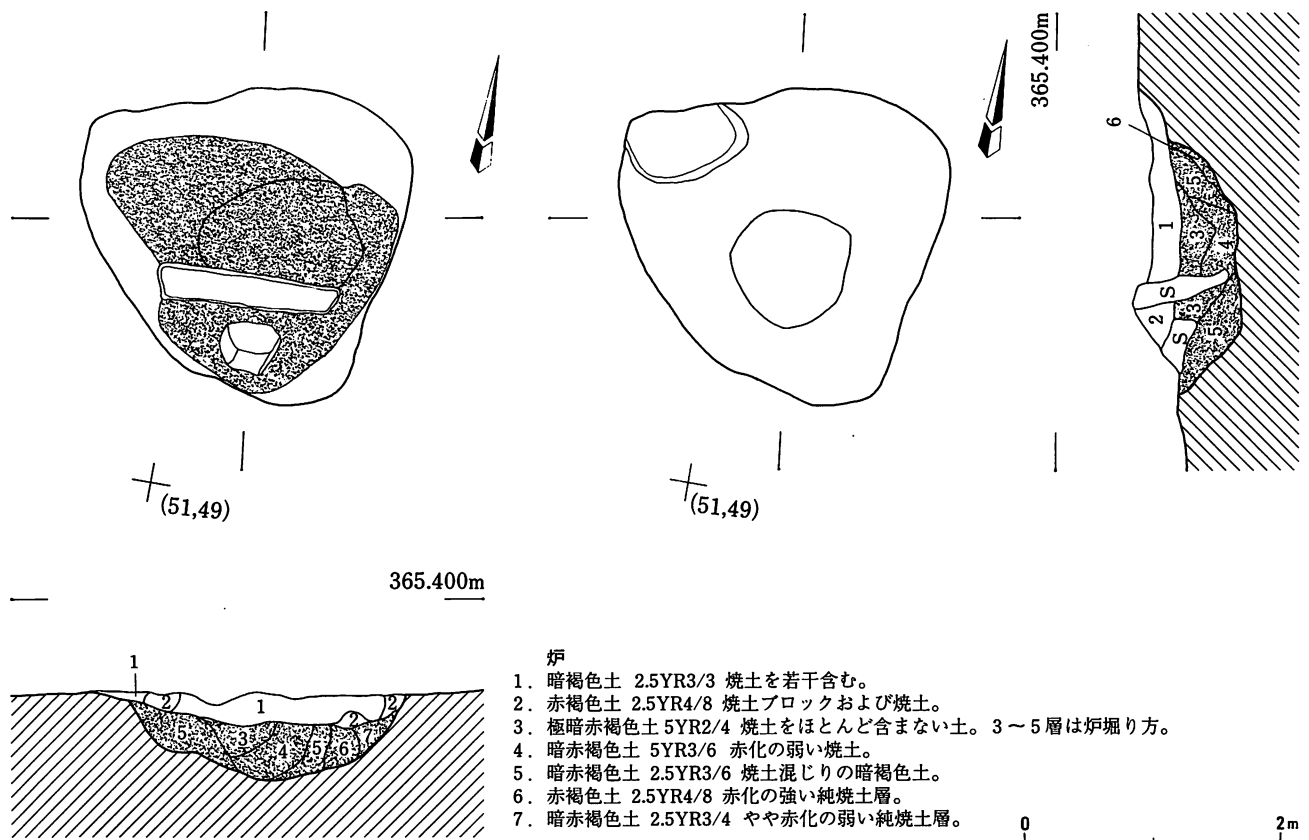
### (1) 敷石住居址(第11・12図)

第1号敷石住居跡(SI1)はⅡ区東側山寄り、X=47~55、Y=45~52ポイントの範囲から検出された。この付近は遺構面に達するくらいの浅いゴミ穴等で攪乱されており、本住居跡は覆土・敷石の一部や炉跡が確認できたにすぎない。このため掘り込みや住居跡プラン、範囲についての推定は困難である。敷石は大きさかなりの違いがあるが基本的に扁平な大形礫を隙間無く並べ、それらのわずかな隙間に小礫を縦に詰めて動かないように固定している。また敷石の利用石材は多くは河川礫であるが、一部には山地礫が、また敷石と認定できるかどうか疑問であるが、ごく少数の溶岩も出土している。また相当数の敷石が全面的に赤化しており、かなりの被熱を受けていることが明らかであるが、その分布はある程度のまとまりは窺えるものの必ずしも隣接しているものばかりではなく、この場所で直接加熱を受けたものか、それとも被熱後に設置されたものかの判断は難しい。遺存部分からすると本住居跡は、直径が8m以上で円形ないしは楕円形の可能性が考えられよう。柱穴など住居に関係する諸設備は炉跡以外には確認できなかった。

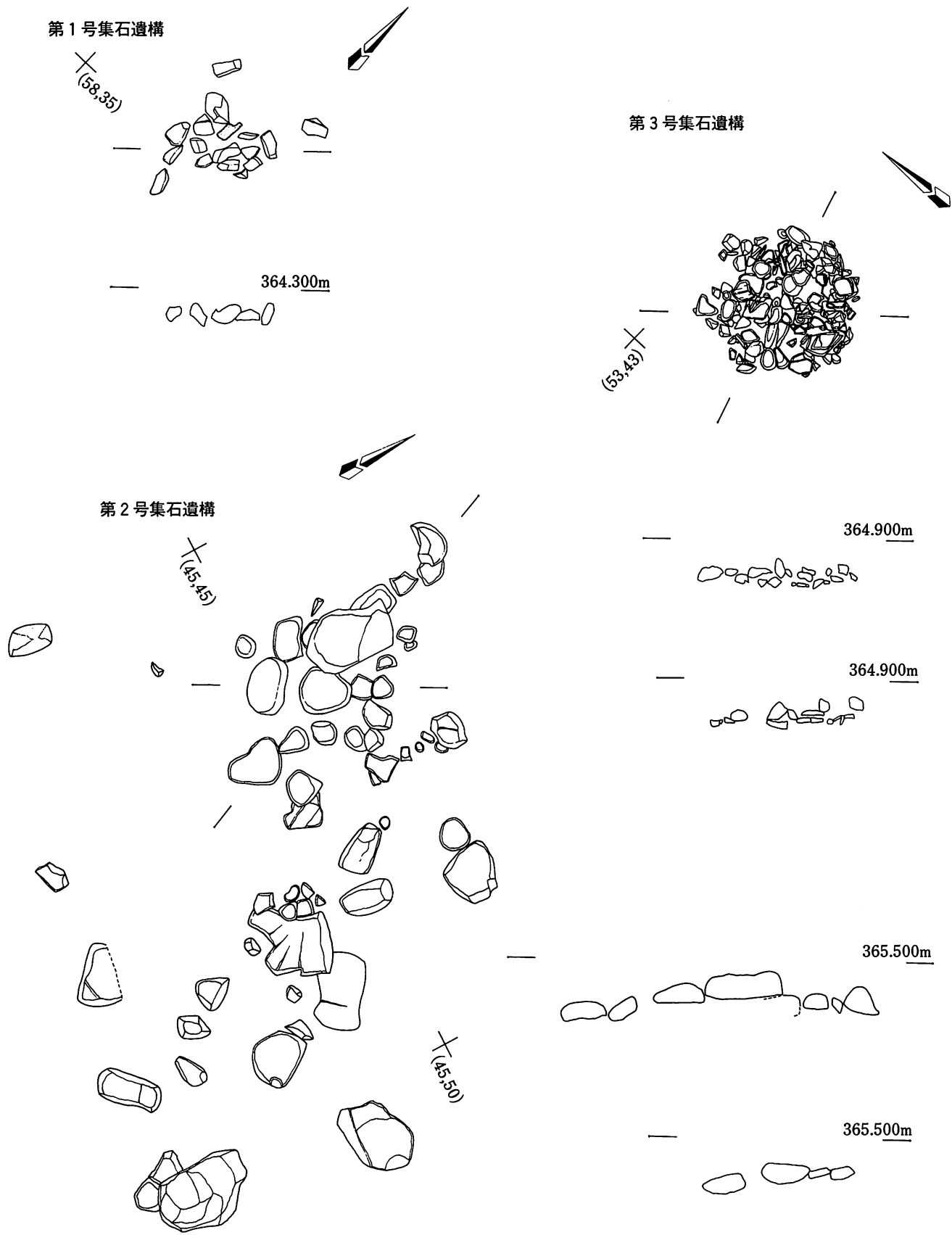
炉 遺存する敷石の間、X=52、Y=54ポイント付近で検出された。平面プランは不整三角形形状で、規模は東西約90cm、南北約80cmである。上層の褐色土を取ると緩やかな凹地となり燃焼面と考えられる焼土が広がっている。この燃焼面は不定形であるが、長軸長は約80cmほどと大きい。またその南寄りには長さ50cmほどの扁平な板石が東西方向に据え付けられており、土器等を固定する枕石であると考えられる。燃焼面を掘り下げると掘り方となり、純焼土や焼土ブロックを含む褐色土などが堆積していた。掘り方底面までの深さは約30cmである。

### (2) 集石遺構(第13図)

Ⅱ区では3ヶ所で集石遺構が確認された。第1号集石遺構はX=58、Y=36ポイント周辺にあり、直径10cm前

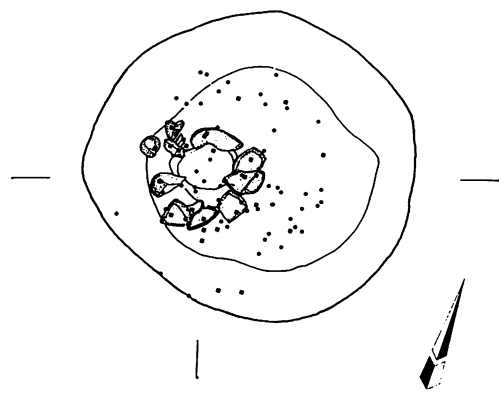


第12図 第1号敷石住居跡炉平・断面図



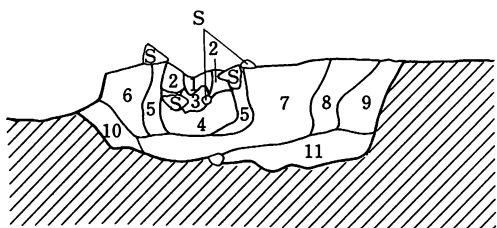
第13図 第1～3号集石遺構平・断面図

第7号焼土遺構



(45,25)

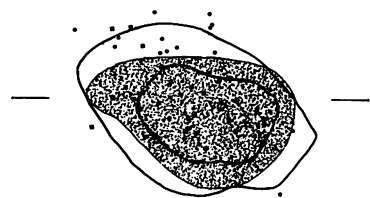
364.800m



第7号焼土遺構

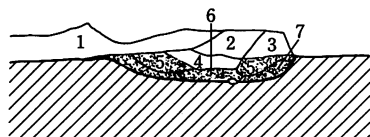
1. 極暗褐色土 7.5YR2/3 しまりが弱く、砂粒を含まない。
2. 暗褐色土 7.5YR3/4 赤褐色スコリアをわずかに含み堅くしまったシルト質層。
3. 暗褐色土 7.5YR3/3 焼土をやや多く含む。
4. 暗褐色土 7.5YR3/3 焼土・赤褐色スコリアをわずかに含む。
5. 暗褐色土 7.5YR3/3 大粒スコリアを多く、焼土を若干含む。
6. 褐色土 7.5YR4/3 赤褐色スコリアを少し含む。
7. 暗褐色土 7.5YR3/4 大粒スコリアを多量に、焼土・炭化物を少し含み堅くしまった層。
8. 極暗褐色土 7.5YR2/3 大粒の黒褐色スコリア・赤褐色スコリアを少し含む。
9. 褐色土 7.5YR4/3 赤褐色スコリアを少し含む。
10. 褐色土 7.5YR3/4 スコリアを含まないシルト質層。
11. 暗褐色土 7.5YR3/3 大粒の黒褐色スコリアを少し含み堅くしまった層。

第9号焼土遺構



(45,43)

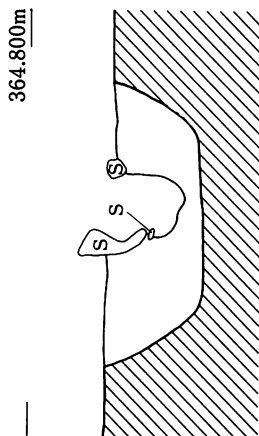
365.400m



第9号焼土遺構

1. 赤褐色土 5YR4/6 褐色土を主体とし、暗褐色土ブロック・橙褐色粒子・大粒砂粒を少し含む。
2. にぶい赤褐色土 7.5YR4/4 暗褐色土を主体とし、大粒砂粒を多く、橙褐色粒子を少し含む。
3. 赤褐色土 5YR4/8 1層と2層の混合した土。
4. 赤褐色土 5YR3/4 暗褐色土を主体とし、大粒砂粒を若干、焼土を少し含む。

364.800m

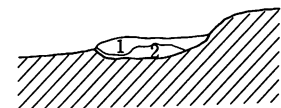


第8号焼土遺構



(43,35)

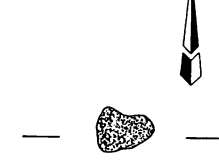
365.300m



第8号焼土遺構

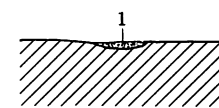
1. 褐色土 7.5YR4/6 大粒スコリアを含む焼土。
2. 暗褐色土 7.5YR3/3

第10号焼土遺構



(45,50)

365.700m



第10号焼土遺構

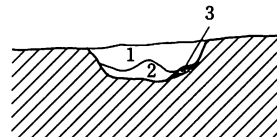
1. 赤褐色土 2.5YR5/8 純焼土。

第11号焼土遺構



(57,43)

364.800m



第11号焼土遺構

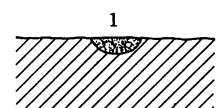
1. 暗褐色土 7.5YR3/3 暗褐色土を主体とし、ローム粒を少し含む。
2. 褐色土 7.5YR4/3 褐色土にローム粒を多く含む。
3. 明褐色土 7.5YR5/8 純焼土。

第13号焼土遺構



(55,34)

365.800m

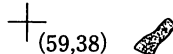


第13号焼土遺構

1. 赤褐色土 2.5YR5/8 純焼土ブロックを含む。この場で生成か。

第12号焼土遺構

(59,38)

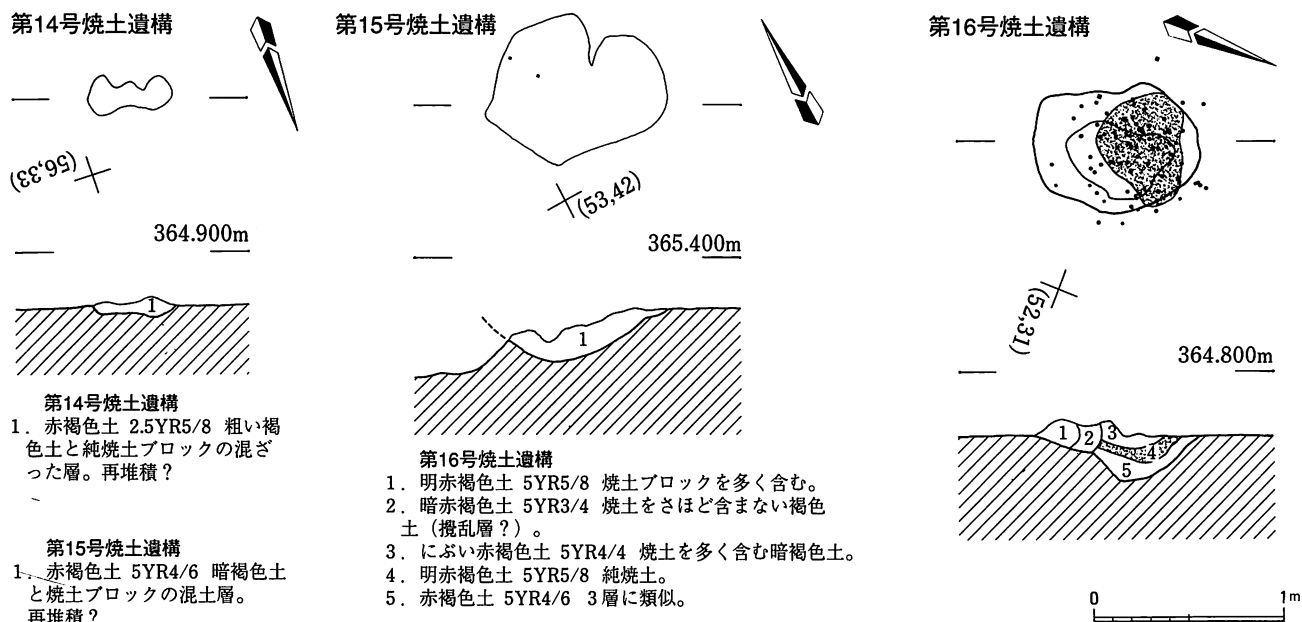


5. 明赤褐色土 5YR5/8 純焼土に近いがややボソボソ(再堆積か?)。
6. にぶい赤褐色土 5YR4/3 4層に似るが、焼土をブロック的に含む。
7. にぶい赤褐色土 5YR4/4 4層に焼土が均質に混ざった層。

0 1m

第14図 第7～13号焼土遺構平・断面図





第15図 第14～16号焼土遺構平・断面図

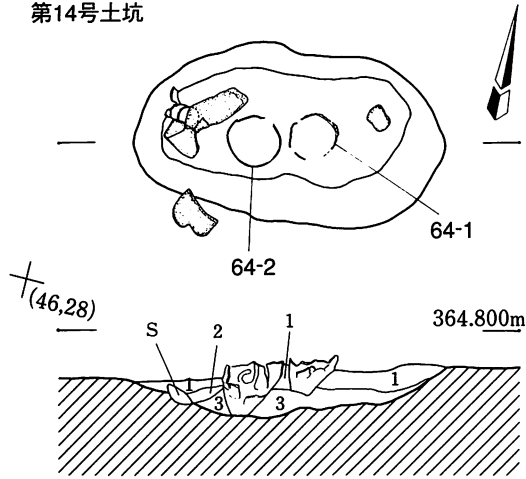
後の小形河川礫が直径60～80cm程度の範囲に20個弱ほど集められていた。これらの多くはほとんど赤化しておらず被熱の形跡はうすい。第2号集石遺構はX=45、Y=47ポイント周辺にある。直径約10cmから60cm以上と大きさかなりの差がある礫が50個程度、長さ5.5m、幅2mほどの範囲にやや散漫に分布している。これらの礫は河川礫と山地礫とで構成されるが、周縁部は後者が多く別の集石の可能性もあるかも知れない。第3号集石遺構はX=53、Y=44ポイント周辺で検出された。直径数cmから10cm程度の小形礫百数十個ほどを直径1mほどの範囲にほぼ円形に集積している。礫は河川礫および山地礫からなるが混在している。また赤化は顕著でなく被熱の形跡はうすい。

### (3) 焼土遺構 (第14・15図)

Ⅱ区では焼土遺構は10ヶ所確認された。第7号焼土遺構はX=47、Y=25ポイント付近にあり、特徴的な構造を持つ。まず長軸長1.8m、短軸幅1.6m、深さ60cmほどの楕円形土坑を掘り、それを褐色土・暗褐色土で埋め戻す。その後おそらく中央部を直径50cmほどの範囲で掘り下げ、縁に礫を円形に並べ石囲い炉状にしている。しかしこの内部に焼土はさほどなく礫自体もほとんど赤化していないことから被熱の形跡は薄い。従ってこれが炉であった可能性は低い。第8号焼土遺構はX=43、Y=35ポイント付近にある。確認面で焼土面が検出され、焼土範囲プランは略円形、規模は長軸長で60cmほどである。また焼土面は厚さ10cm程度あり、被熱の痕跡は顕著であった。第9号焼土遺構はX=45、Y=43ポイント付近にある。長軸長1.3mほどの浅い楕円形土坑下層に純焼土に近いが再堆積の可能性がありこの場所での形成ではないと見られる土が厚さ10cmほど堆積していた。第10号焼土遺構はX=45、Y=50ポイント付近にある。確認面で焼土面が検出され、焼土範囲は略円形、規模は直径30cmほどと小さい。また焼土は厚さ5cmと薄い、よく赤化し被熱の痕跡は顕著であった。第11号焼土遺構は炉穴でX=57、Y=43ポイント付近にある。長軸長約60cmと小形の土坑底面東隅が直径15cmほどの範囲で焼土化していた。第12号焼土遺構はX=59、Y=38ポイント付近にある。確認された焼土面は長軸長20cmほどの長方形でごく小さい。第13号焼土遺構はX=55、Y=34ポイント付近で検出された焼土面で、長軸長30cm程度とやはりごく小さい。焼土は厚さ10cmほどである。

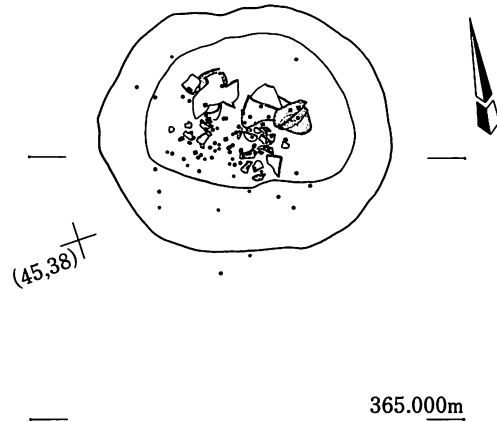
第14号焼土遺構はX=56、Y=33ポイント付近で検出された。長軸長40cmほどと小さいが、褐色土と焼土の混土層であり再堆積であろう。第15号焼土遺構はX=53、Y=42ポイント付近で検出された。長軸長40cmほどの不整形円形で、暗褐色土と焼土ブロックの混土層であることから再堆積といえる。第16号焼土遺構はX=52、Y=31ポイント付近で検出された長軸長90cmほどの長円形土坑で、北寄り中位レベルに厚さ10cmほどの純焼土が形成されている。その下層には焼土を含む暗褐色土があることから、土坑を半分程度埋め戻した後、炉穴として利

第14号土坑



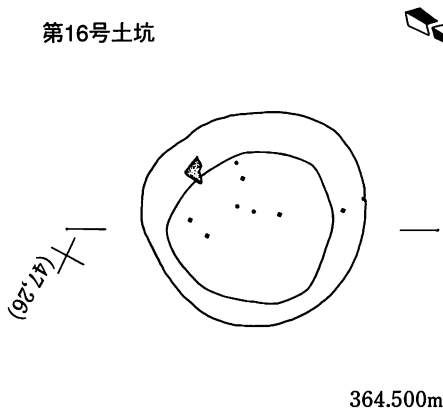
- 第14号土坑  
 1. 極暗褐色土 7.5YR2/3 砂粒を少し含む。  
 2. 暗褐色土 7.5YR3/3 砂粒・黄色スコリアをわずかに含む。  
 3. 暗褐色土 7.5YR3/4 シルト質。

第15号土坑



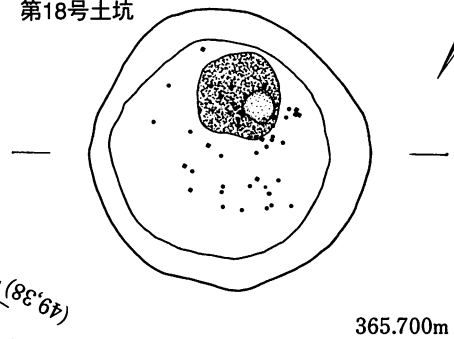
- 第15号土坑  
 1. 褐色土 7.5YR4/6 焼土・灰・骨片を多量に含む。  
 2. 黒褐色土 7.5YR3/2 黒褐色の小粒スコリアを多量に含むボロボロの土。  
 3. 黒褐色土 7.5YR3/2 シルト質。スコリアはほとんど含まない。  
 4. 黒褐色土 7.5YR2/3 黒褐色を少量、赤褐色スコリアをわずかに含み堅くしめる。  
 5. 黒褐色土 7.5YR2/2 黒褐色の大粒スコリアを多量に含むボロボロの土。  
 6. 赤黒色土 10YR1/2 シルト質で小粒の黒・赤褐色スコリアを若干含み堅くしめる。  
 7. 褐色土 10YR4/4 シルト質でスコリアはほとんど含まない。しまりは弱い。  
 8. 暗褐色土 10YR3/4 大粒と小粒の黒褐色スコリアを含み、しまりは弱い。

第16号土坑



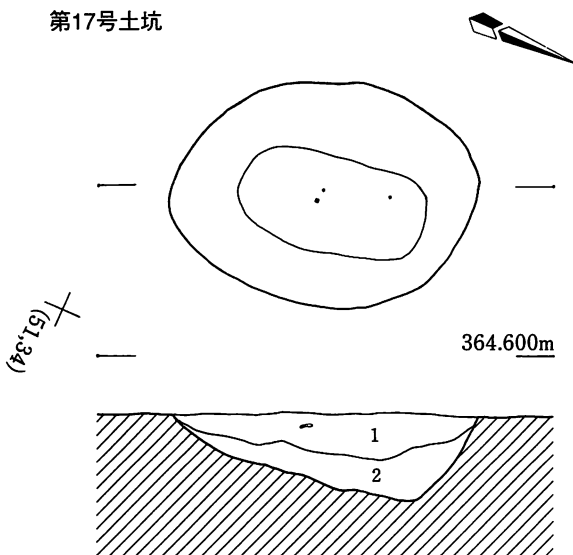
- 第16号土坑  
 1. 褐色土 7.5YR4/3 赤褐色スコリアを多く、大粒スコリアをわずかに含む。  
 2. 灰褐色土 7.5YR4/2 スコリアをほとんど含まず堅くしめる。  
 3. 灰褐色土 7.5YR4/2 2層類似だが炭化物と焼土を多く含む。  
 4. 明褐色土 7.5YR5/6 地山に近く、スコリアを含まない。

第18号土坑



- 第18号土坑  
 1. 暗褐色土 7.5YR3/3 赤褐色スコリアをやや多く含む。土坑より新しいピット覆土。  
 2. 黒褐色土 7.5YR2/3 黒褐色の大粒スコリアと赤褐色スコリアをわずかに含み堅くしまった土。  
 3. 黒褐色土 7.5YR2/3 黒褐色の大粒スコリアを多量に含む。  
 4. 暗褐色土 7.5YR3/3 スコリアをほとんど含まないシルト質層。

第17号土坑

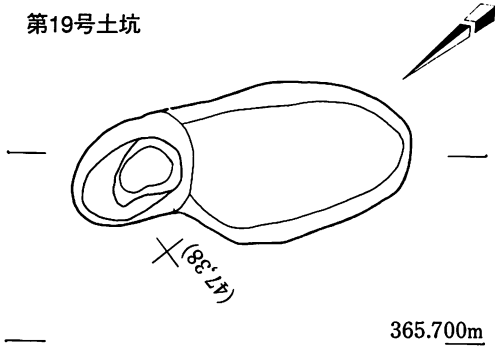


- 第17号土坑  
 1. 黒褐色土 7.5YR2/2 赤褐色・大粒スコリアをわずかに含む。  
 2. 黒褐色土 7.5YR2/3 スコリアをほとんど含まないシルト質層。

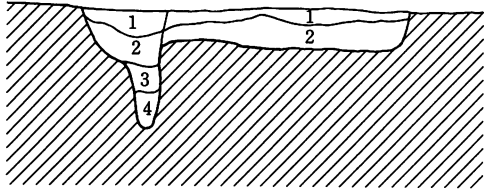


第16図 第14～18号土坑平・断面図

第19号土坑



365.700m



第19号土坑

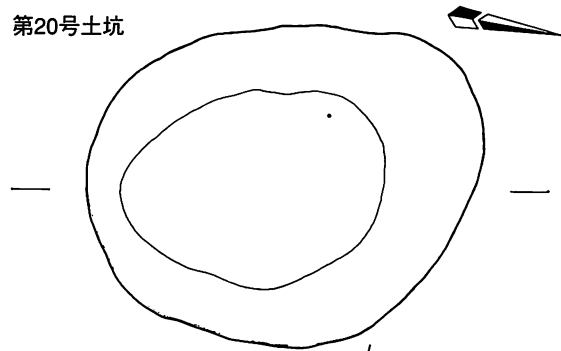
ピット

1. 黒褐色土 7.5YR2/3 赤褐色スコリアと白色砂を少し含む。
2. 黒褐色土 7.5YR3/3 地山砂質ローム土、白色砂粒を含む。
3. 暗褐色土 7.5YR3/4 地山砂質ローム土に上位の黒褐色土をわずかに含む。
4. 暗褐色土 7.5YR3/3 砂質ローム土をわずかに含む。

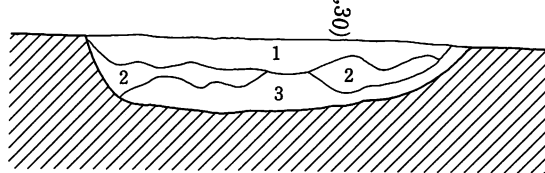
土坑

1. 黒褐色土 7.5YR2/3 黒褐色と赤褐色スコリアを少し含む。
2. 暗褐色土 7.5YR3/4 スコリアを含まないシルト質層。

第20号土坑



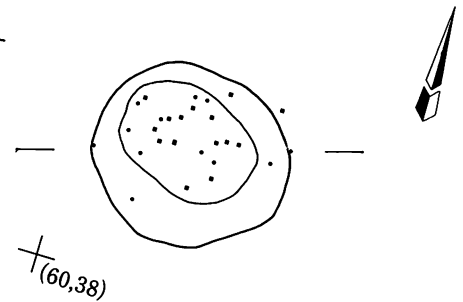
364.500m



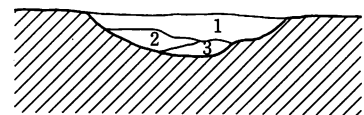
第20号土坑

1. 黒褐色土 7.5YR2/3 赤褐色スコリアを多く、黒褐色大粒スコリア少し含む。
2. 黒褐色土 7.5YR2/3 赤褐色スコリアをわずかに含む。
3. 暗褐色土 7.5YR3/4 地山砂質ローム土を少量に含むシルト質層。

第22号土坑



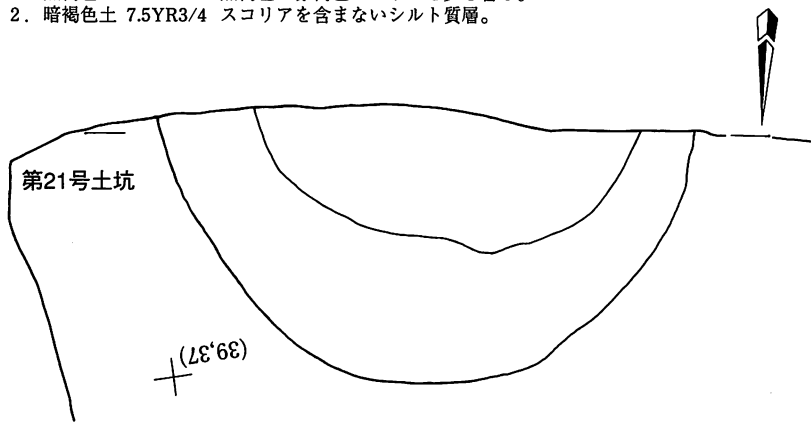
364.600m



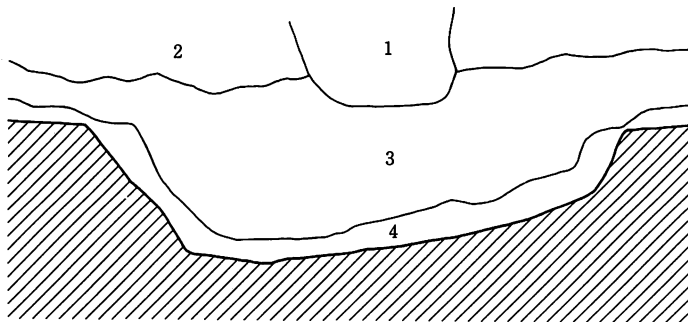
第22号土坑

1. 褐色土 7.5YR4/3 赤褐色スコリアを多く、大粒スコリアをわずかに含む。
2. 灰褐色土 7.5YR4/2 スコリアをほとんど含まず、堅くしまっている。
3. 灰褐色土 7.5YR4/2 2層と同じだが、炭化物と焼土を多量に含む。
4. 明褐色土 7.5YR5/6 地山に近く、スコリアを含まない。

第21号土坑



365.000m

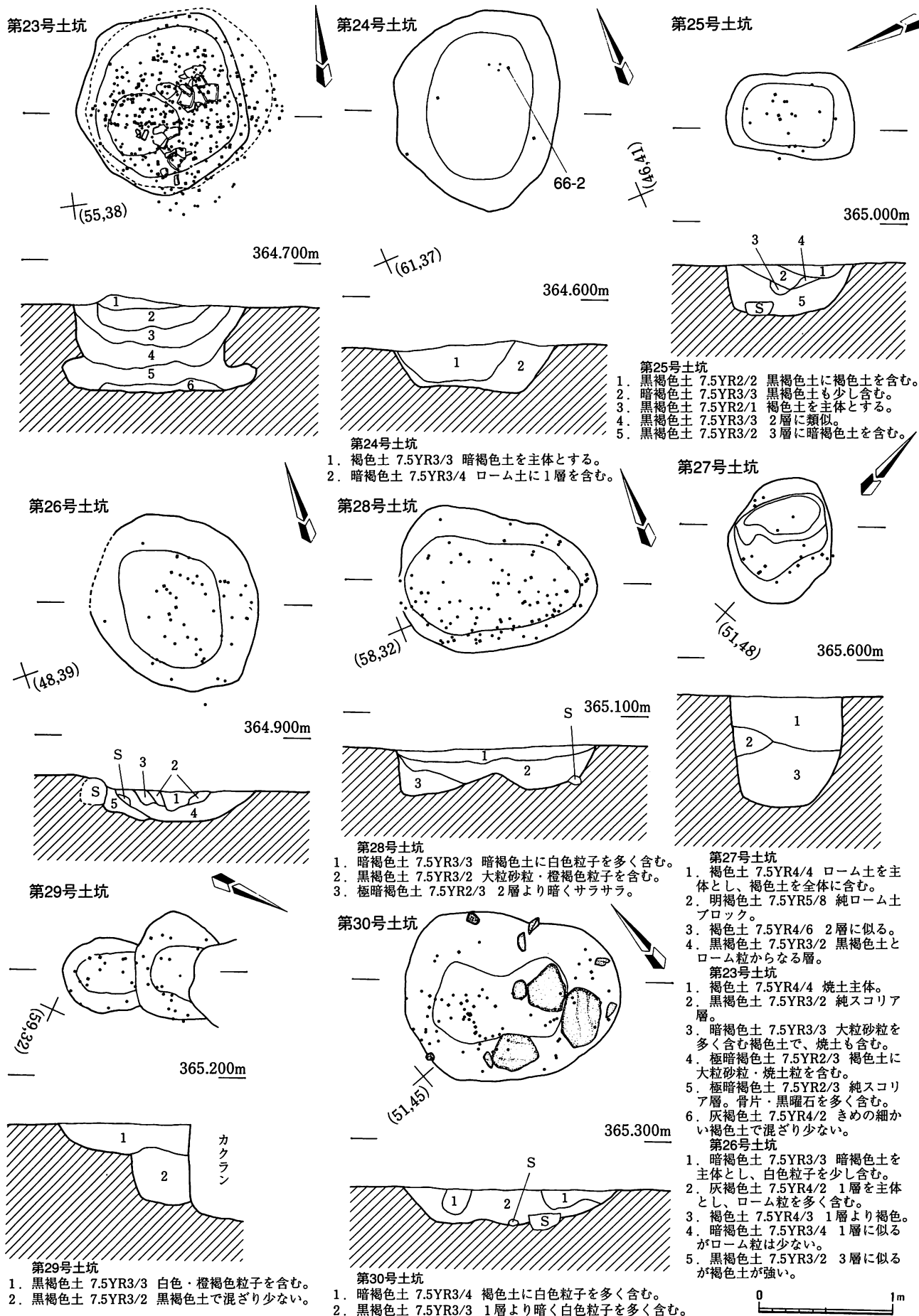


第21号土坑

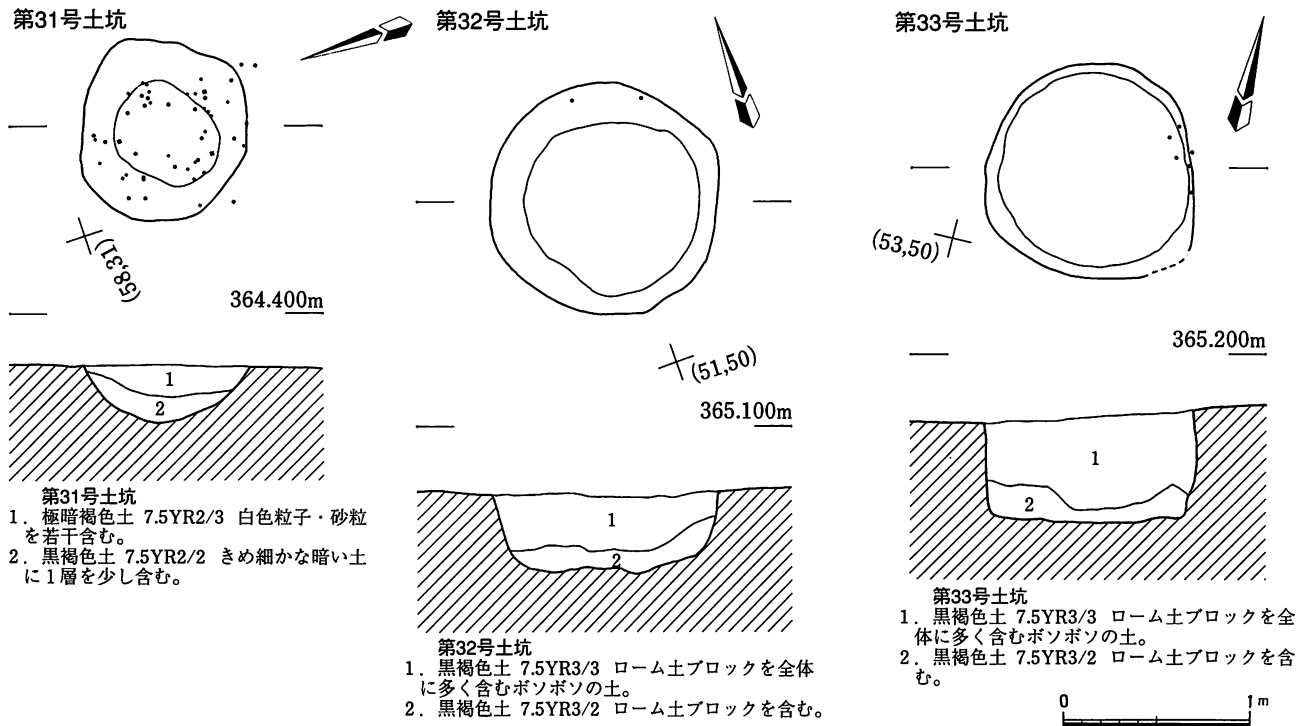
1. 黒褐色土 7.5YR2/2 褐色土、黒褐色スコリアを含む。
2. 黒褐色土 7.5YR2/3 黒褐色・赤褐色スコリアを多く含む。
3. 暗褐色土 7.5YR3/3 小粒な赤褐色スコリアをわずかに含むシルト質層。
4. 暗褐色土 7.5YR3/4 ローム土を含むシルト質層。



第17図 第19~22号土坑平・断面図



第18図 第23～30号土坑平・断面図

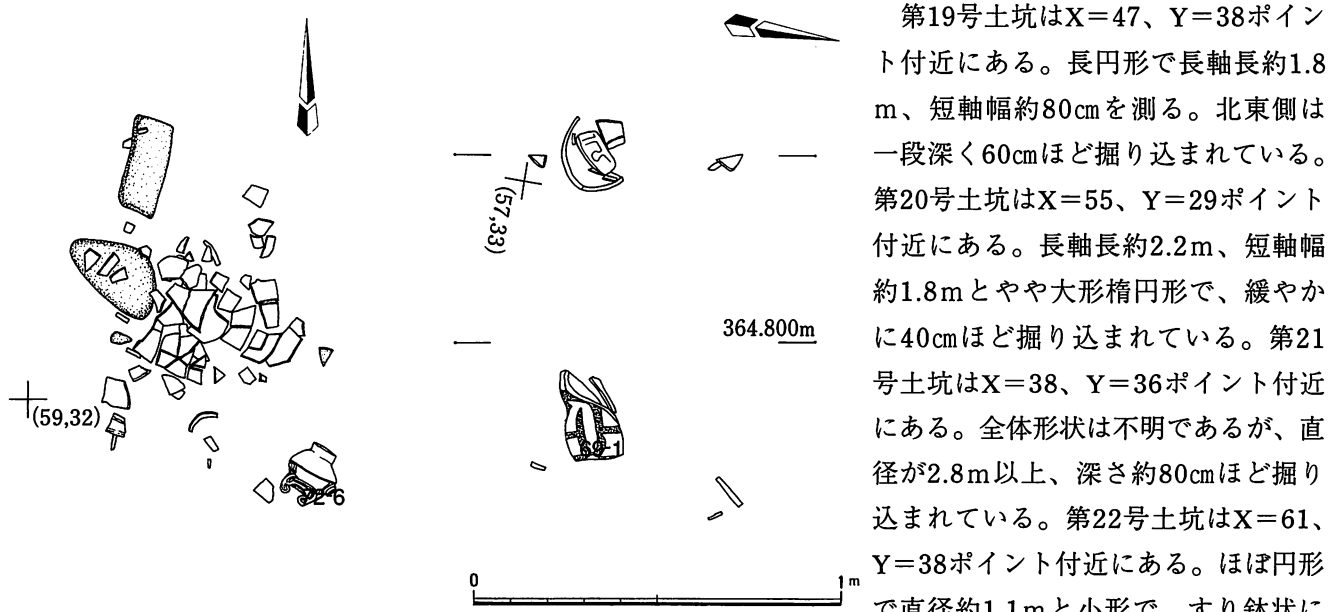


第19図 第31～33号土坑平・断面図

用したと考えられる。

(4) 土坑 (第16～19図)

第14号土坑はX=47、Y=29ポイント付近にある埋甕土坑である。長軸長約1.7m、短軸幅約90cmの楕円形で、深さ約20cmと浅く緩やかに掘り込まれ、その中央に深鉢2個体が正置されていた。第15号土坑はX=45、Y=38ポイント付近にある。長軸長約1.6m、短軸幅約1.3m、楕円形で深さ1mほど掘り込まれた土坑である。また覆土中から動物四肢骨などが出土している。第16号土坑はX=47、Y=26ポイント付近にある。直径約1.2mの略円形で深さ40cmほどしっかり掘り込まれている。第17号土坑はX=51、Y=34ポイント付近にある。長軸長約1.6m、短軸幅約1.2m、やや緩やかに深さ約50cmほど掘り込まれている。第18号土坑はX=49、Y=38ポイント付近にある。直径約1.5mのほぼ正円形で深さ50cmほど掘り込まれている。また覆土中に焼土ブロックが確認された。



第20図 IIA区包含層遺物出土状況図

第23号土坑はX=56、Y=39ポイント付近にある。直径が約1.2mの略円形で深さ約70cmを測るが、底部はさらに全体的に20cmほど壁を掘り込まれオーバーハングしている。内部からは397点の遺物が出土したが、これらは土器191点、黒曜石チップ類を主とする石器77点、小骨片127点である。また覆土上層と底部には純スコリア層が堆積していた。第24号土坑はX=62、Y=38ポイント付近にある。不整円形で長軸長約1.5m、短軸幅約1.2m、深さ40cmほど掘り込まれている。また底面東寄りから翡翠大珠が1点出土した。第25号土坑はX=45、Y=41ポイント付近にある。長軸長約1m、短軸幅約60cmと小形長方形で、40cmほど掘り込まれている。第26号土坑はX=48、Y=40ポイント付近にある。直径約1.2mの略円形で、ゆるやかに20cmほど掘り窪められている。第27号土坑はX=52、Y=48ポイント付近にある。直径約1mの不整円形で、段を持つ底面は深さ約80cm掘り込まれている。第28号土坑はX=58、Y=33ポイント付近にある。長軸長約1.5m、短軸幅約1.1mの長円形で、底面は中央に稜があり30cmほど掘り込まれている。第29号土坑はX=60、Y=32ポイント付近にある。形状からは二つの遺構のようであるが、覆土は一連の埋没過程を示している。第30号土坑はX=51、Y=46ポイント付近にある。長軸長約1.6m、短軸幅約1.3mの楕円形で、ゆるやかに30cmほど掘り込まれている。

第31号土坑はX=57、Y=31ポイント付近にある。直径約90cmの略円形で、30cmほど緩やかに掘り込まれている。第32号土坑はX=52、Y=50ポイント付近にある。直径約1.2m、深さ約40cmの略円形で、底面はほぼ水平である。第33号土坑はX=53、Y=51ポイント付近にある。略円形で直径約1.2m、ほぼ垂直に60cmほど掘り込まれ底面は平らである。

#### (5) ピット群 (第10図)

Ⅱ区のピットは若干の精粗はあるもののほぼ全域から検出されている。しかしながらかなり散漫な分布でありまた検出レベルも異なるため、特定の建物や柵列といった遺構に復元できるものはない。

(小林)

### 第3項 第8次調査

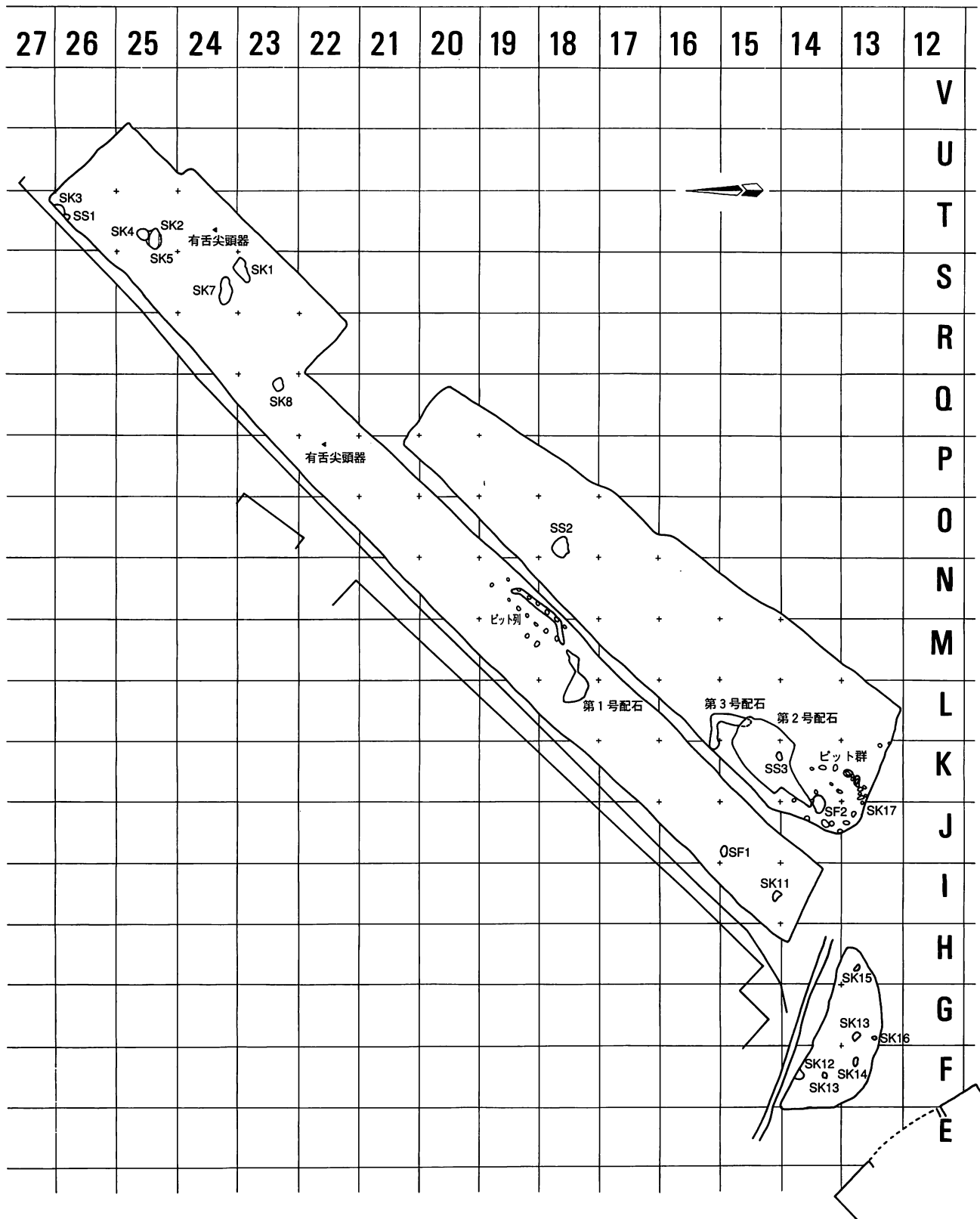
今回、都留高校の敷地内の最も南側を調査した結果、縄文時代と近世以降の遺構・遺物が出土した。縄文時代では土坑17基・集石遺構3基・焼土遺構2ヶ所・ピット群が、近世以降では配石遺構3基・ピット列が検出された。遺構に伴う遺物は少なく、その大半が遺構外から出土したものである。そのため、遺構の時期を確定するのは難しいが、調査区全体から出土する遺物の状態から縄文時代中期末から後期にかけての遺構と考えられる。

#### (1) 集石遺構

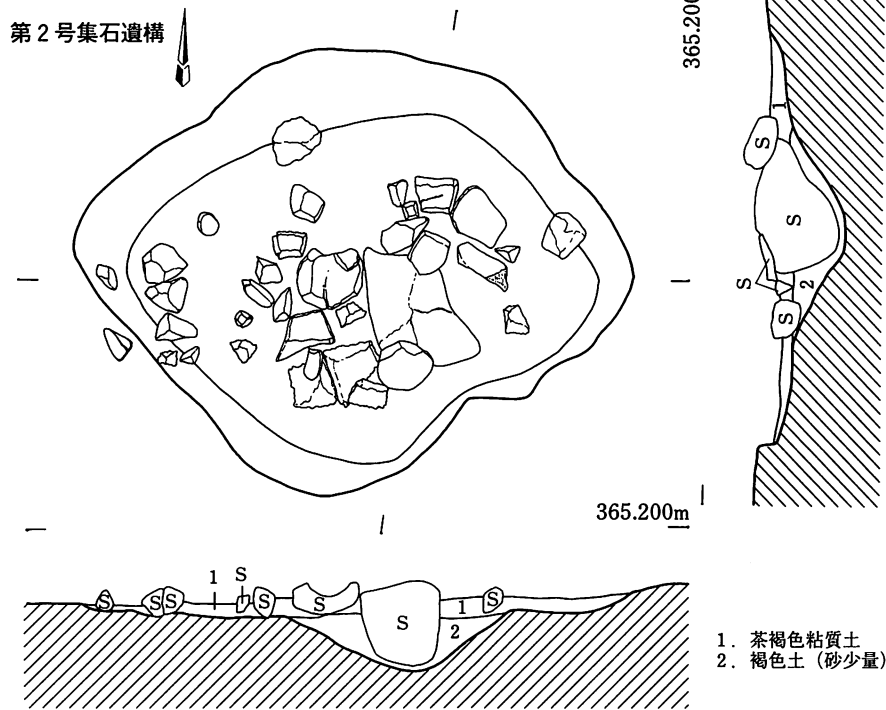
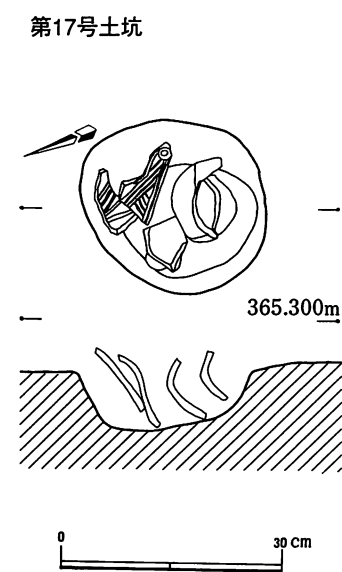
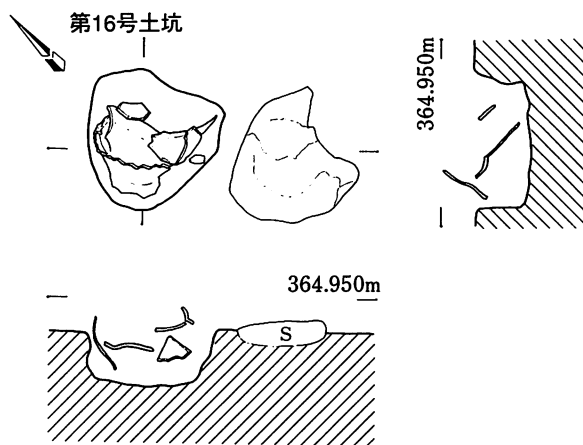
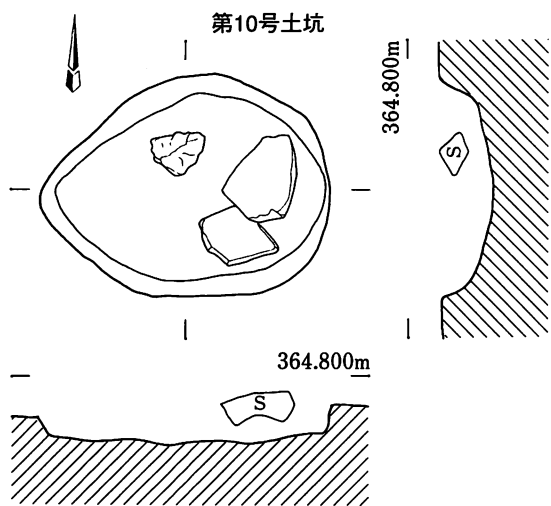
第1号集石遺構はT-26に位置し、標高363.6m付近である。長径120cm・短径110cmの楕円形で深さは35cm程を測る。北西隅が調査区外で、10~18cmほどの細長い礫が卵形に配列されている。

第2表 第8次調査縄文時代土坑一覧表

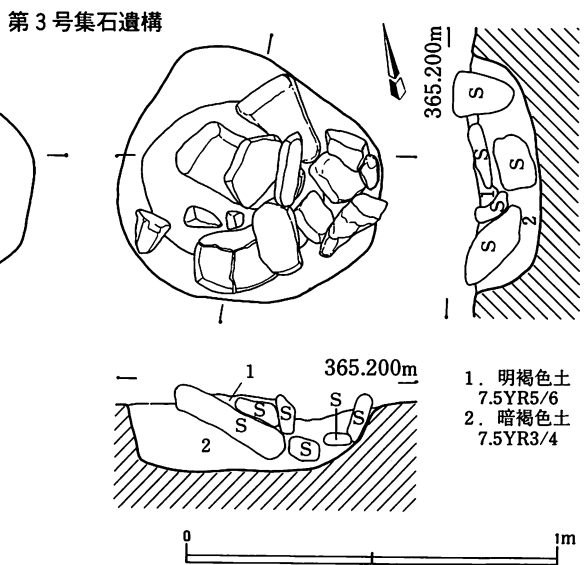
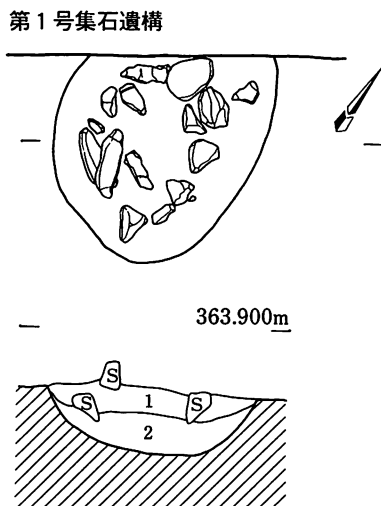
番号	位 置	時 期	種類	規模 (cm) 長径×短径×深さ	形 状	遺物の有無	備 考
1	S-23・24	縄文	土坑	200×95~130×25~35	瓢箪形	特に無い	
2	T-25	縄文	土坑	165×80×20~35	楕円形	特に無い	
4	T-25	縄文	土坑	100×100×25	円形	特に無い	
5	T-25	縄文	土坑	155×70~100×25	不整円形	特に無い	
7	S-24	縄文	土坑	210×105×40	楕円形	特に無い	
8	Q-23	縄文	土坑	90×90×20~30	円形	特に無い	
10	F-14	縄文	土坑	80×60×15	卵形	特に無い	
11	I-15	縄文	土坑	85×60×10~20	卵形	特に無い	
12	F-14	縄文中期末~後期	土坑	83×73×20	楕円形	縄文	
13	G-13	縄文中期末~後期	土坑	82×45×20	楕円形	縄文	
14	F-13	縄文中期末~後期	土坑	70×70×15	円形	縄文	
15	H-13	縄文	土坑	70×70×20	円形	特に無い	
16	G-13	縄文後期	土坑	35×35×15	円形	堀之内式の浅鉢	
17	J-13	縄文後期	土坑	25×25×10	円形	堀之内式の浅鉢	



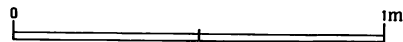
第21図 第8次調査遺構全体図



1. 茶褐色粘質土
2. 褐色土 (砂少量)

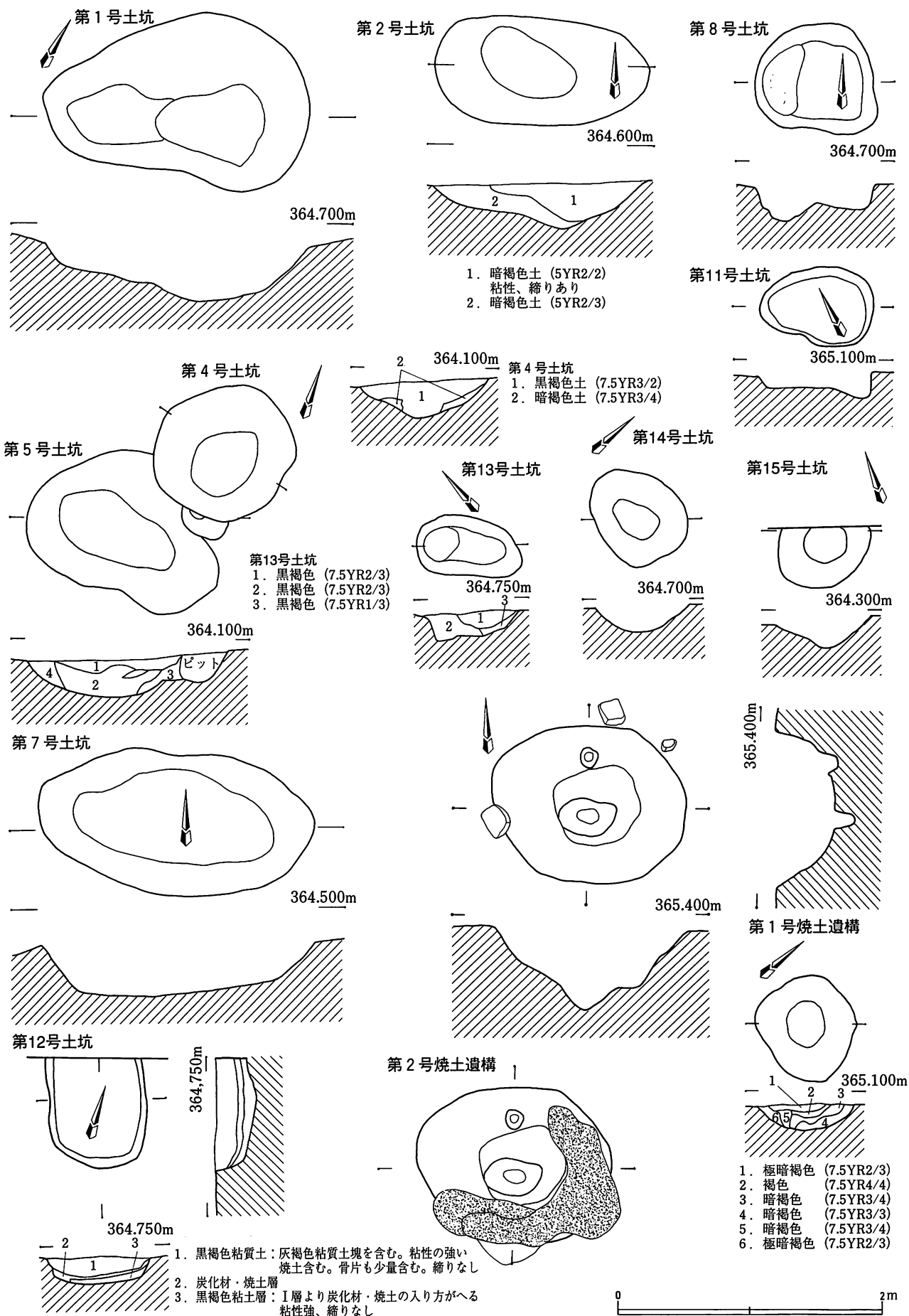


1. 黒色土層 1~2mmほどの小さな赤色粒子が少量ながら見られる。1~2mmの黄色粒子も少量、粘性、しまり共に強い
2. 黒褐色土層 1~5mmの赤色粒子 1~8mmの黄色粒子が含まれている。上層より若干多く含まれている。上層と同様に粘性、しまり

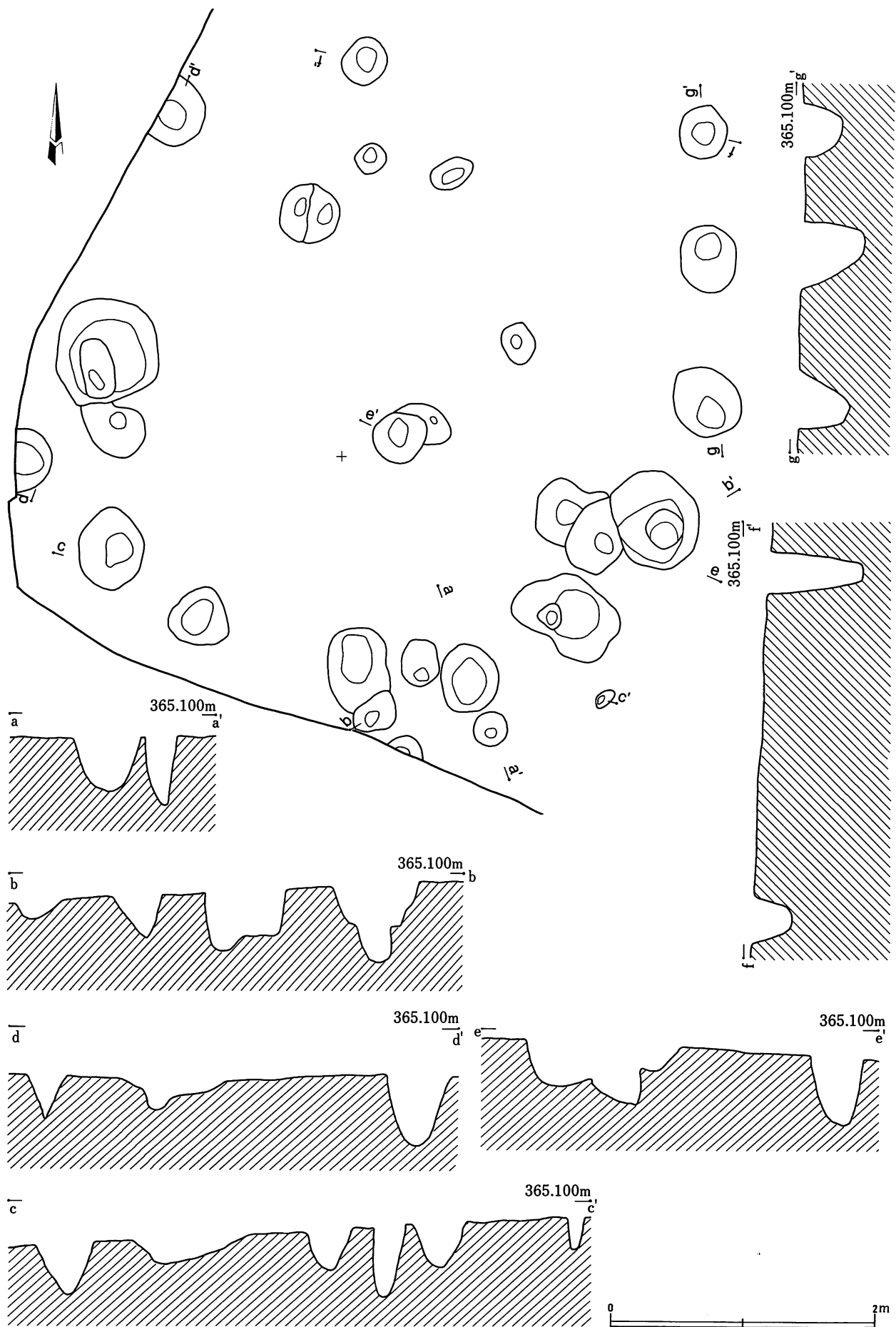


第22図 第8次調査縄文遺構平・断面図(1)





第23図 第8次調査縄文遺構平・断面図(2)



第24圖 第8次調査縄文遺構平・断面図(3)

第2号集石遺構はO-18に位置し、標高364.8m付近である。長径305cm・短径240cmの不整形で深さ50cmを測る。長さ40cm・幅20cm・深さ24cmの大きな礫を囲むように、その周辺に10cmから20cmほどの礫が配置されている。

第3号集石遺構はK-14~15に位置し、標高365.05m付近である。長径140cm・短径130cmのほぼ円形で深さは40cmである。長さ20cm・幅10cm・厚さ5cmほどの礫が重なり合って発見され、その隙間には粘土の様な粘性の強い土があった。これらを取り除くと、長さ30cm・幅20cmほどの礫が斜めに立てかけた様に配置され、底面にも平石が敷きつめられていた。

## (2) ピット群

J-13・14~K-13・14に位置し、標高365.1~364.9mを測り北側から南側に向かってやや傾斜している。ピットは大小合わせて29基確認でき、平均的な大きさは直径50cm・深さ50~70cmほどである。それぞれの平面的な配置は住居跡の柱穴を想像させるが、調査区全体が住宅建設や都留高校の施設整備によって、かなり攪乱を受けているため明確な根拠は無い。それぞれのピットを結んだその直径は約5mでほぼ円形となる。

## (3) 焼土遺構

第1号焼土遺構はJ-15に位置し、標高365m付近である。直径約80cmの円形で深さは20cmを測る。

第2号焼土遺構はJ-14~K-14に位置し、標高364.34m付近である。長径147cm・短径118cmの楕円形で深さは55から60cmを測る。確認面から三日月形の焼土があり、底面の近くまで焼土があった。土坑中の遺物の変形するほどの高温で焼かれた形跡がある。

## (4) 土坑

第2表を参照。

(笠原みゆき)

## 第2節 奈良・平安時代から中世の遺構

I区では中世と奈良・平安時代遺構が層位的な上下差をもって確認されたが、II区では両者を層位的に分離することはできなかった。また出土遺物もごく少なく内容的にも分離困難なため、一括して提示することにした。

### 第1項 第7次調査I区(第25・30図)

#### (1) 奈良・平安時代の遺構

本区から検出された奈良・平安時代の遺構は、土坑、溝、ピットであるが、土坑・ピットは東寄りにやや集中し、溝は調査区東端を南北に走っている。

##### a) 土坑(第26~28図)

第34号土坑はX=31、Y=31ポイント付近にある。長軸長約1.2m、短軸幅約90cm、深さ約65cmほどの不整形で、南側を中世ピットによって切られている。第35号土坑はX=33、Y=29ポイント付近にある。長軸長約1.4m、短軸幅約90cmで略長方形、深さ約80cmほどほぼ垂直に掘り下げているが、西側は一段の高く三角形に張り出している。第36号土坑はX=34、Y=24ポイント付近にある。長軸長約85cm、短軸幅約75cmの楕円形で、深さ約45cmほど掘り鉢状に掘り下げられている。第37号土坑はX=33、Y=33ポイント付近にある。長軸長約2m、短軸幅約75cmの略長方形で、深さ約60cmほどほぼ垂直に掘り下げている。北寄り底面に枕石のような直径25cmほどの扁平大形円礫が置かれており、墓壙といった用途が推測される。第38号土坑はX=35、Y=18ポイント付近にある。長軸長約1.1m、短軸幅約90cmの楕円形で、やや緩やかに深さ15cmほど掘り下げられている。また底面中央に直径10cmほどの扁平礫が置かれており、何らかの関係を持つと思われる。

第39号土坑はX=35、Y=22ポイント付近にある。調査区外に延びるが検出部分は船首部分の船底のような隅丸三角形に掘られ、長さ約2.5m以上、幅約2.9m、深さ約85cmである。第40号土坑はX=34、Y=24ポイント付近にある。直径約1.1mのほぼ正円形で、深さ約15cm緩やかに掘り下げている。第41号土坑はX=20、Y=24

ポイント付近にある。長辺長約1m弱、短辺幅約70cm前後の不整長方形で、深さ約50cmほどほぼ垂直に掘り下げている。

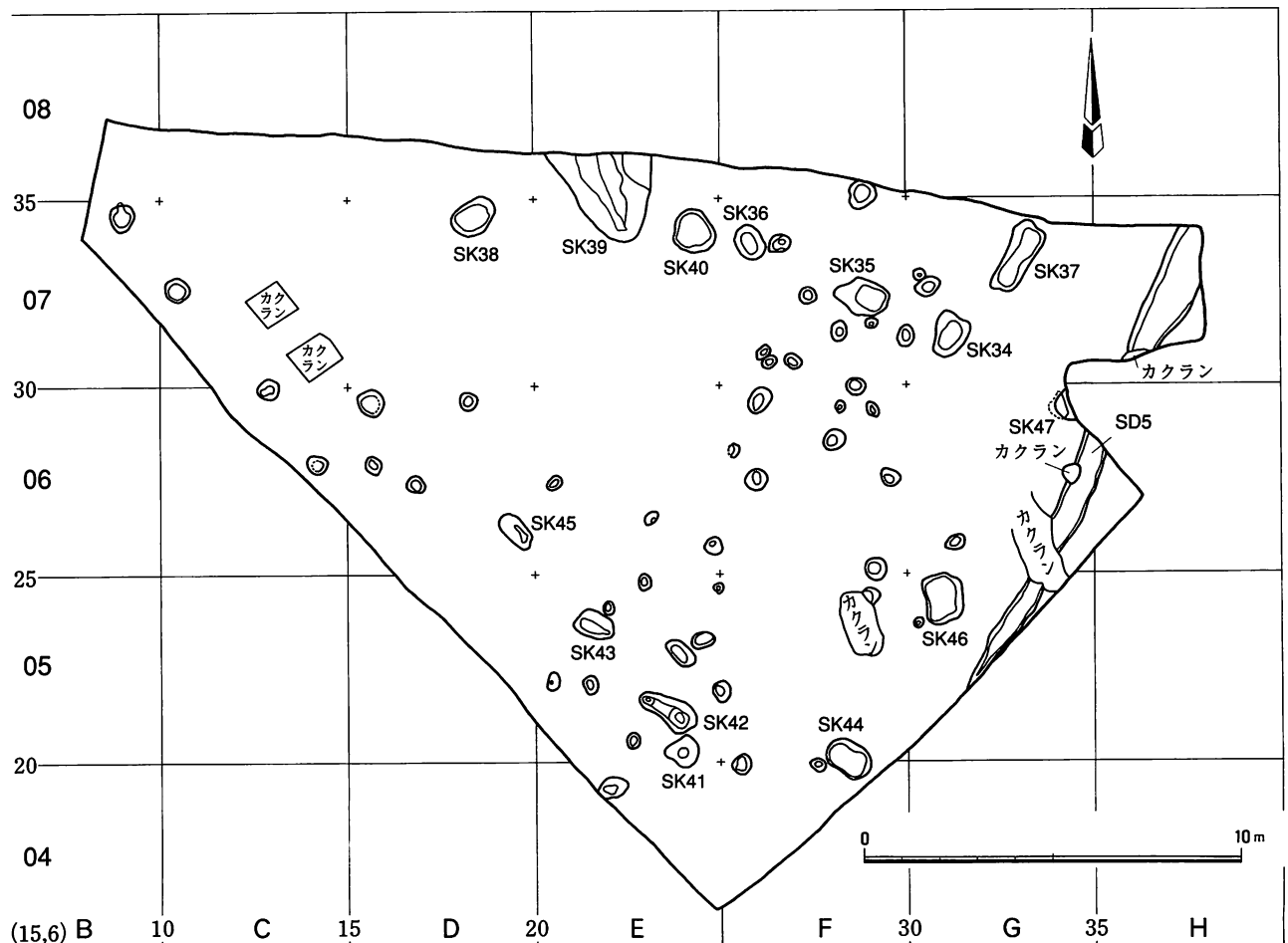
第42号土坑はX=21、Y=24ポイント付近にある。長軸長約1.6m、短軸幅約70cm前後の不整長円形で、深さ50cm弱に若干傾斜をもって掘り下げられ、底面は両端にやや段差がある。第43号土坑はX=24、Y=22ポイント付近にある。長軸長約1.2m、短軸幅約70cm強の不整長円形で、深さ30cmほど緩やかに掘り下げ、底面は東西で段差を持っている。第44号土坑はX=20、Y=28ポイント付近にある。長軸長約1.2m、短軸幅約70cm強の不整楕円形で、深さ40cm前後直線的に掘り下げている。第45号土坑はX=26、Y=20ポイント付近にある。長軸長1m強、短軸長約50cmの不整長円形で、深さ20cm強ほど直線的に掘り下げている。第46号土坑はX=24、Y=31ポイント付近にある。長軸長1.2m強、短軸幅約90cm前後のかなり整った長方形で、深さは60cm前後ほぼ垂直に掘り下げられ、一部の壁はややオーバーハングしている。第47号土坑はX=29、Y=34ポイント付近にあるが、大半は調査区外にあると思われる。直径80cmほどの円形と推測され、深さ50cm弱垂直に掘り下げ、一部ではオーバーハングしている。

b) 溝 (第29図)

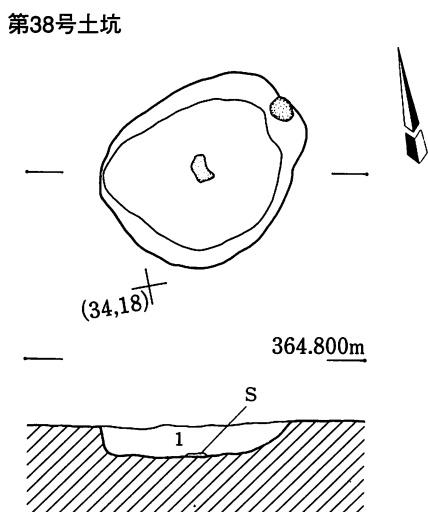
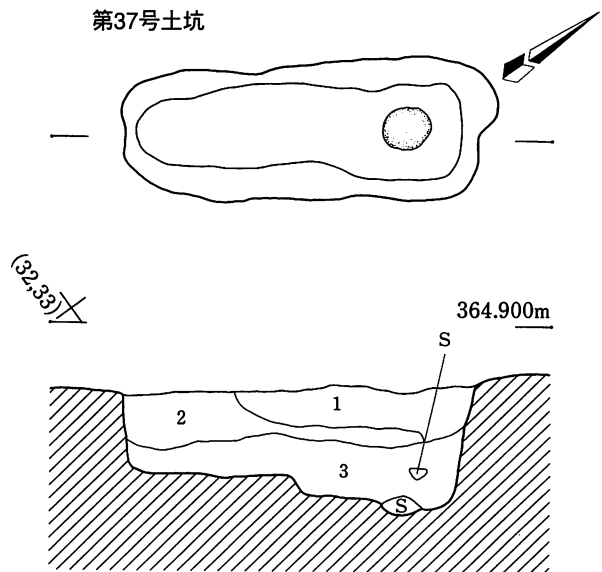
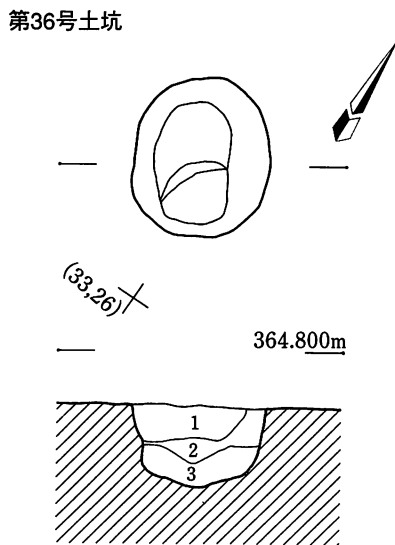
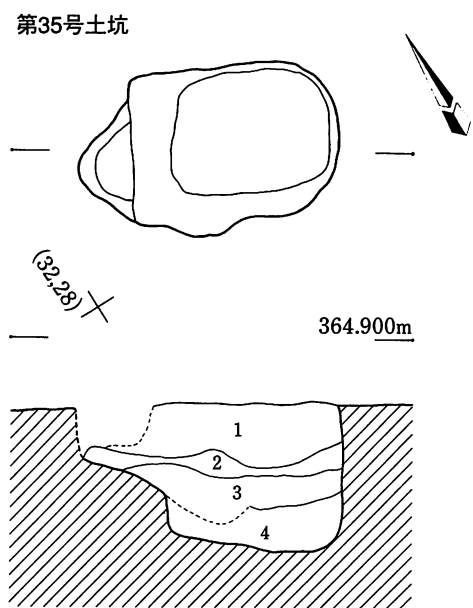
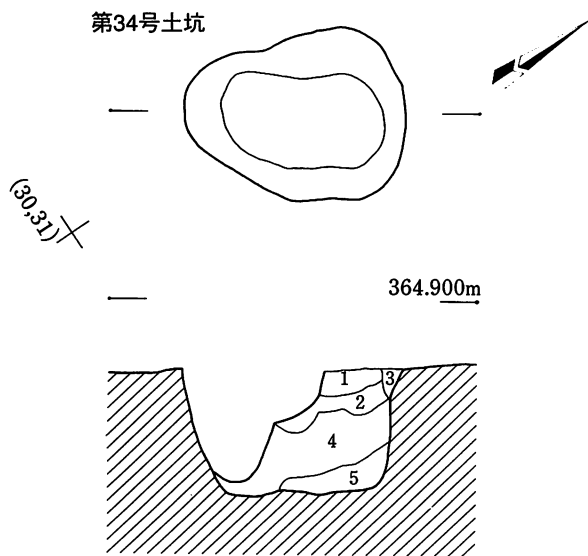
第5号溝はX=22~34、Y=32~38ポイント付近にある南北方向の溝である。一部攪乱されているがほぼ良好に遺存しており、南北端で調査範囲外に続いている。長さ約14m以上、幅約40cm~1m前後、深さ約20cmほどで、底面はほぼ水平で、覆土は全体に黒味の強い土が堆積していた。この溝は縄文時代遺構確認面で検出できたものであるが、整理時にIIA区第5号溝と方向および形状がよく一致することが確認でき、同一の溝と考えられる。

c) ピット群 (第25図)

本調査区古代面から確認されたピット群はほぼ全体に分布しているが、粗密があり中央部南寄りから北西に



第25図 I A区奈良・平安時代遺構全体図



第34号土坑

1. 暗褐色土 7.5YR4/3 ローム土を主体とする。
2. 暗褐色土 7.5YR3/3 暗褐色土とローム土からなる。
3. 黒褐色土 7.5YR3/2 地山砂質土を主体とし、覆土をやや含む。
4. 黒色土 5YR11/1 ロームブロックを一部に含む。
5. 暗赤褐色土 5YR3/3 地山砂質土を主体とし、一部に4層を含む。

第35号土坑

1. 暗赤褐色土 5YR2/3 ロームブロックを全体に、砂粒を若干含む。
2. にぶい赤褐色土 7.5YR3/4 1層よりもローム土を多く含む。
3. 黒褐色土 5YR2/2 地山砂質ローム土主体で、褐色土をブロック的に含む。
4. 黒褐色土 5YR2/1 砂質土を主体とし、一部に地山ロームブロックを含む。

第36号土坑

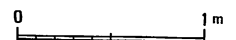
1. 暗赤褐色土 7.5YR3/3 ローム粒・砂粒を少し含む。
2. 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム土ブロックを部分的に含む。
3. 極暗褐色土 7.5YR2/3 地山砂質土と2層からなる。

第37号土坑

1. 極暗褐色土 7.5YR2/3 暗褐色土にローム土ブロック・砂粒を若干含む。
2. 暗褐色土 7.5YR3/3 砂粒を少し含む。
3. 暗褐色土 7.5YR3/4 1層に類似する。砂粒を少し含む。

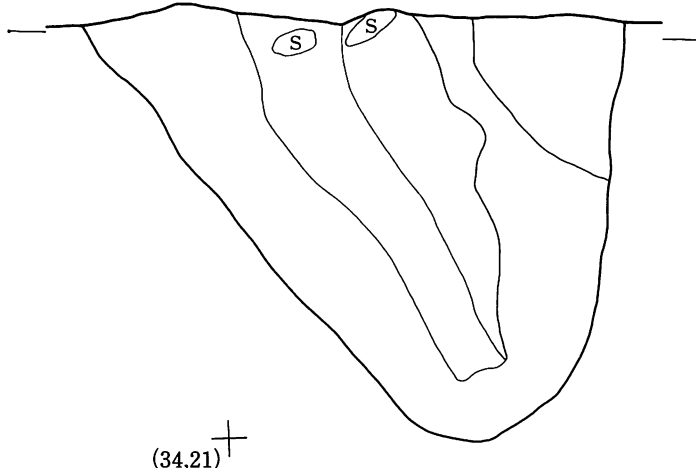
第38号土坑

1. 黒褐色土 5YR2/2

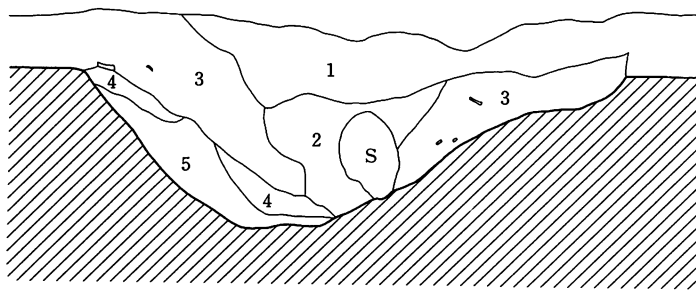


第26図 第34~38号土坑平・断面図

第39号土坑



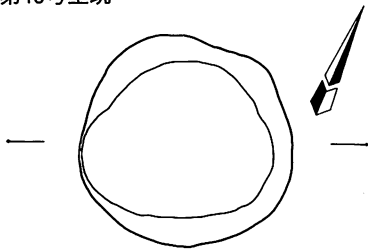
364.800m



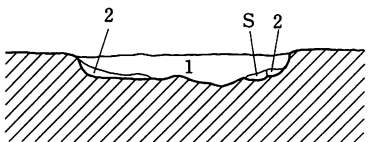
第39号土坑

1. 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒を多く含む。
2. 暗褐色土 7.5YR3/4 1層よりロームブロック・ローム粒を多く含む。
3. 褐色土 7.5YR4/3 全体にロームブロック・ローム粒を多く含む。
4. 褐色土 7.5YR4/6 地山砂質土を主体とし、混じりのない暗褐色土をブロック的に含む。
5. にぶい褐色土 7.5YR5/4 ほとんど地山砂質土であるが、地山よりもやや粘質でわずかに褐色土を含む。

第40号土坑



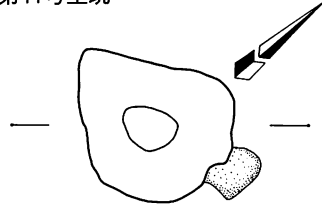
364.700m



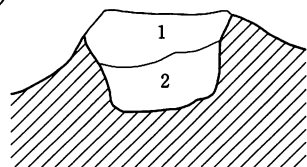
第40号土坑

1. 暗赤褐色土 5YR3/2 ローム粒を全体に多く含む。
2. 黒褐色土 5YR2/2 1層に地山ブロックを含む。

第41号土坑



364.700m



第41号土坑

1. 極暗褐色土 7.5YR2/3 ローム粒を全体に多く含む。
2. 暗褐色土 7.5YR5/3 1層に地山砂質土を含む。



第27図 第39～41号土坑平・断面図

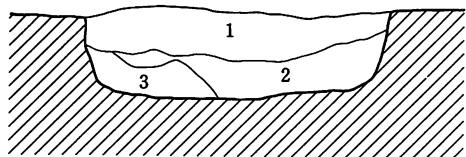
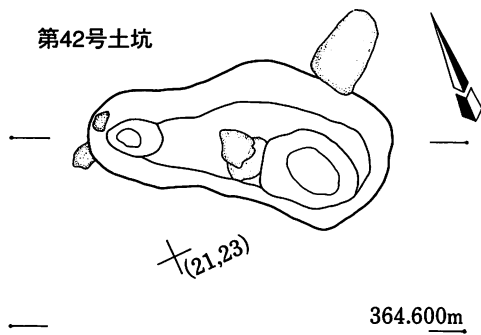
かけて比較的多く集中している。しかしながら掘立柱建物跡や柵列といった遺構に復元可能なものは認められない。規模は直径50cm程度のものが多く深さは様々である。覆土はおおむねローム土を含む褐色土が堆積している。

## (2) 中世の遺構

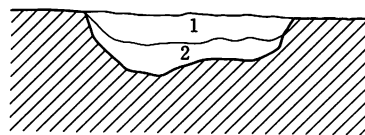
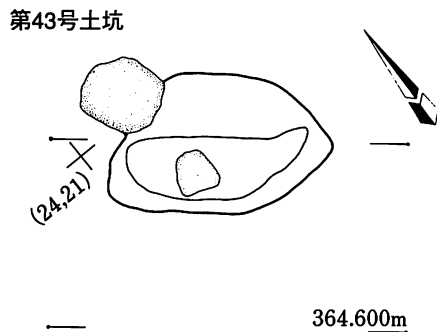
本区で検出された中世の遺構は、土坑、溝、ピットであるが、中央部南寄りにかなり集中する傾向が伺われる。また覆土には黒褐色土が共通して堆積している。

### a) 土坑 (第31～36図)

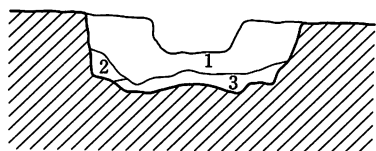
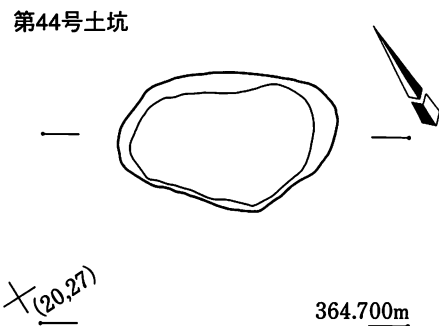
第48号土坑はX=17、Y=24ポイント付近にある。片側半分が調査区外に延びるが、長軸長約1.6m、短軸幅約70cm以上の楕円形と推測され、深さ約1mほど直線的に掘り下げている。第49号土坑はX=19、Y=26ポイント付近にあるが、南東部が攪乱で失われている。長軸長約1.9m、短軸幅約90cm程度の長円形で、深さ約45cmほど直線的に掘り下げている。第50号土坑はX=20、Y=25ポイント付近にある。長軸長約2.1m、短軸幅約1.1mのやや不整な長楕円形で、深さ約40cmほど直線的に掘り下げている。第51号土坑はX=27、Y=19ポイント付近にある。長径約1.55m、短径約1.4mの不整円形で、深さ約70cmほどほぼ直線的に掘り下げている。覆土上層より火打金が1点出土した。第53号土坑はX=29、Y=20ポイント付近にある。長軸長約1.65m、短軸幅約1.3mのやや不整な楕円形で、深さ約30cmほどやや緩やかに掘り下げている。第78号土坑はX=28、Y=18ポイント付近にある。第51号土坑との新旧関係は不明である。平面的には2つの土坑のような形態であるが土層的には分離できなかったため、一つの土坑として解釈したが、形態的には複数の可能性が高く、二つの土坑が、同一の埋没過程をたどった可能性があろう。長軸長は約2.4m、短軸幅は約1.5m、西側は深さ約40cmほど掘り鉢状



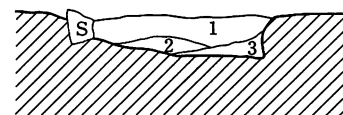
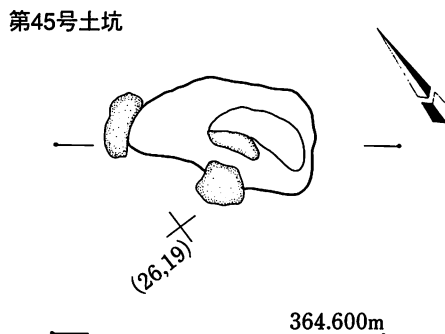
- 第42号土坑
1. 極暗褐色土 7.5YR2/3 ローム粒・砂粒を若干含む。
  2. 黒褐色土 7.5YR2/2 1層よりきめ細かい。砂粒を少し含む。
  3. 黒褐色土 7.5YR3/2 地山砂質土を主体とし、砂粒を少し含む。



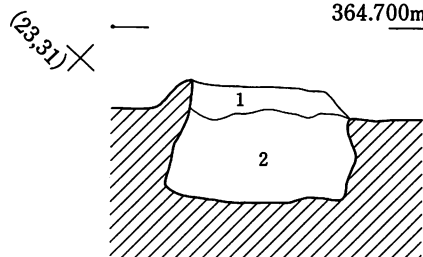
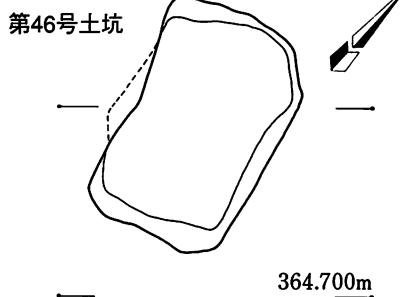
- 第43号土坑
1. 黒褐色土 7.5YR3/2 砂粒を少し含む。
  2. 極暗褐色土 7.5YR2/3 ローム粒を若干含む。



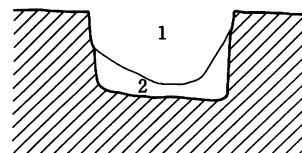
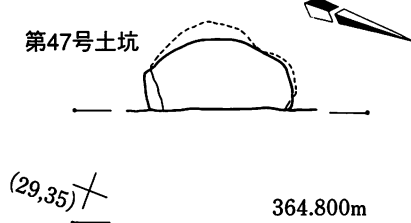
- 第44号土坑
1. 極暗褐色土 7.5YR2/3 ローム粒を少し含む。
  2. 黒褐色土 7.5YR3/2 1層と3層からなる。
  3. 黒褐色土 7.5YR3/2 地山砂質土を主体とし、ローム粒を少し含む。



- 第45号土坑
1. 黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒を少し含む。
  2. 黒褐色土 7.5YR3/2 1層よりもローム粒を多く含む。
  3. 黒褐色土 7.5YR3/3 ローム粒、砂粒を多く含む。



- 第46号土坑
1. 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒を全体に少し含む。
  2. 暗褐色土 7.5YR3/3 ロームブロックを主体とし、1層を少しブロック的に含む。



- 第47号土坑
1. 暗赤褐色土 5YR3/3 ロームブロック・砂粒を多く含む。
  2. 暗赤褐色土 5YR3/4 褐色土とロームブロックの混ざった土。砂粒を少し含む。



第28図 第42～47号土坑平・断面図



第29図 第5号溝平・断面図

に、東側は徐々に掘り下げている。

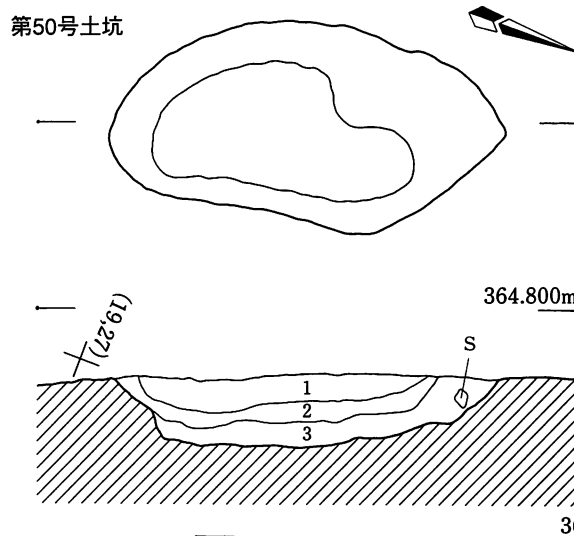
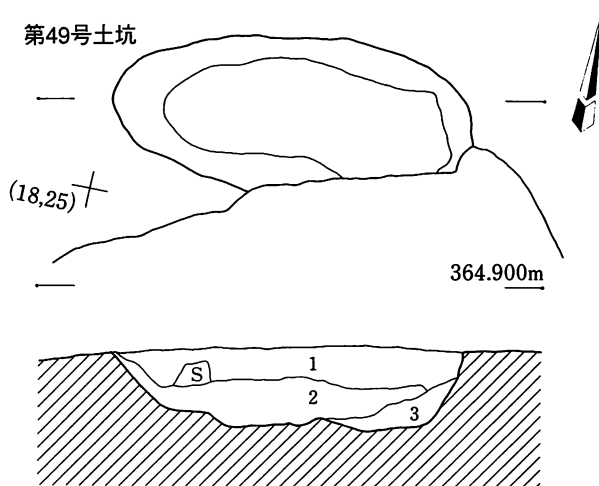
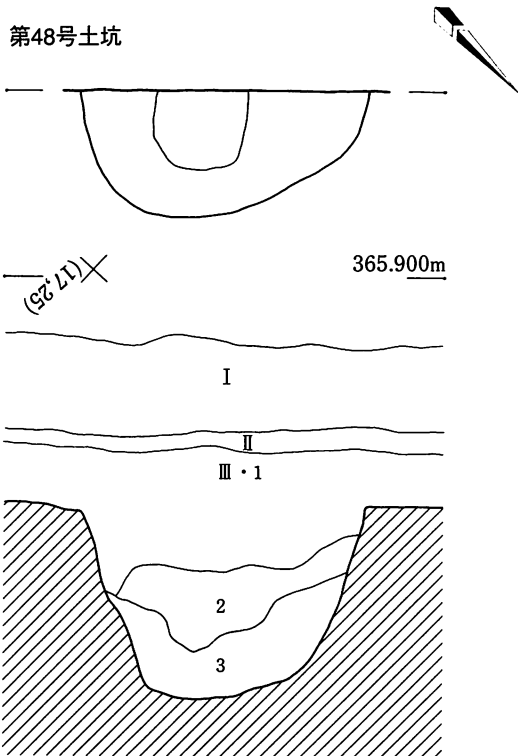
第52号土坑はX=27、Y=22ポイント付近にあり、南端を攪乱されている。長軸長約1.65m、短軸幅約1.3mの楕円形で、深さ約60cmほど直線的に掘り下げている。第54号土坑はX=30、Y=22ポイント付近にある。長軸長約1.5m、短軸幅約1.2mの不整形円で、深さ約35cmほどやや緩やかに掘り下げている。第55号土坑はX=26、Y=21ポイント付近にある。土層観察から二つの土坑であることが判り a・b の小番号を付けた。まず b 土坑が掘られ、ある程度埋まった段階で a 土坑が掘られ、最終的に両者の上層に同一の土が入り込んだと考えられる。両者共に長軸長約1.1m前後、短軸幅約70~90cmの長円形で、深さは a 土坑が約50cm、b 土坑が約30cmほど緩やかに掘り下げている。第56号土坑はX=34、Y=16ポイント付近にある。長軸長約1.6m、短軸幅約1.3mの整った楕円形で、深さ約35cmほど徐々に掘り下げやや凹凸のある底面となる。第57号土坑はX=37、Y=9ポイント付近にある。片側は掘りすぎのため全体形状は不明だが、おそらく直径約1.5mほどの不整形円と思われる。深さは約40cm程度と浅く緩やかに掘り下げられている。第69号土坑はX=34、Y=15ポイント付近にあり、第56号土坑に切られている。掘り下げたところ二つの土坑であることが判り a・b と細別した。両者ともに長円形で、a 土坑が長軸長約1m、短軸幅約90cm、深さ約60cm、b 土坑は長軸長約1.2m以上、短軸幅約80cm、深さ約65cmである。いずれも急に掘り下げている。

第63・64号土坑はX=27、Y=25ポイント付近にあり若干の切り合いを持つが、第63号土坑の方が新しい。第63号土坑は長軸長約2.05m、短軸幅約90cm程度の長円形で、深さ約55cmほど緩やかに掘り下げている。第64号土坑は長軸長約1.6m、短軸幅約1.4m程度のほぼ円形で、深さ約70cmでほぼ垂直に掘り下げている。第65号土坑はX=30、Y=24ポイント付近にある。長軸長約1.2m、短軸幅約90cmの長円形で、深さ約30cmほどほぼ垂直に掘り下げ大きく湾曲して底面となっている。第66号土坑はX=29、Y=27ポイント付近にある。長軸長約2.2m、短軸幅約1.05m程度の不整な長円形で、深さ約20cmと浅いが直線的に掘り下げている。第67号土坑はX=34、Y=28ポイント付近にある。長軸長約2.4m、短軸幅約1.5mの不整形長円形で、深さ約35cmほど浅く掘り下げやや凸凹な底面となっている。第68号土坑はX=29、Y=32ポイント付近にある。長軸長約1.3m、短軸幅約95cmの長円形で、深さ約40cmほどやや緩やかに掘り下げている。第70号土坑はX=34、Y=25ポイント付近にある。長軸長約2.45m、短軸幅約1.3mの不整形長円形で、深さ約20cmほど掘り下げている。

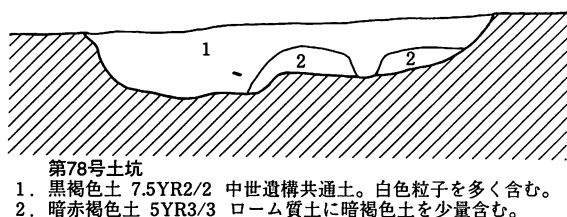
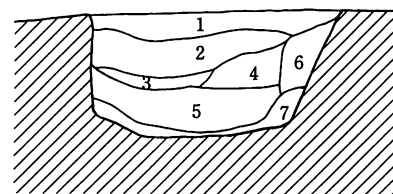
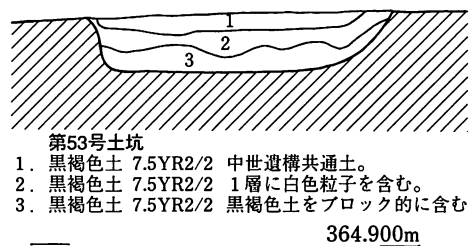
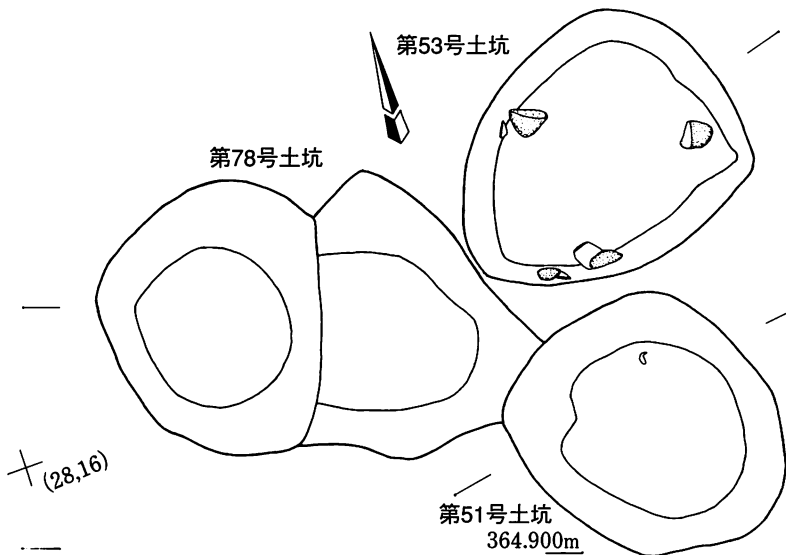
第72号土坑はX=22、Y=26ポイント周囲にあり、第73号土坑と若干切り合うが、新旧関係は不明である。長軸長約1.95m、短軸幅約1.1mのかなり整った長方形で、深さ約65cmほど直線的に掘り下げほぼ水平な底面となる。このような整った形状の土坑は少なく、墓壙



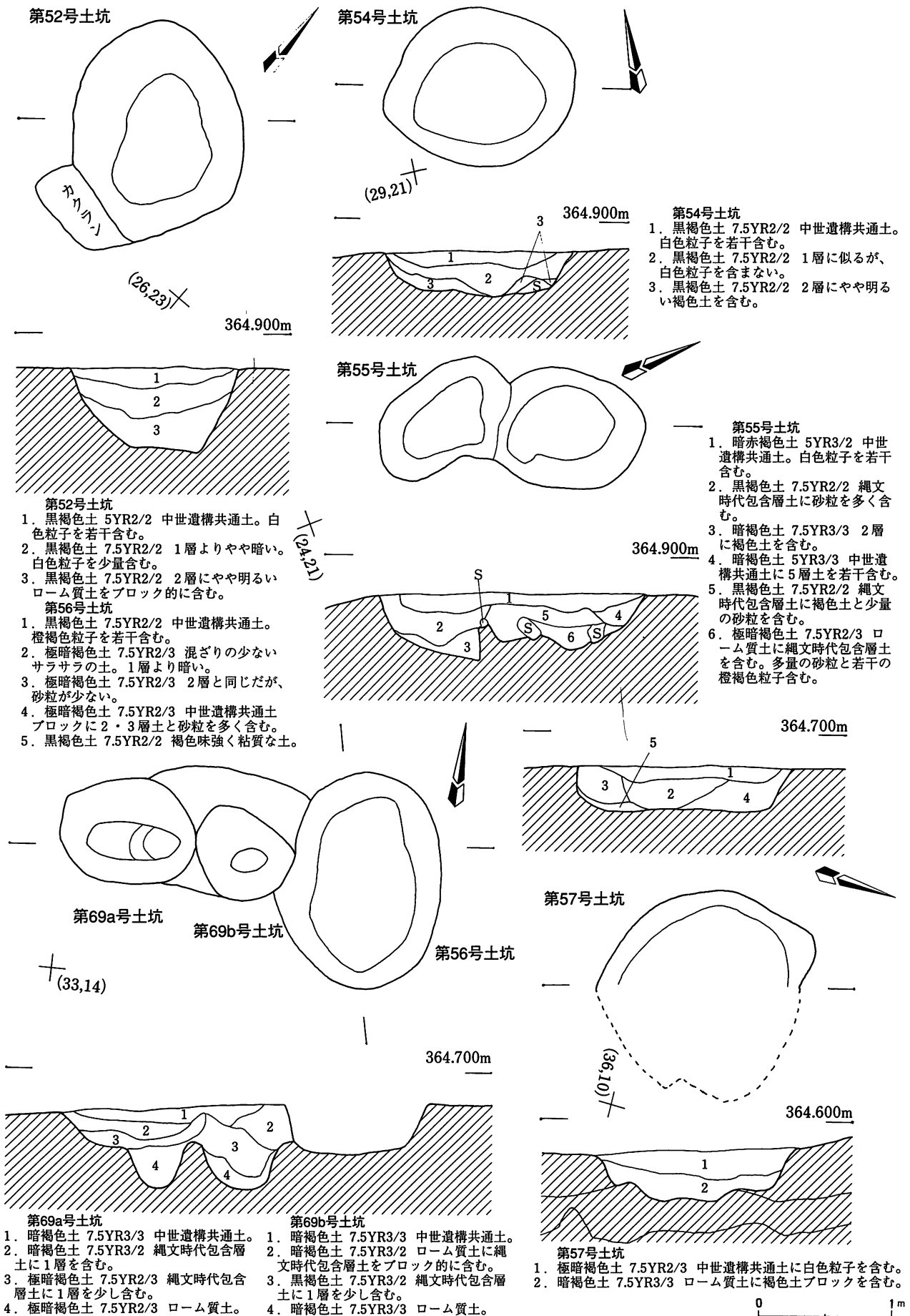




- 第48号土坑
- I. 暗褐色土 7.5YR3/4 標準土層 I 層。攪乱・容土。
  - II. 極暗褐色土 7.5YR2/3 III 層に橙褐色スコリアを多く含む。
  - III・1. 黒褐色土 7.5YR2/3 標準土層 III 層、本土坑 1 層。小砂を含む。
- 第49号土坑
1. 極暗褐色土 7.5YR2/3 やや硬めの褐色土。小砂を若干含む。
  2. 暗褐色土 7.5YR3/3 1 層より明るい。白色粒子を多く含む。
  3. 極暗褐色土 7.5YR2/3 1 層に縄文時代包含層の黒褐色土を含む。
- 第50号土坑
1. 黒褐色土 7.5YR3/2 ややきめ細かい褐色土。中世遺構共通土。
  2. 黒褐色土 7.5YR2/2 明るく硬質な土をブロック的に、小砂も含む。
  3. 黒褐色土 7.5YR2/2 中世遺構地山の黒褐色土と 1 層が混ざった土。

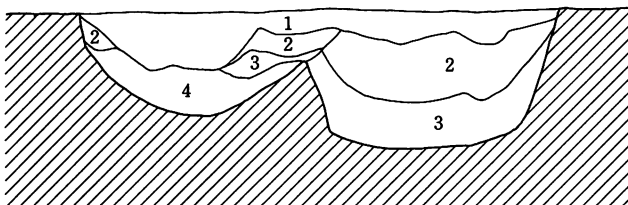
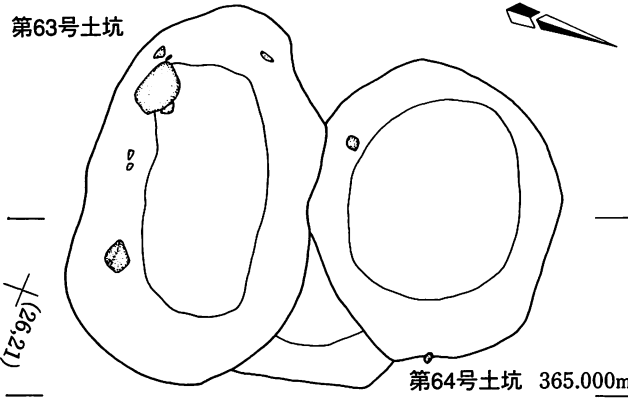


第31図 第48～51・53・78号土坑平・断面図



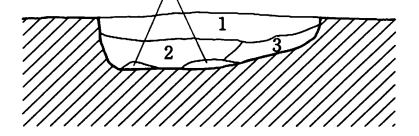
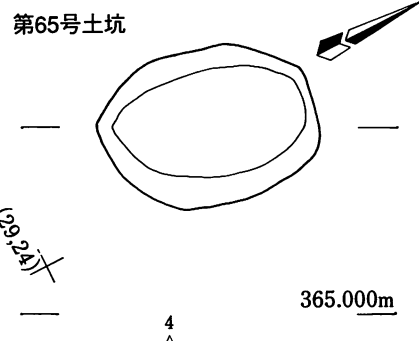
第32図 第52・54～57・69号土坑平・断面図

第63号土坑



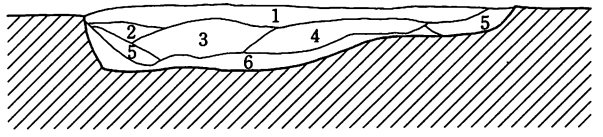
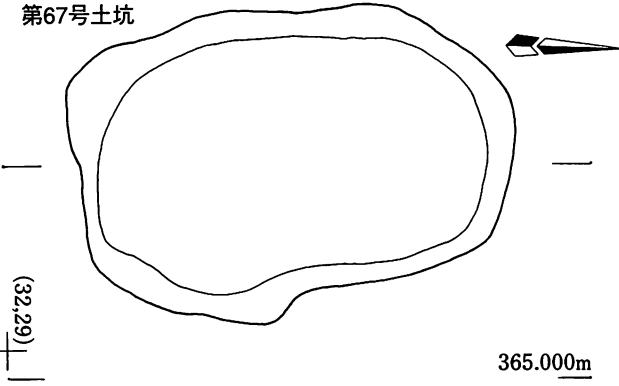
- 第63号土坑
1. 黒褐色土 10YR2/3 中世遺構共通土。白色粒子を多く含む。
  2. 黒褐色土 10YR2/3 縄文時代包含層土に白色粒子を少量含む。
  3. 黒褐色土 10YR2/3 中世遺構共通土にローム質土を若干含む。
  4. 暗褐色土 10YR3/3 中世遺構共通土にローム土ブロックを含む。

第65号土坑



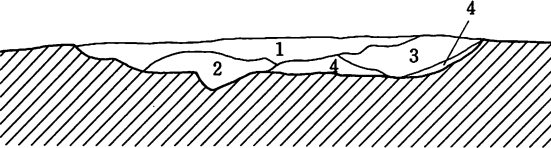
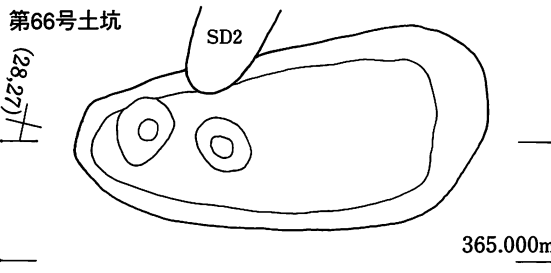
- 第65号土坑
1. 黒褐色土 5YR2/2 中世遺構共通土。白色粒子を多く含む。
  2. 黒褐色土 5YR2/2 縄文時代包含層土で、混ざり少ない。
  3. 黒褐色土 5YR2/2 2層より明るく1層より暗い。白色粒子を少し含む。
  4. 黒褐色土 5YR2/2 ローム質褐色土を主体とする。

第67号土坑



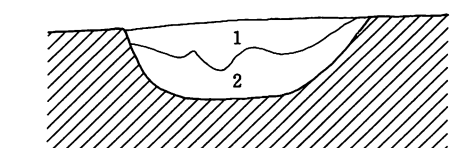
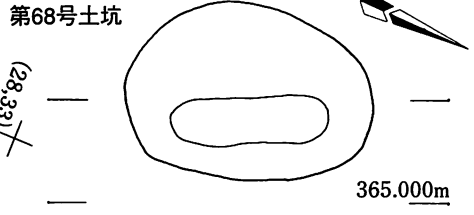
- 第67号土坑
1. 暗褐色土 7.5YR3/4 中世遺構共通土。白色粒子を若干含む。
  2. 褐色土 7.5YR4/4 中世遺構共通土にローム質土を含む。
  3. 暗褐色土 7.5YR3/3 中世遺構共通土に白色粒子を少し含む。
  4. 暗褐色土 7.5YR3/3 中世遺構共通土を主体とし、縄文時代包含層土をブロック的に少し、白色粒子を若干含む。
  5. 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム質土に、縄文時代包含層土を含む。
  6. 暗褐色土 7.5YR3/3 ローム質土を多く、縄文時代包含層土を若干含む。

第66号土坑



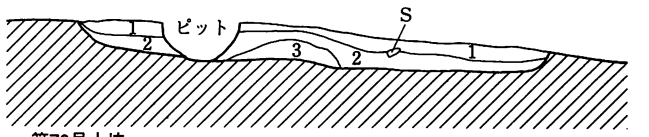
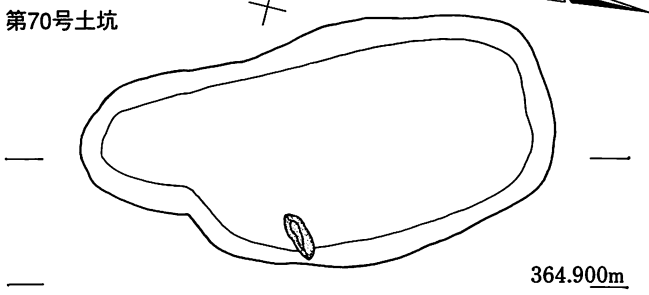
- 第66号土坑
1. 黒褐色土 5YR2/2 中世遺構共通土。白色粒子を多く含む。
  2. 極暗褐色土 7.5YR2/3 縄文包含層土にローム土ブロックを含む。
  3. 黒褐色土 5YR2/2 中世遺構共通土に縄文時代包含層土を含む。
  4. 黒褐色土 5YR2/2 ローム質褐色土に縄文時代包含層土を含む。

第68号土坑



- 第68号土坑
1. 黒褐色土 10YR2/3 中世遺構共通土。白色粒子を少し含む。
  2. 暗褐色土 10YR3/4 縄文時代包含層土にローム質土を含む。

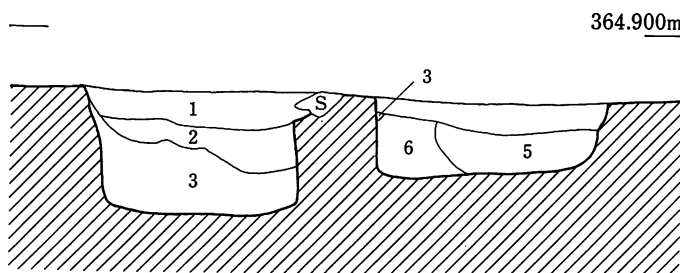
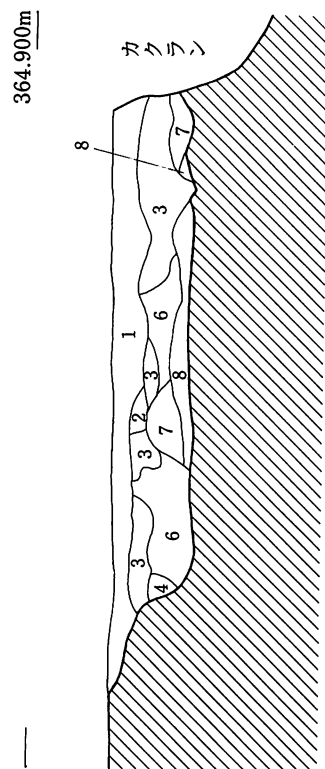
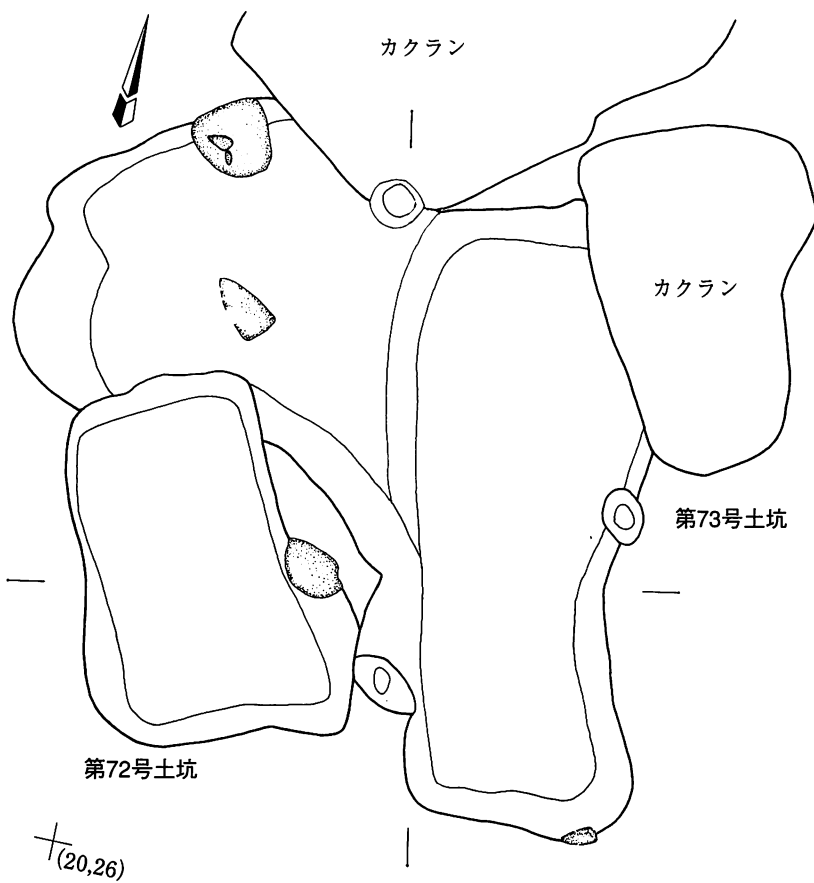
第70号土坑



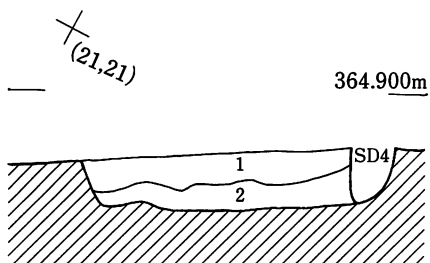
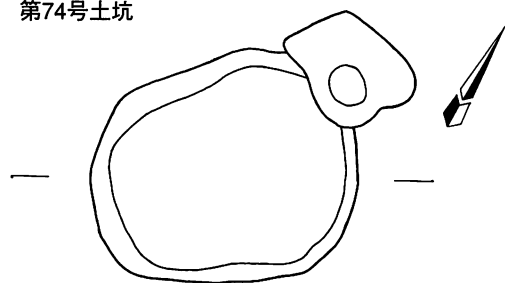
- 第70号土坑
1. 黒褐色土 5YR2/2 中世遺構共通土。白色粒子を含む。
  2. 極暗褐色土 7.5YR2/3 縄文時代包含層土に1層を少し含む。
  3. 極暗褐色土 7.5YR2/3 2層土を主体とし、ローム質土を若干含む。



第33図 第63~68・70号土坑平・断面図



第74号土坑



- 第74号土坑
1. 黒褐色土 7.5YR3/2 縄文時代包含層土を主体とし砂粒を多く含む。
  2. 黒褐色土 7.5YR2/2 中世遺構共通土にローム質土をブロック的に含む。

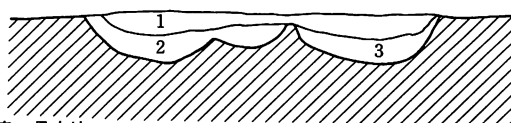
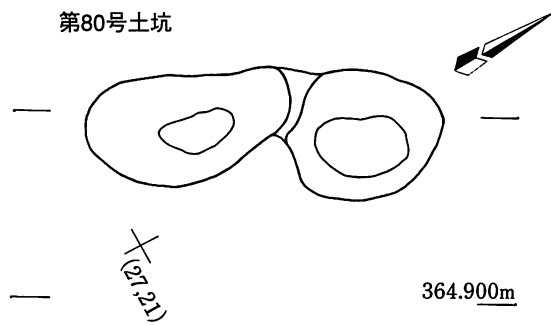
第72号土坑

1. 極暗褐色土 7.5YR2/3 中世遺構共通土。白色粒子を含む。
2. 極暗褐色土 7.5YR2/3 1・3層より暗く大粒砂を多く含む。
3. 極暗褐色土 7.5YR2/3 粘質土を主体とし大粒砂を多く含む。

第73号土坑

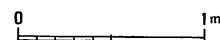
1. 暗褐色土 7.5YR3/4 中世遺構共通土。
2. 暗褐色土 7.5YR2/3 ブロック的な縄文時代包含層土。
3. 極暗褐色土 7.5YR2/3 縄文時代包含層土を主体とし、ローム質土をブロック的に若干含む。
4. 黒褐色土 7.5YR2/2 2層に類似。
5. 暗褐色土 7.5YR3/4 ローム質土を主体とし、縄文時代包含層土を若干含む。
6. 暗褐色土 7.5YR3/4 ローム質土主体で褐色土をまだらに、小砂粒も若干含む。
7. 暗褐色土 7.5YR3/4 縄文時代包含層土主体で3層を若干含む。
8. 黒褐色土 7.5YR2/2 地山砂質土主体のきめ細かい褐色土。

第80号土坑

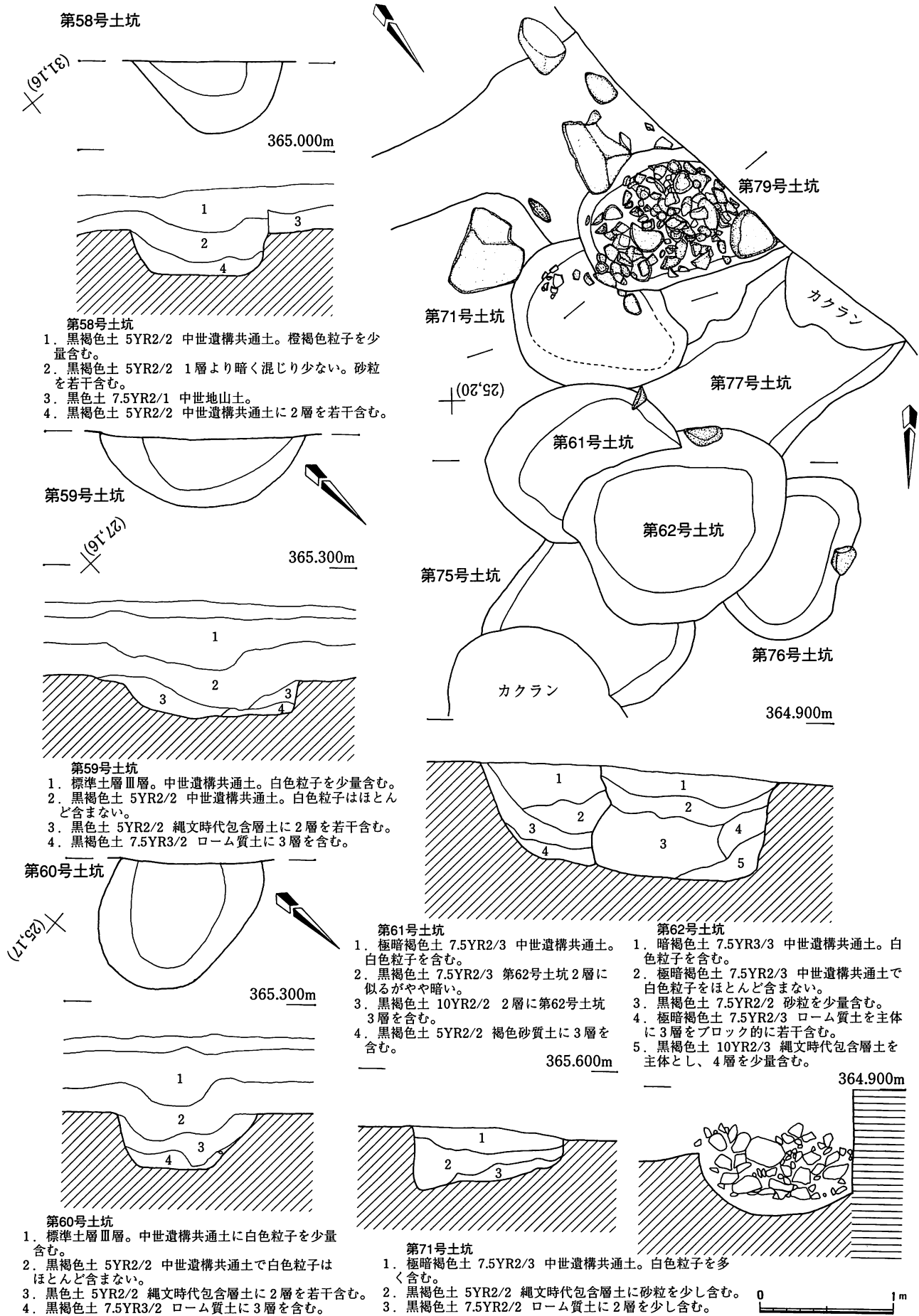


第80号土坑

1. 黒褐色土 7.5YR3/2 中世遺構共通土。白色粒子を少量含む。
2. 極暗褐色土 7.5YR2/3 縄文時代包含層土を主体とし、砂粒を含む。
3. 黒褐色土 7.5YR3/2 2層と類似するがやや暗い。



第34図 第72~74・80号土坑平・断面図



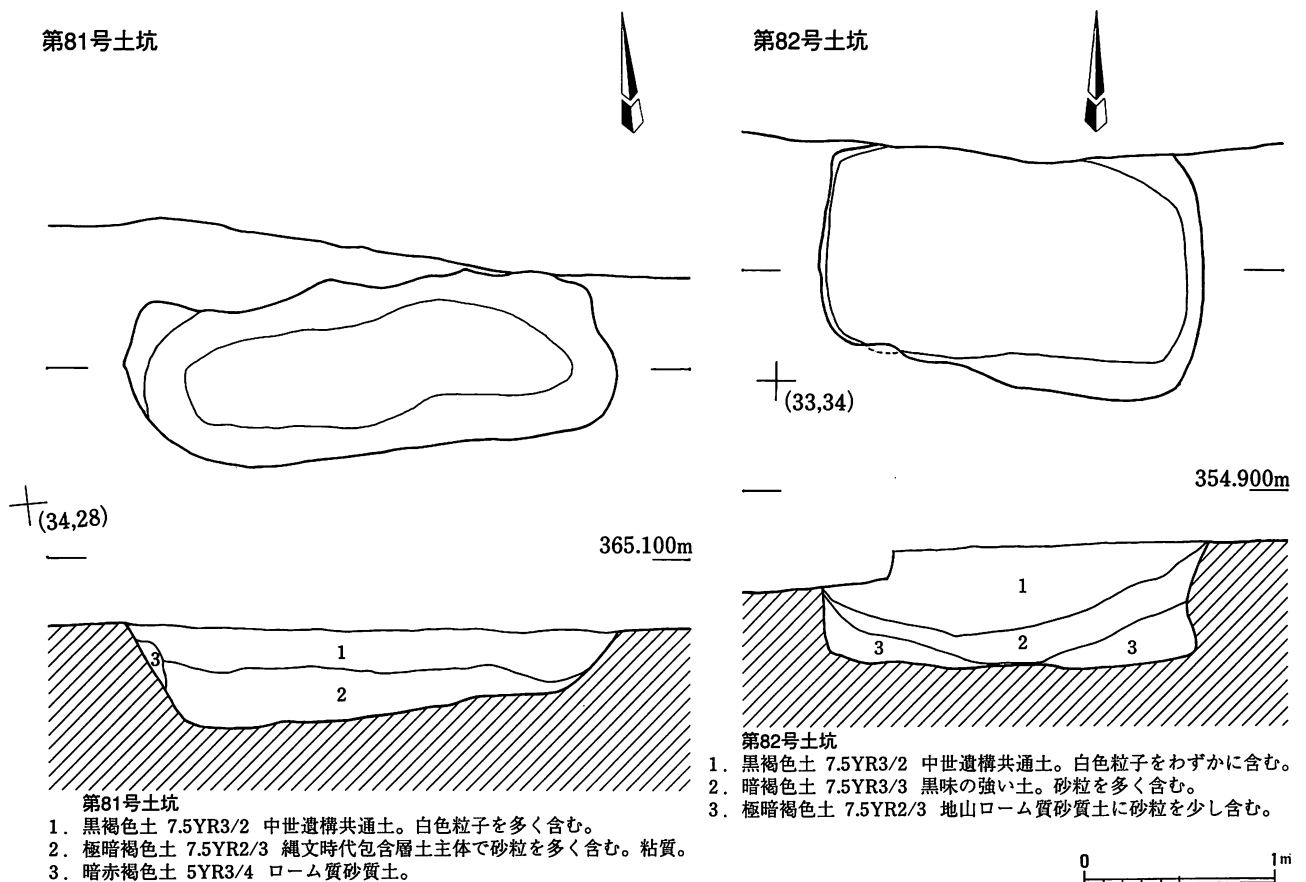
第35図 第58～62・71・75～77・79号土坑平・断面図

短軸幅で約1.1m程度の楕円形で、深さ約50cmほど垂直に掘り下げている。第75号土坑はX=27、Y=19ポイント付近にある。第61・62号土坑と切り合うが、第62号土坑より古い。直径約1.4m程度の略円形と推測され、深さ約30cmほど直線的に掘り下げている。第76号土坑はX=26、Y=17ポイント付近にあり、第62号土坑と切り合っている。長軸長約1.3mの楕円形で、深さ約20cmほどやや湾曲して掘り下げている。第77号土坑はX=25、Y=18ポイント付近にあり、第61・62・71号土坑と切り合う他、南西の壁際は攪乱によって失われているが、第61・62号土坑より古い。長軸長は約1.5m以上、短軸幅約1.1mの溝状もしくは長方形だと推測され、深さ約25cmほど湾曲しながら掘り下げている。第79号土坑はX=24、Y=18ポイント付近にある集石土坑で、一部は調査区外となっている。第71・77号土坑と切り合うが、上述したように前者よりは新しいと考えられる。長軸長約1.2m、短軸幅約1mの楕円形で、深さ約65cmである。集石は土坑ほぼ中央にあり、直径数cmから20cm以上の河川礫・山地礫が直径約80cm前後、厚さ約50cmほどの範囲に積まれていた。被熱による赤化は見受けられない。壁は全体的に湾曲しながら掘り下げられている。

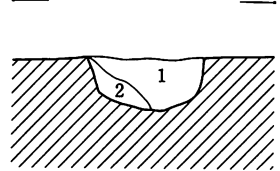
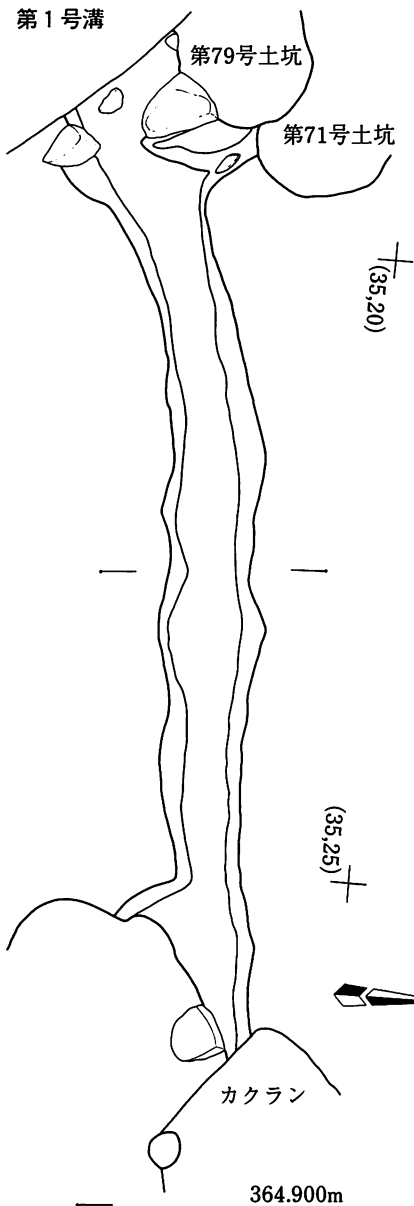
第81号土坑はX=35、Y=30ポイント付近にある。長軸長約2.6m、短軸幅約90cmの全体に整ったやや隅丸な長方形で、深さ約55cmほどやや斜めに掘り下げている。第82号土坑はX=35、Y=35ポイント付近にあるが、一部調査区外となっている。規模はやや小さいが整った長方形土坑で第72号土坑と類似する。長軸長約2m、短軸幅約1.4m、深さ約60cmでほぼ垂直に掘り下げている。

b) 溝 (第37図)

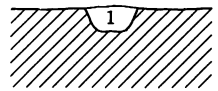
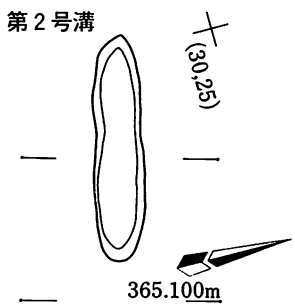
第1号溝はX=23~24、Y=19~26ポイント付近にある東西方向の溝である。東端では新旧関係不明な第73号土坑および攪乱地点で止まり、西端は調査区外に延びている。長さ約8m以上、幅約70cm前後、深さ約30cmほどで、底面はおおむね水平、覆土は黒褐色土が堆積し流水の形跡はない。第2号溝はX=29、Y=25・26ポイント付近にある東西方向の溝である。東端は新旧関係は不明な第66号土坑の位置で止まっている。長さ約1.8m以上、幅約40cm前後、深さ約15cmほどと短く、覆土には黒褐色土が堆積している。第3号溝はX=31~32、Y=19



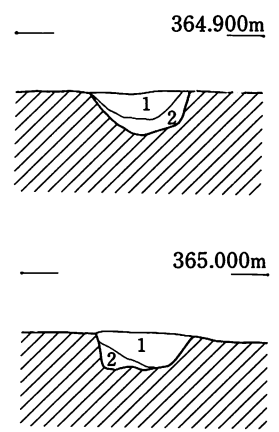
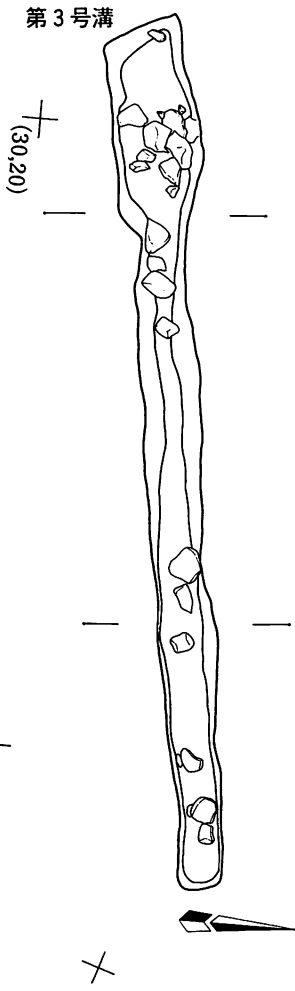
第36図 第80・81号土坑平・断面図



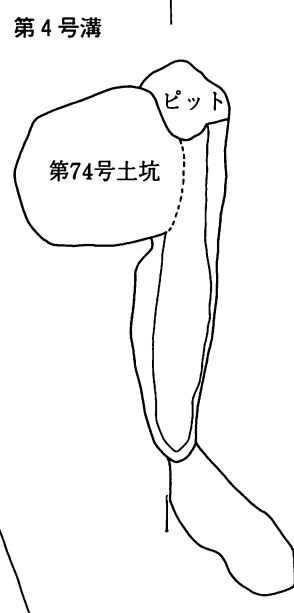
第1号溝  
 1. 極暗褐色土 7.5YR2/3 中世遺構共通土。白色粒子を多く含む。  
 2. 極暗褐色土 7.5YR2/3 縄文時代包含層土にローム質褐色土を含む。



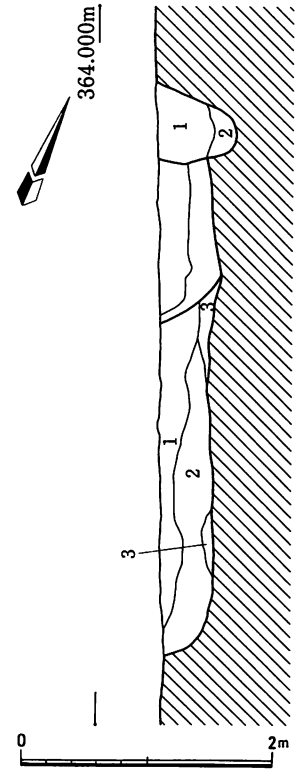
第2号溝  
 1. 極暗褐色土 7.5YR2/3 中世遺構共通土。白色粒子を含む。



第3号溝  
 1. 黒褐色土 7.5YR2/2 中世遺構共通土。白色粒子を少し含む。  
 2. 黒褐色土 7.5YR2/2 縄文時代包含層土。



第4号溝  
 1. 極暗褐色土 7.5YR2/3 中世遺構共通土。白色粒子を少し含む。  
 2. 極暗褐色土 7.5YR2/3 1層よりも暗く、砂粒を多く含む。  
 3. 暗褐色土 7.5YR3/3 地山ローム質砂質土。  
 ピット  
 1. 極暗褐色土 7.5YR2/2 中世遺構共通土。白色粒子・砂粒を含む。  
 2. 暗褐色土 7.5YR3/3 1層にローム質土を含む。

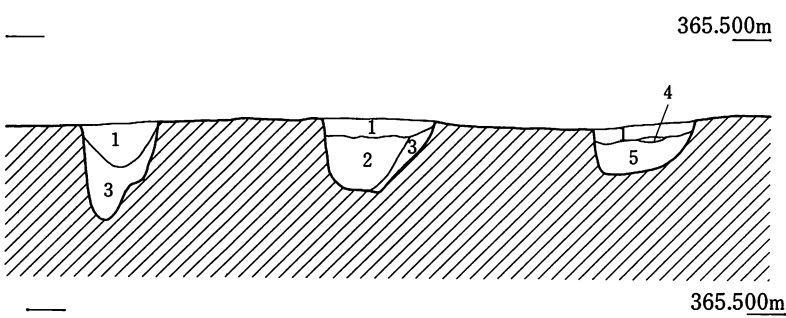
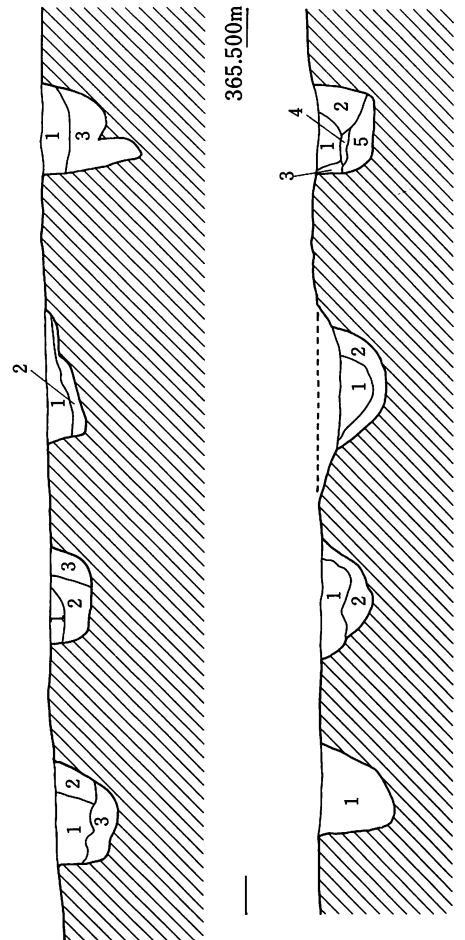
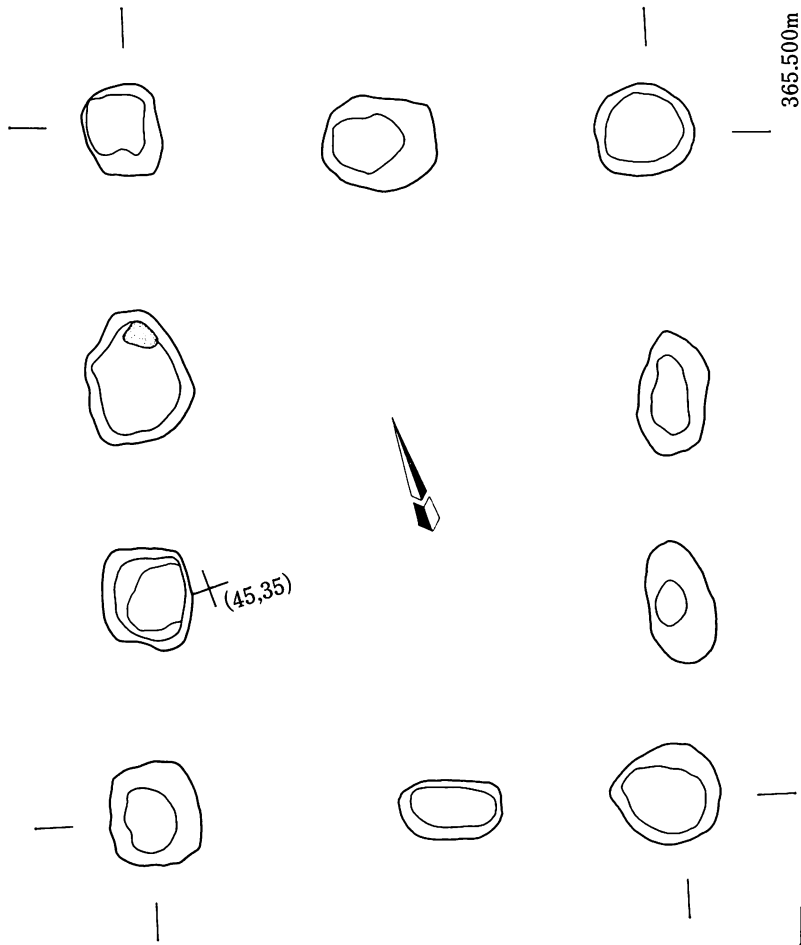


第37図 第1～4号溝平・断面図

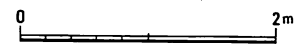
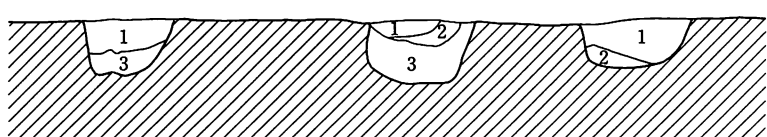


第38図 II区奈良・平安時代、中世遺構全体図

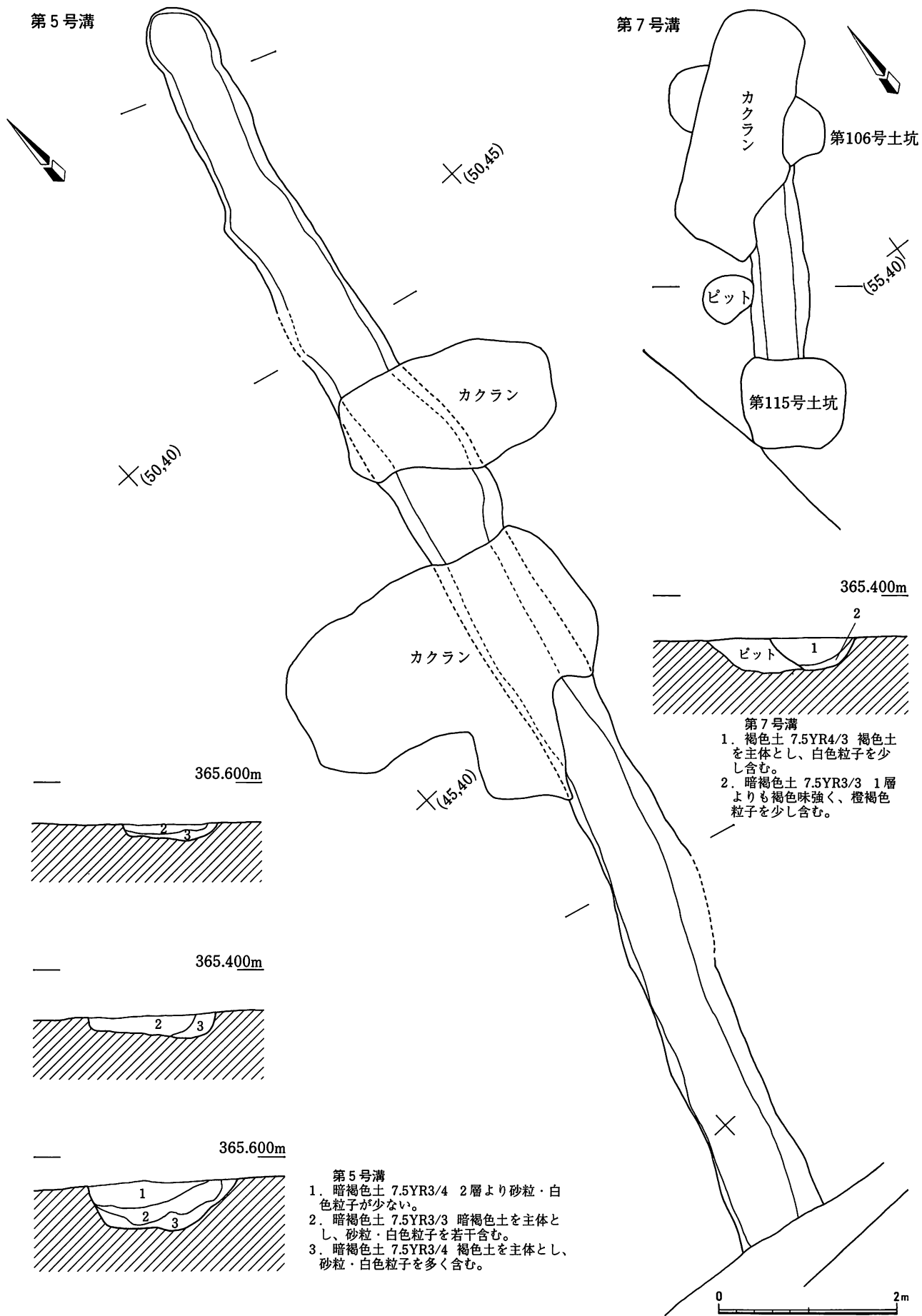




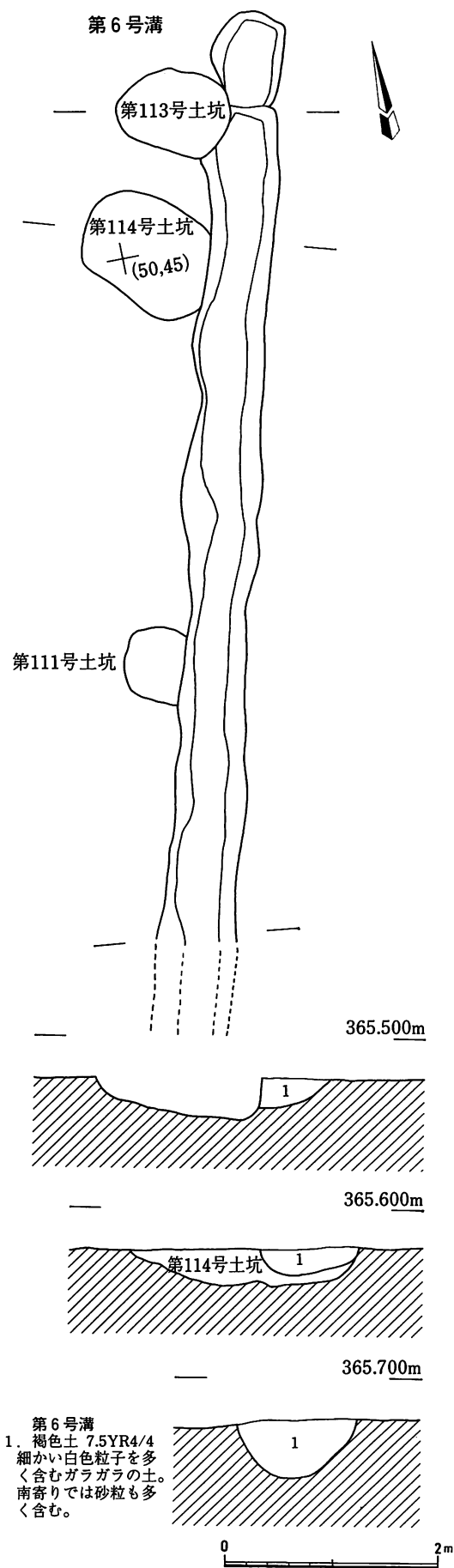
- 第1号掘立柱建物
1. 黒褐色土 7.5YR2/2 白色粒子・砂粒を若干含む。
  2. 黒褐色土 7.5YR2/2 1層よりもやや暗い。
  3. 黒褐色土 7.5YR2/2 さらにやや暗い。
  4. 暗褐色土 7.5YR3/3 橙褐色土ブロックを主体とする。
  5. 黒褐色土 7.5YR3/1 2層と同じ土を主体とし、橙褐色粒子をやや多く含む。



第39図 第1号掘立柱建物跡平・断面図



第40図 第5・7号溝平・断面図



第41図 第6号溝平・断面図

～26ポイント付近にある東西方向の溝で、第1号溝と7mほど離れてほぼ並行する。両端ともに突如止まり、長さ約7m以上、幅約50cm前後、深さ約30cmほどである。底面はおおむね水平で、覆土は上層は黒褐色土、下層は縄文時代包含層土が堆積していた。また内部より大形礫多数が出土したが、遺構に伴うかどうかは不明である。第4号溝はX=20～23、Y=22・23ポイント付近にある南北方向の溝である。北端で第74号土坑に切られている他、南北両端ともにピットで止まっているが、これらも溝に関係するのかもしれない。長さ約2.6m以上、幅約60cm前後、確認面からの深さ約15cmほど、覆土は黒褐色土が上層に堆積している。

#### c) ピット群 (第30図)

中世遺構面で確認されたピットは75ヶ所である。これらはほぼ全体的に分布しているが、東寄りに若干集中する傾向がある。規模は直径30cm程度のものが多いが深さにはやや差がある。またこれらのピット群は掘立柱建物跡や柵列といった遺構に復元できていない。

## 第2項 第7次調査Ⅱ区 (第38図)

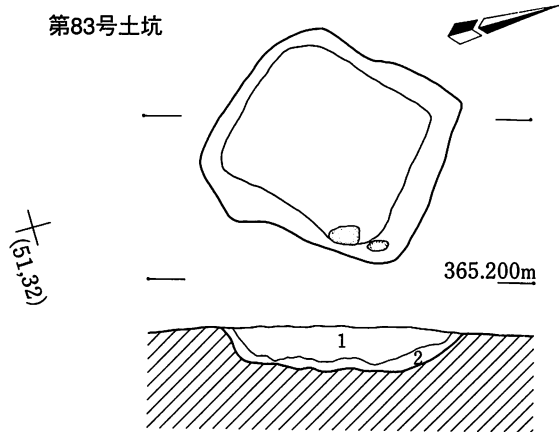
Ⅱ区で検出された古代、中世の遺構には、掘立柱建物跡1棟、溝3条、土坑38基、ピット81ヶ所がある。

### (1) 掘立柱建物跡 (第39図)

第1号掘立柱建物跡はⅡ区中央部やや南西寄り、X=45、Y=37ポイント付近から検出された2間×3間の掘立柱建物である。桁行は東側2.5mにある第5号溝とほぼ平行する。主軸方位はN-18°-Eとやや東に偏向し、規模は桁行約6m、梁行約4.5mを測る。柱穴内側範囲の面積は約18.6㎡である。柱穴は直径・長軸長が70～80cm程度の方形・長円形のを主体とし、深さは30～70cmとやや差があるが、45cm程度のものが多い。また柱痕は確認できなかったが、P8では底面から扁平な自然礫が出土し、柱支えないしは高さ調整として置かれた可能性がある。

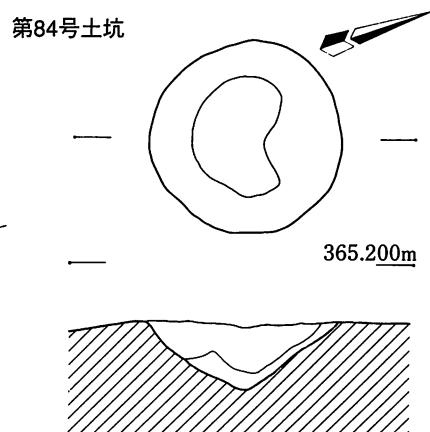
### (2) 溝 (第40・41図)

第5号溝はX=39～54、Y=39～44ポイント付近にある南北方向の溝である。ⅠA区第5号溝と形状や方向性がよく類似していることから同一の溝と考えられる。一部攪乱されているがおおむね良好に遺存しており、南側はさらに調査範囲外に続く。長さ15m以上、幅約60cm～1m前後、深さ20～60cmほどで本区内では南に向かって若干深くなる傾向がある。底面はほぼ水平で、覆土は全体に黒味の強い土が堆積していた。溝自体が北側に向かって徐々に浅くなる傾向はあるものの、I11スクエアで突如壁が立ち上がっており、ここで掘り止められたと考えられる。なお第1号掘立柱建物跡と桁行方向が並行していることから、建物と何らかの関係を持っていると推測される。第6号溝はX=43～52、Y=



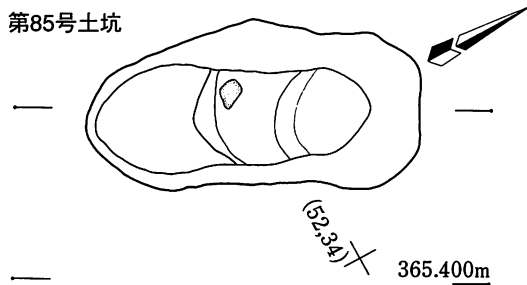
第83号土坑

1. 黒褐色土 7.5YR2/2 砂粒・ローム粒を若干含む。
2. 極暗褐色土 7.5YR2/3 1層にローム粒をやや多く含む。



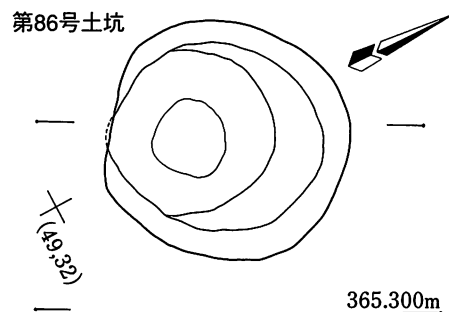
第84号土坑

1. 黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒・ローム土ブロックをやや多く含む。
2. 黒褐色土 5YR2/2 1層にローム土をやや多く含み全体にしまる。



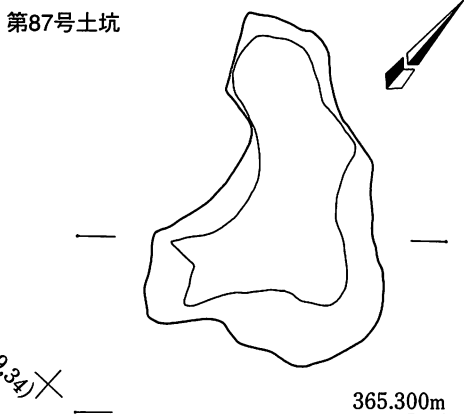
第85号土坑

1. 黒褐色土 7.5YR2/2 砂粒・ローム粒を少し含む。
2. 極暗褐色土 7.5YR2/3 1層に砂粒・ローム土をやや多く含む。
3. 極暗褐色土 7.5YR2/3 ローム土を主体とする。



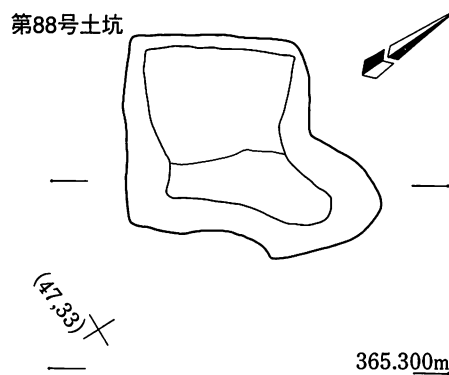
第86号土坑

1. 黒褐色土 7.5YR2/2 砂粒・白色粒子を少し含む。
2. 黒褐色土 7.5YR3/2 1層よりやや明るい。
3. 黒褐色土 7.5YR2/2 2層より暗く、白色粒子を若干含む。



第87号土坑

1. 暗褐色土 7.5YR3/3 砂粒を少し、ローム粒を多く含む。
2. 褐色土 7.5YR4/6 ローム土を主体とするブロック土。
3. 暗褐色土 7.5YR3/3
4. 暗褐色土 7.5YR3/3 砂粒を多く、ローム粒を少し含む。



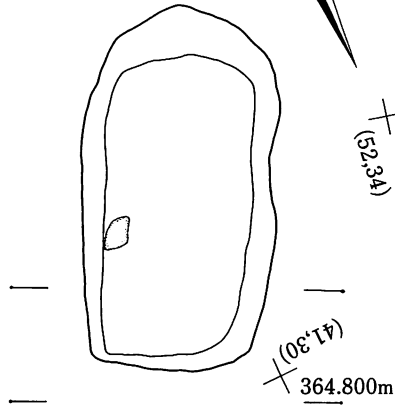
第88号土坑

1. 黒褐色土 7.5YR2/2 砂粒・ローム粒を少し含む。
2. 黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒を多く含む。
3. 黒褐色土 7.5YR2/2 砂粒・ローム粒を少し含む。
4. 黒褐色土 7.5YR3/2 地山を主体とし、ローム粒を少し含む。

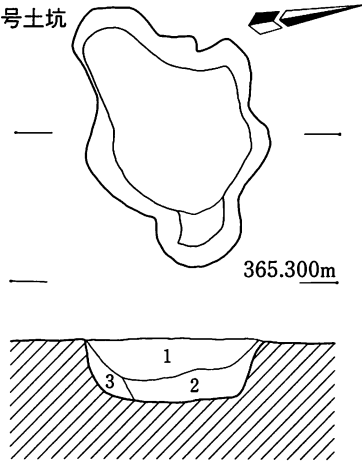


第42図 第83~88号土坑平・断面図

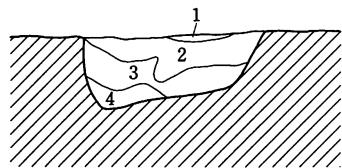
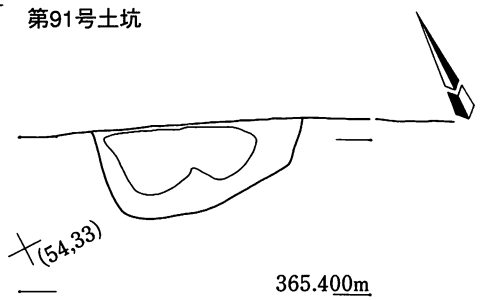
第89号土坑



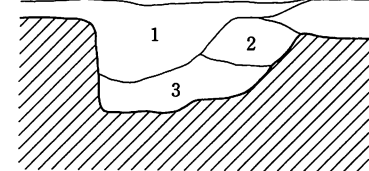
第90号土坑



第91号土坑

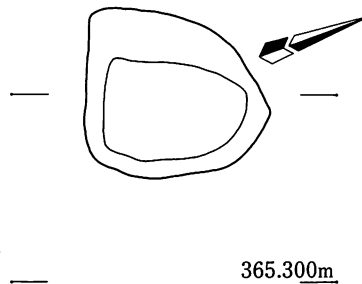


- 第90号土坑
1. 暗褐色土 7.5YR3/3 砂粒・ローム粒を含む。
  2. 暗褐色土 7.5YR3/3 1層より暗く砂粒を含む。
  3. 暗褐色土 7.5YR3/3 1・2層より砂質の土。

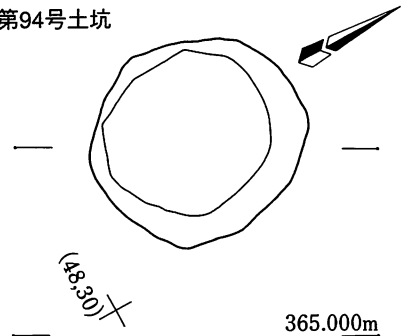


- 第91号土坑
1. 暗褐色土 7.5YR3/4 砂粒・ローム粒を若干含む。
  2. 暗褐色土 7.5YR3/4 ローム土主体で砂粒を多く含む。
  3. 暗褐色土 7.5YR3/3 砂粒を多く、ローム粒を少し含む。

第93号土坑



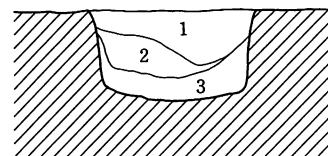
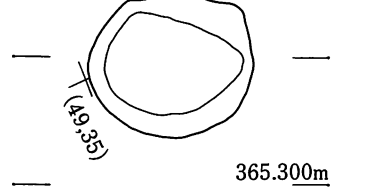
第94号土坑



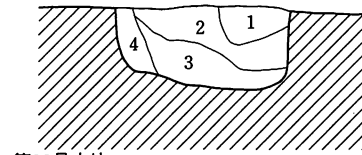
第89号土坑

1. 黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒を含まない。
2. 極暗褐色土 7.5YR2/3 ローム粒を多く、砂粒を少し含む。
3. 黒褐色土 7.5YR2/2 混ざり少ない。
4. 黒褐色土 7.5YR2/2 3層とローム土ブロックから成る。

第92号土坑



- 第92号土坑
1. 黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒を若干含み2層より明るい。
  2. 黒褐色土 7.5YR3/2 砂粒を少し、ローム土ブロックをまばらに含む。
  3. 黒褐色土 7.5YR3/2 2層より砂粒を多く含む。

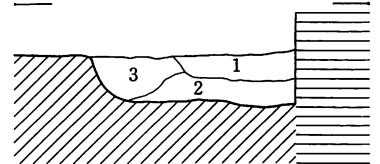
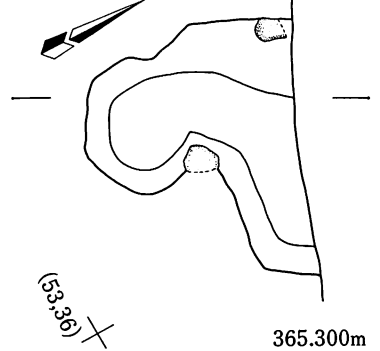


- 第93号土坑
1. 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム土ブロックを全体に含む。
  2. 黒褐色土 7.5YR2/2 砂粒・ローム粒を多く含む。
  3. 黒褐色土 7.5YR3/2 砂粒を多く含む。
  4. 黒褐色土 7.5YR3/2 地山の褐色土を主体としローム粒を含む。

第94号土坑

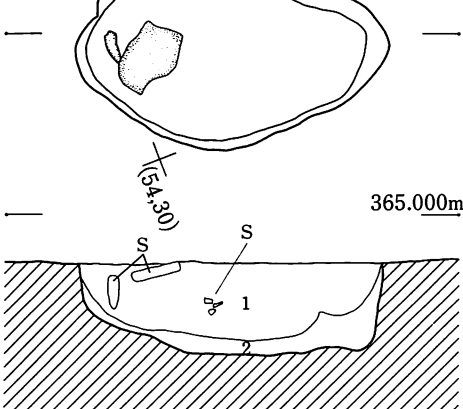
1. 黒褐色土 7.5YR3/2 砂粒・白色粒子を多く含む。

第97号土坑



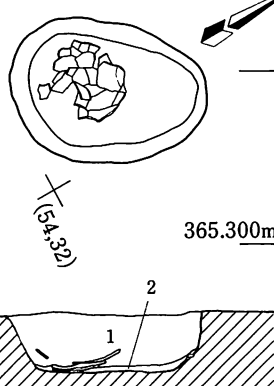
- 第97号土坑
1. 黒褐色土 7.5YR2/2 砂粒・ローム粒を含む。
  2. 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム土に砂粒を含む。
  3. 黒褐色土 7.5YR3/2 砂粒を多く含む。

第95号土坑



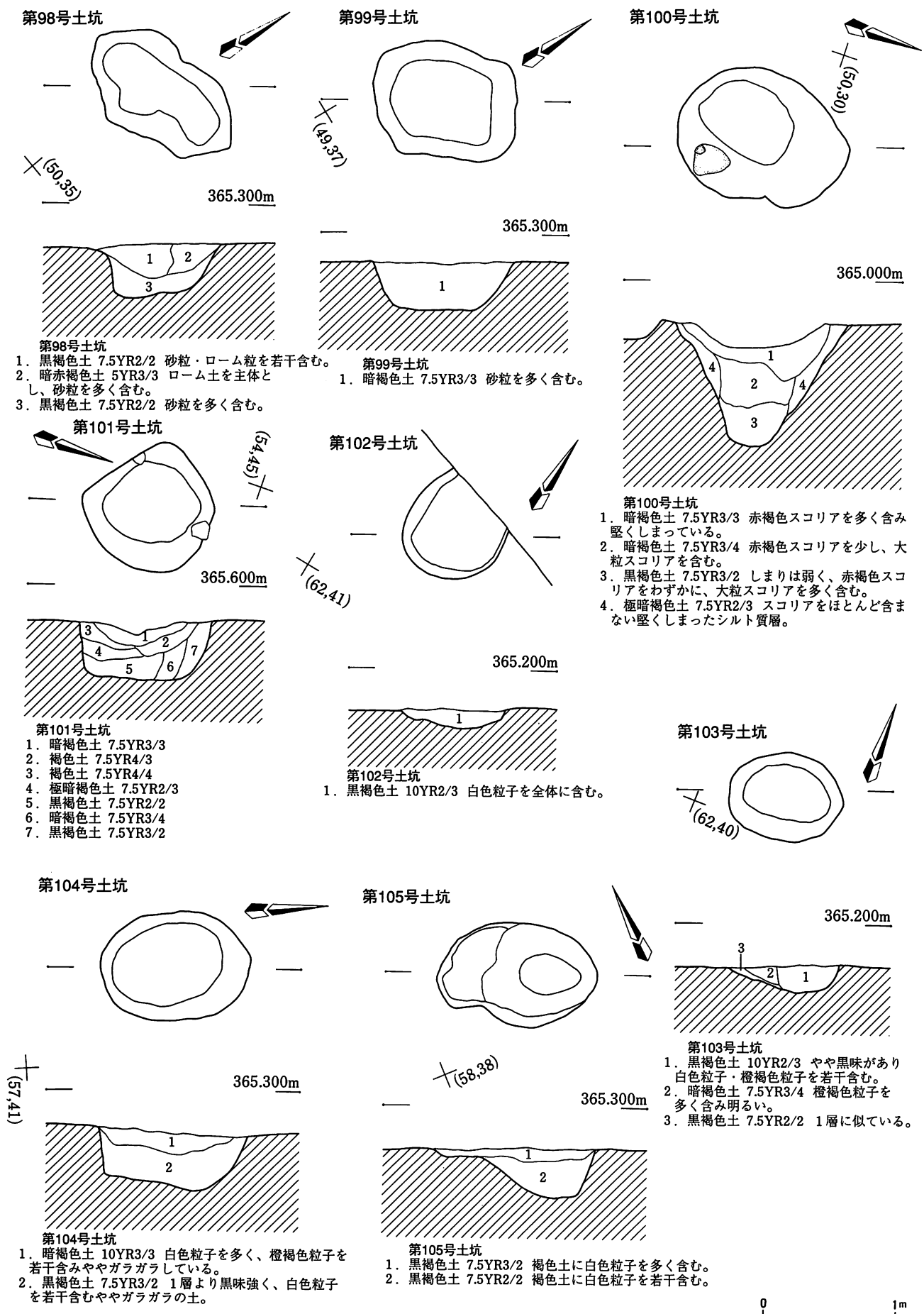
- 第95号土坑
1. 極暗褐色土 7.5YR2/3 砂粒を多く含む。
  2. 黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒を少し含む。

第96号土坑



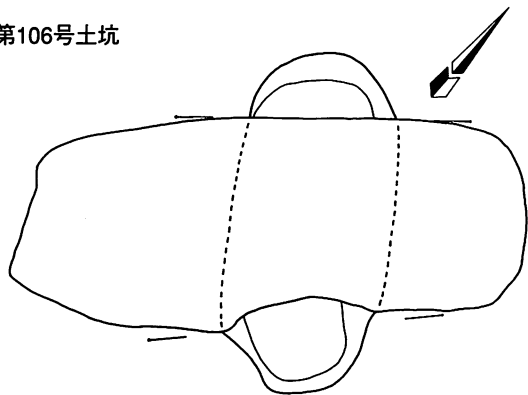
- 第96号土坑
1. 暗褐色土 7.5YR3/3 砂粒を多く含む。
  2. 暗褐色土 7.5YR3/3 砂質で、ローム粒を少し含む。

第43図 第89~97号土坑平・断面図



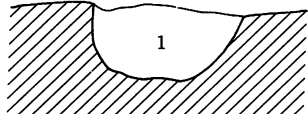
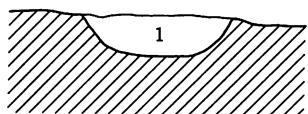
第44図 第98~105号土坑平・断面図

第106号土坑



(56,38)

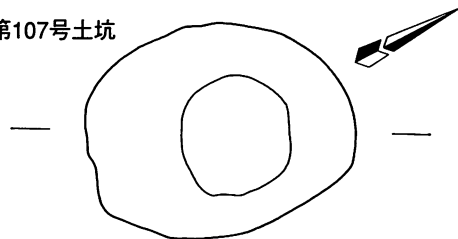
365.300m



第106号土坑

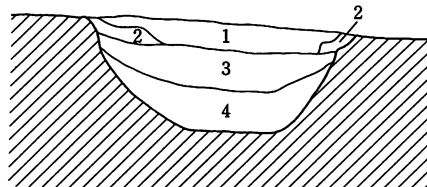
1. 褐色土 7.5YR4/3 褐色土に大粒砂粒(スコリア?)を多く、白色粒子を若干含む。

第107号土坑



(55,39)

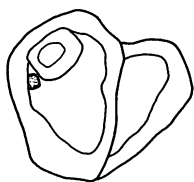
365.400m



第107号土坑

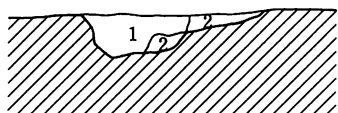
1. 黒褐色土 7.5YR3/2 ガラガラの白色粒子を多く含む。
2. 暗褐色土 7.5YR3/4 黒味強い。白色粒子を多く含む。
3. 黒褐色土 7.5YR3/3 2層に似るが、大粒砂粒を全体に含む。
4. 黒褐色土 7.5YR3/2 3層より大粒砂粒・白色粒子少なく、きめ細かいソフトな土。

第108号土坑



(54,38)

365.500m



第108号土坑

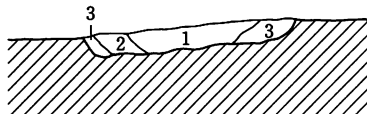
1. 黒褐色土 7.5YR3/2 白色粒子を若干含む。
2. 暗褐色土 7.5YR3/4 褐色土に橙褐色粒・白色粒子を若干含む。

第109号土坑

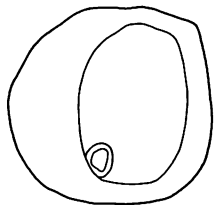


(56,41)

365.500m

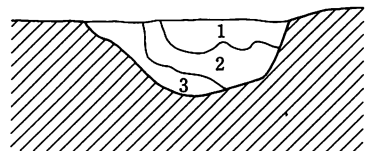


第112号土坑

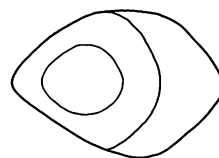


(40,38)

365.400m

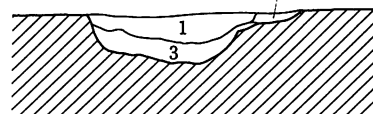


第110号土坑



(57,35)

365.300m



第109号土坑

1. 暗褐色土 7.5YR3/3 黒味強い。白色粒子を多く含む。
2. 黒褐色土 7.5YR3/2 橙褐色粒子を多く含む。
3. 暗褐色土 7.5YR3/4 1層に似る。

第110号土坑

1. 褐色土 7.5YR4/3 橙褐色粒子を多く、白色粒子を少し含む。
2. 暗褐色土 7.5YR3/3 1層よりやや暗く、橙褐色粒子は少ない。
3. 褐色土 7.5YR4/3 1層に橙褐色粒子をより多く含む。

第111号土坑

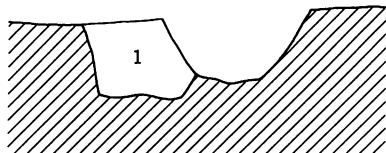
1. 黒褐色土 7.5YR3/2 大粒スコリア・白色粒子を多く含む。

第112号土坑

1. 暗褐色土 7.5YR3/3 橙褐色粒子を多く、白色粒子を少し含む。
2. 極暗褐色土 7.5YR2/3 1層に暗褐色土をブロック的に含む。
3. 褐色土 7.5YR4/3 1層に、2層を少しと地山褐色土を含む。

SD2

(45,45) 365.600m



第45図 第106~112号土坑平・断面図



44～47ポイント付近にあり、西側の第5号溝と並行する南北方向の溝である。第111・113・114号土坑と切り合うが、第111・114号土坑より新しく、第113号土坑よりも古い。長さ9 m以上、幅約60cm～80cm前後、深さ20～40cmほど、底面はほぼ水平、覆土は第5号溝同様、全体に黒味の強い土が堆積していた。またこの溝も第5号溝とほぼ同地点で突如壁が立ち上がっており、やはりここで掘り止めたと考えられる。こうした特徴は第5号溝と共通しており密接な関係を持つと考えられよう。なお、南側では攪乱等により検出できなかったが、本来はさらに南へ続くと見られる。第7号溝はX=55～57、Y=36～38ポイント付近にある南北方向の溝である。南北端に攪乱および第115号土坑があるものの、長さ約2 m、幅約60cm、深さ20cmほどとごく短い。

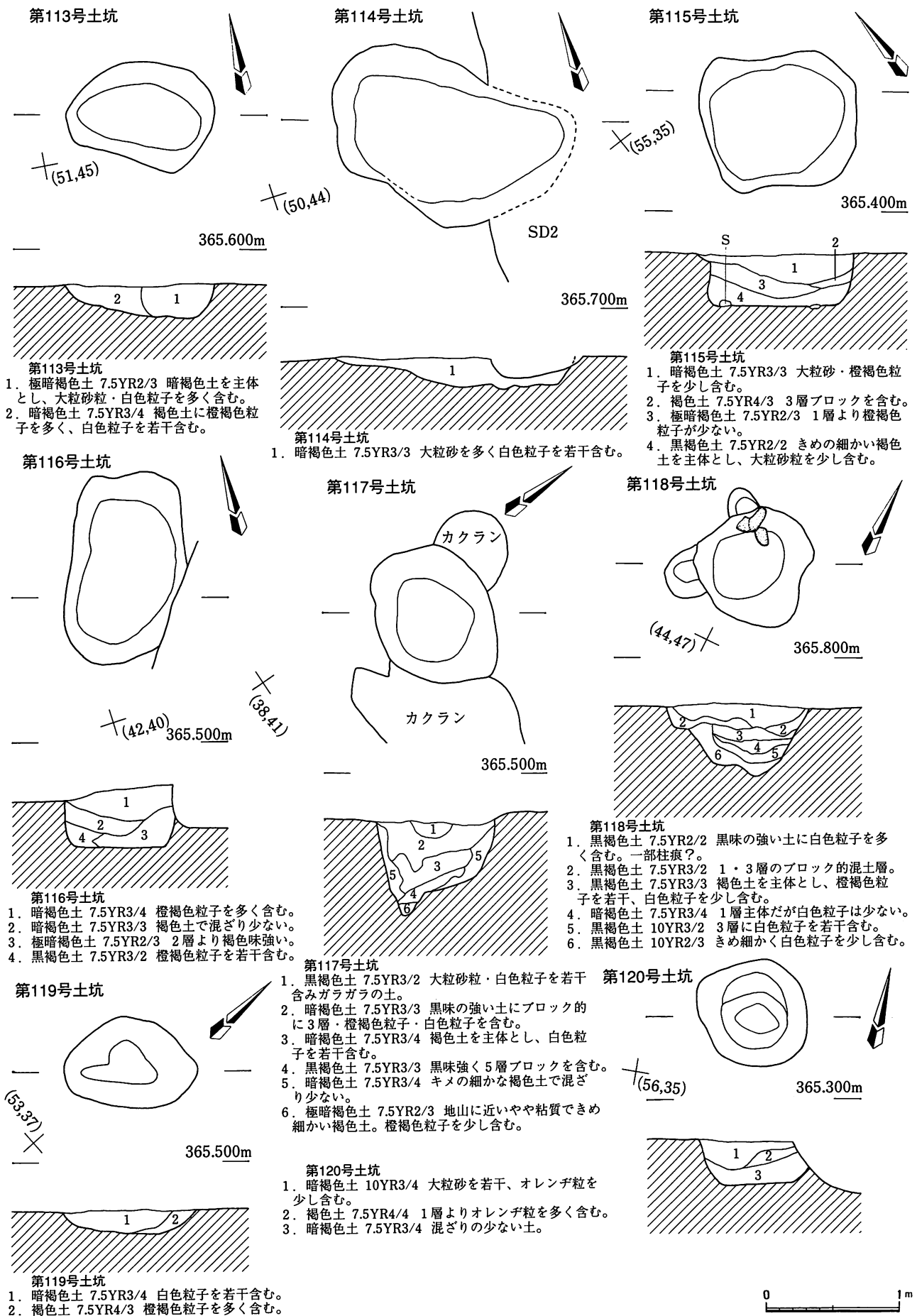
### (3) 土坑 (第42～46図)

第83号土坑はX=52、Y=32ポイント付近にある。一辺約1.2mほどの略方形で、深さ約20cmと浅く緩やかに掘り込まれている。第84号土坑はX=47、Y=31ポイント付近にある。直径約1 mほどの円形で深さ30cmほど掘り下げている。第85号土坑はX=52、Y=33ポイント付近にある。長軸長約1.8m、短軸幅約80cmの長円形で北側に向かって深さ約50cmまで徐々に深く下げている。第86号土坑はX=50、Y=32ポイント付近にある。直径約1.3mほどの円形で深さ約40cmほどほぼ垂直に掘り下げている。第87号土坑はX=50、Y=34ポイント付近にある。長軸長約1.9m、短軸幅約1.2mの不整形で、深さ50cmほどほぼ垂直に掘り下げている。第88号土坑はX=48、Y=33ポイント付近にある。一辺1 m程度の不整形で、深さ30cmほどすり鉢状に掘り下げている。

第89号土坑はX=40、Y=30ポイント付近にある。長軸長約1.9m、短軸幅約1 mの長方形で深さ30cmほど垂直に掘り下げている。かなり整った形態を持つ。第90号土坑はX=53、Y=34ポイント付近にある。長軸長約1.5 m、短軸幅約1 mの不整形で、深さ30cmほど掘り下げている。第91号土坑はX=54、Y=34ポイント付近にある。半分以上調査区外にあると思われ、長軸長約1.1m、短軸幅40cm以上、深さ50cmほど掘り下げている。第92号土坑はX=50、Y=35ポイント付近にある。直径90cmほどの略円形で、深さ50cmほどほぼ垂直に掘り下げている。第93号土坑はX=52、Y=36ポイント付近にある。長軸長約1 m、短軸幅90cmの略三角形で、深さ40cmほどほぼ垂直に掘り下げている。第94号土坑はX=49、Y=29ポイント付近にある。直径約1.1mの略円形で、深さ20cmほど垂直気味に掘り下げている。第95号土坑はX=54、Y=30ポイント付近にある。長軸長約1.7m、短軸幅1 mほどの長円形で、深さ50cmほどほぼ垂直に掘り下げている。第96号土坑はX=54、Y=32ポイント付近にある。長軸長約1.1m、短軸幅80cmほどの長円形で、深さ30cmほど急傾斜に掘り下げている。また底面付近から土器がまとまって出土した。第97号土坑はX=54、Y=35ポイント付近にある。長軸長約1.4m、短軸幅1.1m以上の不整形で、深さ20cmほど掘り下げている。

第98号土坑はX=51、Y=35ポイント付近にある。長軸長約1.3m、短軸幅70cmほどの不整形長円形で、深さ40 cmほど急傾斜に掘り下げている。第99号土坑はX=50、Y=37ポイント付近にある。長軸長約1.1m、短軸幅80 cmほどの長方形で、深さ30cmほど急傾斜に掘り下げている。第100号土坑はX=50、Y=31ポイント付近にある。長軸長約1.2m、短軸幅1 mほどの楕円形で、深さ1 mと比較的深く急傾斜に掘り下げている。第101号土坑はX=53、Y=46ポイント付近にある。直径約90cmほどの不整形円形で、深さ40cmほどほぼ垂直に掘り下げている。第102号土坑はX=63、Y=42ポイント付近にあり調査区外に及ぶ。長軸長約70cm以上、短軸幅70cmほどの略長方形と思われ、深さ10cmほど浅くなだらかに掘り下げている。第103号土坑はX=62、Y=41ポイント付近にある。長軸長約90cm、短軸幅約70cmほどの長円形で、深さ20cmほど緩やかに掘り下げている。第104号土坑はX=58、Y=40ポイント付近にある。長軸長約1.2m、短軸幅80cmほどの長円形で、深さ40cmほど急傾斜に掘り下げている。第105号土坑はX=58、Y=39ポイント付近にある。長軸長約1.2m、短軸幅約80cmほどの長円形で、東寄りに段を持つように深さ40cmほど掘り下げている。

第106号土坑はX=57、Y=38ポイント付近にあるが、両端以外の大部分が攪乱されている。長軸長約1.8m、短軸幅80cm強の長円形と推測され、深さ40cmほどゆるやかに掘り下げていると見られる。第107号土坑はX=57、Y=39ポイント付近にある。長軸長約1.4m、短軸幅約1.2mほどの長円形で、緩やかに深さ60cmほど掘り下げている。第108号土坑はX=55、Y=39ポイント付近にある。長軸長約1 mほどの不整形で東寄りに弱い段を持つ



第46図 第113~120号土坑平・断面図

が深さ20cmほど緩やかに掘り下げている。第109号土坑はX=56、Y=42ポイント付近にある。長軸長約1.1m、短軸幅約50cmほどの長円形で、緩やかに深さ10cmほど掘り下げている。第110号土坑はX=58、Y=35ポイント付近にある。長軸長約1.1m、短軸幅約80cmほどの長円形で東寄りに段を持ち、深さ30cmほど緩やかに掘り下げている。第111号土坑はX=46、Y=45ポイント付近にあり東側半分を第2号溝に切られている。長軸長約80cmほど、短軸幅約70cmほどの長方形で、ほぼ垂直に深さ40cmほど掘り下げている。第112号土坑はX=41、Y=39ポイント付近にある。直径約1.1mほどの略円形で、緩やかに深さ40cmほど掘り下げている。

第113号土坑はX=51、Y=46ポイント付近にある。長軸長約1.1m、短軸幅約80cmほどの長円形で、深さ30cmほど緩やかに掘り下げている。第114号土坑はX=50、Y=45ポイント付近にあり、第2号溝によって東側上部を切られている。長軸長1.9mほどと推定され短軸幅は1.2mほどの不整長円形、深さ20cmほどごく緩やかに掘り下げている。第115号土坑はX=54、Y=36ポイント付近にある。長軸長約1.2m、短軸幅約1mほどの比較的整った略長方形のもので、深さ40cmほど垂直に掘り下げている。第116号土坑はX=43、Y=40ポイント付近にある。長軸長約1.4m、短軸幅約90cmほどの略長方形と比較的整った形態で、深さ40cmほどほぼ垂直に掘り下げている。第117号土坑はX=39、Y=41ポイント付近にある。直径約90cmほどの不整円形で、深さ70cmほど掘り下げられている。第118号土坑はX=45、Y=47ポイント付近にある。直径約90cmほどの略円形で、深さ50cmほど傾斜を持ちながら掘り下げている。第119号土坑はX=54、Y=37ポイント付近にある。長軸長約1m、短軸幅約70cmほどの長円形で、深さ20cmほど緩やかに掘り下げている。第120号土坑はX=57、Y=36ポイント付近にある。直径約80cmほどの円形で、深さ30cmほど垂直気味に掘り下げている。

#### (4) ピット群 (第38図)

本調査区の古代・中世面で確認されたピットは西側半分に多く分布する。これらからは出土遺物もほとんどなく建物等には復元できていないが、第1号掘立柱建物跡の存在や第1・2号溝の西側にあるという点を考慮すると奈良・平安時代のものが主体を占め、土坑としたものとも組合わさって建物などと関係する可能性があるう。

(小林)

### 第3節 近世以降の遺構

#### 第1項 第8次調査 (第21図)

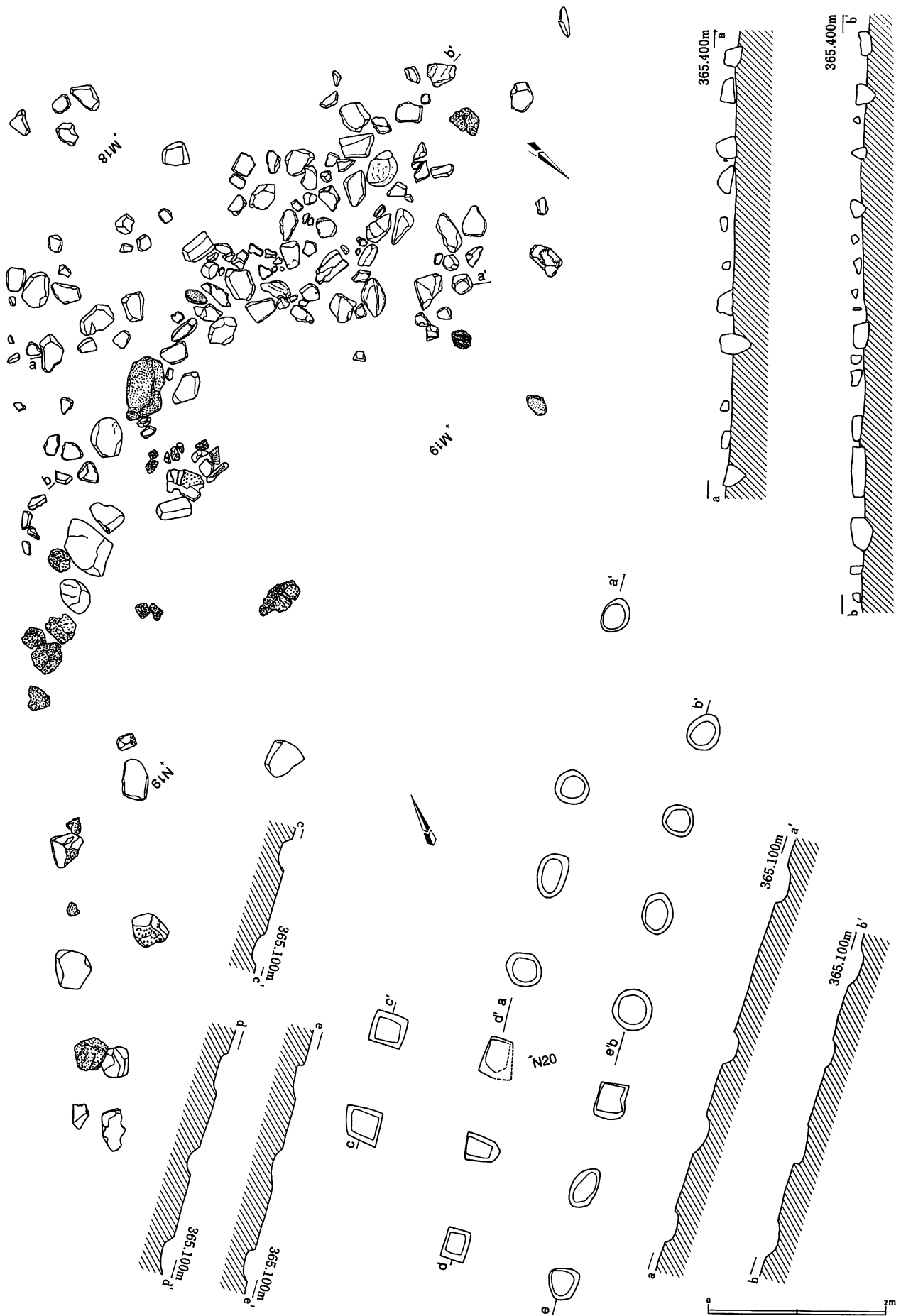
##### (1) ピット列

堀方の浅い110cm間隔で1列に並ぶピットが少なくとも3列検出された。西側は方形、東側は円形と平面形態に違いがあるが、間隔は同じである。時期的な差などは明確ではない。

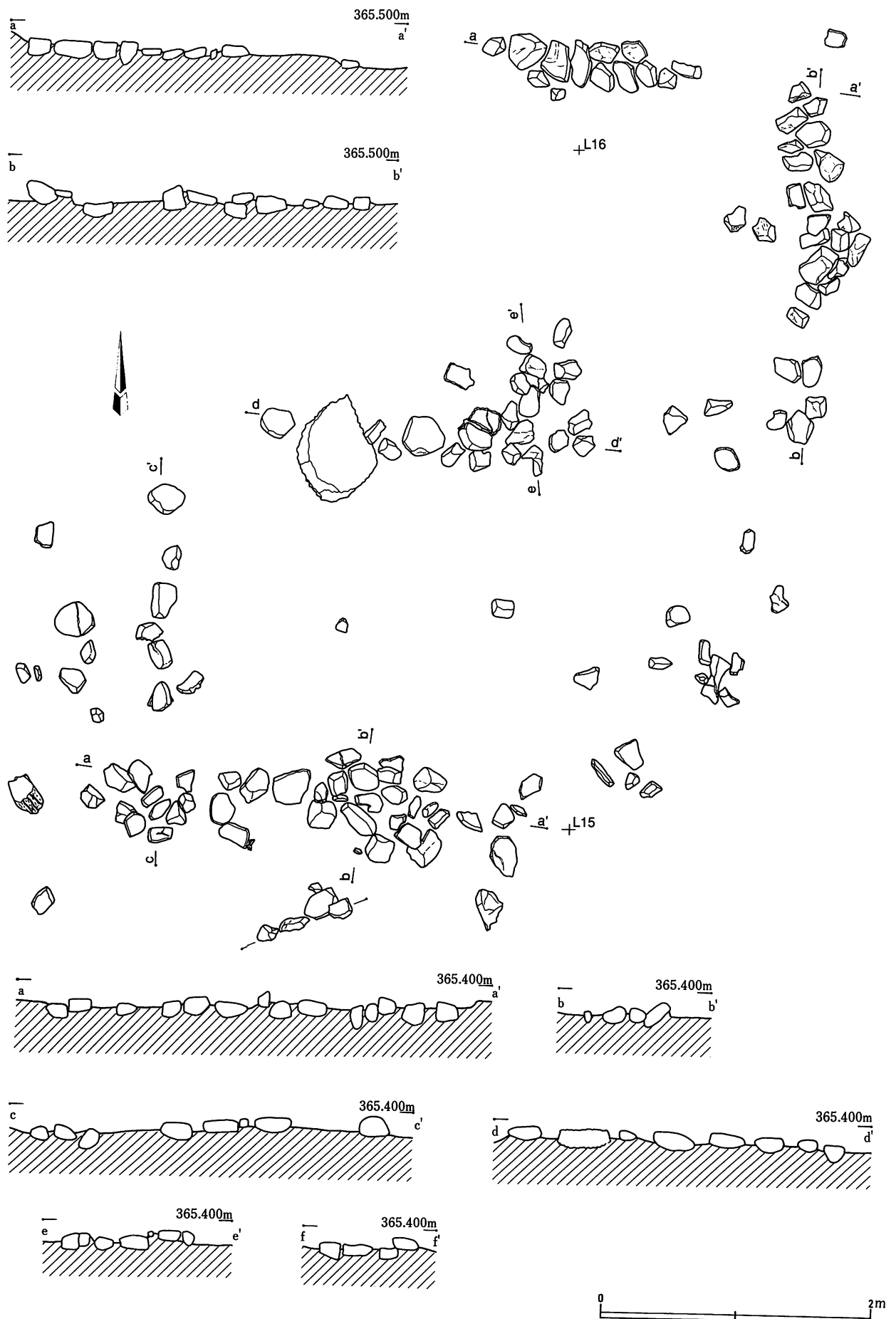
##### (2) 配石遺構

第1号配石遺構は、M-18~N18・19に位置し、標高365.2m付近である。ピット列を取り囲むように配列されている。構成される礫は、溶岩系の多孔質のことが多い。第2号配石遺構は、K-14・15~L-15に位置し、標高364.3m付近である。南北を軸に逆コの字型をしており、その幅は2m60cmを測る。第3号配石遺構はK-16~L-15・16に位置し、標高364.3~364.4m付近である。第2号配石遺構と近接しており、第2号配石遺構の北辺を共有するコの字型となる。

(笠原)



第47図 第8次調査近世遺構平・断面図(1)



第48図 第8次調査近世遺構平・断面図(2)

# 第3章 出土遺物

## 第1節 縄文時代の遺物

### 第1項 第7次調査I区

#### (1) 縄文時代遺構出土遺物 (第49・50図・第4・5表)

##### a) 土器 (第49図・第4表)

第49図1は第2号焼土遺構から出土した深鉢の底部である。中央部にのみ網代痕が残っているが、その理由ははっきりしない。

##### b) 石器 (第50図・第5表)

第50図1は第5号土坑から出土した石皿である。多孔質な扁平丸石の片面ほぼ全体が、使用によってかなり摩滅している。

#### (2) 遺構外出土遺物 (第51図～61図・第3～5表)

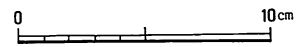
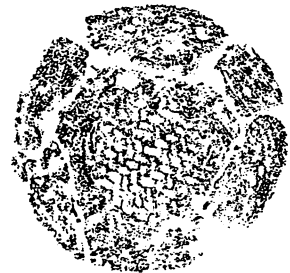
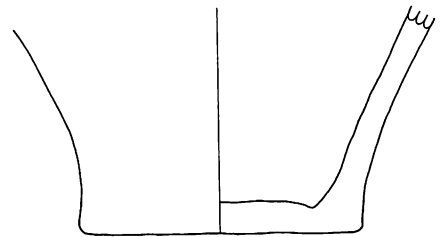
##### a) 土製品 (第51図・第3表)

本区から出土した土製品は、土偶5点、土製円盤3点、丸玉・ミニチュア土器各2点、耳栓・土製蓋・匙各1点である。1～5は土偶脚部と見られ、1・2は大形品、3～5は中形品である。いずれも中空であるが、1・5は設置部を肉厚にするか焼成前に外側から穿孔するかによって接地面は幅2cm程度のドーナツ状となっており、そこに穿孔前に付いた網代痕が残る。3・4は無孔である。1は脚のみが遺存し、その高さからかなりの大形品と推測される。

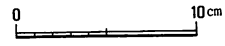
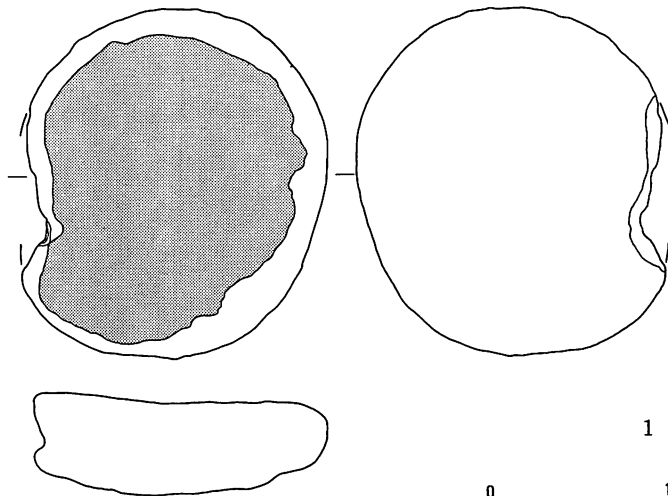
斐崎市後田遺跡から出土した新町タイプと呼ばれる中空後期土偶の股下高が約6cm、全高が21.5cmほどであることから類推すると(山下1989)、股下高9.7cmの本土偶の高さは30cmほどに復元される可能性がある。3は内外面ともミガキをかけた比較的丁寧な作りであるが、4は内面はやや雑な作りである。5は足指表現はないものの大まかな足形から右足部分と見られ、弱いくびれで踵なども表現しているようである。6は粘土塊を成形しアーチ状のつまみを造りだした蓋である。直径8.4cmと都留市中谷遺跡で注口土器と伴出した蓋(山梨県教育委員会1996)とほぼ同大であり、同様の組み合わせが推測される。7は丁寧な造りの匙である。柄の有無は不明であるが、幅3.7cmと県内出土品で標準的なサイズと推測される。8は耳栓と見られる。直径5.3cmと大きめで破損面および側面にミガキがなされている。9・10は丸玉である。粘土塊をラフに成形した程度の簡単な造りでそろばん玉状の形態を持つ。また大きさも非常に類似している。11・12はミニチュア土器である。11は完存品で口縁部を内側に曲げた壺型で、12は底面のみ遺存している。13～15は土製円盤で周囲を割り取るだけか、ざっと擦る程度で整形している。また15には表裏面の同位置から穿孔しようとした痕跡が残っている。

##### b) 土器 (第52～56図・第4表)

第52図1～4は曽利式に位置付けられるものである。1はⅡ式段階で上位は地文の斜行条線に粘土紐を重ねた斜格子文、下位は粘土紐で区画した縦位条線が施しており、2は太い縦位条線で区画しその間を細かな条線で埋めている。3はⅣ式段階で口縁直下から地文の縦位条線のみが施されるものである。4はⅤ式段階のもの



第49図 IA区焼土遺構出土縄文土器

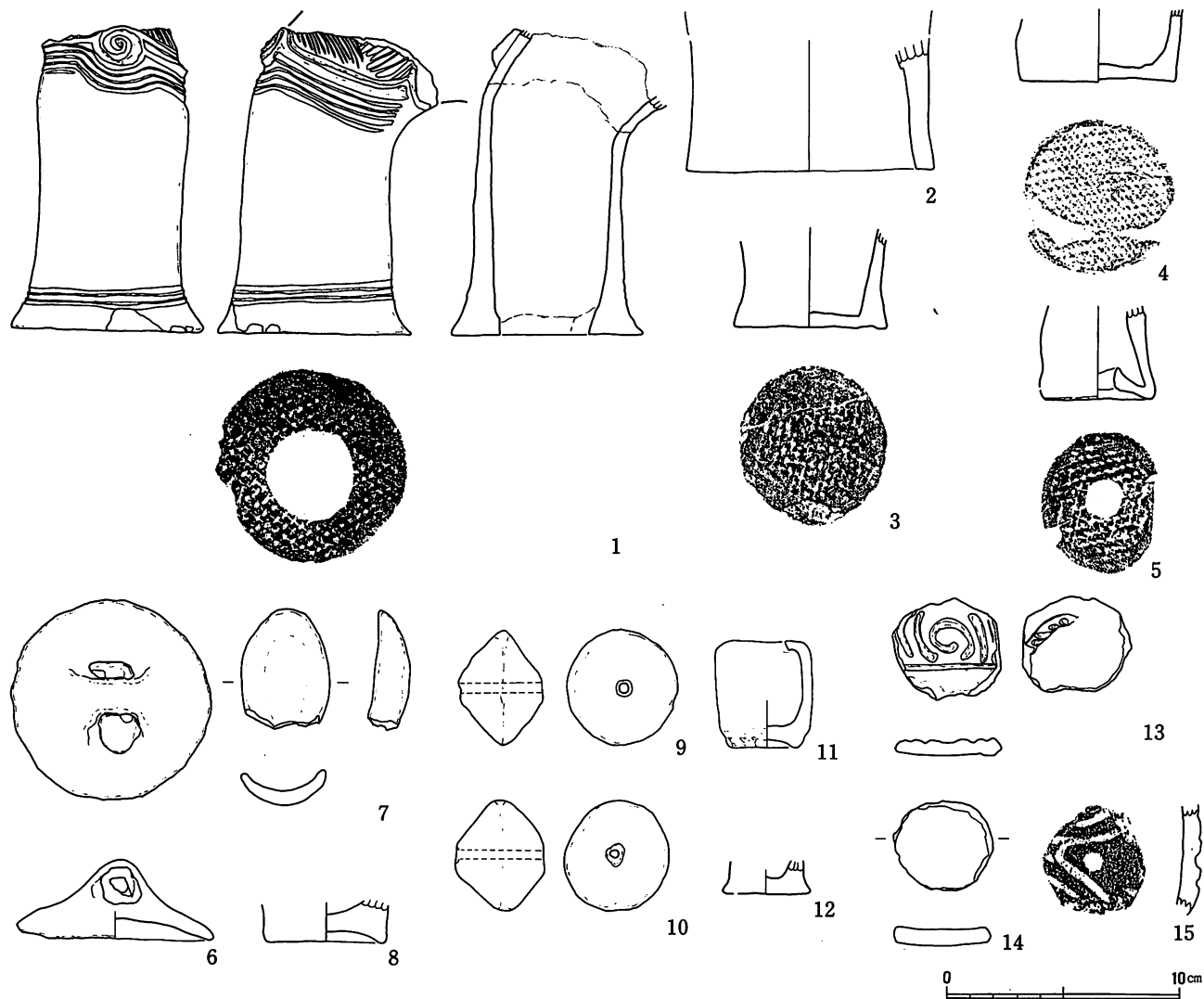


第50図 IA区縄文土坑出土縄文石器

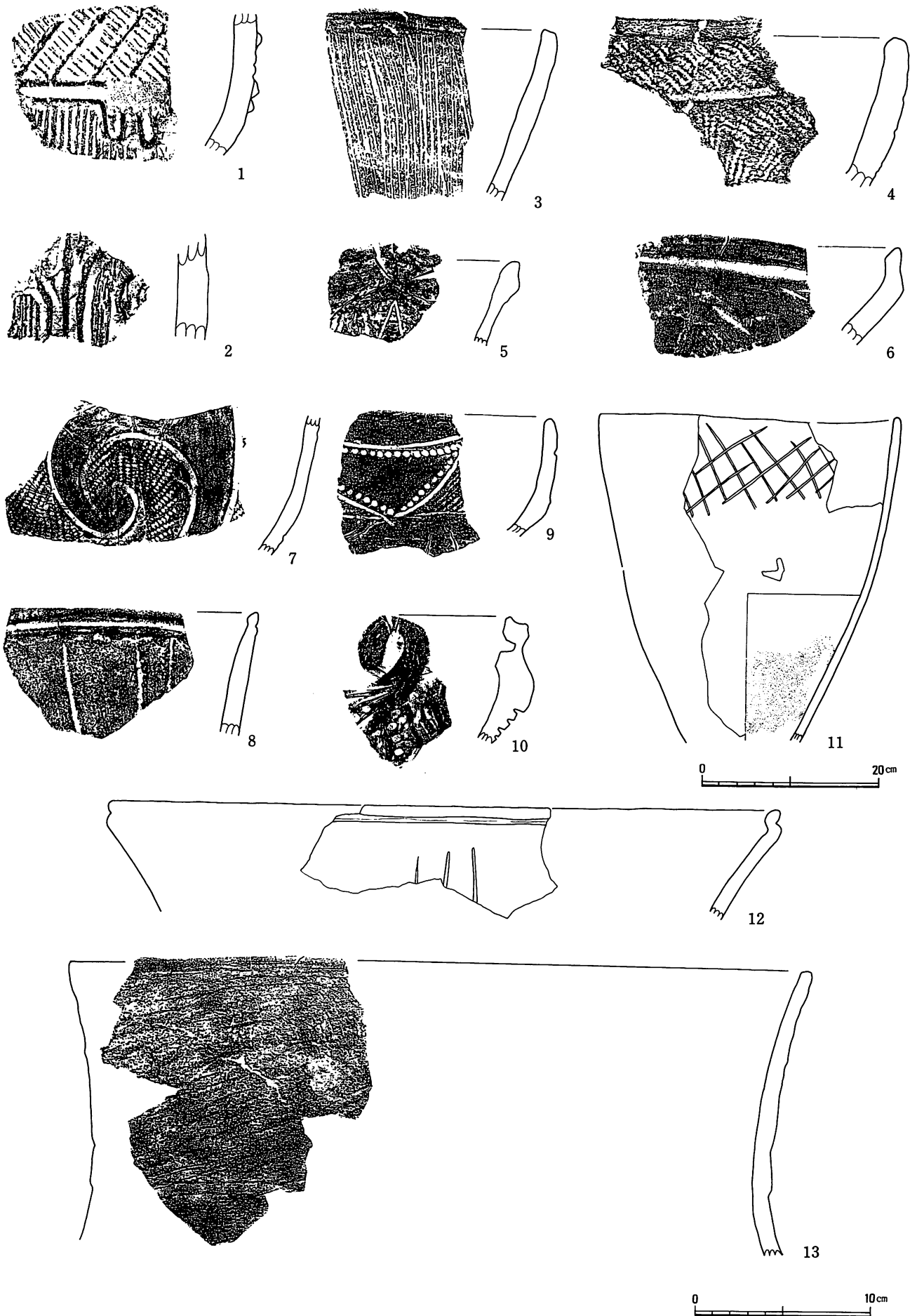
で、横位沈線で区画し中を縄文で埋めているものである。5・7・9は加曾利E4式のもので、5は隆帯で文様を構成し一部に沈線を持つもの、7は沈線でモチーフを描き内部を縄文で埋めるもの、9は口縁下を沈線で三角形に区画しその内際を刺突文で巡らしている。6・8は堀之内1式で、6は無文で口縁に段を持つ浅鉢、8は口唇下に沈線が巡り縦位沈線のみが残る。10は関沢類型と呼ばれるもので、波状口縁の頂部にループ状突起を造りその下位に刺突文を加えている。第52図11から第55図までは堀之内式から加曾利B式のものである。11はほぼ全形がわかる資料であるが、口縁下に斜格子の沈線文を施しているに過ぎない。内面下位にはオコゲと見られる汚れがパッチ状に付着している。12は口縁で強い段を持ち縦位の沈線が施されている。13は粗製無文で堀之内式期の深鉢である。

第53図1・2も無文のもの、3は浅鉢で口縁際から一部に縦位沈線を施し、4は粗い隆帯と太い沈線とで文様を構成している。5はくびれ部の破片で有刻細隆線に8字状突起が貼付されその下位に沈線と縄文とで文様を描いており、6は沈線による渦巻文・綾杉文などと細かな刺突文によって空間を隙間無く充填している。7は加曾利B1期のもので胴部は横位の沈線を施し、突起部は刺突と縦の列点とで飾っている。8は口縁部が幅広に屈曲し沈線文が施され、突起は中心を穿孔し周囲を沈線および刺突で囲んでいるようである。9～第54図6・8・9は2式段階と見られるものである。第53図9は小形の朝顔形深鉢である。口縁下に8字状突起が貼付された有刻細隆線が巡り、その下位に沈線で三角文を描き帯縄文を施すこの時期の典型的な文様構成を持っている。10・11はそれとほぼ同様のもの、14・15は有刻細隆線が2本となり、12・13は縄文でなく沈線を多重にして三角文を充填している。

第54図1～5は2式でも後出的な様相を持つものである。1は口縁下に粘土貼付により有刻細隆線と8字状

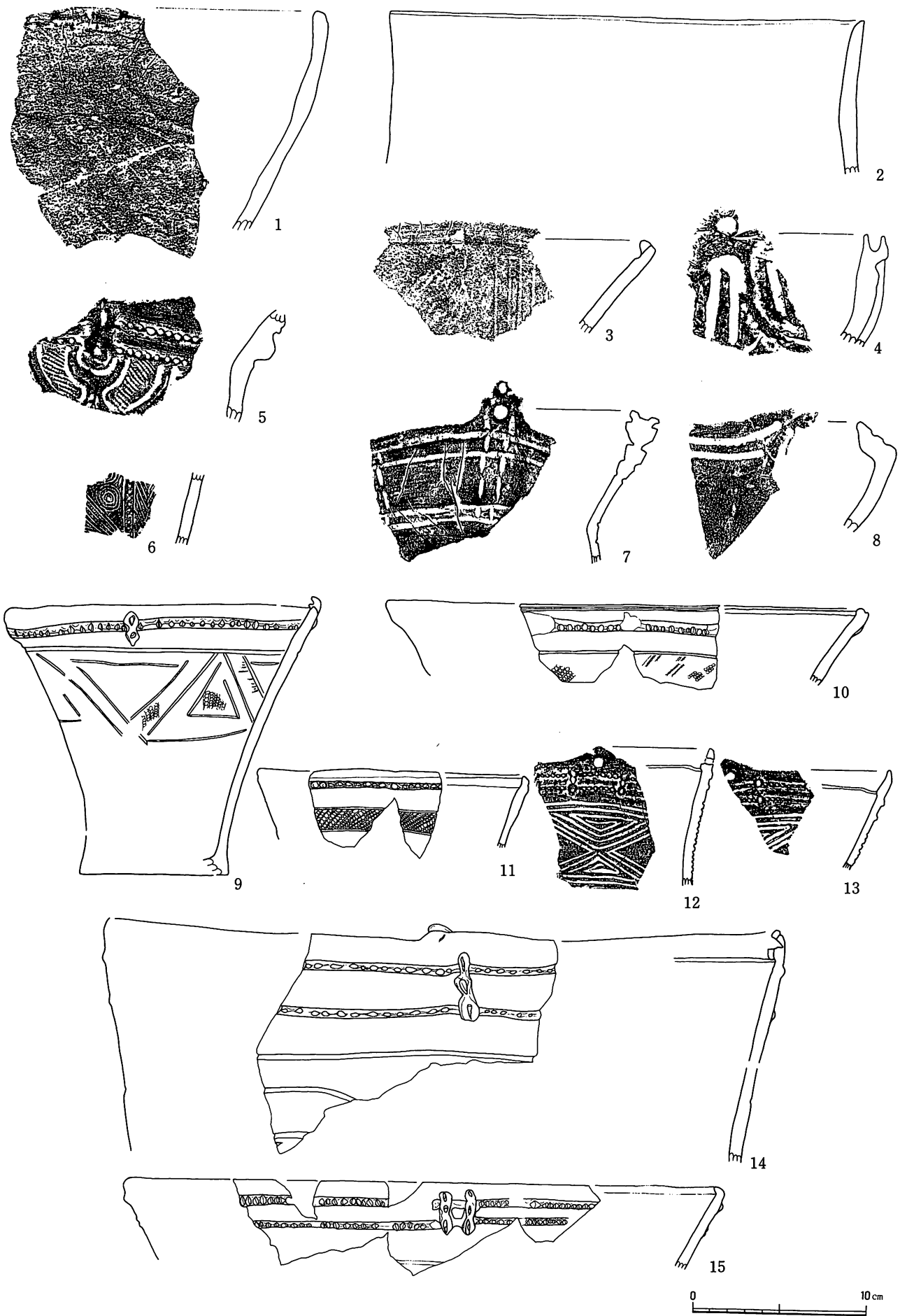


第51図 IA区縄文時代遺構外出土縄文土製品

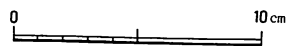


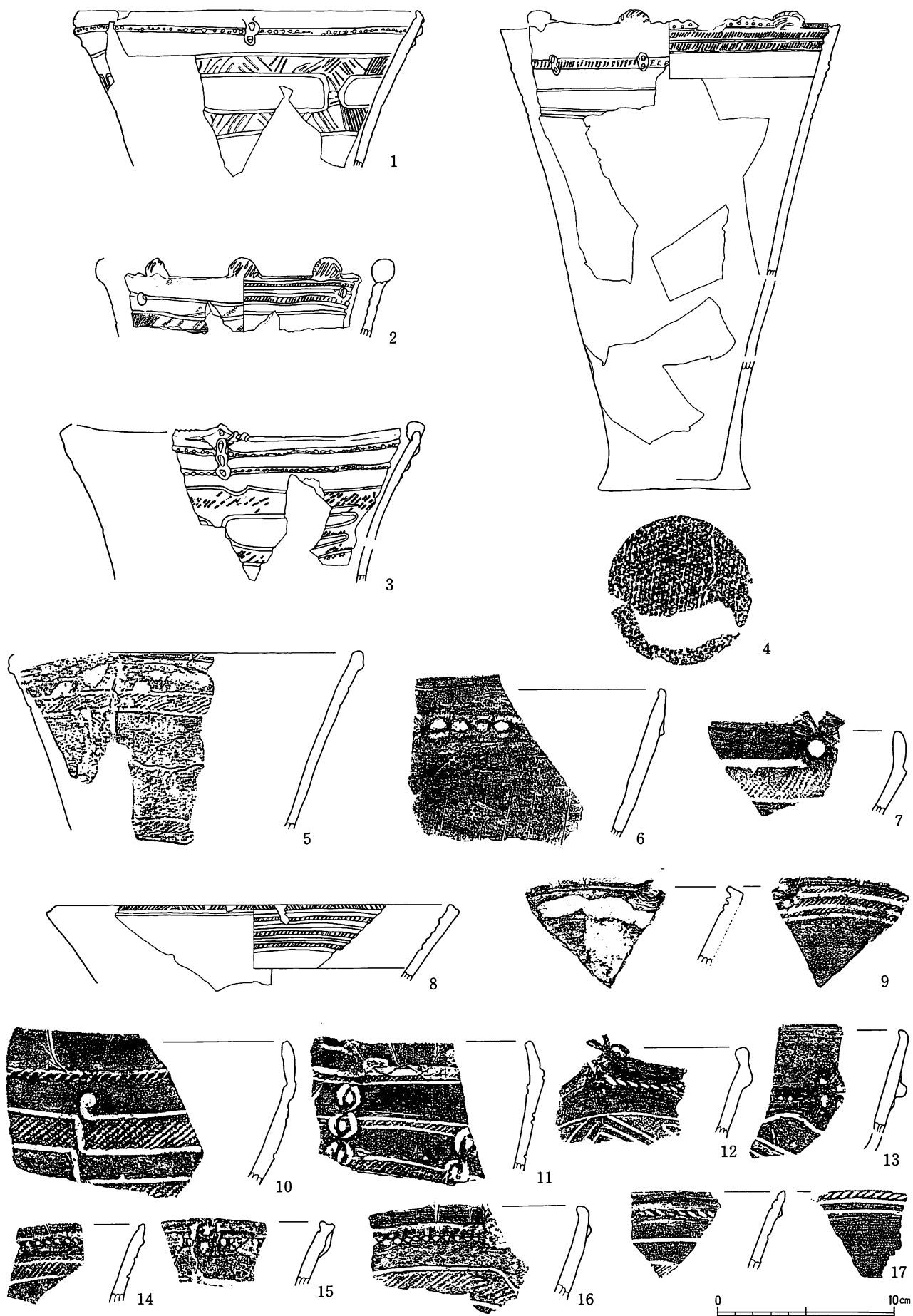
第52図 IA区縄文時代遺構外出土縄文土器 (1)





第53圖 IA区縄文時代遺構外出土縄文土器 (2)





第54图 IA区绳文时代遗構外出土绳文土器 (3)



第55圖 IA区縄文時代遺構外出土縄文土器 (4)

突起を作り、その下に沈線による杵状文とそこに縄文の代わりとして斜位の細沈線を充填して文様を構成している。2は口縁に斜行沈線で飾る多数の丸い突起を貼付したもので外面は横位沈線と縄文、内面は多重沈線を加えその間の一部隆帯に刻みを加えている。なお口縁下に焼成後の穿孔がある。3は1と類似しているが有刻細隆線が2本となっている。また内面には口縁際までオコゲが付着している。4は全形を窺うことができるのであるが、口縁には円形小突起を巡らし胴部は横位の細沈線で区画、最上位の沈線間を刻みで埋め8字状突起のみを貼付し、以下の幅広沈線間は細かな縄文で充填している。内面は口唇部の刺突文と口縁際の沈線とで構成し、その間を一つ置きに細かな刻みを加えている。また底面には網代痕がある。5も杵状文と思われるが、その縦幅はかなり大きいようである。6は刻みというよりも粗い押さえによって口縁下の有刻隆線を作り、胴部はおそらく一部格子状となる斜行沈線が加えられているに過ぎない。7は加曾利B1式で、貼付による突起に刺突を加え沈線の間を縄文で埋めている。8・9は浅鉢である。8は内面のみに文様があり、深い沈線を多重に刻みその間の隆帯に一つ置きに細かい刻みを加えている。9も類似するが口唇に押さえと刺突による文様があるのと、刻みはすべての沈線間隆帯に加えられている。10・11は加曾利B式のものである。10は深鉢と見られるが、粘土紐貼付の痕跡と見られる弱い段を口縁・胴部境に作りそこに刻みを加え、胴部は横位と縦位の沈線を組み合わせた区切り文を加え、その間を一部縄文で充填している。11は横位沈線による幅狭の区画に縄文を充填し、粘土貼付による小突起下に対弧文とその中心の刺突とによる文様を縦に並べている。12・13は2式古手の様相を持ち、有刻細隆線と8字状突起および多重沈線による菱形文で構成されると見られる。14～17は有刻細隆線や8字状突起、横位沈線など2式の特徴を持つものである。14には口縁際までオコゲが付着している。

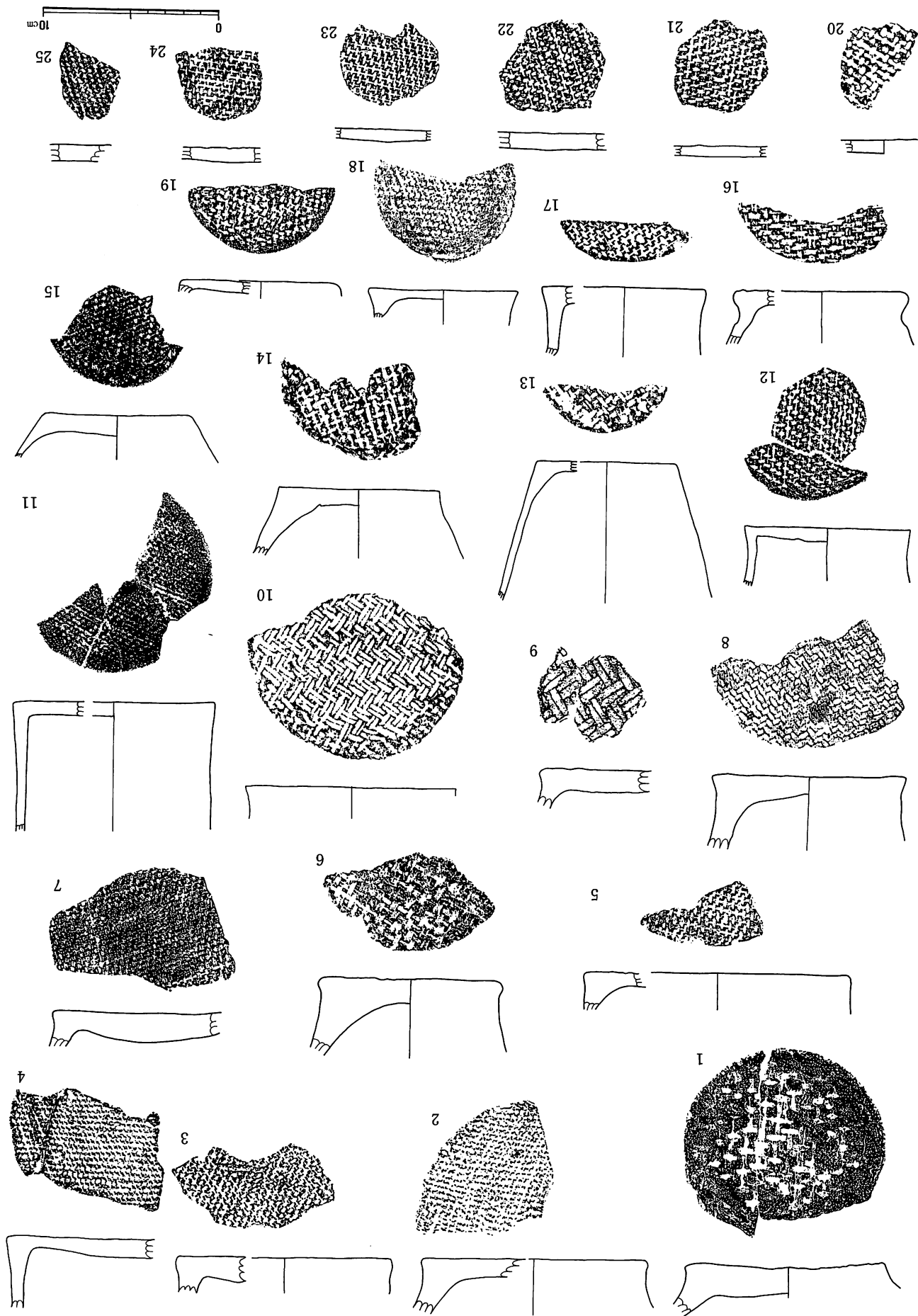
第55図1・3は称名寺I式で、1は沈線間の帯縄文でJ字文を作っていると思われる。4～6は堀之内式の深鉢口縁部の耳および突起と思われる。多くは粘土帯を貼り付けて造り出しているようであるが、粘土板が器壁と平行するか直交するかの大きく2種に分けられるようである。そして沈線や刺突などを加えて造形しており、その形態はヴァリエティーに富む。7は加曾利B式の深鉢突起と思われる。8～21は堀之内2式と見られるものである。8は朝顔形深鉢で外面は横位の沈線、内面は4条の沈線を施し、その間の隆帯には一つ置きに細かな刻みを入れている。9は外面は横位沈線を加え、内面は口縁下の刺突文および双瘤様の貼付、そして胴部上位の沈線数条が見られる。10は外面無文、内面に一つ置きに刻みを施した沈線を加えている。また一部に焼成前の穿孔がある。11・13は2・3本の粘土紐貼付による有刻細隆線と沈線間を縄文で充填した縄文帯からなる。14は口縁下のごく一般的な有刻細隆線と8字状突起に加え、その下に斜格子を描いた沈線とその中に縄文を入れた点特徴的である。15は受け口状になると思われ、口縁突起部に短い縦の沈線を入れ、また粘土を貼り付け突起を造っているようである。12・16は有刻細隆線と8字状突起が見られ、17は口唇部に段を持ち、くびれに刻みが見られる以外は文様は見られない。18～21は注口土器把手である。22・23は深鉢口縁部突起であるが、おそらく粘土の貼付によって比厚させ、沈線および刺突によって文様を構成している。24～27は注口土器の口縁部である。いずれも堀之内期のもものと見られ、沈線による渦巻き文を主とし、これに細かな刺突による列点を配している。28・29は加曾利B1式で、28は主に沈線による区切文と横位の帯縄文とで構成されている。29は外面は横位の沈線とその間を埋める縄文帯を胴部上位に施し、ほぼ均等に6分割した位置に対弧文を2段に配している。30・31も加曾利B式注口土器の胴部から口縁部破片である。いずれも精緻な沈線を多重に平行させ曲線を展開して文様を構成している。さらに31は刺突による列点および刻みも組合わせている。

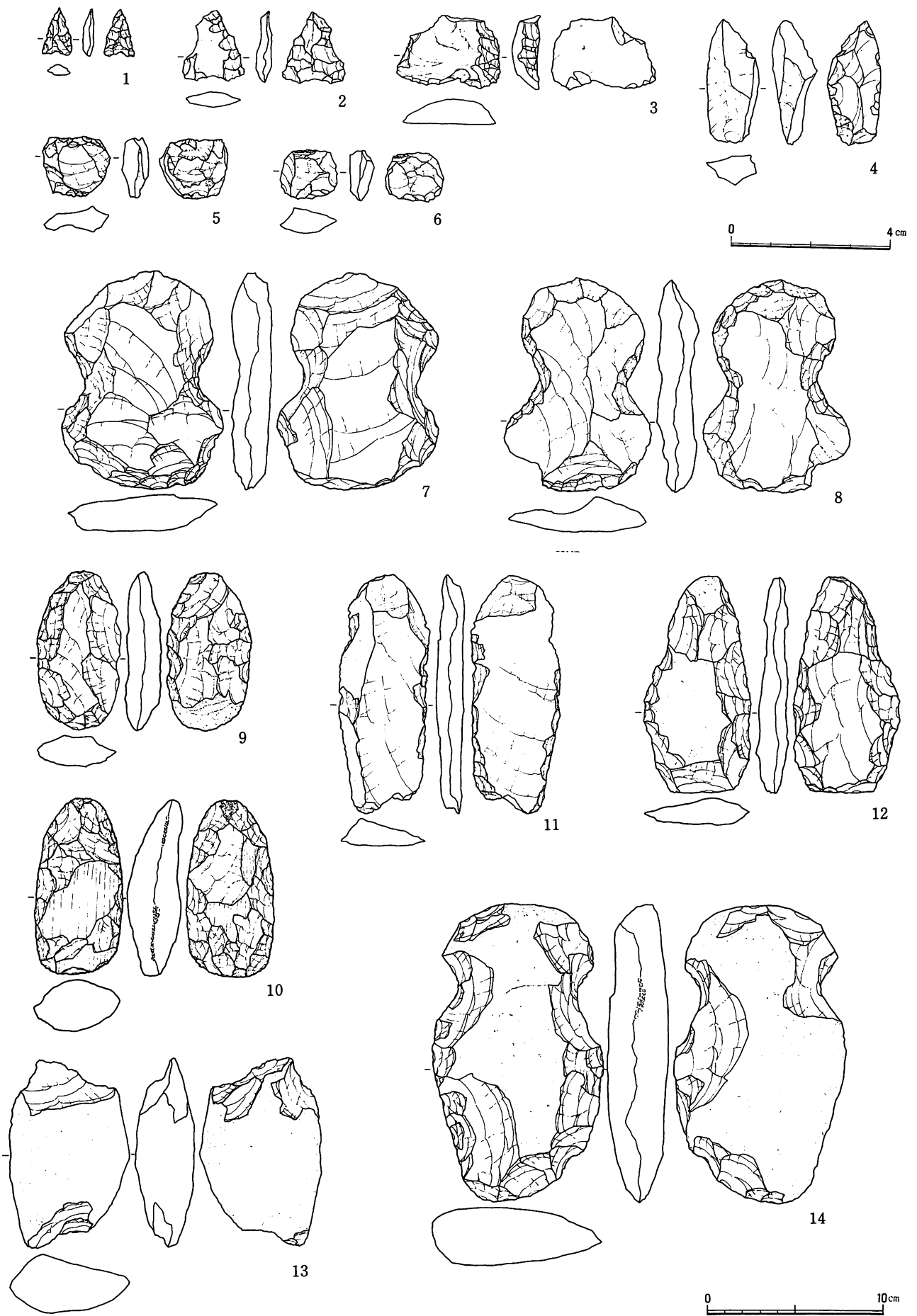
第56図は深鉢の底部の内、網代痕が比較的明瞭に観察できるものを25点ほど集成した。これらの編み方は1越え・1潜り・1送りが8点（以下1-1-1のように表示）、2-1-1が8点、2-2-1が6点、二つの編み方からなる特殊なものが1点で前3者の編み方が多くを占めているようである。また2本組のものもあるがこれらは平滑で断面がカマボコ状であることからツル素材であると見られる（長沢1997：16）。また経緯各条の太さは細いもので1mmほど、太いもので5mm前後と若干の差があるが、全体的には2～3mm前後のものが多い。

### c) 石器（第57～61図・第5表）

第57図1から6は小形の石器である。1は凹基無茎鏃で大変小形のものである。2は石鏃未成品と見られ、各縁のおおまかな調整の後、片側縁に移ったところで調整に失敗し放棄されたと見られる。3は搔器で一辺に

第56图 IA区縄文时代遺構外出土縄文土器 (5)



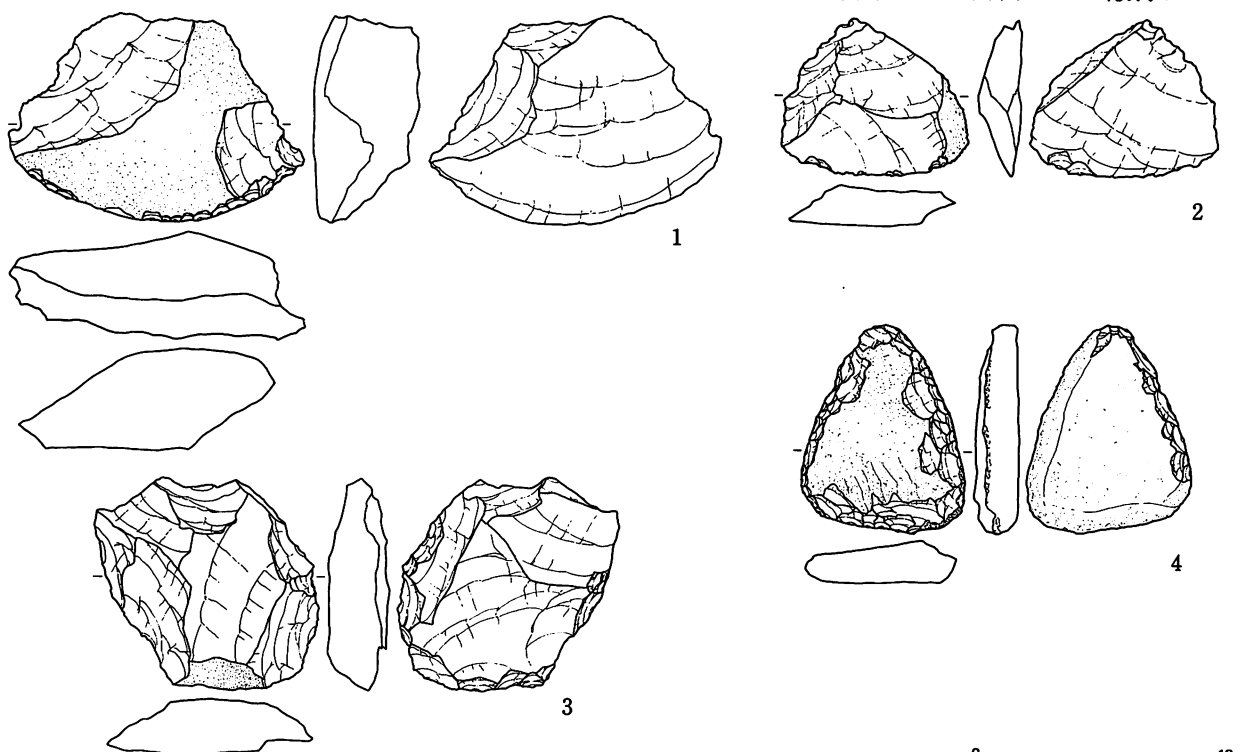


第57図 IA区縄文時代遺構外出土縄文石器(1)

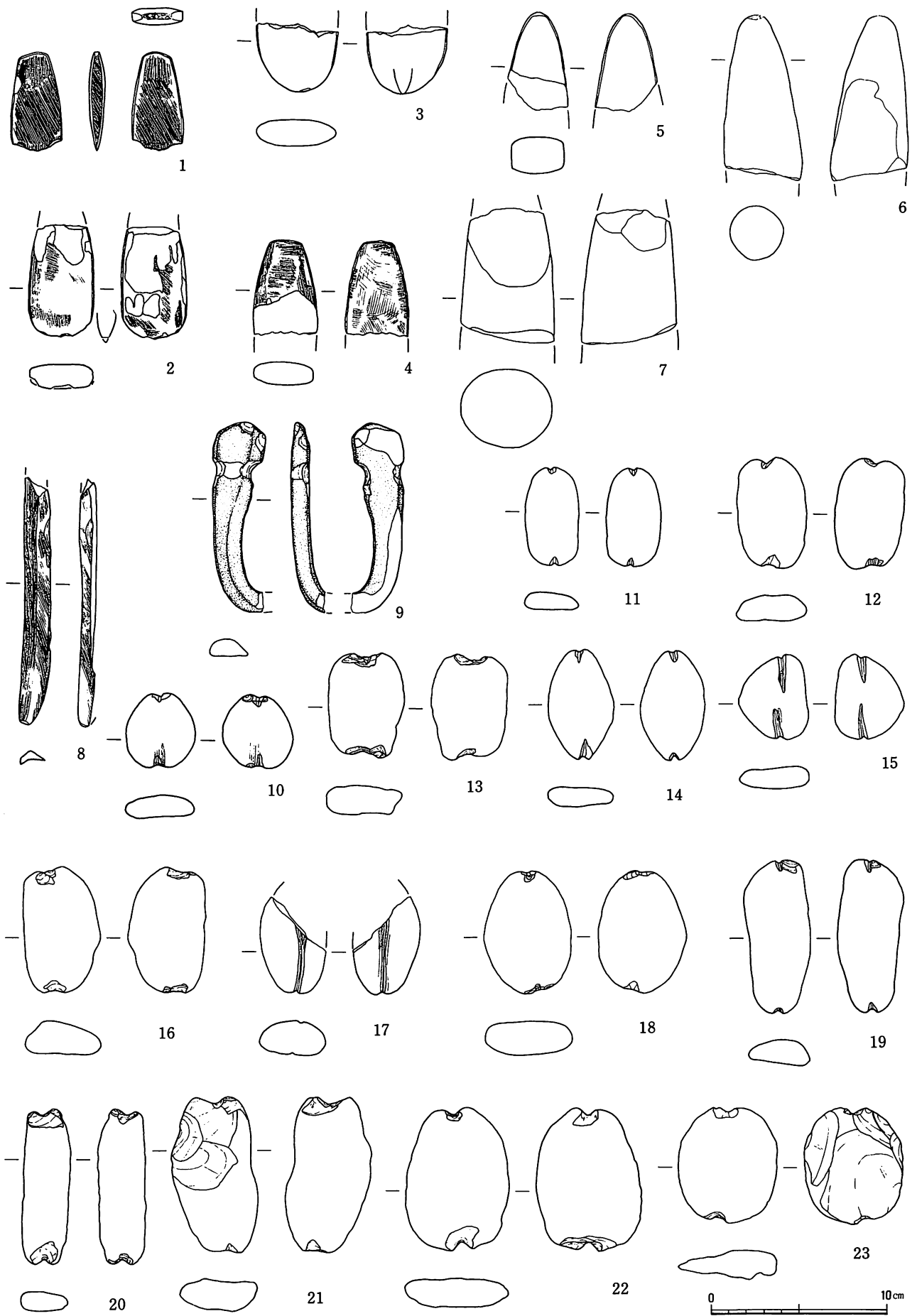
片面からの急斜度調整がなされている他、細かい潰れも見られる。4は二次加工剥片であるが、背面左辺に連続的な二次加工と潰れが、末端と右辺に使用痕の可能性ある微細剥離がある。5・6は楔形石器である。相対する二辺にかなりの潰れが観察される。13を除く7～14までの7点は打製石斧と見られるものである。このうち7・8は分銅形のもので、剥片を利用し周囲から比較的角度の浅い調整を加えて形状を造り出している。7の両側挟入部および8の片側挟入部には細かい調整が集中的に加えられ鋭利な側縁となっているが、8のもう一方の挟入部は階段状剥離が発達し幅広で摩滅した面となっている。9～11は短冊形に近いものである。9・10の2点は比較的厚みのある素材を利用しており周縁から調整を加えて整形している。9の図下方の刃部では調整が片面からに限り、鈍い先端となっている。10は両面の体部中央と刃部付近に磨面が残っていることとその石材から当初磨製石斧であったものを転用したと推測される。また側縁の一部にはかなり顕著な潰れが認められ、着柄等による可能性がある。11は扁平な剥片に両側から細かい調整を加えている。図下方の刃部は打撃による破損面が生じている。12はどちらかといえば撥形にあたるものである。薄い剥片に周縁からのやや大きな調整によって整形され、刃部はほぼ直線的となっている。14はかなり大形で異形のものである。扁平な原礫に対して必要最小限程度の二次加工を加えている程度であるが、上方寄りには両面から集中的に調整し挟入部が造られ、さらにその下方には潰れが観察される。刃部も両面から剥離された結果、比較的鋭利となっている。13は楔状石器で棒状礫の両端にラフで粗い両極剥離を行っている。

第58図は二次加工のある不定形な石器である。1はかなり厚い剥片の左右両辺の一部に二次加工を行い、末端辺を刃部としているもので、刃部には中央部を中心に潰れと連続的な小剥離が観察される。2は三角形の剥片右辺に二次加工を加えている他、刃部である末端辺には使用痕とおぼしき不揃いな小剥離が見られる。3は礫器である。縁辺の一部に表裏から若干の調整を行い大略鶏卵形の形状にしている。4は敲石で、板状の長三角形礫の周縁ほぼ全体に剥離痕があり、そこに使用の際に生じたと思われる敲打痕が連続している。

第59図1～7は磨製石斧およびその可能性があるものである。1～5は定角式で1・2は刃部に破損や摩滅などの使用痕跡が明瞭に認められる。3は湾曲した刃部となっている。また磨製石斧全体に方向の異なる整形時の擦痕がほぼ全面に見られる。6・7は乳棒状石斧の頭部破片と見られる。全体によく磨かれている他、6では一部に整形時の敲打痕が残っている。8・9は用途不明の棒状石製品である。8は一端および片半分が欠損しているが、全面が3面体によく磨かれている。9も先端などが欠損しているが釣り針状の形状を持つと予想されるものである。元々こうした形状の礫を利用したと見られるが、頭部側には両側からの敲打によって挟

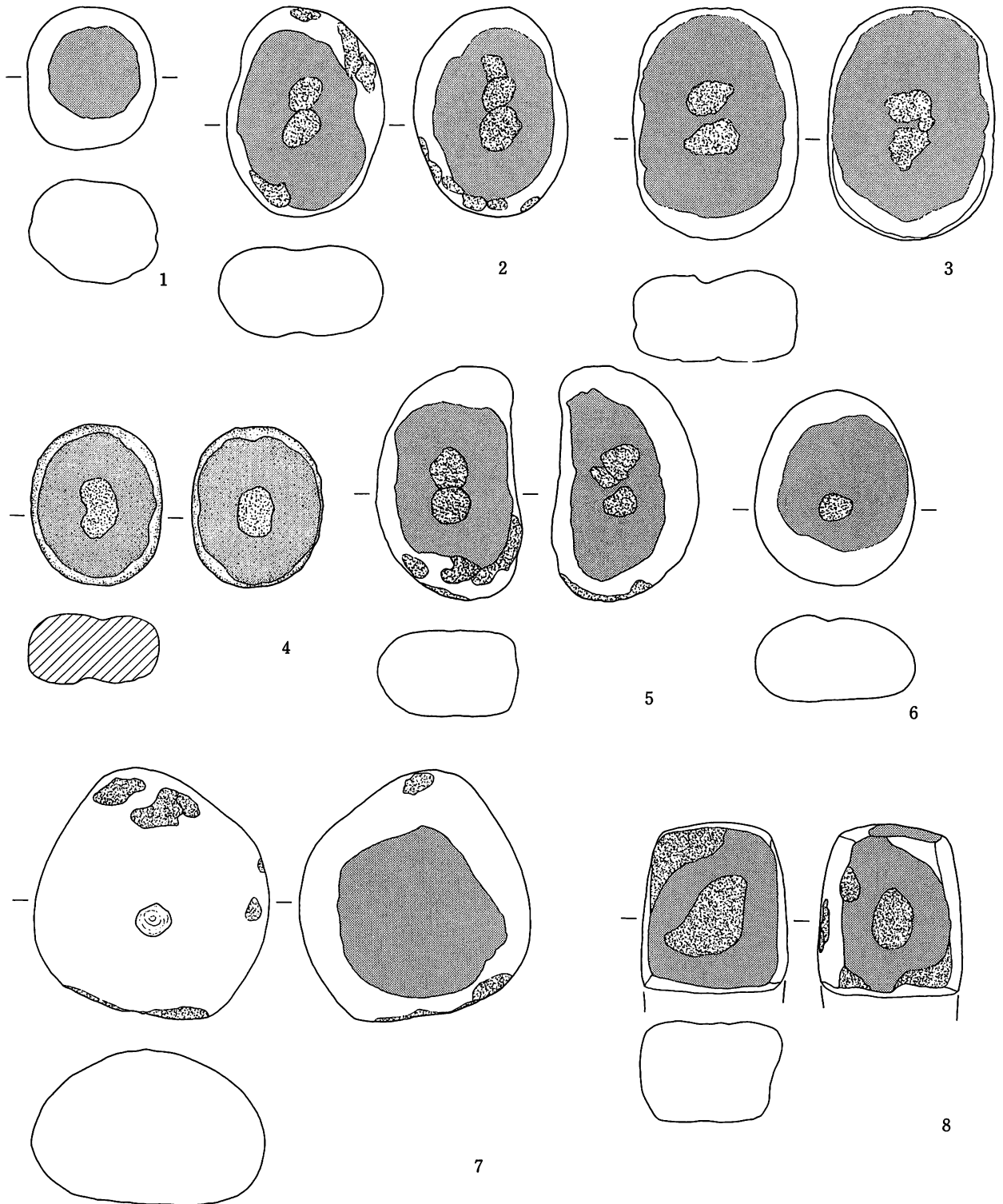


第58図 IA区縄文時代遺構外出土縄文石器(2)



第59圖 IA区縄文時代遺構外出土縄文石器 (3)



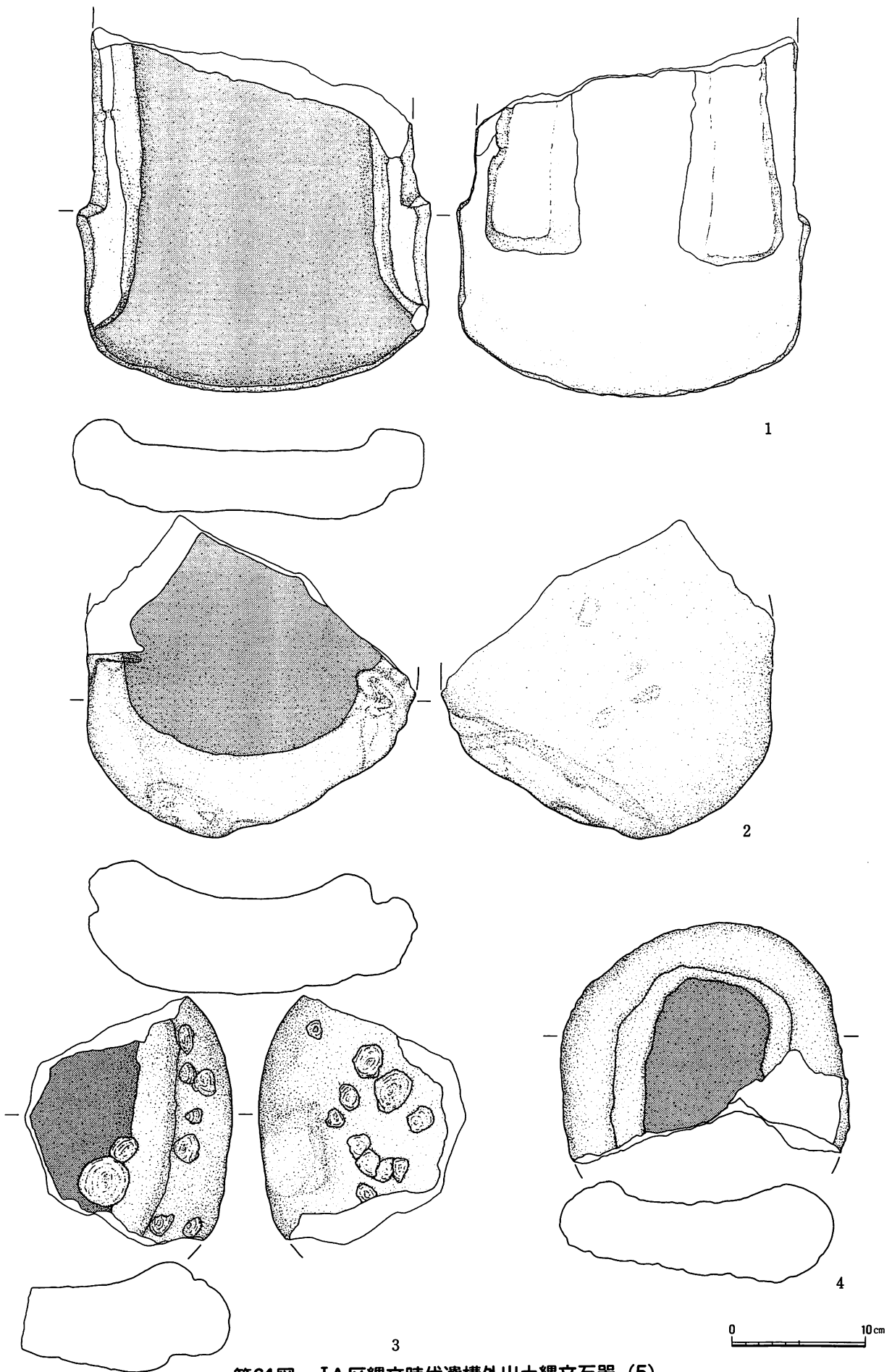


第60図 IA区縄文時代遺構外出土縄文石器(4)

0 10cm

入部が造られている他、その部分の色調が若干変っており、実際にここで紐状の繊維を結び付けていた痕跡であるかもしれない。10～23の14点は石錘である。大きさに若干の違いがあるがいずれも長軸端の中央に紐掛け用の刻みを加えたもので、その方法は打ち欠きによるものと擦り切りによる場合の二つがある。また形状は長円形のもの一般的であるが、より円形に近いもの(10)や棒状のもの(19・20)なども見られる。また機能的に重要な重さについて見てみると、最軽量品で23g、最重量品で120g、平均60g弱となるが、かなり分散しており、20～40g代と、50～100g代とに分かれる傾向が窺われる。

第60図は磨石・敲石類である。これらの磨石・敲石類は重量600～700gほどの楕円形で扁平な形態の礫を使用するものが多いが、中には8のように長方体のものもある。これらの石器で顕著なのは表裏面ともに使用さ

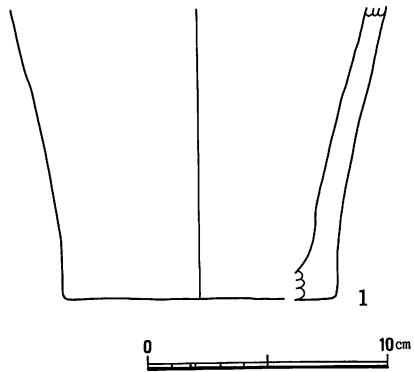


第61図 IA区縄文時代遺構外出土縄文石器 (5)

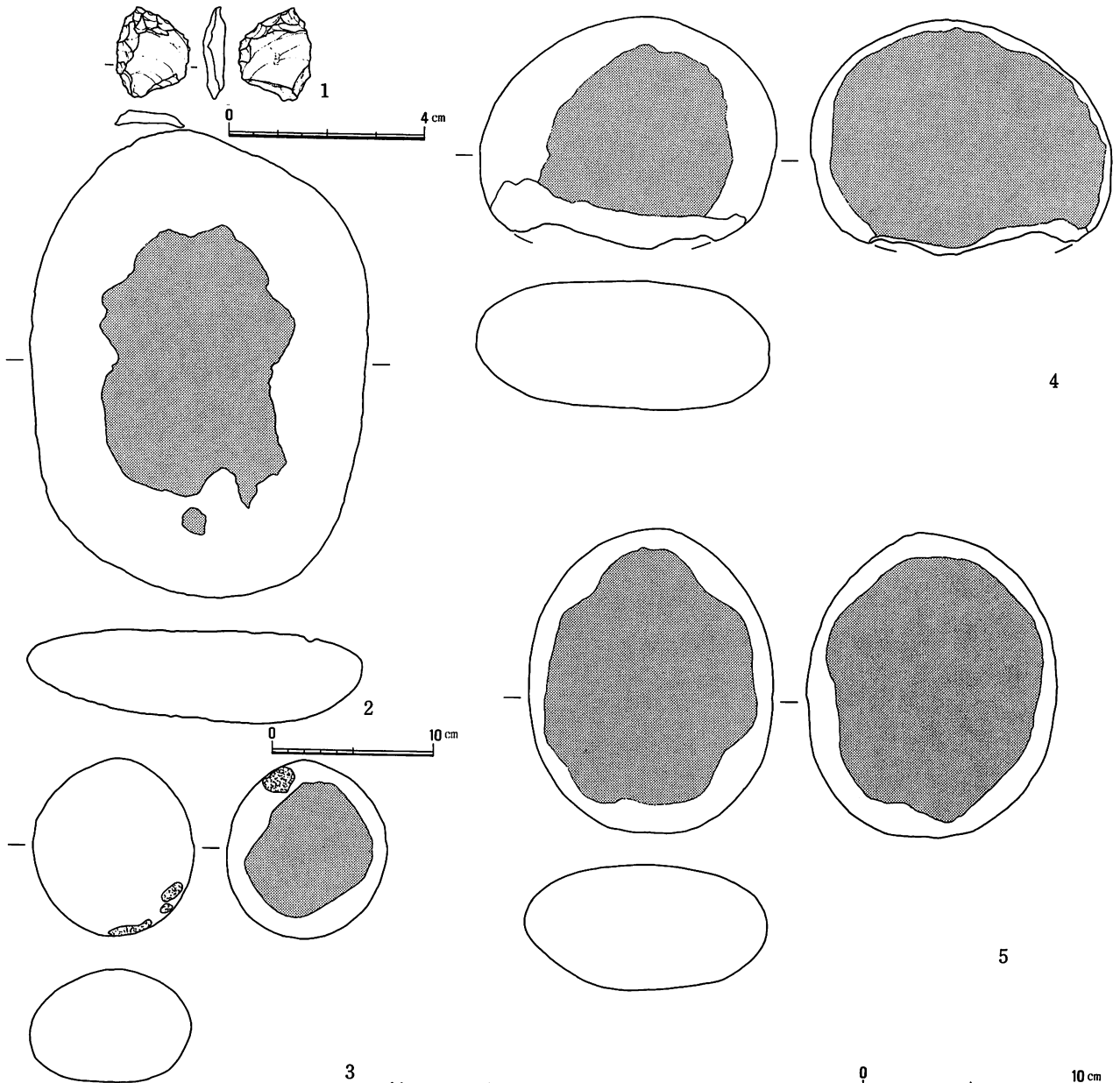
れ、しかも磨面と敲打痕とが共存している場合が多いことである。このことからこの二つの行為が一作業の中に組み込まれていたことがわかる。また敲打による凹面は磨面の中心部に2ヶ所ないしは複数ヶ所形成される場合が多く見られるが、これは使用度の進行とともに凹面がある程度の大きさあるいは深さになると位置をずらして使用された結果を示している可能性がある。そしてこれらが中心に偏っているのは片手で握って敲打する際の安定性もしくは正確性を必要としたためと推測され、縁辺に見られる敲打痕とは作業内容が異なっている

可能性が高いのであろう。また、7は重さ1.6kgとかなり重く、しかも片面中央にかなり顕著な潰れのある逆円錐形の窪みが形成されており、作業台石として使用された可能性が高いであろう。なお、こうした作業の対象物を明らかにする目的で4に対して残存脂肪分析を行った結果、イノシシやニホンジカなどに由来する脂肪が残存すること、また堅果類などの処理を行った可能性は低いことが明らかとなった。

第61図は石皿である。1は大形品であるが特に入念な加工が加えられ、長方形の脚台や両側縁などを造り出している。2は円形と推測されるもので中央部がすり鉢状に窪み作業面となっている。3は大形品と推測される



第62図 第1号敷石住居跡出土縄文土器



第63図 第1号敷石住居跡出土縄文石器

が遺存部分はわずかである。円形と思われ中央部分がやはりすり鉢状となるが、その縁辺および裏面には多数の逆円錐形状窪みが形成されている。これらの孔は直径1～3cm、深さ1～2cmほどと若干の差異があり、一部に若干の潰れが観察されるものの、摩滅などさほど顕著な使用痕は窺われない。4は中形のもので楕円形のもので推測される。やはり中央部分が窪められているが、整形はややラフな仕上がりである。作業面の摩滅もさほど顕著ではない。

なお、1と2の2点に対しても残存脂肪分析を行った結果、1は磨石と同様にイノシシやニホンジカなどに由来する脂肪が残存すること、2はイヌ、タヌキのような動物、モズ、ツグミ、ウズラの卵のような野鳥や野鳥卵およびヒトの手の油脂が検出されている。

## 第2項 第7次調査Ⅱ区

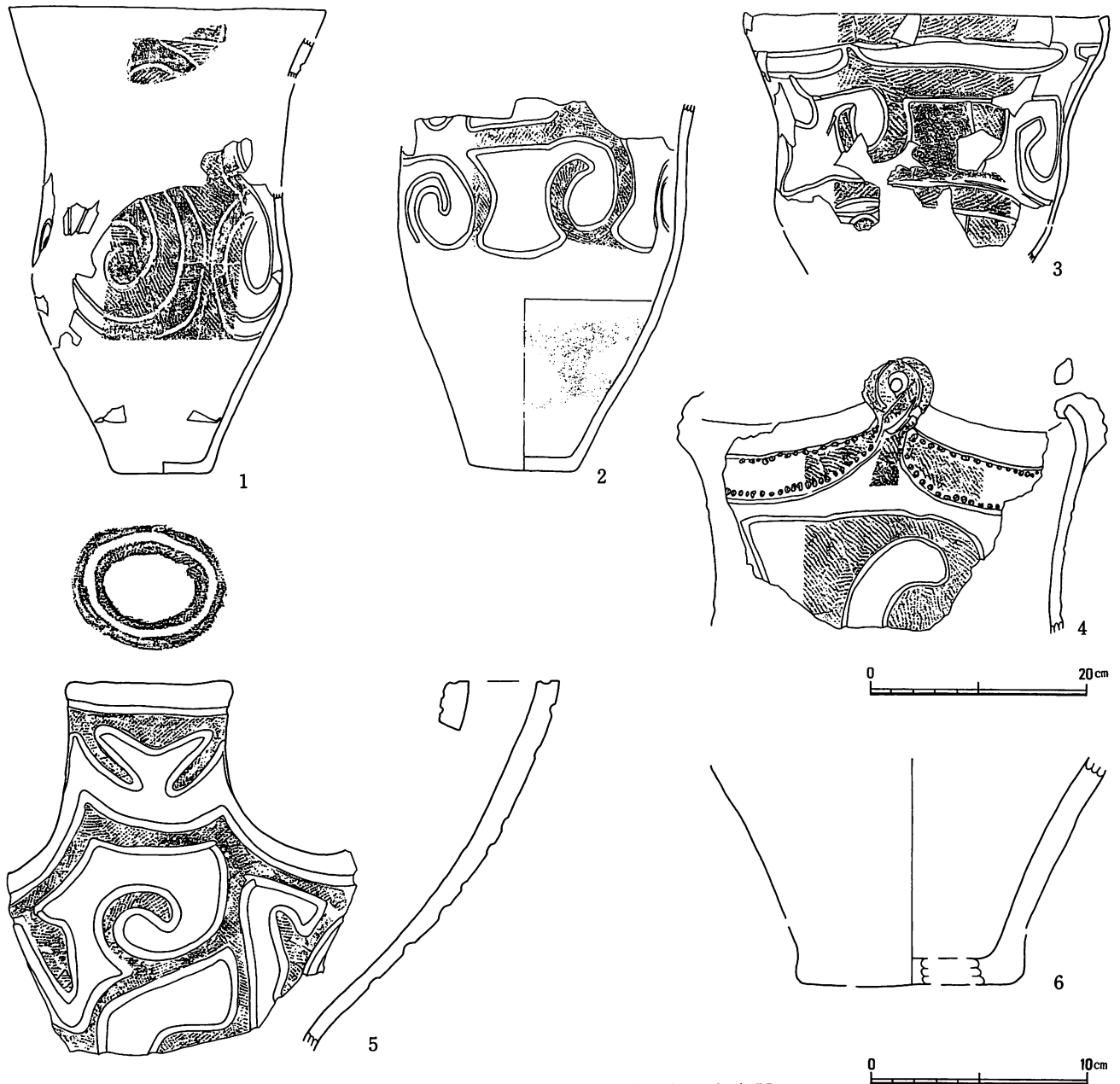
### (1) 縄文時代遺構出土遺物 (第62～66図・第4・5表)

#### 第1号敷石住居跡 (SI01)

##### a) 土器 (第62図・第4表)

第62図1は第1号敷石住居跡から出土したものである。大形の深鉢底部と見られるが、時期等は不明である。

##### b) 石器 (第63図・第5表)



第64図 ⅡA区縄文時代遺構出土縄文土器

第63図 1 は二次加工剥片である。小形の剥片に対して主要剥離面から急斜度調整を集中して加えている。2 は石皿であるが、大形の扁平礫を加工せずにそのまま利用している。使用面は片面中央で若干の摩滅が観察される。3 は小形の磨石・敲石類である。4・5 も表裏両面に磨面が観察されるが、1.2kg強と他の磨石・敲石類よりもかなり重いため、手持ちではなく石皿として置いて利用された可能性も考えられよう。

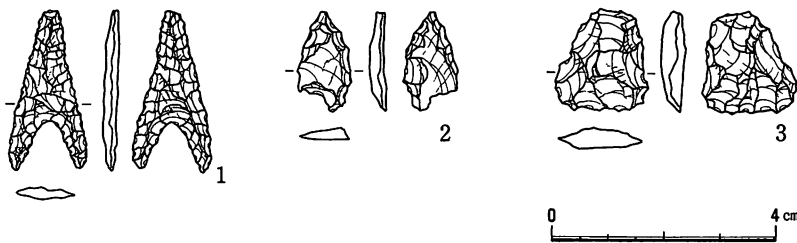
土坑・焼土遺構・集石遺構

a) 土器 (第64図・第4表)

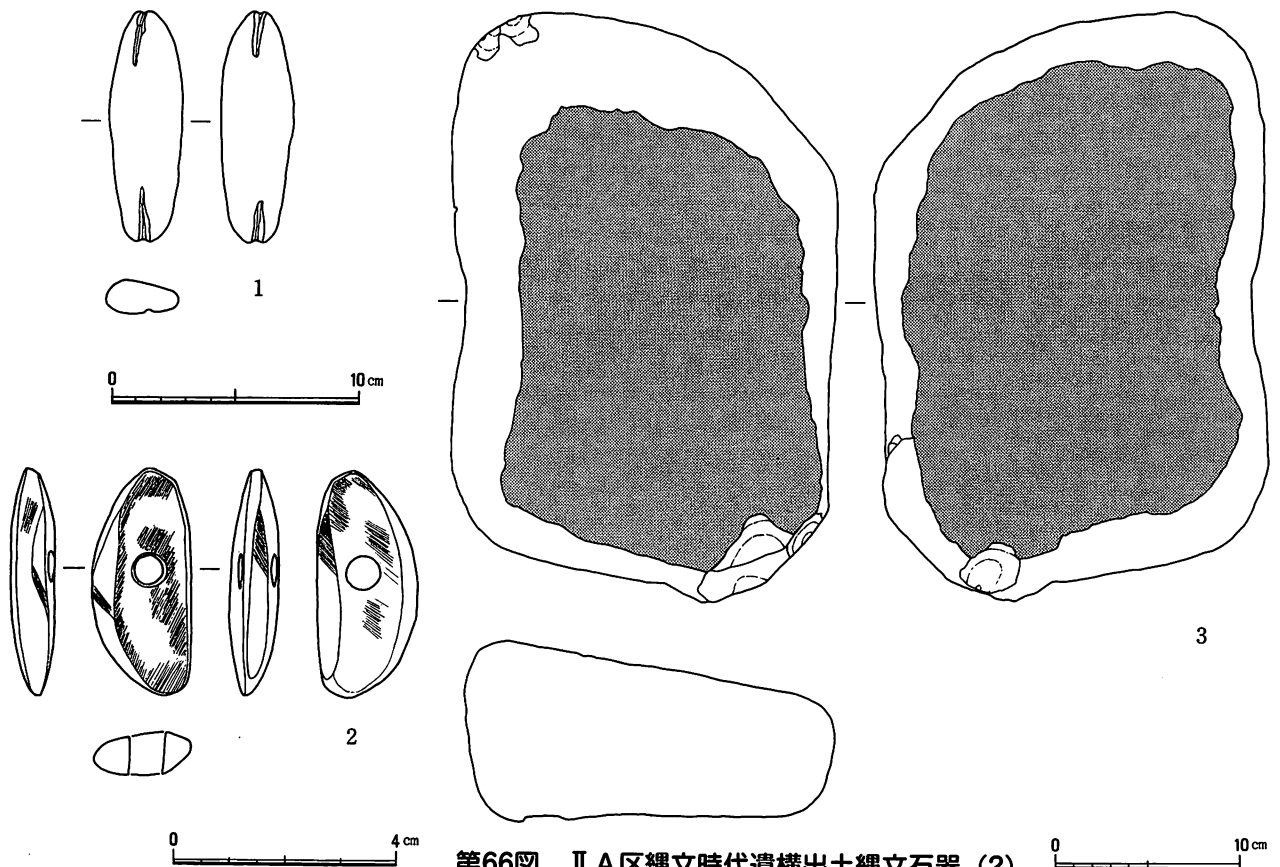
第64図は縄文時代土坑から出土したもので称名寺段階のものを主としている。1・2 は第14号土坑中に正位に並置されていた埋甕である。1 は中下位までJ字状モチーフを沈線で描きその内部を縄文で埋めるもの、2 はおそらく縦位2段にJ字文が配されていると思われ、いずれもI式段階である。2 は胴部内面下位に使用によるオコゲが縞状に付着している。3 もやはり縦位2段にJ字文が配されていると見られる最古段階のもの、4 はかなり大形の「閑沢類型」深鉢である。列点・縄文などで構成される波状の突起を持ち、胴部は列点もしくは沈線で区画した中を縄文で埋めている。5 は口縁が筒状に大きく突起しているI式段階のものである。6 は底部破片で詳細な時期は不明であるが、底面から9cmほど上位の内面には帯状にオコゲ痕が付着している。

b) 石器 (第65・66図・第5表)

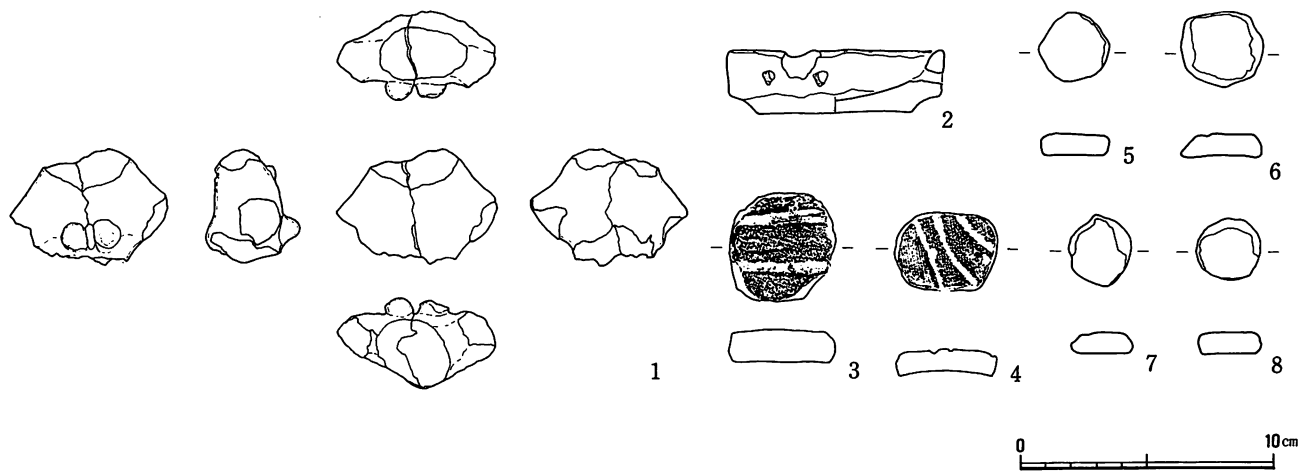
第65図は小形石器である。1 は凹基無茎鏃で比較的長脚のものである。2 は凹基の石鏃未成品と思われるが、脚が片方作り出されていない。3 は調整の進行度や形態から両面調整石器 (石鏃である可能性大) あるいは下端辺を利用した削器の可能性もある。小形剥片を両面ともにほぼ全周から浅い角度で細かく剥離している。第66図は石錘で細長い棒状礫に擦り切りによって刻みをつけている。重さは52gと標準的なものである。2 は第24号土坑から出土した翡翠の大珠である。中央ややはずれた位置にきわめてシ



第65図 IIA区縄文時代遺構出土縄文石器 (1)



第66図 IIA区縄文時代遺構出土縄文石器 (2)



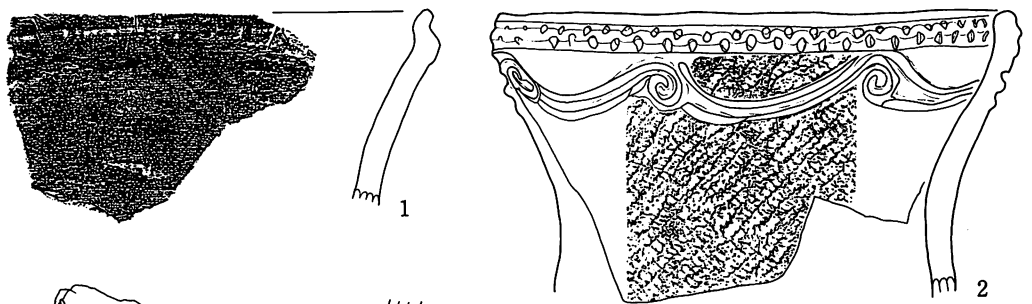
第67図 IIA区縄文時代遺構外出土縄文土製品

ヤープな正円孔がある。片面では直径7.4mm、もう片面で6.3mmであるため径の大きい面から穿孔されたと考えられる。3は石皿で特に整形加工はなされていない。表裏面が広く磨面として使用されている。

(2) 遺構外出土遺物 (第67~78図・第3~5表)

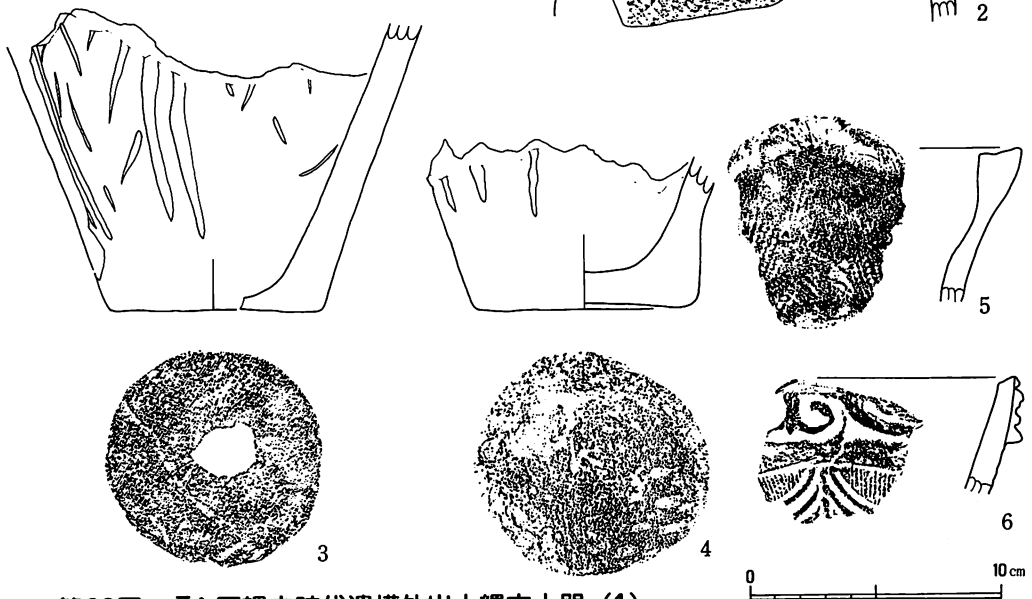
a) 土製品 (第67図・第3表)

本区から出土した土製品は、土偶・器台形土器各1点、土製円盤6点である。1は土偶の胸部片である。板状ハート系であると見られ、乳房と両肩が表現されている。頭部・両腕・臀部のいずれの破損面も粘土塊の表面で、またこの出土品自体も縦の割れ目が見られ両乳房中心ラインを境として2分割できそうなことから、分割塊製作法によると判断できる。2は器台形土器としたが、一般的にこの名称に分類されているものは直径15~25cmの大きさを持つとされており(新津1999:169)、器台状部の直径が9cm弱のこの土器がかなり小さいことは明らかである。ただし形態的には皿状の台を持ち、体部2ヶ所に対で穿孔するなど、他とは一線を画す特徴を持っているが、ここでは器台と分類しておきたい。3~8は土製円盤である。3・4の2点は大きさ・重量ともに標準的なものであるが、その他の4点はかなり小形のものである。また4には土器外面側から穿孔しようとした痕跡がある。

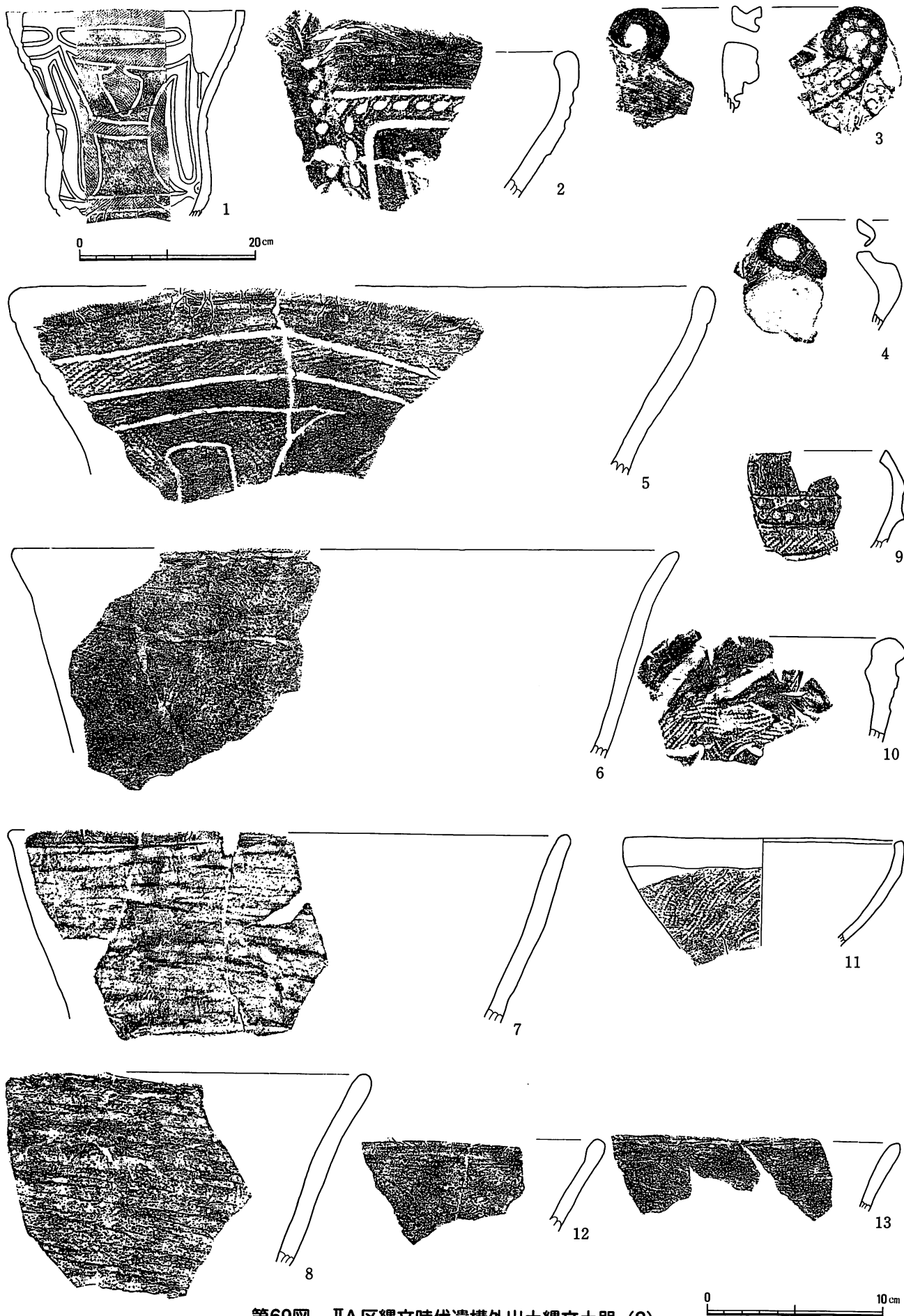


b) 土器 (第68~72図・第4表)

第68図はII区の遺構外から出土したものである。時期の比較的はっきりしているのは1~4であるが、1は堀之内1式の粗製土器、2は口縁部に沈線および刺突による列点を巡らし、その下位に横S字形に類似した沈線および粗い縄文で空間を埋めている連弧文系のものである。3・4は



第68図 IIA区縄文時代遺構外出土縄文土器(1)



第69図 IIA区縄文時代遺構外出土縄文土器(2)

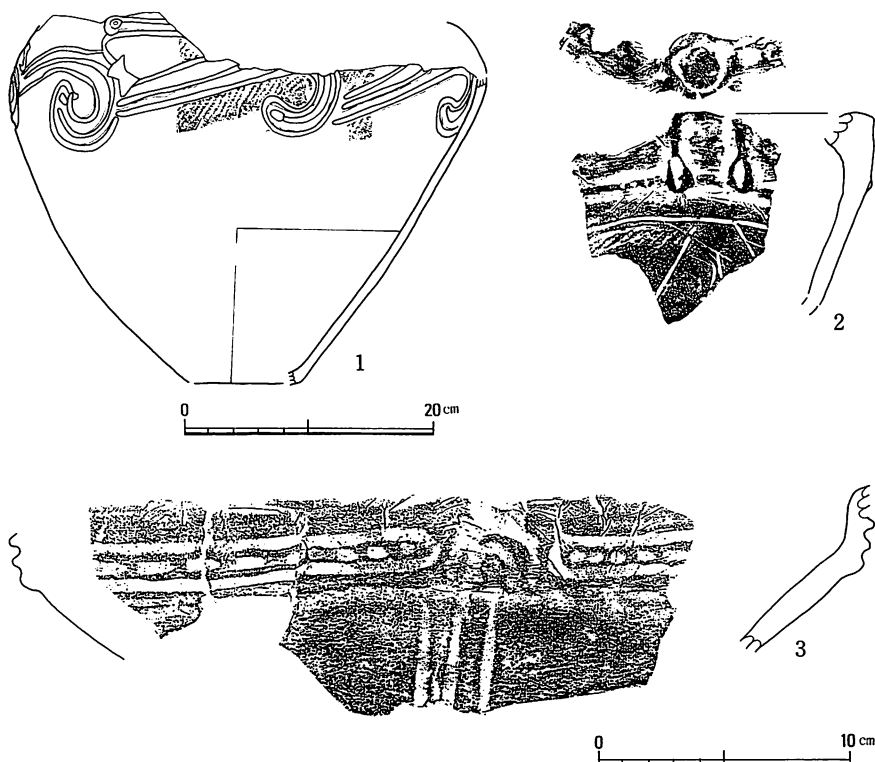
底部であるが、胴部下位まで縦位の沈線を垂下させ、3ではその間に「ハ」字文を配している。またこの土器には底面に直径2cm強ほどの外面からの焼成後穿孔がなされている。

第69図は後期初頭の資料を中心にしたものである。1は中形深鉢でJ字文の間に銚先状の文様が配置されている称名寺式最古段階のI式である。2は太い粘土紐を縦に貼り付けそこに刻みを加えて突起を作り、胴部は沈線と列点および縄文によって文様を構成している。3・4は「関沢類型」の突起部である。5はやはり称名寺I段階のもので平口縁直下から沈線によって区画し縄文でその中を埋めている。6～8・12・13は無文の深鉢で堀之内期の粗製土器である。外面は擦痕があるか、粗いナデが為されるかといった程度で直線的に開いている。9は小形の深鉢と思われ、二段に列点を巡らしその下に縄文を施している。10は口縁を太い粘土紐を多重に貼付けて装飾し、その直下は縄文と沈線とを加えている。11は小形の浅鉢で、胴部に縄文を転がしただけのシンプルなものである。

第70図は後期前葉の堀之内式と見られるものである。1は丸みを持って広がる胴部から一旦くびれて大きく開く口縁となると見られる大形の深鉢である。胴部上位には多重の沈線による渦巻き状の文様が全部で7単位横位に展開し、その間や上位を縄文や沈線で埋めている。また内面下位の一部には使用によるヨゴレが縞状に残っている。2は縦横への粘土紐貼付により口唇部文様帯を作り、胴部上位は沈線と縄文で飾っている2式のもの、3は口縁部が大きく広がる深鉢と見られ、口縁端を沈線および列点で飾る1式のものである。

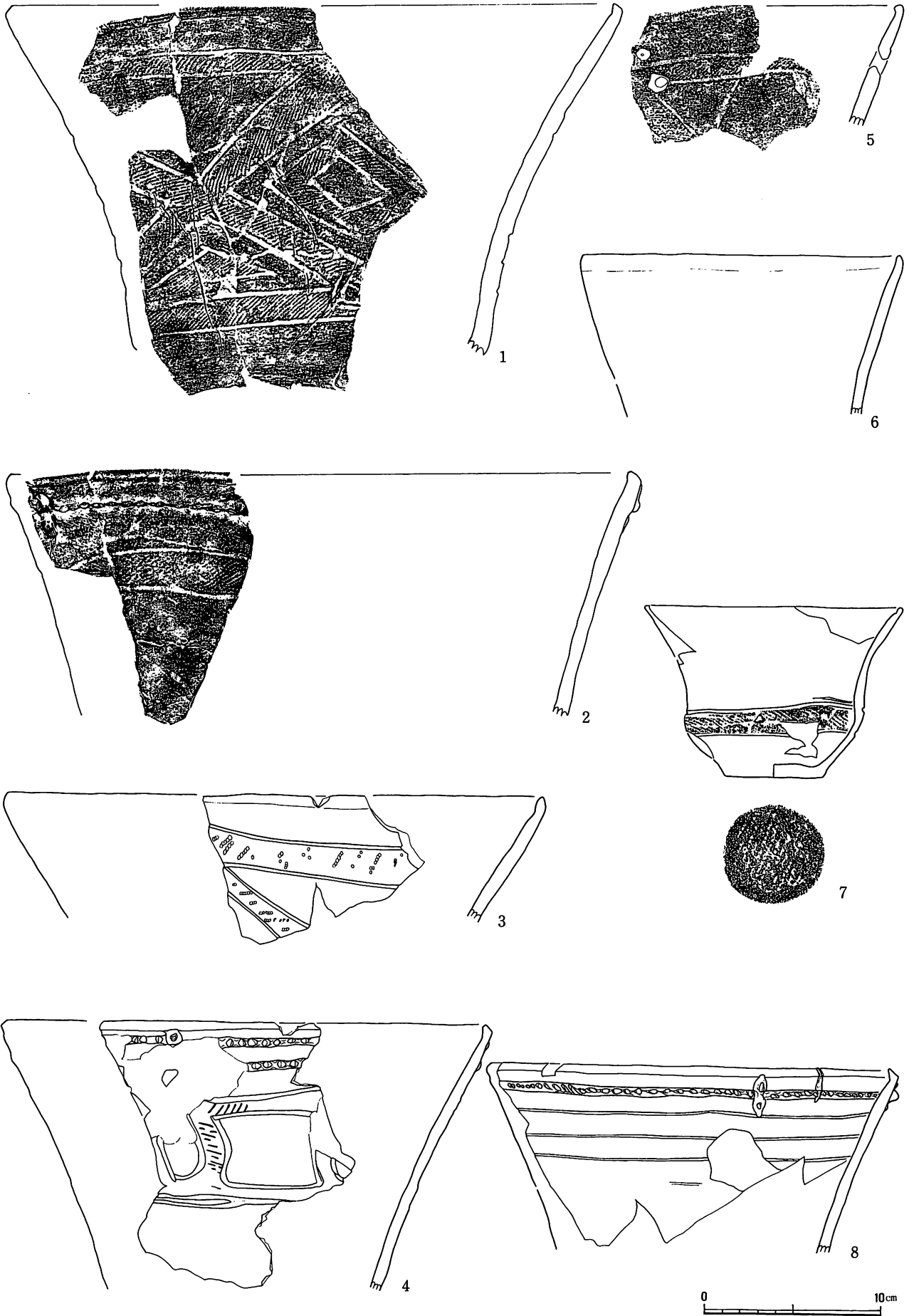
第71図および第72図1～4・6は堀之内2式段階のものである。第71図は7を除いて朝顔形深鉢と見られる。6は無文であるが、それ以外は胴部上位に沈線による菱形文・三角文や杵状文を描き、そこに縄文を充填して文様を構成しているが、8は沈線のみで縄文は施文されていない。また2・4・8は口縁部外面に粘土紐貼付による有刻隆線と8字状突起が加えられている。なお、5には口縁下に焼成後の穿孔が1ヶ所、また焼成後外側から穿孔しようとして貫通しないまま作業を中断した穴が1ヶ所ある。7はめずらしい小形の鉢である。胴部ではほぼ垂直に立ち上がった後口縁に向かって大きく開いている。文様は胴部に沈線帯を描きその中を縄文で埋めただけの単純なものである。

第72図1は口縁部の突起装飾がかなり入念なもので、内面および口唇端には沈線による渦巻き文を主とし、その間を多重沈線でつなぐような文様が立体的に表現されている。外面は沈線文および縄文帯と有刻細隆線と8字状突起からなる。2は外面は沈線を施しただけであるが、沈線間にはミガキをかけないことで文様帯としての印象を強めている。内面は5本の沈線をしっかりとつけ、一つ置きに刻みを加えている。3はおそらく沈線による楕円形文と縄文からなる文様帯の間に、粘土紐貼付と刺突文からなる突起部を作っている。4は深鉢胴部片と思われるが、外面に赤色顔料が付着していたものである。5は加曾利B式期の小形浅鉢で、内面は刻みの加えられる沈線文およびおそらく対向する位置に4ヶ所配置されると推測される対弧文などから構成されている。外面はシンプルで口縁の段差部分に細かい刻みが加えられているに過ぎない。6は注口部分が欠けている以外はほぼ完存しているものである。体部上半以上に沈線によって杵状の文様を描き、前後には把手を付け、さらにその上部に

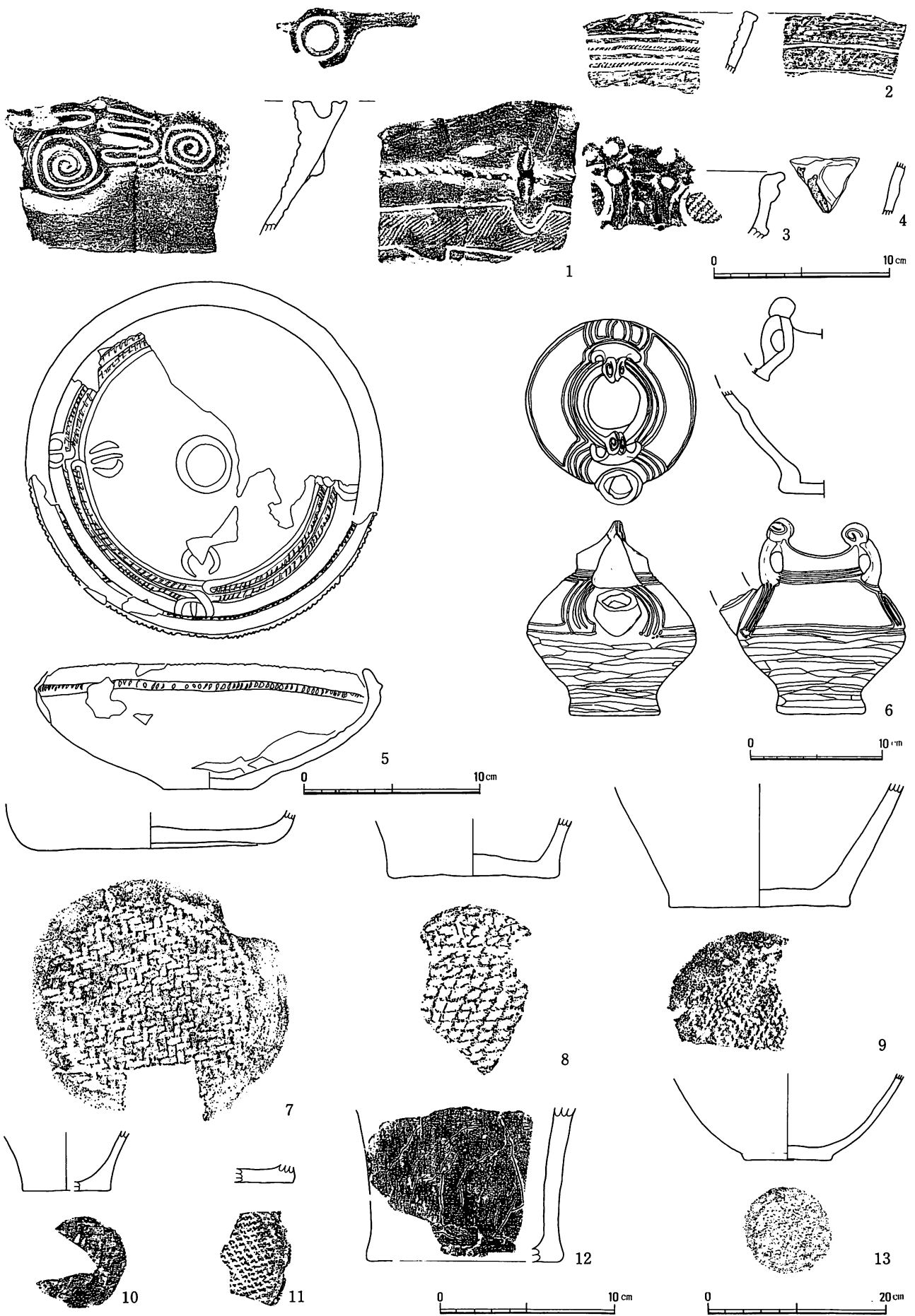


第70図 IIA区縄文時代遺構外出土縄文土器(3)

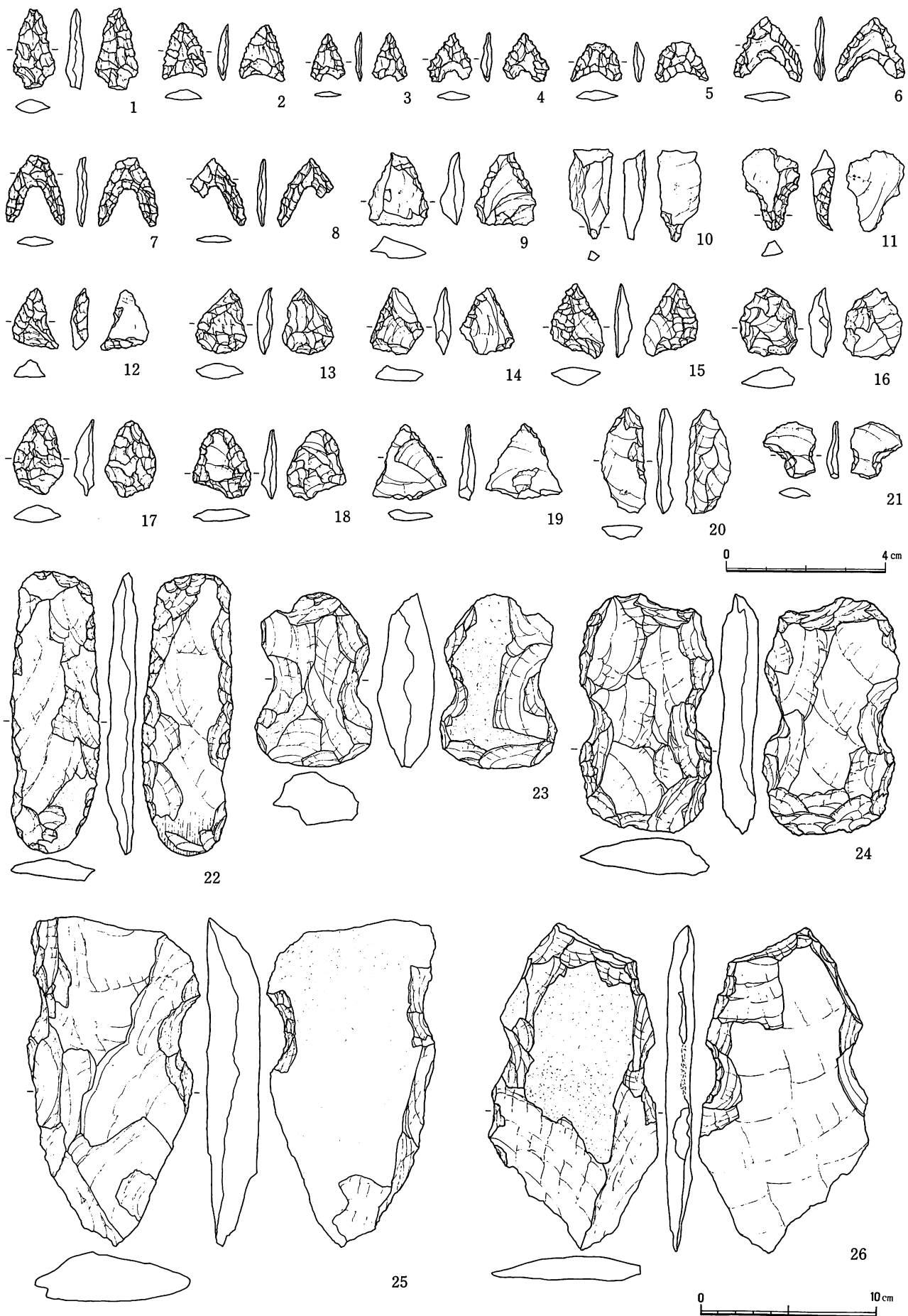




第71圖 II A区縄文時代遺構外出土縄文土器(4)



第72图 IIA区縄文時代遺構外出土縄文土器 (5)



第73図 IIA区縄文時代遺構外出土縄文石器(1)

は目を意識したような渦巻き文を描いた円盤状突起を加えている。なお、この土器に入れられていた内容物を調べるためにその本体および土器内外土に対して残存脂肪分析を実施した。その結果、イノシシとニホンジカの脂肪が半々に混合したものが入っていたと推測されること、またアルコール発酵物や植物性発酵加工食品などが入っていた可能性は低いことが明らかとなった。

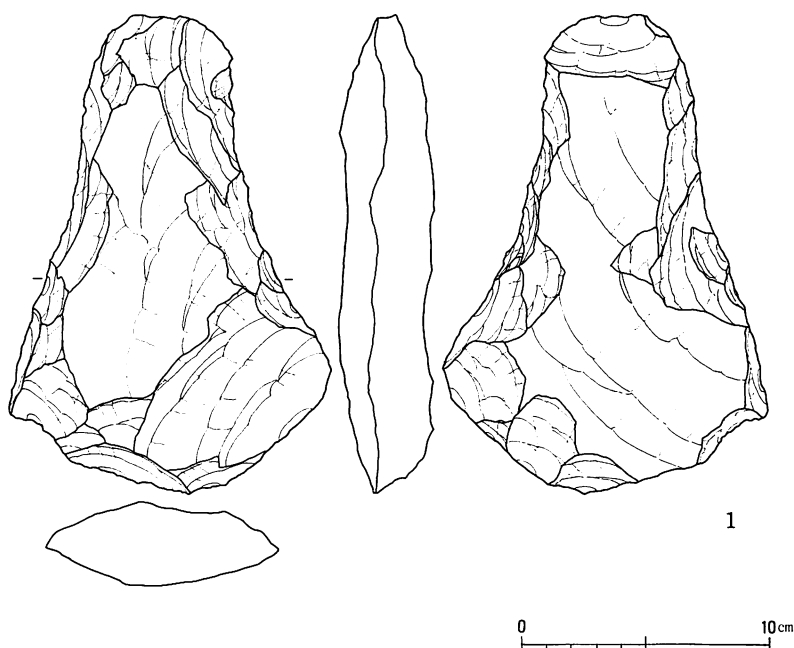
8～13は深鉢の底部のうち比較的明瞭に網代痕が残っているものである。しかしながら編み方まで復元できるものは少なく、2-1-1と2-2-1が各1点あるに過ぎない。

#### c) 石器 (第73～78図・第5表)

第73・74図は小形石器および打製石斧類である。1～9の9点は石鏃である。1は本遺跡ではほとんど見られない有茎鏃、2

～8は凹基無茎鏃である。2は鋸歯状側縁、3は両側に抉入部を持ち、5は先端部が突出していないにも関わらず剥離痕が見られることから、破損後に再加工されたと思われる。6～8はかなりの長脚である。9はまず主要剥離面から両側縁への調整に続いて背面からの右側縁剥離に移り、先端に至ったところで剥離に失敗したため放棄された石鏃未成品と思われる。10～12は石錐である。10は剥片の末端に急斜度調整・通常剥離を加えて細く尖らせているが、11は先端が尖っておらず又逆側に微細剥離が連続している。12は先端部に対向する辺にも主要剥離面から急斜度調整を行っている。13・14・16～21は二次加工剥片である。13は両面全体に角度の浅い調整を加えている。14は剥片を半分ほどで折り取って二次加工を行っているが、形状的に石鏃未成品の可能性もあろう。15も石鏃未成品と見られる。まず片側縁の加工をかなり進行させ、その後脚の調整に移った際に失敗し放棄された可能性がある。16は特に背面側に多く周囲からの浅い調整が見られる。17は両面全体に周縁から浅い調整を細かく入れ、木の葉状に整形している。18は全体に縁辺からの浅い調整が加えられているが、凹部には片面からの刃潰しが観察される。19は剥片剥離軸を中心とする対称の三角形となるよう左右両辺に対して背腹片面ずつから細かく剥離している。20は剥片の右辺に二次加工、左辺に微細剥離がある。21は剥片の両側に抉入部を作出している他、末端辺にも浅い剥離をわずかに加えている。22～24は打製石斧であるが、このうち22は短冊形、23・24は分銅形のものである。22は薄い剥片を周縁から剥離して整形しており、刃部は曲線状になっている。また線状痕も観察される。23はやや厚みのある原礫を、24は剥片を用い、周辺から大きく調整を加えて整形している。25・26は通常の打製石斧と異なる形状のものでここでは一応打製石斧類として扱っておく。25・26ともに原礫から薄くはぎ取った大形剥片を用い、両側上部に抉入部を作り、先端に向かって徐々に尖る形態を持つ。26は先端側はまったく剥離痕が存在しない。第57図14など類似形態のものがいくつか出土していることからこれらを特定器種として分類できるのかもしれない。第74図1はかなり大形でかなり重量感がある撥形のものである。厚みのある素材剥片に対して刃部および頭部は浅い角度の調整で薄く、体部は急斜度調整で厚く仕上げている。

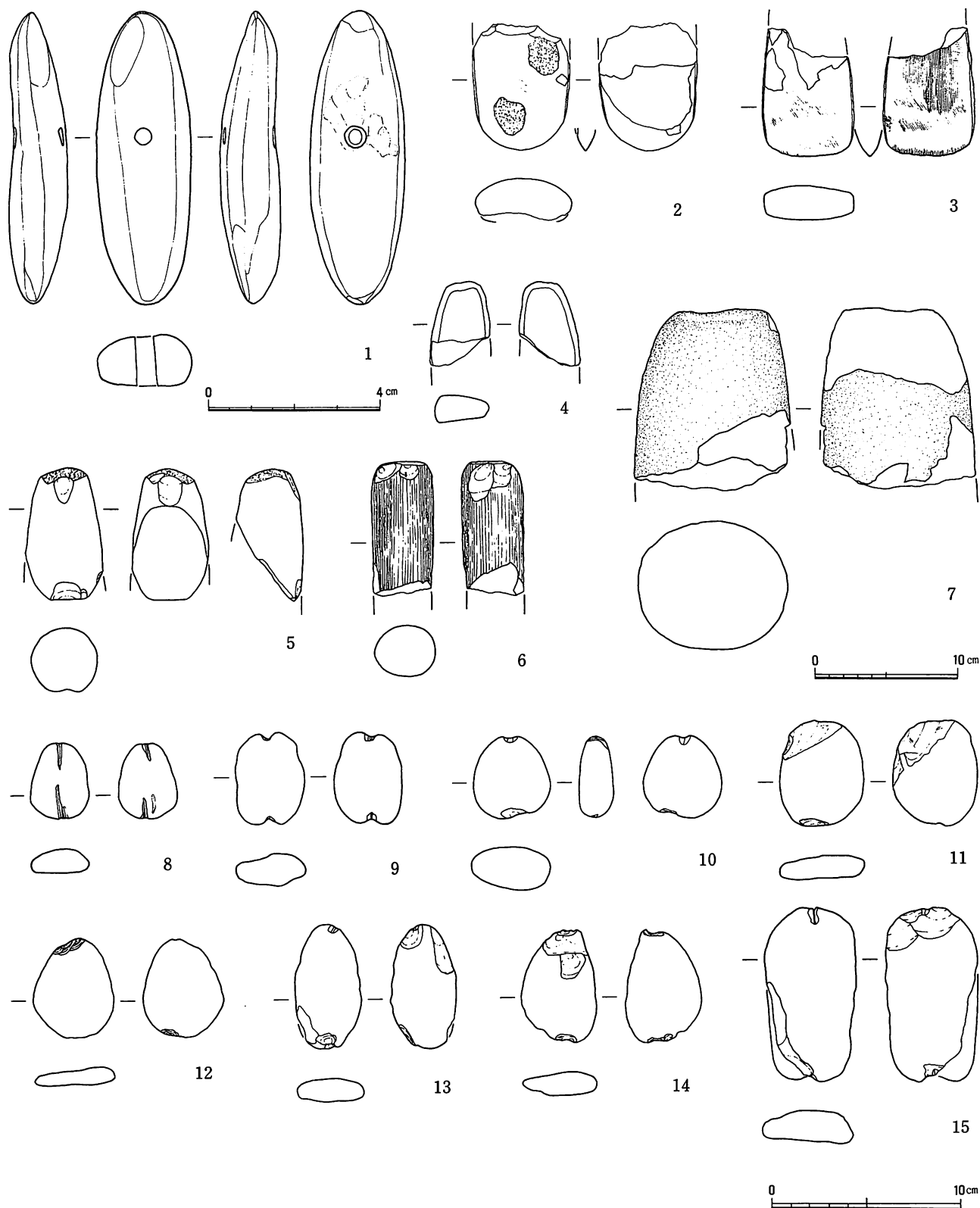
第75図1は翡翠大珠である。第66図2と同様に中心よりややずらした位置に正円形に穿孔しているが、その内面には輪状擦痕が認められるので、先端の方が細い正円形棒状工具を回転させながら穿孔していったものと考えられる。2～4は磨製石斧である。2は湾曲した刃部を持つが、その先端には使用によると思われる光沢が若干観察される。3は使用痕跡が比較的良好に残っているが、刃部と直交する擦痕と摩滅が顕著である。5・6は棒状の敲石・および磨石と見られる。5の先端は平坦で全面に敲打痕が見られる。また6の先端は全体に磨面となっている。7は先端の一部に過ぎないが石棒と見られる。平坦な頂部には一ヶ所窪みが作られ、外面



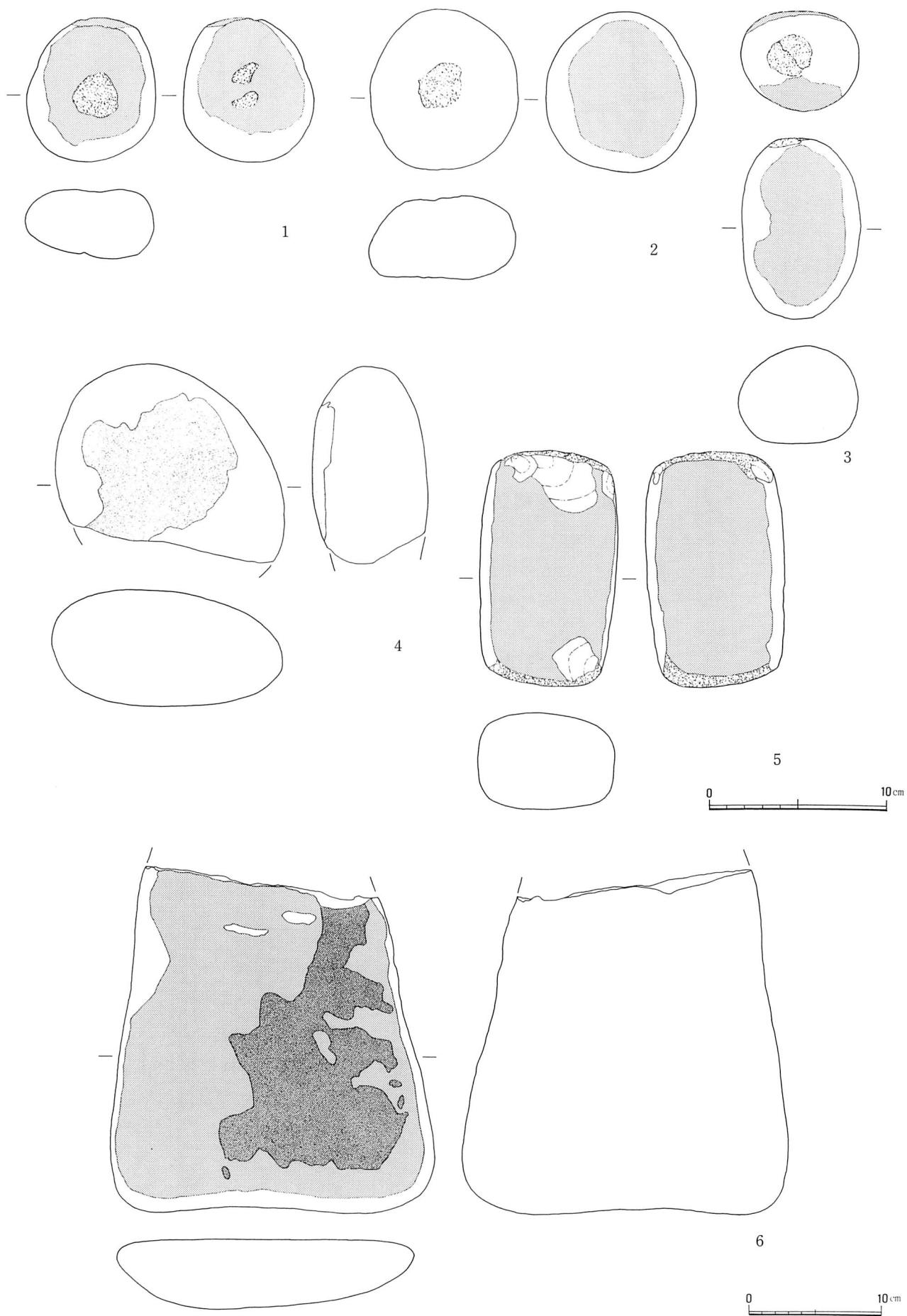
第74図 II A区縄文時代遺構外出土縄文石器 (2)

は敲打によって形態を整えた後、丁寧に磨いている。8～15の8点は石錘である。23gと小形軽量のもの（8）から100g以上の大形でかなり重いもの（15）まであるが、20～40gまでのものが6点と比較的小形のものが多  
い。

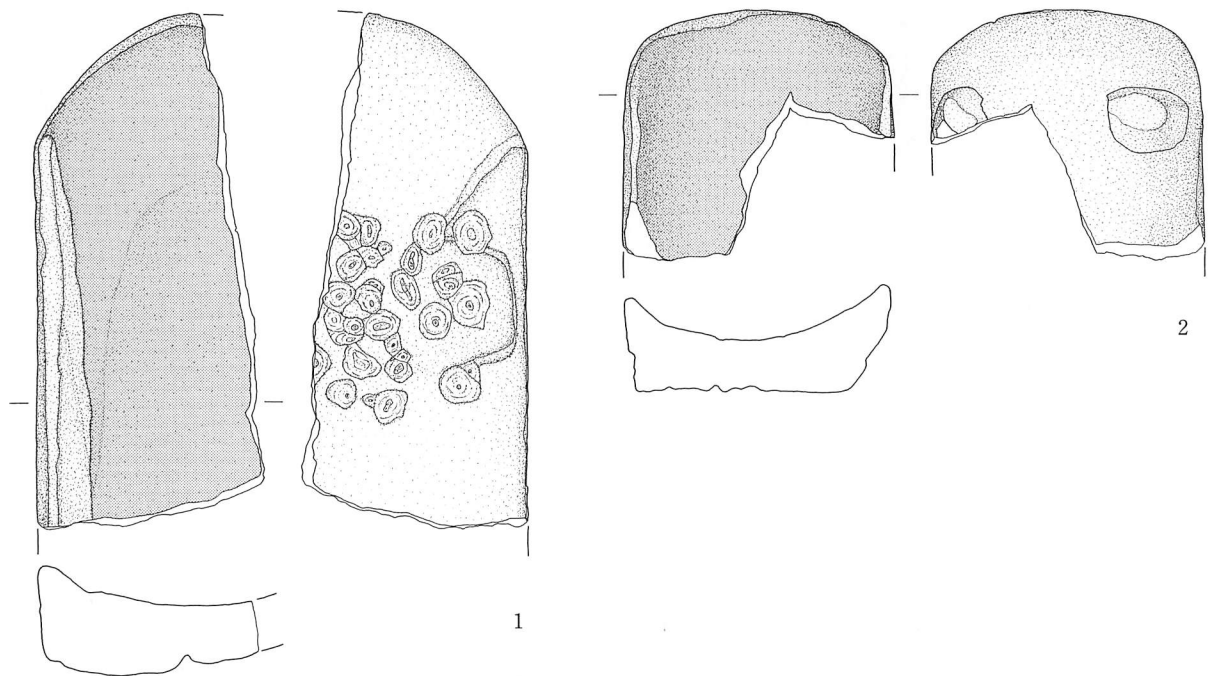
第76・77図は磨石・敲石類および石皿である。1～5は磨石・敲石類で、このうち1・2は円形、3は円柱形、5は長方形のものである。円形のものには表裏面を主に用い磨面・敲打面として利用しているが、円柱形・長方形のものは両端もしくは片端を敲打面として利用している。4はかなり重量のある扁平な円形礫であるが、



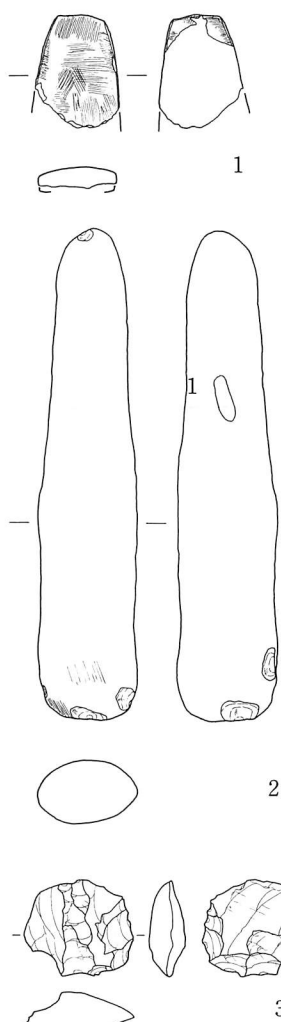
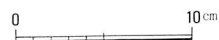
第75図 IIA区縄文時代遺構外出土縄文石器 (3)



第76図 II A区縄文時代遺構外出土縄文石器(4)



第77図 II A区縄文時代遺構外出土縄文石器(5)



その一面中央に水銀朱がかなり付着しており、この面を利用してその粉碎・摺り潰しを行ったものである。また6は台形状平石の平坦面全体を利用した石皿であるが、その一部にやはり水銀朱が付着している。このことからこの石皿は食物調理用ではなく、こうした鉱物などの加工用として使われたものと判断される。第77図1は全体に丁寧な整形を加えた石皿であるが、磨面は全体的に平滑になっている。また裏面中央には円錐形状の窪みが多数あり多孔石としても利用されているが、この目的での使用は破損以前に開始されている。2はやや小形の石皿である。やはり入念な整形がなされ、磨面も全体に平滑になっている。

第78図は攪乱出土のものである。1・2は磨製石斧であるが、後者は完存している。長さ20cm近い細身のものであるが、刃部はおそらく使用のためかなり分厚く鈍化し、また衝撃のため破損していることから使用に耐えられなくなって放棄されたと推測される。3は二次加工剥片である。主に背面から平坦な剥離が加えられている。

(小林)

### 第3項 第8次調査

#### (1) 土器(第79~82図)

第8次調査では、遺物の大半が遺構外からで、特に、C区からは中期の土偶片や後期の双口土器片などが出土している。出土土器は全体で8,535点を数え時期的に3群に分けられる。それぞれ、第1群(早期)・第2群(中期)・第3群(後期)とした。

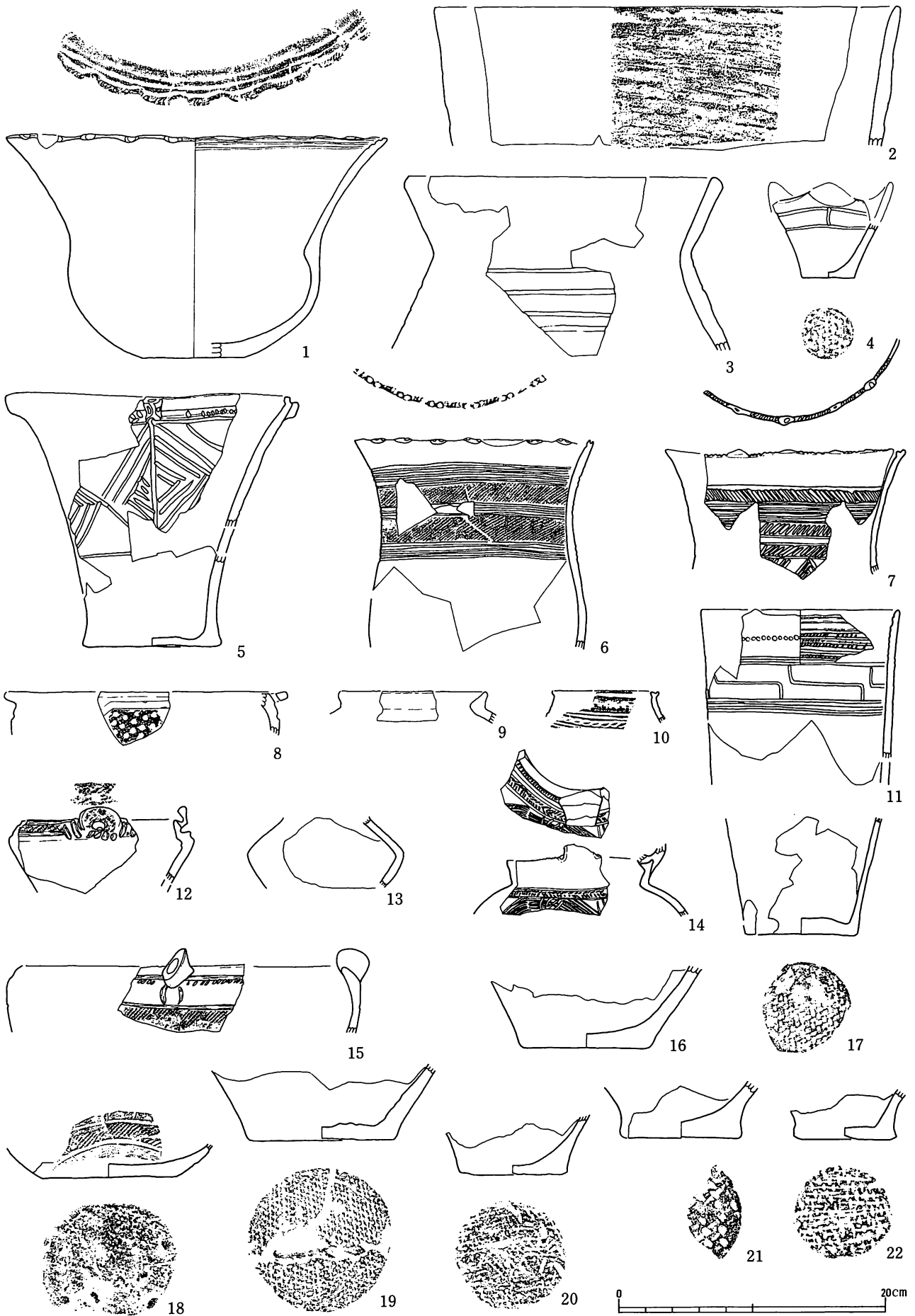
#### 第1群(縄文時代早期の土器)

押し形文が4点、捺糸文が1点出土している(第80図-23~26・28)。これらは、B区東側、草創期の有舌尖頭器が出土した付近に集中している。

#### 第2群(縄文時代中期の土器)

中期末曾利式土器と加曾利E式土器片が出土している。復元出来たのは1点で、ほかは断面実測である。主体は曾利式で、加曾利E式が若干含まれる程度である。

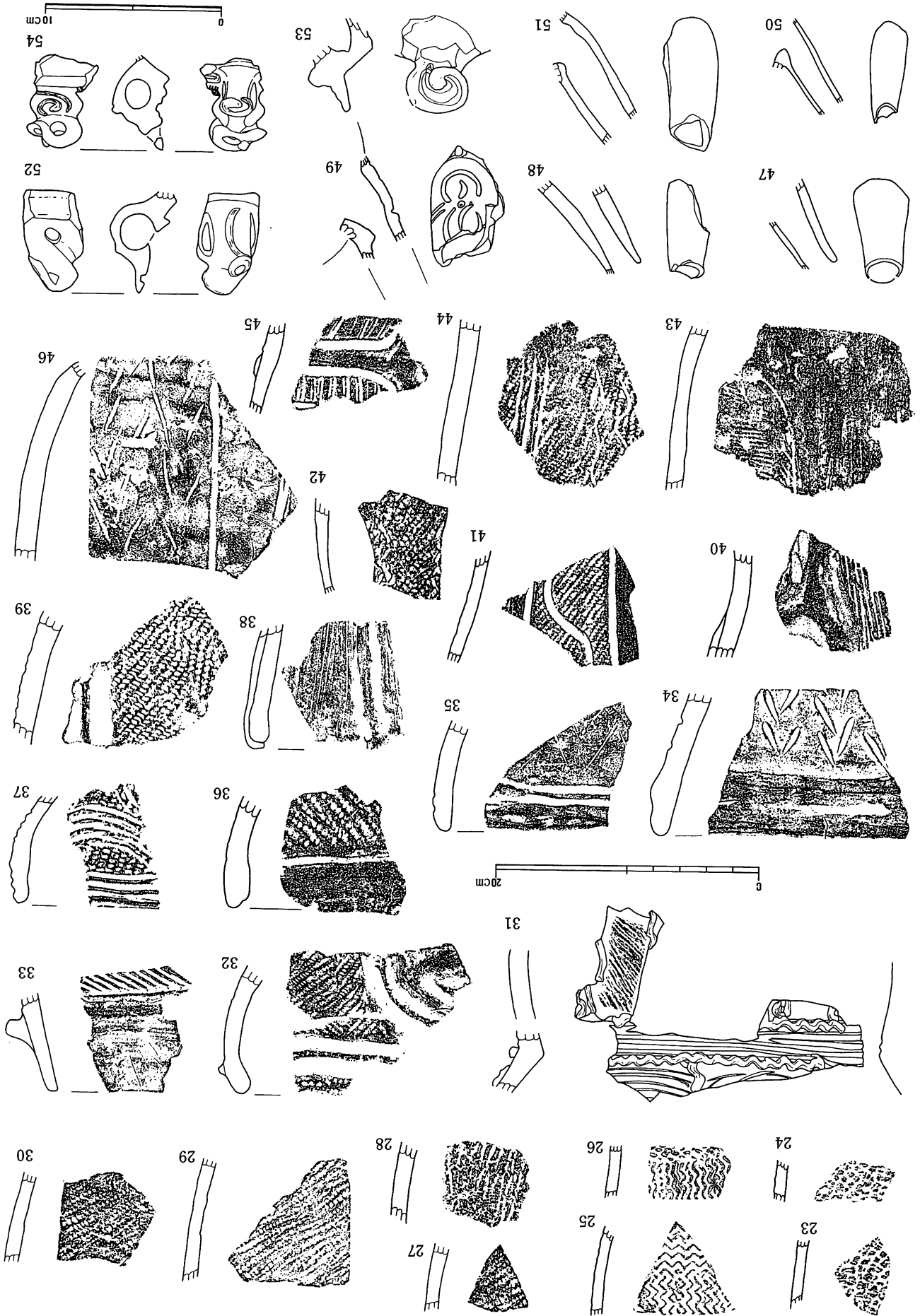
第78図 遺構外出土縄文石器(第80図31~46)



第79図 第8次調査出土縄文土器(1)



第80圖 第8次調査出土縄文土器 (2)





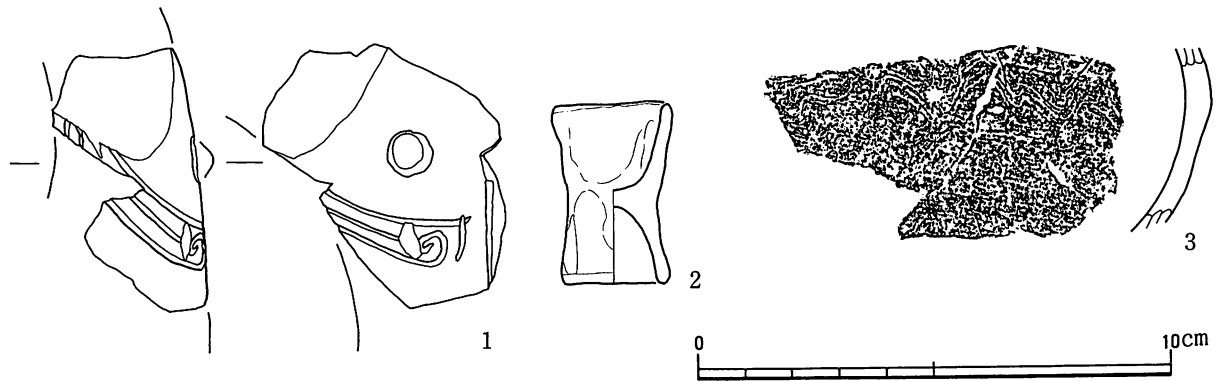
第81圖 第8次調査出土縄文土器 (3)

第3群（縄文時代後期の土器）

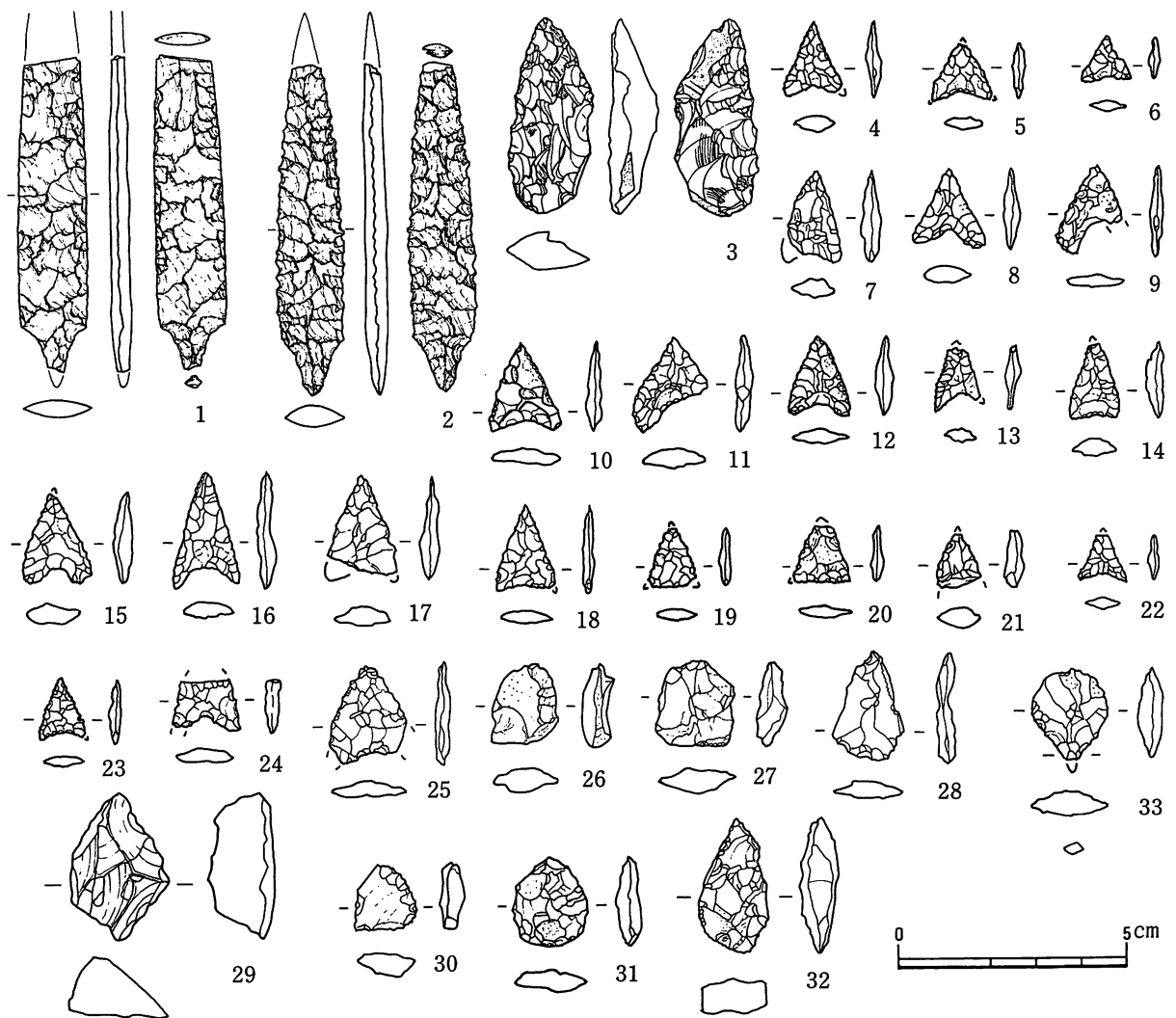
堀之内式土器が主体を占め、16・17号土坑からの出土もこの時期に当てはまる（第79図-1・5）。称名寺式・加曾利B式土器の出土は少ないが、第2号焼土遺構からは、関沢類型の把手が出土している（第81図-55）。

（2）石器（第83～86図・第5表）

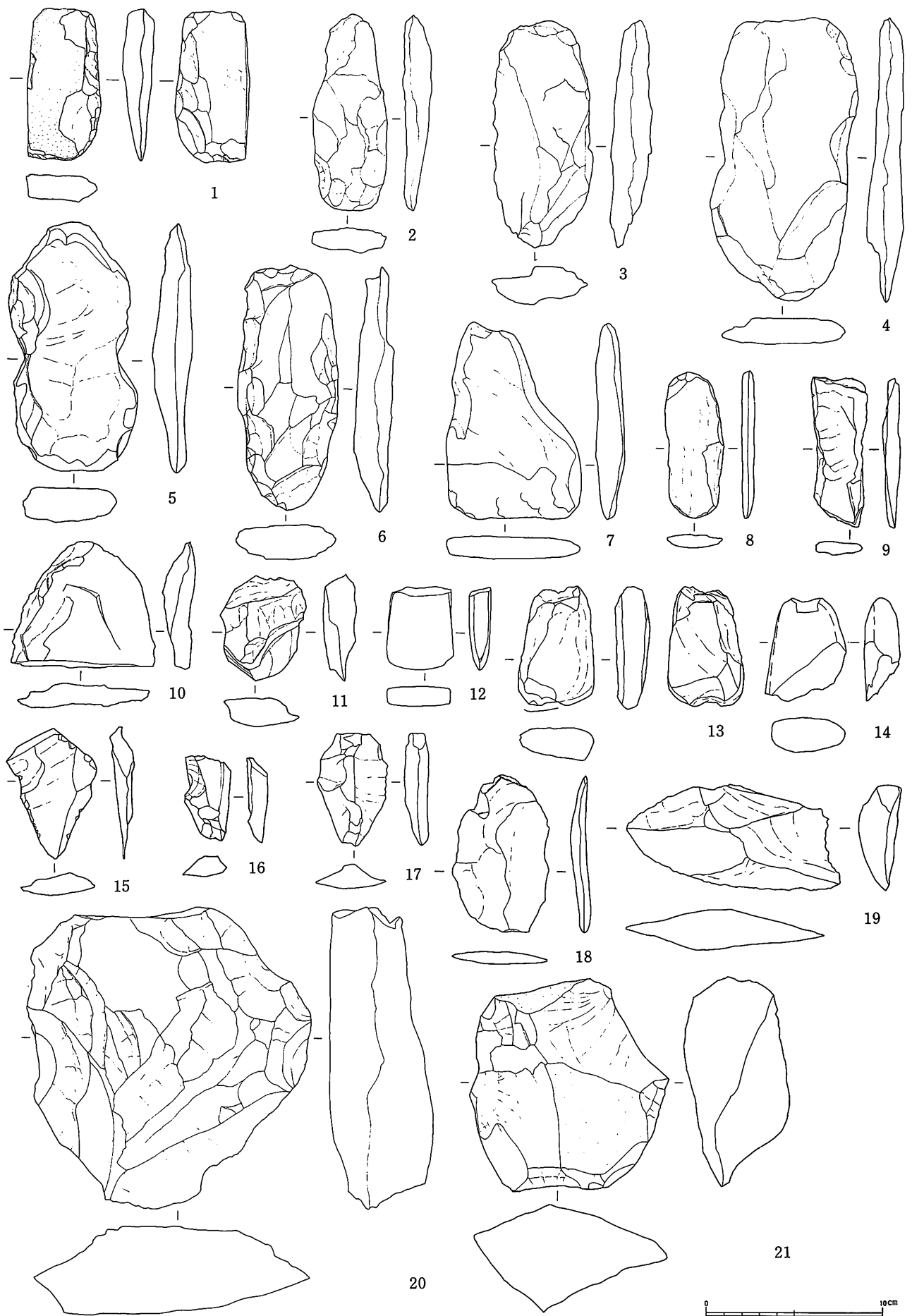
石器は、12号土坑から出土した石鏃以外は遺構外からの出土である。ここでも、その多くがC区からの出土である。この遺跡で特筆すべきものは、草創期の有舌尖頭器が2点出土したことである。この2点は、草創期の



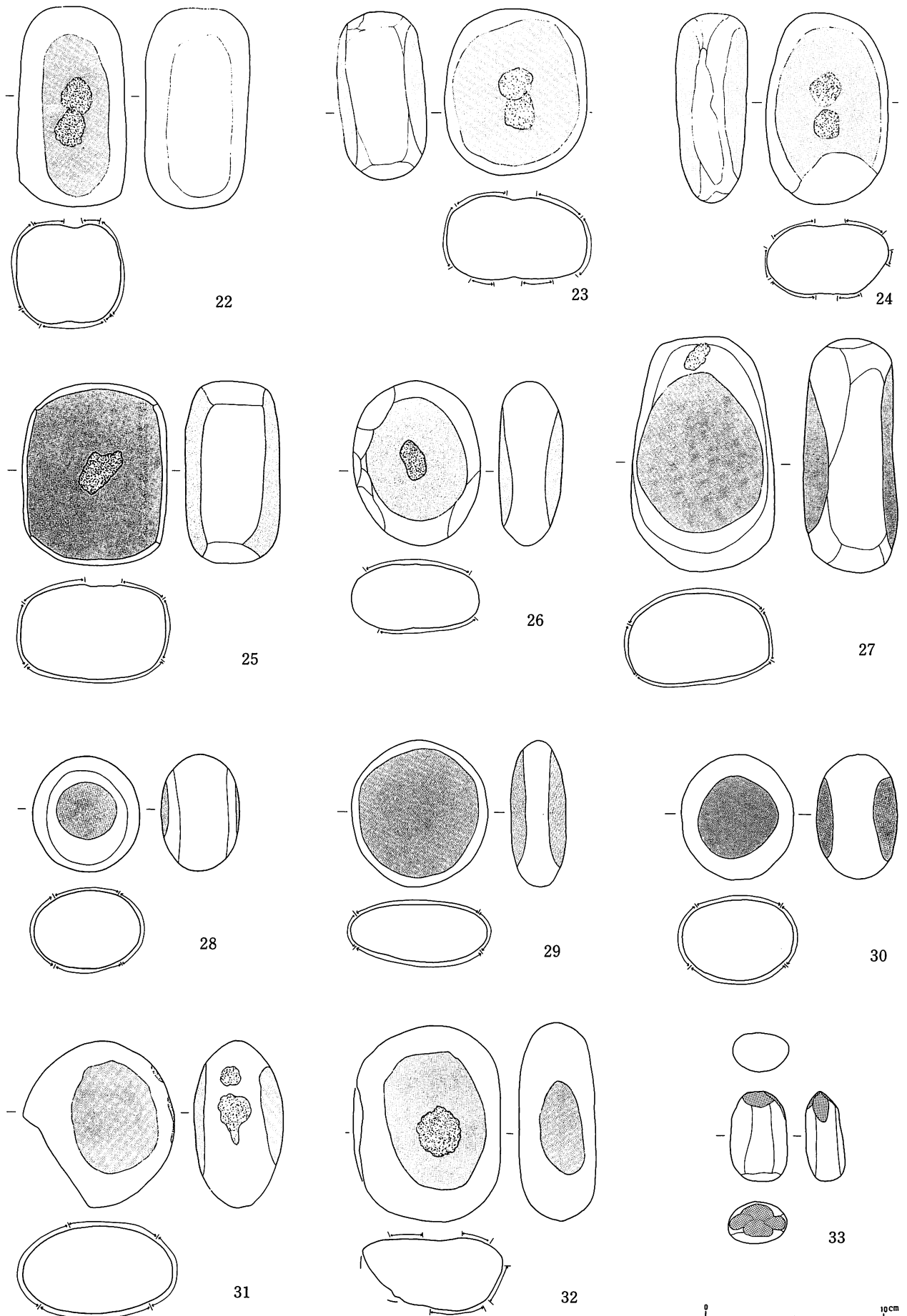
第82図 第8次調査出土縄文土器（4）



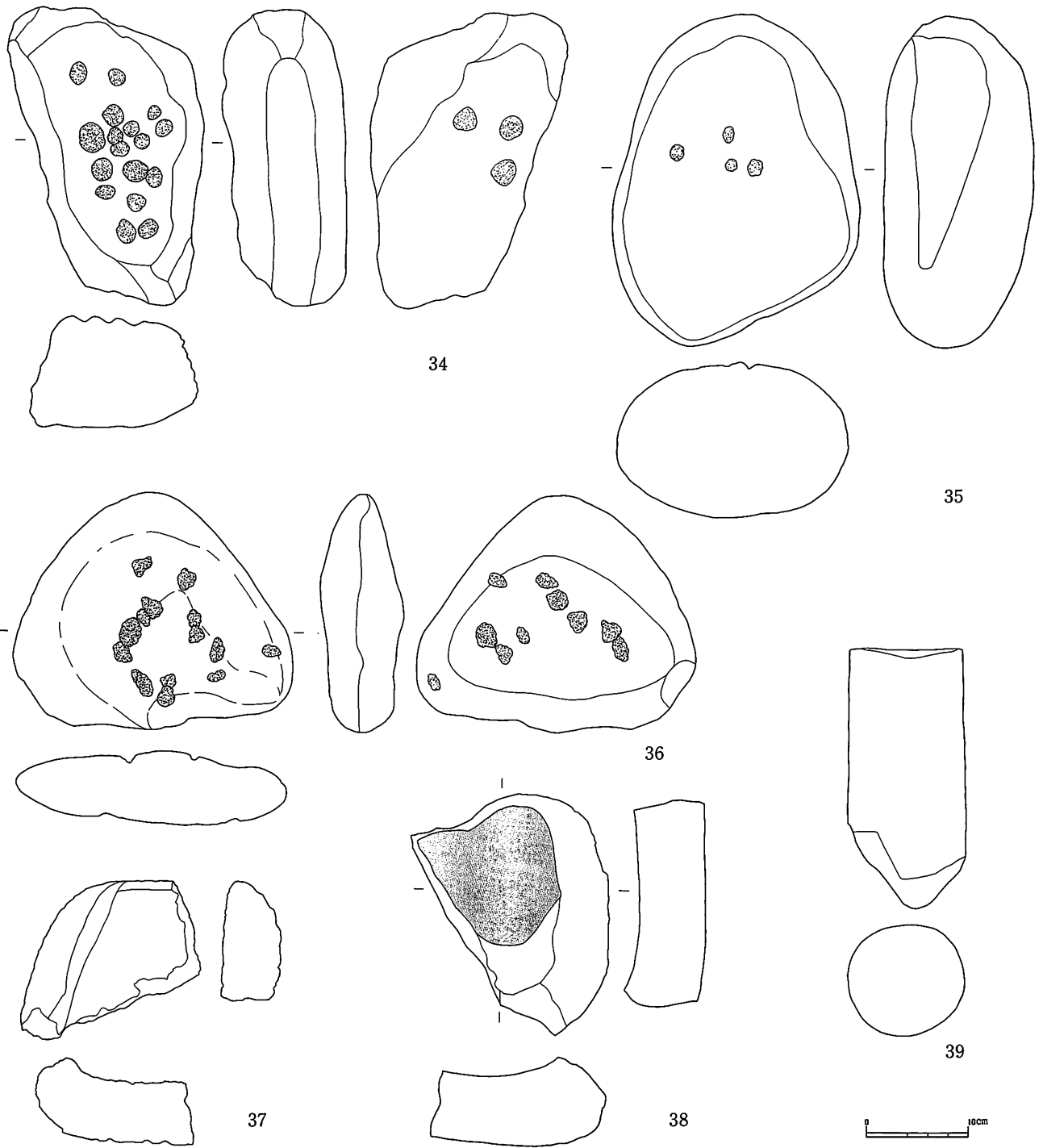
第83図 第8次調査出土縄文石器（1）



第84図 第8次調査出土縄文石器(2)



第85図 第8次調査出土縄文石器 (3)



第86図 第8次調査出土縄文石器(4)

なかでも、有舌尖頭器が最も盛んに作られた時期のもので小瀬ヶ沢型と考えられる。これらは、B区東側から出土し、第83図-1・2とも364.3~5mの地点にあり、距離にして20mほど離れている。また、その中間に近い場所から草創期末に想定される両刃石斧（の可能性がある）が1点出土している（第84図-1）。これらが出土した位置から北東にかけて地形の落ち込みが確認されている。残念ながら、これらに伴う土器は出土しておらず遺構もわからなかったが、単独で出土することの多いものが3点も出土したことで、山裾の斜面やその付近に遺跡の可能性が窺える。

この他、縄文時代中期以降の打製石斧・磨製石斧・磨石・凹石・石皿・敲石・石棒・多孔石・石鏃などが出土している。第83図3は見た目は尖頭器ともとれるが、片方の側縁に連続的な調整を施す形態と、尖頭基部を意図的に作りだしていない事から、削器と考えられる。

(笠原)

## 第2節 奈良・平安時代の遺物

### 第1項 第7次調査

奈良・平安時代の遺物の出土量は少なく全体でも百片程度に過ぎない。種別には須恵器甕・壺類の胴部破片が大多数を占め、この他に土師器坏・皿や灰釉陶器破片などがあるが、いずれも小片である。時期的に明らかにできるものも少ないが、土師器坏類は甲斐型のもので、体部外面に横位のミガキ内面に放射状暗文が見られることから8世紀代後半に位置づけられるものがある。出土位置はIA区から出土しているものが多い。

(小林)

### 第2項 第8次調査

この時期に該当する遺物は土師器坏の破片が数点出土したのみである。

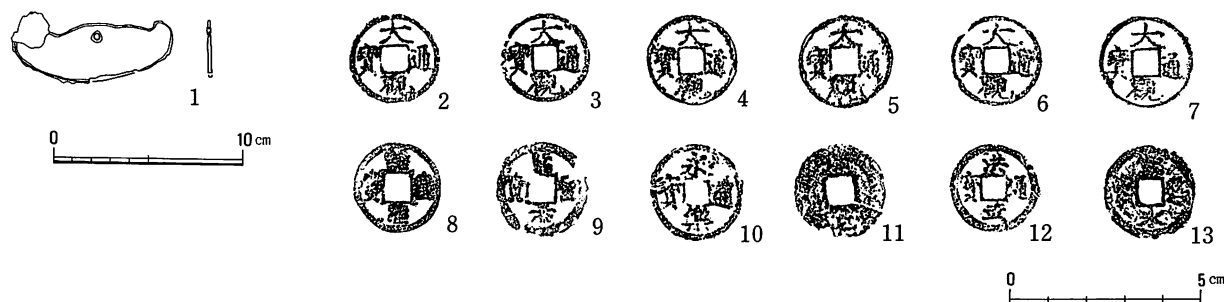
(笠原)

## 第3節 中・近世の遺物

### 第1項 第7次調査 (第87図・第6表)

中・近世の遺物には銭貨・鉄製品と少量の陶磁器類破片がある。このうち図示したのは火打金と古銭12点である。1の火打金は第51号土坑から出土したもので、錆化がはげしいものの、ほぼ全体が遺存している。古銭は第53号土坑から6点、第1号溝から4点とまとまって出土している。第53号土坑ではいずれも大観通寶でそれぞれ2枚ずつぴたりと張り付いて出土しており、副葬品といったものとして何枚かがまとめて入れられていた可能性がある。一方、第1号溝の出土銭は銭文の不明な1点を除き、熙寧元寶から洪武通寶まですべて異なる銭から構成されると思われる。

(小林)



第87図 第7次調査出土中・近世遺物

### 第2項 第8次調査

この時代に該当する遺物は1点も検出されなかった。

(笠原)

## 第4章 まとめ

縄文時代 今次の調査範囲は南に山地を控え西は桂川の急崖に面する位置にあり、大月遺跡では地形的に南西隅にあたるといえる。この地点から検出された縄文時代の主要遺構は大規模な配石遺構や散発的な土坑類である。これらの土坑には、底面に接して翡翠の大珠が出土したことから墓壙の可能性が高い第24号土坑、また石器制作や動物処理などに伴い生じた黒曜石のチップ類や骨片類などを廃棄したと見られる第23号土坑、といった特定の性格を持つものが存在している。また広く形成されている遺物包含層中からはかなり多量の土器・石器などが出土したが（第4・10図）、これは破損土器片など不要品の継続的廃棄の結果形成されたと思われる。これに対し居住に直接関わると見られる遺構は敷石住居1軒およびその場での焚き火を示すいくつかの焼土遺構に限られており、今回の調査範囲北にあたり11軒の住居跡が確認されている第6次調査や2軒の住居跡が確認された第5次調査と比較すると内容的に大きく異なっている。こうした遺跡内での遺構や遺物の分布状況からは、居住域はむしろ台地の中央部寄りにあったこと、そして集落西南隅では配石遺構や墓壙から窺われる精神的活動や、厚い遺物包含層や廃棄土坑から判断される生活残滓の廃棄場所といった性格の場として利用されていたと思われる。

一方、出土した遺物のうち土器類は3万7000点ほどと圧倒的多数を占めるが、これらのうちのほとんどは中期末の曾利期から後期中葉加曾利B期の破片である。さらにこの中でも後期初頭の称名寺期と同期前葉の堀之内期のものでかなりの部分を占めていると思われる。こうした土器の相対的遺物量は第5・6次調査で検出された縄文時代住居跡が中期末のものを主体としていることと実は時期的にあまり整合的ではなく、未調査範囲に後期の居住遺構が埋没している可能性を示唆しているのかも知れない。一方、石器類で注目されるのは第8次調査において草創期の有舌尖頭器が2本出土したことである。遺構や遺物の存在は不明であるものの、狩猟といった何らかの活動によるこの土地の利用がすでに草創期から始まっていたことが明らかとなった。また、注口土器の内容物を特定するために実施した残存脂肪分析の結果では、イノシシとニホンジカの半々混合脂肪が入っていたこと、そしてアルコール発酵物や植物性発酵加工食品、すなわち醸造酒などが入っていた可能性は低いことが判明した。この動物脂肪がどのように使われたのかは不明であるが、当時の液体容器利用法的一端を知ることができたのは大きな成果だといえる。今後、同様の分析を各地で行い具体的に注口土器などの内容物を限定していく必要があるだろう。また磨石・敲石類と石皿の計3点に対して行った残存脂肪分析の結果では、分析前に予想していた堅果類などの植物食料ではなく、ほ乳類や鳥類の肉や卵の加工を行った道具であることが判明した。このことが直ちにこの種の石製食料加工具すべての用途を決定するわけではないが、少なくとも本遺跡では動物質食料の磨り潰しに磨石・敲石類や石皿が使われていたことが明らかになったわけで、今後石器に残る使用痕跡と具体的な使用法とを対応させて考えていく必要があるだろう。なお、この残存脂肪分析結果の詳細と、これら土器・石器の使用法については別稿で改めて述べることにしたい（小林ほか2000）。

奈良・平安時代 第6次調査（都留高体育館地点）では「く」の字状に屈曲する二重の区画溝とその内部の掘立柱建物跡3棟が検出されていたが、今次の調査の結果、この溝がさらに南西に向かって延びていくこと、そして掘立柱建物跡がもう1棟存在していることが明らかとなった。今回の調査で検出されたこの2本の溝はⅡ区の中央部付近で消滅し、第8次調査区では検出されていないため、第6次調査範囲付近で再び掘り込まれていると予想される。このことはこの間がかなり幅広い空間となっていたことを推測させる。またこの溝は第6・7次調査区以外では確認されていないため、北西および南西方向にどのくらい続くのかも問題となる。また掘立柱建物跡4棟の規模は、1×3間1棟、2×3間2棟、3×5間1棟と比較的小規模で棟数も少なくかなり散発的な分布状況であること、また遺物量もごく少なく墨書土器なども出土していないため、官衙などの性格を考えるには今のところ材料が不足している。このほか正確な位置は不明なものの、第3・4次調査では奈良・平安時代竪穴住居跡4軒、第5次調査区では平安時代竪穴住居跡1軒が検出されているという。このよ



うに区画溝内での奈良・平安時代遺構のあり方はかなり散在的であると判断され、その性格を具体的に想定するのは困難な状況であるが、この場所が地形的に富士吉田方面と甲府盆地方面とへの分岐点となる要所を占めていることは、今後一つの判断材料となるのかもしれない。このほか、若干の土坑群が検出されているが、形態などから墓壙の可能性も考えられよう。

**中世** 中世の遺構としてはⅠ区を中心として検出された土坑群が主要なものとして上げられる。これらは形状的には若干のヴァリエーションを持つが、長方形もしくは長円形のもを主体としている。また第53号土坑のように渡来銭を出土したものがあることから、多くは墓壙として認められるのではないと思われる。土器や陶器類の出土に乏しいため具体的に時期を特定できないのが残念であるが、今後近隣地域での調査によって、その性格や、館や山城など周辺遺跡との関係が明らかになることを期待したい。

**近世** 近世の遺構はごく僅少である。掘立柱建物の存在からは生活跡としての存在を窺うことができるが、その時期など詳細は不明である。ただし、中世と直接継続するのではなく、ある程度の期間を置いた後に再び利用が始まったものと予想される。

以上、大月遺跡の第7・8次調査で出土した遺構・遺物について簡単に記載とまとめを行ってきた。しかし残念ながら、時間やスペースなど、限られた範囲の中で出土内容すべてについて触れることは困難である。また筆者の能力不足もあり、本書に記載できなかった事実も多い。今後折を見て、残された課題について触れていきたい。

(小林)

## 引用・参考文献

- 今福利恵 1999 「(9) 中期後半(曾利式土器)」『山梨県史 資料編2 原始・古代2 考古(遺構・遺物)』山梨県大月市教育委員会 1973 『山梨県大月市宮谷遺跡発掘調査報告書』  
大月市教育委員会 1995 『大月市埋蔵文化財包蔵地一覧表・分布図』  
大山 柏 1927 「神奈川県下新磯村字勝坂遺物包含地調査報告」『史前学研究会小報』第1号 史前学研究会  
小林公治・中野益男・中野寛子・長田正宏 2000 「磨石・敲石類、石皿と注口土器の使用法に関する一事例」『研究紀要』16 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター  
小林行雄 1964 『続古代の技術』塙書房  
坪井正五郎 1899 「日本石器時代の網代形編み物」『東京人類学会雑誌』第14巻第161号 東京人類学会  
都留市 1986 『都留市史資料編地史・考古』  
都留市教育委員会ほか 1981 『中谷・宮脇遺跡』都留市埋蔵文化財調査報告第8集  
長沢宏昌 1997 「都留市中谷遺跡出土の縄文土器底部圧痕について」『研究紀要』13 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター  
新津 健 1997 「ハヶ岳南麓の後晩期土偶一金生遺跡とその周辺一」『土偶研究の地平』勉誠社  
——— 1998 「山梨における後晩期土偶の展開」『研究紀要』14 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター  
——— 1999 「2土の道具(1) 縄文時代」『山梨県史 資料編2 原始・古代2 考古(遺構・遺物)』山梨県  
仁科義男 1928 「甲斐大月の先史遺跡について」『史跡名勝天然記念物』第3集第5号  
——— 1935 『甲斐の先史並原始時代の調査』全  
三田村美彦 1999 a 「(10) 後期初頭(称名寺式土器)」『山梨県史 資料編2 原始・古代2 考古(遺構・遺物)』山梨県  
——— 1999 b 「(11) 後期前葉(堀之内式土器)」『山梨県史 資料編2 原始・古代2 考古(遺構・遺物)』山梨県  
——— 1999 c 「(12) 後期中葉(加曾利B式土器)」『山梨県史 資料編2 原始・古代2 考古(遺構・遺物)』山梨県  
山下孝司 1989 「山梨県韮崎市後田遺跡出土の中空土偶」『考古学雑誌』第75巻第1号 日本考古学会  
山梨県 1998 『山梨県史 資料編1 原始・古代1 考古(遺跡)』  
山梨県 1999 『山梨県史 資料編2 原始・古代2 考古(遺構・遺物)』  
山梨県教育委員会 1974 『大月遺跡(Ⅰ) 県立都留高等学校校舎改築に伴う第一次発掘調査報告書』  
——— 1992 『大月遺跡Ⅱ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第67集  
——— 1996 『中谷遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第116集  
——— 1997 『大月遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第139集  
——— 1998 『大月市御所遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第154集  
山梨県埋蔵文化財センター 1995 『年報』11 平成6年度  
山梨県埋蔵文化財センター 1996 『年報』12 平成7年度  
山梨県埋蔵文化財センター 1997 『年報』13 平成8年度  
山梨県埋蔵文化財センター 1998 『年報』14 平成9年度

### 第3表 縄文時代土製品観察表

カッコ内の数値は復元値を示す。ただし高さ・重量は破損後の数値である。

採回番号	個別番号	出土位置	器種	時期	長さ(cm) 口径(cm)	幅(cm) 底径(cm)	最大厚(cm) 高さ(cm)	重量(g)	調査年度	遺物番号 (個体番号)	製作技法・形態の特徴
51	1	D-07	土偶	後期	—	8.2	(12.9)	(332)	95	5322	大形品脚部破片。輪積み成形で外面全面ミガキ。沈線文・渦巻文。
51	2	D-07	土偶	—	—	10.6	( 5.5)	( 51)	95	11948	脚部破片。外面ミガキ。内面ケズリか。
51	3	E-05	土偶	—	—	6.6	( 3.0)	( 93)	95	15802	内外面ミガキ。
51	4	C-08	土偶	—	—	6.6	( 4.2)	( 65)	95	3291-8341-8809 (3)	外面ミガキ。底部網代痕は2越え-2滑り-1送り。幅0.16cm×0.18cm。
51	5	F-06	土偶	—	—	4.7	( 3.9)	( 52)	95	4683-10472 (353)	右脚部破片。底面は粘土板貼付。外面は足内側を除きミガキ。
51	6	E-07	土製蓋	—	8.4	—	3.4	91	95	10898	粘土塊成形。つまみは穿孔し、後全面ミガキ。
51	7	F-07	土製匙	—	(5.1)	3.7	1.5	( 15)	95	7364	表裏面全面ミガキ。
51	8	D-06	耳栓か	—	5.3	—	( 1.8)	( 30)	95	10845-10846 (354)	粘土塊成形。破損面・側面ミガキ。
51	9	E-06	丸玉	—	4.8	4.8	3.6	49	95	13662	粘土塊を直径6mmの略円形棒状工具に巻き付け成形。
51	10	E-07	丸玉	—	4.6	4.5	3.8	47	95	15688	粘土塊を直径6mmの不整形円棒状工具に巻き付け成形。
51	11	G-10	ミニチュア土器	—	3.7	2.9	4.5	53	95	19945	完存品。手づくね成形で顕著な調整なし。容量約30ml。
51	12	D-07	ミニチュア土器	—	—	3.8	1.5	( 14)	95	11565	底部のみ遺存。手づくね成形で調整なし。
51	13	E-07	土製円盤	—	4.4	—	—	13	95	10898	口縁部をラフに擦って整形している。
51	14	E-07	土製円盤	—	4.2	—	—	14	95	10808	周囲を削り取って整形しており、摩滅は見られない。
51	15	F-06	土製円盤	—	4.5	—	—	20	95	953	周囲を削り取って整形、摩滅は見られない。表裏面に穿孔痕跡あり。
67	1	H-11	土偶	—	(4.3)	6.2	3.5	( 53)	97	10732	分割塊製作法。乳房は棒状工具を押しつけ二分。調整等なし。
67	2	SD1 (I-09)	器台形土器?	—	6.2	8.6	2.5	( 44)	97	2674	表裏面ミガキ。穿孔は直径5mmの棒状工具。低い高台状部から段を持って器台部となる。
67	3	SD2 (I-09)	土製円盤	—	4.2	—	—	28	97	1295	周囲は全面を擦って整形している。
67	4	I-09	土製円盤	—	4.0	—	—	14	97	11431	周囲は全面をよく擦って整形している。外面側に穿孔未達痕跡がある。
67	5	G-12	土製円盤	—	2.8	—	—	6	97	19278	周囲は全面を擦って整形している。
67	6	I-09	土製円盤	—	3.2	—	—	9	97	9612	周囲は全面を擦って整形している。
67	7	I-09	土製円盤	—	2.4	—	—	5	97	4719	周囲はごく弱く擦って整形している。
67	8	G-12	土製円盤	—	2.5	—	—	6	97	18899	周囲は全面を擦って整形している。

### 第4表 縄文時代土器観察表

カッコ内の数値は復元値を示す。ただし高さ・重量は破損後の数値である。

採回番号	個別番号	出土位置	器種	部位	時期	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	容量(ml)	調査年度	遺物番号 (個体番号)	製作技法・胎土・形態等の特徴
49	1	SF2	深鉢	底部	後期か	—	10.9	(8.8)	—	95	—	底面中央に網代痕。胴部外面のみミガキ。雲母を含む。
52	1	D-08	深鉢	胴部	曾利Ⅱ	—	—	(10.0)	—	95	14831	条線文および粘土紐貼付。
52	2	C-07	深鉢	胴部	曾利	—	—	(5.6)	—	95	20375	条線文。雲母を含む。内面ミガキ。
52	3	D-08	深鉢	口縁部	曾利Ⅳ	—	—	(10.0)	—	95	13697	条線文。雲母を少し含む。口唇部ミガキ。
52	4	E-05	深鉢	口縁部	曾利Ⅴ	—	—	(8.3)	—	95	18246	縄文および沈線。雲母を含む。口唇部ミガキ。
52	5	C-07	深鉢	口縁部	加曾利E 4	—	—	(4.8)	—	95	12629	隆帯および沈線。内外面ミガキ。外面煤・オコグ附着。
52	6	G-07	浅鉢	口縁部	堀之内1	—	—	(5.5)	—	95	289	内面ミガキ。
52	7	C-07	深鉢	胴部	加曾利E 4	—	—	(7.9)	—	95	15145・17424 (355)	縄文および沈線。外面ミガキ。
52	8	F-04	深鉢	口縁部	称名寺Ⅱ	—	—	(7.0)	—	95	10106	沈線。外面煤・オコグ附着。
52	9	D-08	深鉢	口縁部	加曾利E 4	—	—	(6.8)	—	95	13006	縄文・沈線および竹管状工具による刺突文。内外面ミガキ。
52	10	F-07	深鉢	口縁部	開沢型	—	—	(6.9)	—	95	14291	刺突。
52	11	F-07	深鉢	口縁部	堀2~加B	(33.8)	—	(36.5)	—	95	15825 他 11点 (117)	斜格子の沈線文。内面下位にオコグと思われる汚れ。
52	12	D-06	深鉢	口縁部	堀之内1	(38.0)	—	(6.2)	—	95	13151・17711 (33)	沈線。
52	13	E-08	深鉢	口縁部	堀之内	(42.0)	—	(16.0)	—	95	6668 他 6点 (89)	外面上位は7mm程度の幅広工具による横位ナデ。
53	1	E-09	深鉢	口縁部	堀之内1	—	—	(12.5)	—	95	23032・23033 (62)	輪積み成形。口縁部波状押さえ。外面斜位ケズリの後ナデ。
53	2	D-07	深鉢	口縁部	堀之内1	(27.0)	—	(8.8)	—	95	11176・11179 (39)	輪積み成形。外面横位ケズリ。内面横位ナデ。雲母を含む。
53	3	E-06	浅鉢	口縁部	堀之内1	—	—	(5.4)	—	95	10368・13439 (58)	沈線。口唇部・内面横位ナデ。
53	4	C-07	深鉢	口縁部	堀之内1	—	—	(6.3)	—	95	6467	沈線。刺突。粘土紐貼付。
53	5	C-08	深鉢	胴部上位	堀之内1	—	—	(6.3)	—	95	18026	縄文。沈線。刺突。押さえ。内外面ミガキ。
53	6	C-07	深鉢	胴部	堀之内1	—	—	(4.1)	—	95	7670	沈線。刺突。内面ミガキ。雲母を含む。
53	7	F-07	深鉢	口縁部	加曾利B 1	—	—	(8.6)	—	95	6628	沈線。刺突。内面ナデ。
53	8	G-06	浅鉢	口縁部	堀之内1	—	—	(6.3)	—	95	7323	沈線。刺突。雲母を含む。
53	9	E-06	深鉢	口縁部	堀之内2	18.0	8.5	(15.7)	1,400	95	8045 他 10点 (53)	沈線。粘土紐貼付。縄文。内外面ミガキ。底部網代痕。
53	10	D-06	深鉢	口縁部	堀之内2	(27.6)	—	(4.4)	—	95	12240・17686 (32)	縄文。沈線。粘土紐貼付。内外面ミガキ。
53	11	E-07	深鉢	口縁部	堀之内2	(15.6)	—	(4.1)	—	95	7096・8940 (92)	縄文。沈線。粘土紐貼付。内面ナデ。
53	12	F-07	深鉢	口縁部	堀之内2	(8.8)	—	(7.8)	—	95	14480	同一個体。沈線。刺突。粘土紐貼付。外面ミガキ。内面オコグ附着。
53	13	F-07	深鉢	口縁部	堀之内2	—	—	(5.9)	—	95	14481	—
53	14	D-07	深鉢	口縁部	堀之内2	(39.0)	—	(13.3)	—	95	12448・12449 (40)	沈線。粘土貼付。刺突。外面ミガキ。内面ナデ。雲母を含む。
53	15	E-08	深鉢	口縁部	堀之内2	(34.3)	—	(4.7)	—	95	6877 他 3点 (90)	沈線。粘土紐貼付。刺突。内面ミガキ。
54	1	D-06-07	深鉢	口縁部	堀之内2	19.9	—	(9.0)	—	95	11002 他 6点 (45)	沈線。粘土紐貼付。縄文。内外面ミガキ。
54	2	C-07	深鉢	口縁部	堀之内2	(16.9)	—	(4.4)	—	95	12601・12602 (12)	焼成後穿孔。沈線。縄文。刻み。内外面ミガキ。
54	3	D-07	深鉢	口縁部	堀之内2	(20.7)	—	(9.0)	—	95	11193 他 3点 (47)	縄文。沈線。粘土紐貼付。内外面ミガキ。内面口唇部までオコグ。
54	4	SK57・C-08	深鉢	口縁部	堀之内2	19.5	8.5	26.0	2,700	95	483 他 16点 (11)	沈線。縄文。刻み。刺突。内外面ミガキ。底部網代痕。
54	5	E-07	深鉢	口縁部	堀之内2	(20.0)	—	(10.0)	—	95	17214 他 2点 (216)	沈線。粘土貼付。外面ミガキ。内面ナデ。
54	6	C-09	深鉢	口縁部	堀之内2	(32.4)	—	(8.4)	—	95	8382	外面ケズリ。沈線。粘土紐貼付。刻み。内面ミガキ。
54	7	C-07	深鉢	口縁部	加曾利B 1	(42.0)	—	(4.7)	—	95	7665	沈線。縄文。刺突。内外面ミガキ。
54	8	C-08	浅鉢	口縁部	堀之内2	(23.3)	—	(4.3)	—	95	8224	沈線。刻み。内外面ミガキ。
54	9	E-06	浅鉢	口縁部	堀之内2	(16.7)	—	(5.5)	—	95	—	沈線。刻み。押捺。刺突。内外面ミガキ。
54	10	F-07	深鉢	口縁部	加曾利B 1	(61.0)	—	(8.1)	—	95	10662	沈線。縄文。刻み。雲母を含む。
54	11	F-07	深鉢	口縁部	加曾利B 2	(25.2)	—	(7.3)	—	95	6648	沈線。縄文。刻み。刺突。内外面ミガキ。底部網代痕。粘土紐貼付。
54	12	C-07	深鉢	口縁部	堀之内2	(16.8)	—	(5.1)	—	95	15202	沈線。縄文。粘土貼付。内外面ミガキ。雲母を含む。
54	13	D-08	深鉢	口縁部	堀之内2	(28.6)	—	(6.8)	—	95	14871	沈線。粘土貼付。内外面ミガキ。雲母を含む。
54	14	D-06	深鉢	口縁部	堀之内2	(17.6)	—	(4.5)	—	95	12129	沈線。縄文。刻み。粘土紐貼付。内面口唇部までオコグ。雲母を含む。
54	15	D-06	深鉢	口縁部	堀之内2	(21.0)	—	(4.0)	—	95	12208	刻み。刺突。粘土貼付。内面ミガキ。雲母を含む。
54	16	D-08	深鉢	口縁部	堀之内2	(36.5)	—	(5.4)	—	95	22867	沈線。縄文。刻み。粘土紐貼付。内外面ミガキ。
54	17	G-07	深鉢	口縁部	堀之内2	(26.0)	—	(4.6)	—	95	4201	沈線。縄文。刻み。粘土紐貼付。内外面ミガキ。
55	1	C-08	深鉢	口縁部	称名寺Ⅰ	—	—	(4.8)	—	95	15075	沈線。縄文。口唇部・内面ミガキ。
55	2	D-06	深鉢	口縁部	堀之内1	—	—	(5.2)	—	95	12132	貼付。沈線。刻み。穿孔。刺突。内面ミガキ。
55	3	H-07	深鉢	口縁部	称名寺Ⅰ	—	—	(7.9)	—	95	23123	貼付。沈線。刺突。
55	4	D-07	深鉢	口縁部	堀之内1	—	—	(3.9)	—	95	6095	穿孔。刺突。沈線。
55	5	D-08	深鉢	口縁部	堀之内1	—	—	(3.6)	—	95	12945	貼付。刺突。
55	6	F-04	深鉢	口縁部	堀之内2	—	—	(4.4)	—	95	10137	貼付。刺突。内外面ミガキ。
55	7	D-08	深鉢	口縁部	加曾利B 1	—	—	(7.2)	—	95	13677	沈線。刺突。穿孔。縄文。内面ミガキ。
55	8	C-08	深鉢	口縁部	堀之内2	—	—	(6.4)	—	95	8241	沈線。刻み。内外面ミガキ。
55	9	G-07	深鉢	口縁部	堀之内2	—	—	(4.9)	—	95	3779	沈線。刺突。粘土貼付。雲母を含む。
55	10	D-08	深鉢	口縁部	堀之内2	—	—	(4.4)	—	95	13634	沈線。刻み。焼成前穿孔。内外面ミガキ。
55	11	C-07	深鉢	口縁部	堀之内2	(18.3)	—	(6.3)	—	95	7743-7750 (356)	沈線。縄文。刻み。粘土貼付。刺突。内外面ミガキ。雲母を含む。
55	12	D-06	深鉢	口縁部	堀之内2	—	—	(5.8)	—	95	17719	沈線。刻み。刺突。粘土貼付。内外面ミガキ。
55	13	D-06	深鉢	口縁部	堀之内2	—	—	(5.3)	—	95	6217	沈線。縄文。刻み。粘土紐貼付。内外面ミガキ。内面口唇下までオコグ。雲母を含む。
55	14	F-07	深鉢	口縁部	堀之内2	—	—	(6.6)	—	95	14380	沈線。縄文。粘土貼付。内外面ミガキ。雲母を含む。刺突。
55	15	C-07	深鉢	口縁部	堀之内2	—	—	(4.0)	—	95	8479	沈線。刺突。
55	16	D-08	深鉢	口縁部	堀之内2	—	—	(5.5)	—	95	22873	沈線。刻み。刺突。粘土貼付。内面ミガキ。
55	17	E-05	深鉢	口縁部	堀之内2	—	—	(6.2)	—	95	18151-18152 (357)	沈線。刻み。内外面ミガキ。
55	18	D-08	注口	口縁部	堀之内2	—	—	(5.1)	—	95	13011	貼付。沈線。
55	19	D-06	注口	口縁部	堀之内2	—	—	(6.3)	—	95	—	貼付。沈線。

カッコ内の数値は復元値を示す。ただし高さ・重量は破損後の数値である。

押出番号	個別番号	出土位置	器種	部位	時期	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	容量(ml)	調査年度	遺物番号(個体番号)	製作技法・胎土・形跡等の特徴
55	20	D-07	注口	口縁把手	堀之内2	—	—	(5.4)	—	95	12460	貼付。内外面ミガキ。
55	21	D-07	注口	口縁把手	堀之内2	—	—	(5.2)	—	95	11965	貼付。沈線。
55	22	F-07	深鉢	口縁部突起	堀之内	—	—	(4.5)	—	95	14611	沈線。刺突。
55	23	F-07	深鉢	口縁部突起	堀之内	—	—	(5.1)	—	95	14593	沈線。刺突。
55	24	F-07	注口	口縁部	堀之内	—	—	(4.5)	—	95	3467	沈線。刺突。
55	25	H-07	注口	口縁部	堀之内	—	—	(5.3)	—	95	23110	沈線。刺突。
55	26	F-07	注口	口縁部	堀之内	—	—	(3.3)	—	95	164	沈線。刺突。
55	27	D-06	注口	口縁部	堀之内	—	—	(3.2)	—	95	12357	沈線。
55	28	D-06	深鉢	口縁部	加曾利B	—	—	(5.8)	—	95	6211	沈線。縄文。刺突。内外面ミガキ。
55	29	F-07	深鉢	口縁~胴部	加曾利B	26.5	—	(14.8)	(6,500)	95	6281他12点(118)	沈線。縄文。対弧文。外面ミガキ。胴部外面下位ケズリ。
55	30	C-07	注口	胴部	加曾利B	—	—	(5.8)	—	95	7714	沈線。外面ミガキ。
55	31	C-08	注口	口縁部	加曾利B	(10.0)	—	(4.2)	—	95	8807	沈線。刻み。刺突。
押出番号	個別番号	出土位置	器種	部位	時期	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	容量(ml)	調査年度	遺物番号(個体番号)	製作技法・胎土・形跡等の特徴
56	1	D-02	深鉢	底部	後期か	11.2	0.30	0.35	2-2-1	95	21386	胴部外面ミガキ。白色鉱物・雲母を含む。
56	2	D-06	深鉢	底部	後期か	(12.8)	0.15	0.15	1-1-1	95	12270-12273(24)	雲母を含む。
56	3	F-06-07	深鉢	底部	後期か	(13.2)	0.13	0.12	2-1-1	95	7202-9449(358)	胴部外面ミガキ。白色鉱物・雲母・砂粒を含む。
56	4	E-07	深鉢	底部	後期か	(12.5)	0.11	0.14	1-1-1	95	6407-8826(69)	白色鉱物・砂粒を含む。
56	5	D-07	深鉢	底部	後期か	(15.0)	0.14	0.15	1-1-1	95	5903	白色鉱物を多く含む。
56	6	D-07	深鉢	底部	後期か	(10.6)	0.36	0.29	2-1-1	95	6023	白色鉱物を若干含む。
56	7	D-07	深鉢	底部	後期か	(12.6)	0.24	0.14	2-1-1	95	11486-11488(359)	胴部外面ミガキ。白色鉱物を多く含む。
56	8	D-07	深鉢	底部	後期か	(11.0)	0.32	0.29	2-2-1	95	11116-11284(361)	白色鉱物を多く、雲母を若干含む。
56	9	D-07	深鉢	底部	後期か	(7.7)	0.50	0.43	2-2-1	95	11112-11128(360)	二本組。白色鉱物・砂粒を含む。
56	10	F-07	深鉢	底部	後期か	12.0	0.32	0.27	2-2-1	95	9205	二本組。白色鉱物を多く、雲母を少し含む。
56	11	D-06	深鉢	底部	後期か	11.4	0.10	0.14	1-1-1か	95	—	網代模の上から粘土付着。
56	12	F-06	深鉢	底部	後期か	(9.4)	0.16	0.19	1-1-1	95	4759	白色鉱物を若干含む。
56	13	C-07	深鉢	底部	後期か	(8.0)	0.17	0.22	2-1-1	95	13986	胴部内面ミガキ。
56	14	F-07	深鉢	底部	後期か	(9.2)	0.22	0.26	2-1-1	95	6616	白色鉱物を若干含む。底部粘土板貼付。
56	15	F-07	深鉢	底部	後期か	8.2	—	—	—	95	14617	—
56	16	D-08	深鉢	底部	後期か	(10.0)	0.41	0.28	2-1-1	95	14964	砂粒を多く、白色鉱物を少し含む。
56	17	F-05	深鉢	底部	後期か	(9.4)	0.15	0.21	1-1-1	95	3461	胴部内面ミガキ。
56	18	C-07	深鉢	底部	後期か	8.6	0.13	0.15	1-1-1	95	15299	胴部外面ミガキ。
56	19	C-08	深鉢	底部	後期か	(9.0)	0.19	0.19	特殊	95	13585	中心と周縁で2種の編み方。中心部は2-1-1。胴部外面・底部内面ミガキ。
56	20	C-08	深鉢	底部	後期か	—	0.32	0.25	2-1-1	95	8265	底部内面ミガキ。
56	21	F-07	深鉢	底部	後期か	—	0.20	0.15	2-2-1	95	6853	—
56	22	D-07	深鉢	底部	後期か	—	—	—	—	95	11070	—
56	23	D-08	深鉢	底部	後期か	—	0.12	0.15	2-2-1	95	8415	底部内面ミガキ。
56	24	D-07	深鉢	底部	後期か	—	0.15	0.12	2-1-1	95	11239	白色鉱物を若干含む。
56	25	D-07	深鉢	底部	後期か	—	0.09	0.12	1-1-1	95	15688	—
押出番号	個別番号	出土位置	器種	部位	時期	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	容量(ml)	調査年度	遺物番号(個体番号)	製作技法・胎土・形跡等の特徴
62	1	SI01	深鉢	底部	後期か	—	11.4	(12.0)	—	97	15169他6点(344)	砂粒を多く含む。
64	1	SK14・F-10	深鉢	上位~底部	称名寺I	(29.3)	9.0	(42.2)	(14,200)	95	20531-20532(109)	沈線。縄文。内外面ミガキ。
64	2	SK14・F-10	深鉢	上位~底部	称名寺I	—	10.0	(34.3)	(11,800)	95	20531-20532(109)	沈線。縄文。内面下に縦状オコゲ痕。外面中位全周に帯付着。
64	3	SK15	深鉢	胴部状半	称名寺I	33.4	—	(23.0)	—	95	23195他18点(319)	沈線。縄文。内外面ミガキ。内面中下位にオコゲ痕、外面中位屈曲部に煤付着。
64	4	H-12・G-12	深鉢	口縁~上位	関沢類型	(40.0)	—	(25.7)	—	97	14169他2点(132)	刺突。縄文。沈線。内外面ミガキ。
64	5	SK23・H-12	深鉢	口縁部	称名寺I	—	—	(17.1)	—	97	13909他6点(210)	沈線。縄文。内外面ミガキ。
64	6	SK23・H-12	深鉢	底部	後期か	—	10.0	(10.5)	—	97	13909他4点(238)	内面下に帯状オコゲ痕。砂粒を多く含む。
68	1	H-09	深鉢	口縁部	堀之内1	—	—	(8.8)	—	97	9562-9564(199)	外面ミガキ。砂粒を多く含む。
68	2	H-11	深鉢	口縁~中位	遠矢文系	20.0	—	(11.2)	—	97	14439他3点(198)	沈線。縄文。刺突。砂粒を含む。
68	3	G-12	深鉢	底部	曾利V	—	8.4	(11.4)	—	97	22461-21274(130)	沈線。砂粒を多く、雲母を若干含む。焼成後底部穿孔。
68	4	H-13	深鉢	底部	曾利V	—	8.8	(6.0)	—	97	13113	白色鉱物を多く含む。
68	5	G-11	深鉢	口縁部	曾利	—	—	(6.5)	—	97	18920	縄文。砂粒を多く含む。
68	6	H-09	深鉢	口縁部	曾利	—	—	(4.8)	—	97	18644	沈線。
69	1	G-12	深鉢	口縁~下位	称名寺I	(26.6)	—	(23.1)	—	97	22644	沈線。縄文。外面ミガキ。内面くびれ以下に縦状コゴレ。砂粒を含む。
69	2	G-10	深鉢	口縁部	—	—	—	(8.2)	—	97	16716	粘土紐貼付。刻み。沈線。刺突。白色鉱物を多く、雲母を若干含む。
69	3	G-11	深鉢	口縁部	関沢類型	—	—	(5.9)	—	97	21965	刺突。内外面ミガキ。
69	4	G-11	深鉢	口縁部	関沢類型	—	—	(6.1)	—	97	18738	粘土貼付。内外面ミガキ。刺突。
69	5	I-07	深鉢	口縁部	称名寺I	(40.0)	—	(10.6)	—	97	877	沈線。縄文。雲母を若干含む。
69	6	H-12	深鉢	口縁部	堀之内1	(38.0)	—	(11.7)	—	97	12921他3点(252)	外面に横位の擦痕。白色鉱物を多く、雲母を若干含む。
69	7	F-12	深鉢	口縁部	堀之内1	(32.0)	—	(10.6)	—	97	19368他3点(106)	外面は横位の粗いナデ。
69	8	G-12	深鉢	口縁部	堀之内1	—	—	(11.1)	—	97	20244	外面は横位の粗いナデ。白色鉱物を多く、雲母を若干含む。
69	9	G-12	深鉢	口縁部	—	—	—	(5.3)	—	97	21072-21495(184)	粘土紐貼付。刺突。縄文。
69	10	H-09	深鉢	口縁部	—	—	—	(5.8)	—	97	6799	沈線。縄文。粘土貼付。
69	11	E-09	浅鉢	胴部上半	—	(15.6)	—	(5.9)	(750)	95	23043他5点(59)	縄文。外面ミガキ。白色鉱物を多く含む。
69	12	J-09	深鉢	口縁部	堀之内1	—	—	(5.0)	—	97	7504-11854(292)	内面ミガキ。砂粒を含む。
69	13	G-11	深鉢	口縁部	堀之内1	—	—	(3.9)	—	97	20495	内外面ミガキ。砂粒・雲母を含む。
70	1	G-11	深鉢	胴部下半	堀之内1	—	(8.8)	(29.1)	(17,600)	97	18871	沈線。縄文。外面ミガキ。内面下に縦状コゴレ。白色鉱物を多く含む。
70	2	G-11	深鉢	口縁部	堀之内2	(16.8)	—	(8.1)	—	97	17049	粘土紐貼付。沈線。縄文。刻み。内外面ミガキ。
70	3	J-10	深鉢	胴部上半	堀之内1	(34.0)	—	(6.0)	—	97	7617-7759(312)	沈線。刺突。口唇~内面ミガキ。白色鉱物を多く含む。
71	1	J-12	深鉢	胴部上半	堀之内2	(35.0)	—	(19.6)	—	97	12091他9点(306)	沈線。縄文。外面ミガキ。砂粒を多く含む。
71	2	E-09	深鉢	口縁部	堀之内2	(36.0)	—	(13.7)	—	95	20204他4点(65)	沈線。縄文。粘土貼付。刻み。刺突。砂粒を少し含む。
71	3	H-12	深鉢	口縁部	堀之内2	(30.4)	—	(7.1)	—	97	4169	沈線。縄文。
71	4	H-12	深鉢	口縁部	堀之内2	(27.0)	—	(15.0)	—	97	8645	沈線。縄文。粘土貼付。刻み。刺突。砂粒を多く含む。
71	5	I-12	深鉢	口縁部	堀之内2	—	—	(6.7)	—	97	5678	焼成後穿孔1、未貫通孔1あり。沈線。縄文。砂粒・雲母を多く含む。
71	6	G-11	深鉢	口縁部	堀之内2	(38.0)	—	(8.9)	—	95	18828他6点(162)	外面斜位、内面横位ケズリ。砂粒・雲母を多く含む。
71	7	G-12	小形鉢	口縁部欠損	堀之内2	(14.6)	5.5	9.5	700	97	19160他6点(131)	沈線。縄文。底部外面網代痕。
71	8	H-11	深鉢	口縁部	堀之内2	22.0	—	(10.5)	—	97	3861他13点(196)	沈線。粘土貼付。刻み。刺突。
72	1	G-11	深鉢	口縁部	堀之内2	—	—	(7.5)	—	95	19813-21151(351)	沈線。縄文。粘土紐貼付。刻み。刺突。砂粒・雲母を若干含む。
72	2	D-09	深鉢	口縁部	堀之内2	—	—	(3.5)	—	97	20323	沈線。刻み。内外面ミガキ。
72	3	H-09	深鉢	口縁部	堀之内2	—	—	(3.7)	—	97	18689	沈線。縄文。刺突。砂粒を含む。
72	4	H-12	深鉢	胴部	堀之内2	—	—	(3.0)	—	97	13317	外面に赤色顔料付着。粘土紐。雲母を少し含む。
72	5	H-11	浅鉢	全体	加曾利B	(18.3)	5.1	6.7	1,100	97	1058他6点(197)	沈線。刻み。
72	6	G-12	注口	全体	堀之内2	5.0	7.0	14.8	500	97	22321	沈線。外面ミガキ。底部外面網代痕。97年度脂肪分析資料NO.1。
押出番号	個別番号	出土位置	器種	部位	時期	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	容量(ml)	調査年度	遺物番号(個体番号)	製作技法・胎土・形跡等の特徴
72	7	H-12	深鉢	底部	—	13.8	0.4	0.4	2-2-1	97	4188他2点(237)	—
72	8	D-09・C-07	深鉢	底部	—	(9.8)	—	—	—	95	20330-20331(362)	白色鉱物、砂粒を多く含む。
72	9	J-11	深鉢	底部	—	(10.2)	—	—	—	97	177他4点(299)	中心部にのみ網代痕。砂粒を含む。
72	10	I-09	深鉢	底部	—	5.2	—	—	—	97	3259	外面ミガキ。
72	11	I-09	深鉢	底部	—	(5.2)	0.2	0.1	2-1-1	97	3573	外縁部は網代をはずした後ナデ。内面オコゲ付着。
72	12	J-09	深鉢	底部	—	(11.0)	—	—	—	97	7558他2点(298)	外面縦位ミガキ。
72	13	H-12	深鉢	底部	—	9.7	—	—	—	97	8666	外面ミガキ。

### 第5表 縄文時代石器観察表

カッコ内の数値は復元値を示す。ただし高さ・重量は破損後の数値である。

挿入番号	個別番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	調査年度	遺物番号(個体番号)	製作技法・形態の特徴
50	1	SK5	石皿	玄武岩	19.3	(16.8)	5.2	(2,461)	95	17982	扁平丸石の一面を使用。敲打痕は見られない。
57	1	SK57	石鏃	黒曜石	1.4	0.9	0.3	1g未測	95	2548	大変小形の凹基無蓋鏃。
57	2	D-08	石鏃未製品か	黒曜石	2.1	1.8	0.5	1g未測	95	14893	凹基無蓋鏃か。片側縁の剥離失敗のため放棄か。
57	3	E-07	接器	黒曜石	2.1	3.0	0.8	5	95	17275	左辺に急斜度調整およびつぶれ。
57	4	E-04	二次加工剥片	黒曜石	3.5	1.5	1.3	5	95	10062	背面打面側に連続的な二次加工。末端および右辺に微細剥離。
57	5	D-07	楔形石器	黒曜石	1.7	2.0	0.8	2	95	21395	平行する二辺につぶれおよび階段状剥離。
57	6	D-07	楔形石器	黒曜石	1.4	1.7	0.8	2	95	6176	平行する二辺につぶれおよび階段状剥離。
57	7	E-06	打製石斧	ホルンフェルス	12.1	9.2	2.4	311	95	13461	分銅形。
57	8	SK66	打製石斧	ホルンフェルス	12.1	8.3	2.4	187	95	21426	分銅形。片側縁がびれ部につぶれ。
57	9	D-06	打製石斧	粘板岩	9.0	4.8	2.1	90	95	13263	短冊形。
57	10	C-07	打製石斧	蛇紋岩類	9.9	5.0	3.0	185	95	17489	短冊形。磨製石斧転用品か？片側縁につぶれ。
57	11	E-07	打製石斧	粘板岩	13.5	5.0	1.6	130	95	17204	短冊形。刃部の一部欠損。
57	12	E-06	打製石斧	ホルンフェルス	12.2	6.0	1.8	133	95	7938	撥形。刃部は直線的。
57	13	E-07	楔状石器	頁岩	10.7	6.9	3.4	259	95	17894	棒状の両端から剥離。
57	14	SK78	打製石斧類	火山礫凝灰岩	16.9	9.8	3.4	760	95	4108	上部に挿入部。挿入部下方につぶれ。刃部はやや突出。
58	1	C-06	使用痕ある剥片	ホルンフェルス	8.2	11.7	4.2	378	95	21910	略台形状剥片の一端を刃部とし、そこにつぶれと剥離痕。
58	2	D-06	二次加工剥片	ホルンフェルス	6.2	7.5	1.8	75	95	17662	三角形剥片の長辺を刃部とし、若干の二次加工。
58	3	SK55	鏃器	ホルンフェルス	8.5	8.8	2.5	194	95	2885	周縁から大まかい剥離を加え整形。
58	4	SK65	敲石	珪質頁岩	8.2	11.7	4.2	378	95	651	長三角形の縁に敲打痕とそれに伴う連続的な剥離。
59	1	SD5	磨製石斧(定角式)	蛇紋岩類	5.5	3.0	1.1	30	95	3923	両刃。刃部には直交する使用痕・磨滅および破損。全面に擦痕。
59	2	F-07	磨製石斧(定角式)	蛇紋岩類	(6.3)	3.7	1.4	(56)	95	2991	両刃。刃部は破損およびつぶれ。全面に擦痕。
59	3	C-08	磨製石斧(定角式)	凝灰岩	(3.8)	4.6	1.5	(39)	95	8376	刃部破片。両刃の刃。整形時擦痕。
59	4	G-05	磨製石斧(定角式)	蛇紋岩類	(5.4)	3.6	1.3	(37)	95	7380	刃部は欠損。全面に細かい整形擦痕。
59	5	G-05	磨製石斧(定角式)	緑色岩	(5.5)	3.4	2.2	(52)	95	7379	頭部破片。整形時擦痕。
59	6	E-06	磨製石斧(乳棒状)	閃緑岩	(9.3)	4.4	3.6	(221)	95	17823	頭部破片。敲打痕およびやや磨滅。
59	7	E-06	磨製石斧(乳棒状)	砂岩	(7.6)	5.3	4.5	(245)	95	13502	頭部に近い破片。全面ミガキ。
59	8	G-06	棒状石製品	凝灰岩	(13.8)	1.6	1.0	(38)	95	4240	片端および半面欠損。全面にミガキによる擦痕。
59	9	D-07	棒状石製品	砂岩	10.6	3.0	1.4	(51)	95	6691	釣り針状の形状か。頭部側に挿入部と変色。
59	10	D-07	石鏃	砂岩	4.2	3.9	1.4	27	95	12056	打ち欠きと擦り切りを併用して加工。
59	11	E-05	石鏃	砂岩	5.5	3.1	1.0	23	95	13326	擦り切りによる加工。
59	12	SK70	石鏃	砂岩	6.3	4.0	1.5	58	95	2645	擦り切りによる加工。
59	13	E-04	石鏃	砂岩	5.9	4.3	1.6	56	95	—	打ち欠きによる加工。
59	14	SK70	石鏃	粘板岩	6.2	3.7	1.2	33	95	2644	打ち欠きと擦り切りを併用して加工。
59	15	D-05	石鏃	頁岩	4.8	3.9	1.2	30	95	18311	擦り切りによる加工。
59	16	E-07	石鏃	ホルンフェルス	7.1	4.4	2.0	78	95	18828	打ち欠きによる加工。
59	17	D-06	石鏃	凝灰岩	(5.5)	3.8	2.1	(38)	95	—	擦り切りによる加工が全周する有蓋石鏃と見られる。
59	18	SK58	石鏃	砂岩	6.9	5.0	1.9	95	95	14475	打ち欠きによる加工。
59	19	E-05	石鏃	凝灰岩	8.6	3.7	1.6	64	95	13328	打ち欠きと擦り切りを併用するが後者に主に加工。
59	20	F-07	石鏃	粘板岩	8.8	2.8	1.1	36	95	4421	打ち欠きによる加工。
59	21	E-07	石鏃	粘板岩	8.8	4.9	1.8	86	95	7063	打ち欠きによる加工。
59	22	E-06	石鏃	礫岩	8.1	6.0	1.7	120	95	17917	打ち欠きによる加工。
59	23	E-05	石鏃	礫岩	6.6	5.6	1.8	75	95	13333	擦り切りによる加工。
60	1	E-05	磨石・敲石類	花崗閃緑岩	7.3	6.6	5.3	361	95	22840	片面に磨面。側面に若干の敲打痕。
60	2	E-06	磨石・敲石類	閃緑岩	10.7	8.1	4.6	637	95	3512	表裏面ともに磨面・敲打面として使用。側面は敲打痕。
60	3	D-06	磨石・敲石類	安山岩	11.8	8.5	4.8	712	95	13205	表裏面ともに磨面・敲打面として使用。側面は敲打痕。
60	4	E-05	磨石・敲石類	玄武岩	11.1	9.1	4.8	733	95	5363	95年度磨石分析資料NO.1。表裏面ともに磨面・敲打面として使用。
60	5	E-05	磨石・敲石類	花崗閃緑岩	12.0	7.6	4.4	637	95	18189	当初より大形品で破損後も使用か。表裏面ともに磨面・敲打面として使用。側面は敲打痕。
60	6	D-06	磨石・敲石類	安山岩	9.9	8.3	4.3	495	95	20964	表裏面ともに磨面・敲打面として使用。
60	7	SD5	磨石・敲石類	花崗岩類	12.9	12.1	7.9	1,648	95	3835	表裏面・側面を使用。片面に顕著な窪み。台石の可能性あり。
60	8	B-07	磨石・敲石類	玄武岩	(8.9)	7.5	5.7	(619)	95	11547	長方形で片端のみ残存。磨面・敲打面として表裏面を顕著に使用。
61	1	E-05	石皿	玄武岩	(27.0)	26.6	7.3	5,300	95	16439	95年度磨石分析資料NO.2。方形で脚台として使用。作業面の磨滅は全体的に顕著。
61	2	F-07	石皿	玄武岩	(23.8)	24.8	7.2	5,470	95	18090	95年度磨石分析資料NO.3。円形。中央部はすり鉢状に窪み。磨滅顕著。
61	3	C-08	石皿・多孔石	玄武岩	(15.6)	18.6	8.4	(2,591)	95	21525	作業面はすり鉢状に窪んでいる。磨滅は中央部で顕著。縁および裏面に円錐形状窪み多数。
61	4	C-07	石皿	玄武岩	(18.1)	26.6	7.3	3,350	95	18052	中央部はすり鉢状に窪んでいるが、磨滅は弱い。
63	1	SI01	二次加工剥片	黒曜石	2.2	1.7	0.6	2	97	15483	主に主要剥離面から急斜度調整。
63	2	SI01	石皿	玄武岩	28.6	20.8	5.6	4,400	97	21442	扁平な原形を整形加工せずそのまま利用。片面中央部が若干磨滅。
63	3	SI01	磨石・敲石類	玄武岩	8.2	7.4	5.2	460	97	21440	小形で片面に若干の磨滅。側面に敲打痕。
63	4	SI01	磨石・敲石類	安山岩	(10.6)	13.7	5.8	(1,186)	97	21443	表裏面に磨滅。重さのため手持ちでの使用は疑問。
63	5	SI01	磨石・敲石類	砂岩	14.0	11.5	5.8	1,286	97	21437	表裏面に磨滅。重さのため手持ちでの使用は疑問。
65	1	SF16	石鏃	黒曜石	3.2	1.5	0.3	1	97	22963	凹基無蓋鏃。先端欠損。
65	2	SK23	石鏃	黒曜石	2.0	1.1	0.3	1	97	14410	凹基無蓋鏃。片側なし。
65	3	SK26	二次加工剥片	黒曜石	2.1	1.9	0.5	2	97	17922	小形の剥片を両面周囲から平坦な角度で調整。
66	1	SF1	石鏃	砂岩	9.3	3.0	1.4	52	95	22911	擦り切りによる加工。
66	2	SK24	翡翠大珠	翡翠	4.6	2.1	1.1	19	97	14473	ほぼ中央部に直径6.3～7.4mmの正円穿孔。外面を磨いて紡錘形に整形。一部やや面取り。
66	3	SS2	石皿	花崗閃緑岩	31.6	21.1	9.8	10,580	97	16652	長方形大形礫の表裏面を磨面として使用。整形加工なし。
73	1	SK56	石鏃	黒曜石	2.3	1.2	0.6	1	97	1345	凸基有蓋鏃。先端・基欠損。
73	2	H-11	石鏃	黒曜石	1.6	1.3	0.3	1g未測	97	1349	凹基無蓋鏃。鋸歯状側縁。
73	3	I-09	石鏃	黒曜石	1.4	1.0	0.2	1g未測	97	7342	凹基無蓋鏃。両側欠損。両側に挿入部。大要小形。
73	4	G-12	石鏃	黒曜石	1.4	1.3	0.3	1g未測	97	19178	凹基無蓋鏃。両側欠損。鋸歯状側縁。
73	5	H-11	石鏃	黒曜石	1.1	1.5	0.3	1g未測	95	22667	凹基無蓋鏃。片側欠損。先端部欠損後再加工作。
73	6	I-09	石鏃	黒曜石	1.8	2.0	0.3	1	97	17603	凹基無蓋鏃。片側欠損。
73	7	G-10	石鏃	黒曜石	2.0	1.7	0.4	1g未測	95	19298	凹基無蓋鏃。長脚。先端欠損。
73	8	K-10	石鏃	黒曜石	2.0	(1.6)	0.3	(1g未測)	97	15606	凹基無蓋鏃。長脚。片側欠損。
73	9	K-10	石鏃未製品か	黒曜石	2.1	1.8	0.7	2	97	15600	主要剥離面からの両側縁加工後、先端調整失敗し放棄か。
73	10	H-12	石鏃	黒曜石	2.6	1.3	0.7	2	97	13303	剥片の末端に急斜度調整などで尖端部作出。
73	11	I-08	石鏃	黒曜石	2.3	1.7	0.7	2	97	16482	長脚剥片の左辺に背面から急斜度調整。右辺にも微細剥離。
73	12	SD5	石鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.5	1	97	3826	剥片全体に連続的な急斜度調整。
73	13	J-10	二次加工剥片	黒曜石	1.9	1.5	0.5	1	97	16447	両面全体に平坦な剥離。基辺側欠損。
73	14	SK60	二次加工剥片	黒曜石	1.9	1.6	0.5	1	95	18872	剥片の打面半分を利用。石鏃未成品の可能性あるか。
73	15	E-09	石鏃未製品か	黒曜石	2.1	1.5	0.5	1	95	—	凹基無蓋鏃と見られ、片側欠損で放棄か。
73	16	G-12	二次加工剥片	黒曜石	2.0	1.7	0.7	2	97	21502	両面から剥離しているが、背面からが主。
73	17	J-11	二次加工剥片	黒曜石	2.2	1.5	0.6	2	97	21988	両面全体に側縁からの平坦な調整。
73	18	G-11	二次加工剥片	黒曜石	2.0	1.7	0.4	1	95	21220	全体に平坦な調整。凹部には刃痕。
73	19	G-10	二次加工剥片	黒曜石	2.2	2.2	0.5	1	95	19311	剥片剥離軸を中心に三角形に加工。
73	20	K-10	二次加工剥片	黒曜石	3.0	1.3	0.5	1g未測	97	21951	剥片の右辺真中に主要剥離面からの細かい二次加工。右辺に微細剥離。
73	21	J-12	二次加工剥片	黒曜石	1.6	1.5	0.4	1g未測	97	14759	剥片の両側縁に挿入部作出。末端辺にも若干の二次加工。
73	22	F-12	打製石斧	ホルンフェルス	15.8	5.2	1.6	159	97	19826	短冊形。表裏面からの側縁調整で整形。
73	23	H-09	打製石斧	ホルンフェルス	9.8	6.7	3.3	193	95	18697	分銅形。板状礫を利用。大きく剥離して整形。
73	24	G-12	打製石斧	ホルンフェルス	13.4	7.5	2.2	275	97	19965	分銅形。大きく剥離して整形。
73	25	G-11	打製石斧類	ホルンフェルス	18.5	9.7	3.0	633	95	19915	両側に挿入部。全体に加工度が低い。
73	26	G-11	打製石斧類	粘板岩	18.9	9.7	1.6	324	95	21891	両側に挿入部。全体に加工度が低い。
74	1	D-09	打製石斧	ホルンフェルス	19.1	13.1	3.8	969	95	23222	撥形。剥離面の使い分けによる整形。
75	1	G-10	翡翠大珠	翡翠	7.7	2.7	1.8	55	95	20984	ほぼ中央部に直径4.9～7.0mmの正円穿孔。外面を磨いて紡錘形に整形。
75	2	H-12	磨製石斧	砂岩	(6.7)	5.2	2.2	(96)	97	13544	刃部破片。片刃に近い刃。使用による光沢。整形時擦痕。
75	3	SD5	磨製石斧(定角式)	蛇紋岩類	(6.8)	4.8	1.9	(93)	97	3066	両刃。刃部には直交する使用痕・磨滅および破損。全面に擦痕。
75	4	H-09	磨製石斧(定角式)	緑色岩	(4.4)	3.2	1.4	(26)	95	19734	頭部破片。
75	5	H-12	棒状敲石	花崗岩類	(6.9)	4.0	3.3	(104)	97		

カッコ内の数値は復元値を示す。ただし高さ・重量は破損後の数値である。

棟号	個別番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	調査年度	遺物番号(個体番号)	製作技法・形態の特徴
75	12	H-12	石鏵	ホルンフェルス	5.3	4.2	1.0	23	97	2289	打ち欠きによる加工。
75	13	SK65	石鏵	粘板岩	6.6	3.5	1.3	34	95	—	打ち欠きと擦り切りを併用して加工。
75	14	SD5・H-09	石鏵	粘板岩	6.1	4.0	1.2	38	97	2725	打ち欠きによる加工。
75	15	J-10	石鏵	ホルンフェルス	9.2	4.9	1.8	(100)	97	17156	打ち欠きと擦り切りを併用して加工。
76	1	I-09	磨石・蔽石類	砂岩	8.1	7.3	4.0	313	97	16381	表面ともに磨面・蔽打面として使用。側面の一部にも磨面。
76	2	E-09	磨石・蔽石類	玄武岩	9.0	8.4	4.7	364	95	23031	一面を蔽打面、裏面を磨面として使用。
76	3	I-09	磨石・蔽石類	玄武岩	10.2	6.2	5.5	578	97	16511	表面裏面を磨面として使用。端部は蔽打面。
76	4	H-12	磨石・蔽石類	砂岩	(11.1)	13.0	6.5	(1,251)	97	18941	片面に水銀朱付着。磨面として使用か。
76	5	G-11	磨石・蔽石類	玄武岩	13.3	7.8	5.5	995	97	20516	長方形の表面を磨面として使用。端部は蔽打面。
76	6	G-08	石皿	閃緑岩	(26.1)	23.3	5.3	(6,050)	95	22937	台形状扁平石の平坦面全面を磨面として使用し、一部に水銀朱付着。
77	1	H-11	石皿・多孔石	玄武岩	(29.2)	13.0	6.2	(2,049)	95	22684	方形で脚台など盛り出し。裏面中央には円錐形状窪み多数。
77	2	I-11	石皿	玄武岩	(13.9)	15.6	6.5	(452)	97	8070・9531(352)	方形で脚台など盛り出し。磨面は全体に平滑。
78	1	攪乱	磨製石斧(定角式)	蛇紋岩類	(5.4)	3.7	1.3	(17)	97	—	頭部破片。整形時擦痕。
78	2	攪乱	磨製石斧(乳棒状)	砂岩	19.3	3.9	2.5	313	97	—	完存。使用のためか刃部はかなり鈍化・破損。一部整形時の蔽打痕・擦痕。
78	3	攪乱	二次加工剥片	黒曜石	1.9	2.2	0.7	3	97	—	剥片に主に背面から平坦な剥離。
83	1	B区 P-22	有舌尖頭器	結晶片岩	(6.8)	1.5	0.4	(6.0)	96	S122	草創期。先端部欠損。
83	2	A区 T-24	有舌尖頭器	凝灰岩	(7.2)	1.0	0.5	(6.0)	96	S40	草創期。先端部欠損。
83	3	A区 T-26	削器	黒曜石	4.2	1.8	0.9	5.2	96	S4	—
83	4	C区 F-14-SK12	石鏵	黒曜石	1.6	1.3	0.4	(1.1)	96	—	—
83	5	C区 F-14	石鏵	黒曜石	1.2	1.3	0.3	(1.0)	96	—	—
83	6	C区 F-14	石鏵	黒曜石	1.0	1.2	0.3	0.9	96	—	—
83	7	B区 M-19	石鏵	黒曜石	2.0	1.2	0.5	(1.5)	96	S131	—
83	8	A区 T-25	石鏵	チャート	1.8	1.6	0.4	1.3	96	S6	—
83	9	A区 T-26	石鏵	黒曜石	2.0	1.5	0.3	(1.1)	96	S5	—
83	10	A区 R-24	石鏵	黒曜石	1.9	1.6	0.4	1.3	96	S120	—
83	11	B区 I-25	石鏵	黒曜石	2.0	1.7	0.4	(1.5)	96	S139	—
83	12	C区 F-13	石鏵	黒曜石	1.7	1.4	0.4	1.2	96	S52	—
83	13	C区 F-13	石鏵	黒曜石	1.4	1.0	0.4	(1.0)	96	S65	—
83	14	C区 F-13	石鏵	黒曜石	1.6	1.2	0.4	(1.2)	96	S95	—
83	15	C区 F-13	石鏵	砂岩	2.0	1.5	0.5	(1.6)	96	—	—
83	16	C区 F-14	石鏵	黒曜石	2.5	1.5	0.4	1.5	96	S57	—
83	17	C区 F-14	石鏵	黒曜石	2.2	1.6	0.5	(1.6)	96	S75	—
83	18	C区 H-14	石鏵	黒曜石	1.9	1.3	0.3	1.1	96	S102	—
83	19	C区 F-14	石鏵	黒曜石	1.3	1.1	0.2	(0.9)	96	S55	—
83	20	C区 F-14	石鏵	黒曜石	1.2	1.2	0.3	(1.0)	96	S56	—
83	21	C区 F-14	石鏵	黒曜石	1.2	1.0	0.5	(1.1)	96	—	—
83	22	C区 F-14	石鏵	黒曜石	1.0	1.1	0.2	(0.6)	96	S50	—
83	23	C区表探	石鏵	黒曜石	1.4	1.1	0.3	(0.6)	96	—	—
83	24	B区	石鏵	黒曜石	2.1	1.7	0.4	(1.6)	96	—	試掘トレンチ内
83	25	A・B区表探	石鏵	黒曜石	1.1	1.5	0.3	(1.1)	96	—	—
83	26	C区 F-14	二次加工剥片	黒曜石	1.8	1.5	0.6	2.4	96	—	—
83	27	C区 F-14	二次加工剥片	黒曜石	1.9	1.8	0.6	2.6	96	—	—
83	28	C区 F-14	二次加工剥片	黒曜石	2.4	1.6	0.4	1.8	96	—	—
83	29	C区 F-14	二次加工剥片	黒曜石	2.1	1.7	0.4	(1.8)	96	S3	—
83	30	J-14	二次加工剥片	水晶	3.2	2.1	1.5	1.6	96	S17	—
83	31	C区 F-13	二次加工剥片	黒曜石	1.9	1.7	0.5	2.1	96	—	—
83	32	C区 F-13	二次加工剥片	黒曜石	2.9	1.5	0.8	3.7	96	—	—
83	33	C区 F-14	石鏵	黒曜石	2.0	1.6	0.6	2.2	96	—	—
84	1	A区 R-24	両刃石斧か	ホルンフェルス	8.6	4.2	1.5	79.0	96	S119	早期。刃部に摩耗した使用痕が残る。
84	2	C区 G-14	打製石斧	ホルンフェルス	11.0	4.3	1.4	81.0	96	S86	短冊形。
84	3	C区 F-13	打製石斧	粘板岩	12.8	5.8	2.2	150.0	96	S78	分銅形。
84	4	C区 F-13	打製石斧	ホルンフェルス	16.1	8.3	1.5	276.0	96	S87	分銅形。
84	5	C区 F-14	打製石斧	ホルンフェルス	14.0	7.0	1.9	227.0	96	S37	分銅形。
84	6	B区 M-19	打製石斧	ホルンフェルス	13.9	5.6	2.0	192.0	96	S143	短冊形。
84	7	C区 G-13	打製石斧	ホルンフェルス	10.1	7.7	1.3	136.0	96	S20	分銅形。
84	8	C区 F-13	打製石斧	粘板岩	8.3	3.3	0.8	25.0	96	S64	短冊形。
84	9	C区 G-13	打製石斧	粘板岩	9.0	3.2	0.7	27.0	96	S21	短冊形。
84	10	C区 F-14	打製石斧	ホルンフェルス	7.1	8.3	1.4	(101.0)	96	S33	—
84	11	A区	打製石斧	ホルンフェル	6.0	4.9	1.6	(48.0)	96	—	—
84	12	C区 F-14	磨製石斧(定角式)	蛇紋岩類	4.7	3.8	1.1	(39.0)	96	S7	—
84	13	C区 F-13	石鏵	粘板岩	6.7	4.3	1.8	73.0	96	S81	—
84	14	C区 F-13	石鏵	粘板岩	5.9	4.5	2.0	(64.0)	96	S72	—
84	15	C区 G-15-SK12	二次加工剥片	珪質頁岩	7.4	5.2	1.3	37.0	96	—	—
84	16	C区 F-14	二次加工剥片	珪質頁岩	4.8	2.6	1.2	16.0	96	S89	—
84	17	C区 F-14	二次加工剥片	珪質頁岩	6.3	4.1	1.4	32.0	96	S4	—
84	18	C区 F-14	二次加工剥片	ホルンフェルス	9.0	5.5	0.7	43.0	96	S6	—
84	19	C区 F-14	二次加工剥片	ホルンフェルス	6.0	12.0	2.4	139.0	96	S10	—
84	20	C区 F-14	磨器	ホルンフェルス	17.1	15.7	5.2	1,775.0	96	S60	—
84	21	A区 T-26	石核石器	ホルンフェルス	12.2	11.4	6.2	706.0	96	S19	—
85	22	C区 G-13	磨石・凹石	安山岩	11.2	6.1	6.1	656.0	96	S103	—
85	23	C区 F-14	磨石・凹石	花崗岩	9.4	8.1	4.7	601.0	96	S35	—
85	24	C区 F-13	磨石・凹石	花崗岩	10.7	6.9	4.0	436.0	96	S79	—
85	25	C区 F-13	磨石・凹石	玄武岩	10.2	8.2	5.3	792.0	96	S77	—
85	26	C区 G-13	磨石・凹石	デイサイト	9.3	7.3	3.7	344.0	96	S110	—
85	27	C区 F-14	磨石	花崗岩	13.0	8.0	5.1	936.0	96	S38	—
85	28	C区 F-13	磨石	安山岩	6.5	6.0	4.4	251.0	96	S80	—
85	29	J-13	磨石	安山岩	8.3	7.8	3.2	309.0	96	S1	—
85	30	C区 G-13	磨石	砂岩	7.0	6.3	4.5	308.0	96	S105	—
85	31	K-14	磨石	砂岩	9.4	8.5	4.9	(523.0)	96	S4	—
85	32	C区 F-14	蔽石	玄武岩	11.1	8.3	4.2	(600.0)	96	S9	—
85	33	C区 F-13	磨石	砂岩	5.1	3.2	2.2	57.0	96	S63	—
86	34	C区 G-14	多孔石	玄武岩	(29.3)	(19.6)	15.2	(7,395.0)	96	S113	—
86	35	C区 F-14	多孔石	玄武岩	16.5	22.8	15.2	4,740.0	96	S14	—
86	36	B区 I-15	多孔石	玄武岩	23.2	27.8	7.0	14,900.0	96	S142	—
86	37	C区・SK11	石皿	玄武岩	(15.5)	(17.7)	8.2	(4,830.0)	96	—	—
86	38	—	石皿	玄武岩	(23.2)	(20.0)	8.6	(2,200.0)	96	—	—
86	39	C区 F-14	石鏵	玄武岩	(25.5)	10.4	11.0	(5,440.0)	96	S32	—

第6表 中・近世遺物観察表

カッコ内の数値は復元値を示す。

棟号	個別番号	出土位置	器種	時期	長さ(cm) 直径(cm)	幅(cm) 孔経(cm)	厚さ(cm) 高さ(cm)	重量(g)	調査年度	遺物番号	備考
87	1	SK51	火打金	中世	8.30	0.30	(3.10)	(33)	95	1139	—
87	2	SK53	古銭	中世	2.41	0.68	0.14	3	95	419	「大観通寶」初鋳1107年(北宋)。3と裏面で密着。
87	3	SK53	古銭	中世	2.42	0.62	0.15	3	95	419	「大観通寶」初鋳1107年(北宋)。2と裏面で密着。
87	4	SK53	古銭	中世	2.43	0.63	0.17	3	95	1332	「大観通寶」初鋳1107年(北宋)。5と表面で密着。
87	5	SK53	古銭	中世	2.50	0.66	0.18	3	95	1332	「大観通寶」初鋳1107年(北宋)。4と表面で密着。
87	6	SK53	古銭	中世	2.42	0.62	0.18	3	95	1333	「大観通寶」初鋳1107年(北宋)。7と表面で密着。
87	7	SK53	古銭	中世	2.47	0.64	0.15	2	95	1333	「大観通寶」初鋳1107年(北宋)。6と表面で密着。
87	8	SD-06	古銭	中世	2.42	0.69	0.14	3	95	684	「熙寧元寶」初鋳1068年もしくは「聖宋元寶」初鋳1101年(北宋)か。篆背。
87	9	SD-06	古銭	中世	(2.41)	(0.70)	0.11	2	95	685	「紹聖元寶」初鋳1094年(北宋)か。
87	10	SD-06	古銭	中世	2.53	0.58	0.13	2	95	683	「永樂通寶」初鋳1408年(明)。
87	11	SD-06	古銭	中世	2.45	0.72	0.16	3	95	686	銭文判読不可能。
87	12	E-07	古銭	中世	2.35	0.55	0.20	3	95	7059	「洪武通寶」初鋳1368年(明)。
87	13	I A区表探	古銭	近世	2.59	0.63	0.13	2	95	—	「寛永通寶」初鋳1636年。

# 図 版



遺跡遠景（西から）



I A 区配石遺構検出状況（東から）



第 1 号敷石住居跡（北東から）



第1号掘立柱建物跡（北から）



第5・6号溝（北から）





第1号敷石住居跡（東から）



第2号土坑（東南から）



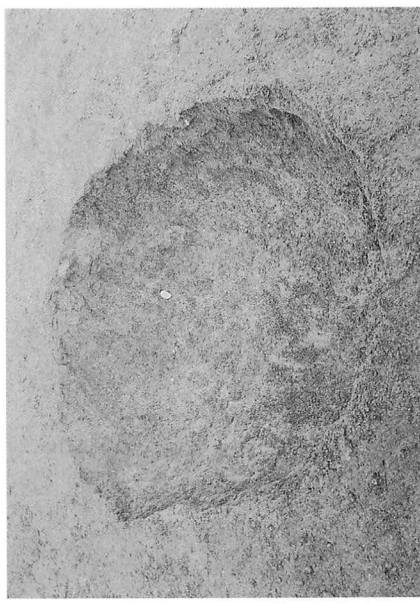
第1号敷石住居跡炉（東から）



第14号土坑（南から）



第2号焼土遺構（東から）



第24号土坑（南から）



第7号焼土遺構（北から）



第3号集石遺構（南西から）

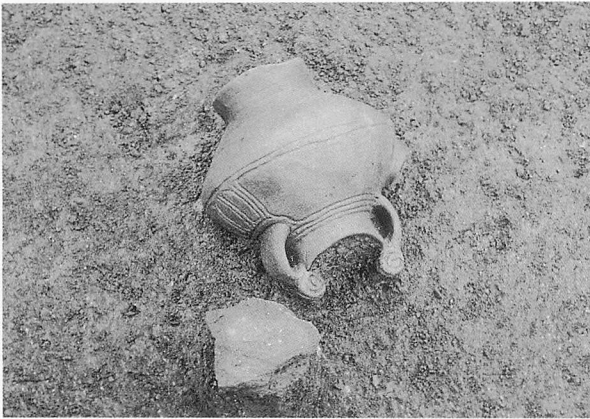
図版 4



IA区縄文遺構面完掘状況（東から）



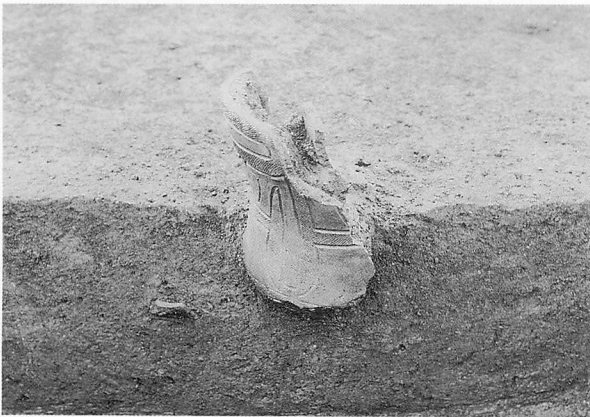
IIA区奈良・平安時代遺構面完掘状況（東から）



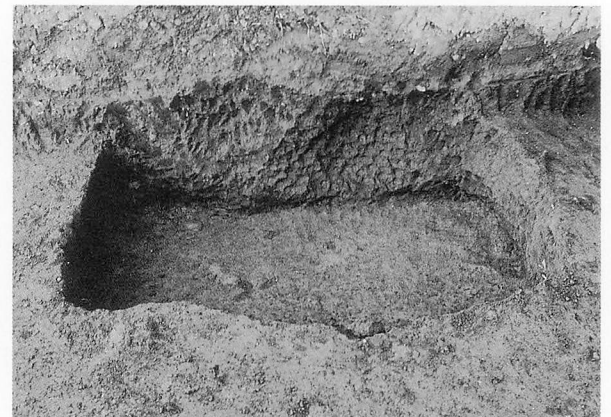
II区包含層遺物出土状況（南西から）



第37号土坑（西から）



II区包含層遺物出土状況（東から）



第82号土坑（南から）



第46号土坑（東から）



第89号土坑（南から）

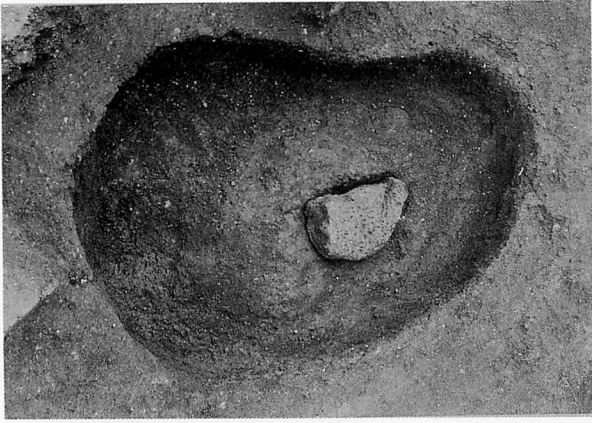


第 8 次調査表土剥ぎ

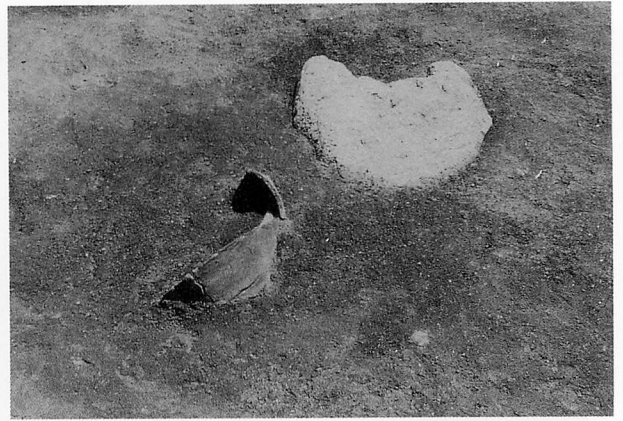


第 8 次調査 B 区作業風景

図版 6



第11号土坑遺物出土状況



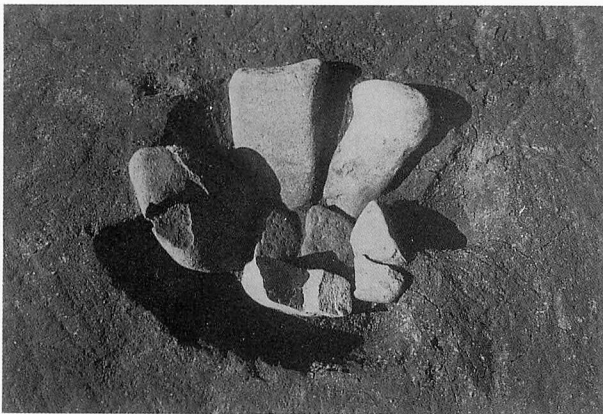
第16号土坑検出状況



第17号土坑検出状況



第1号集石遺構検出状況



第3号集石遺構検出状況



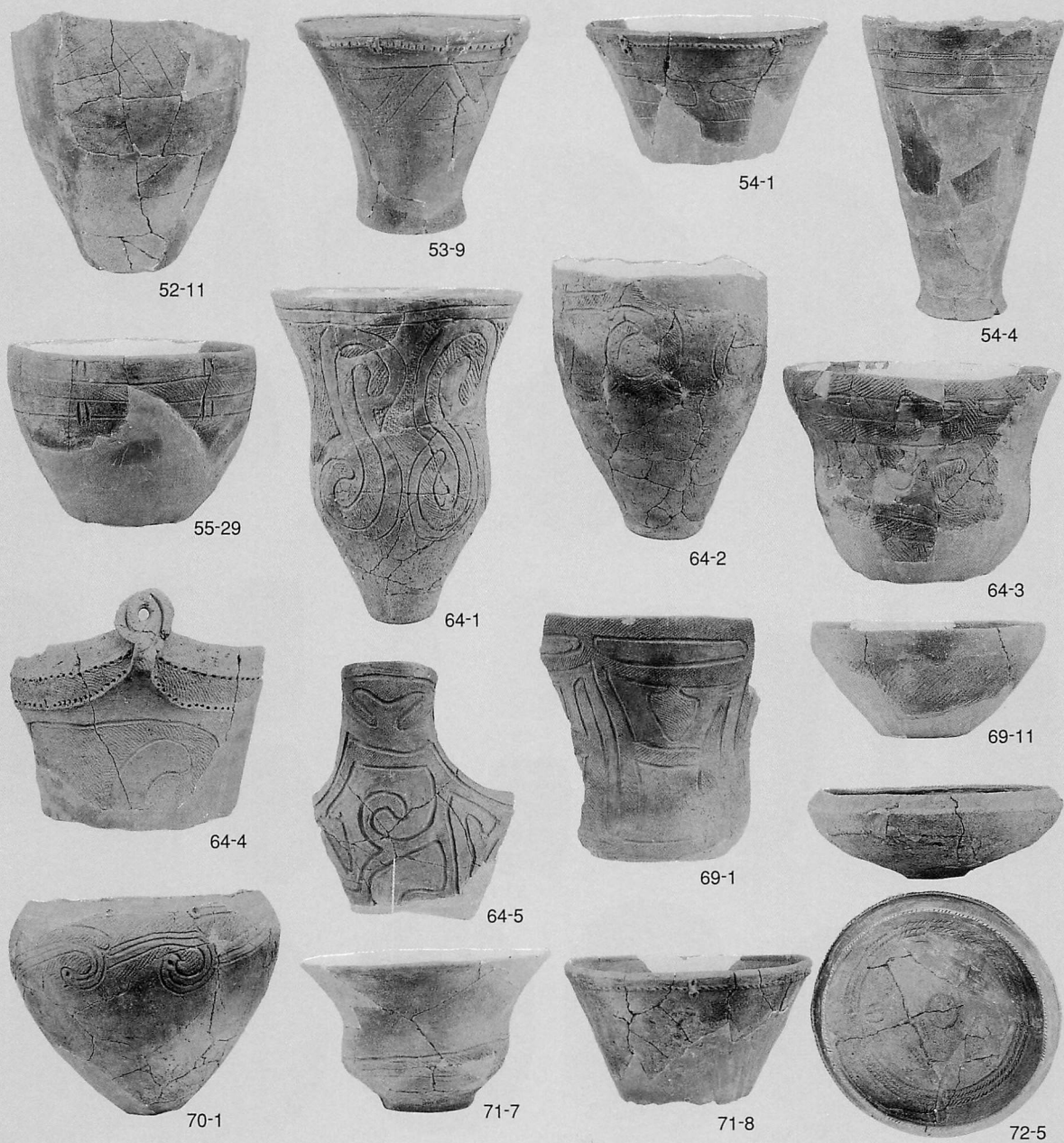
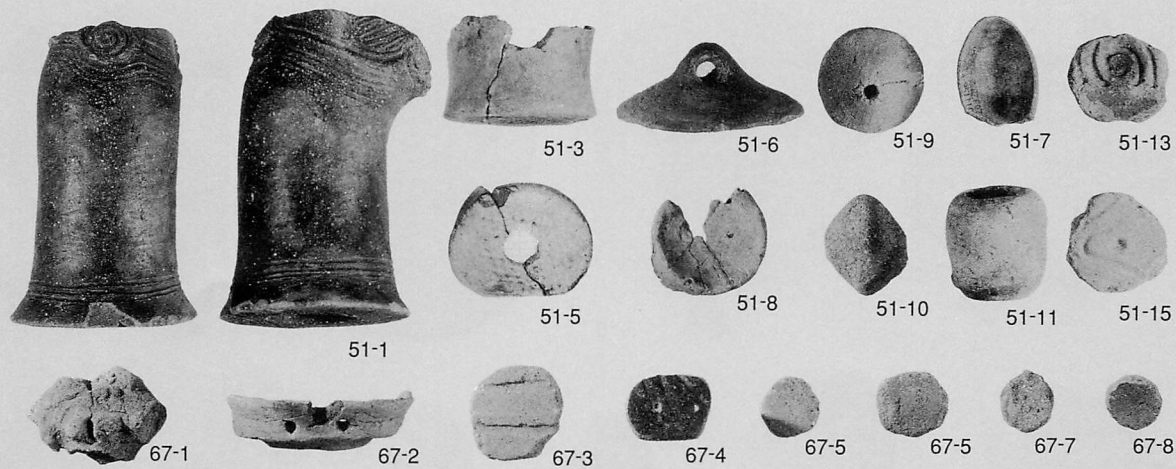
第3号配石遺構検出状況

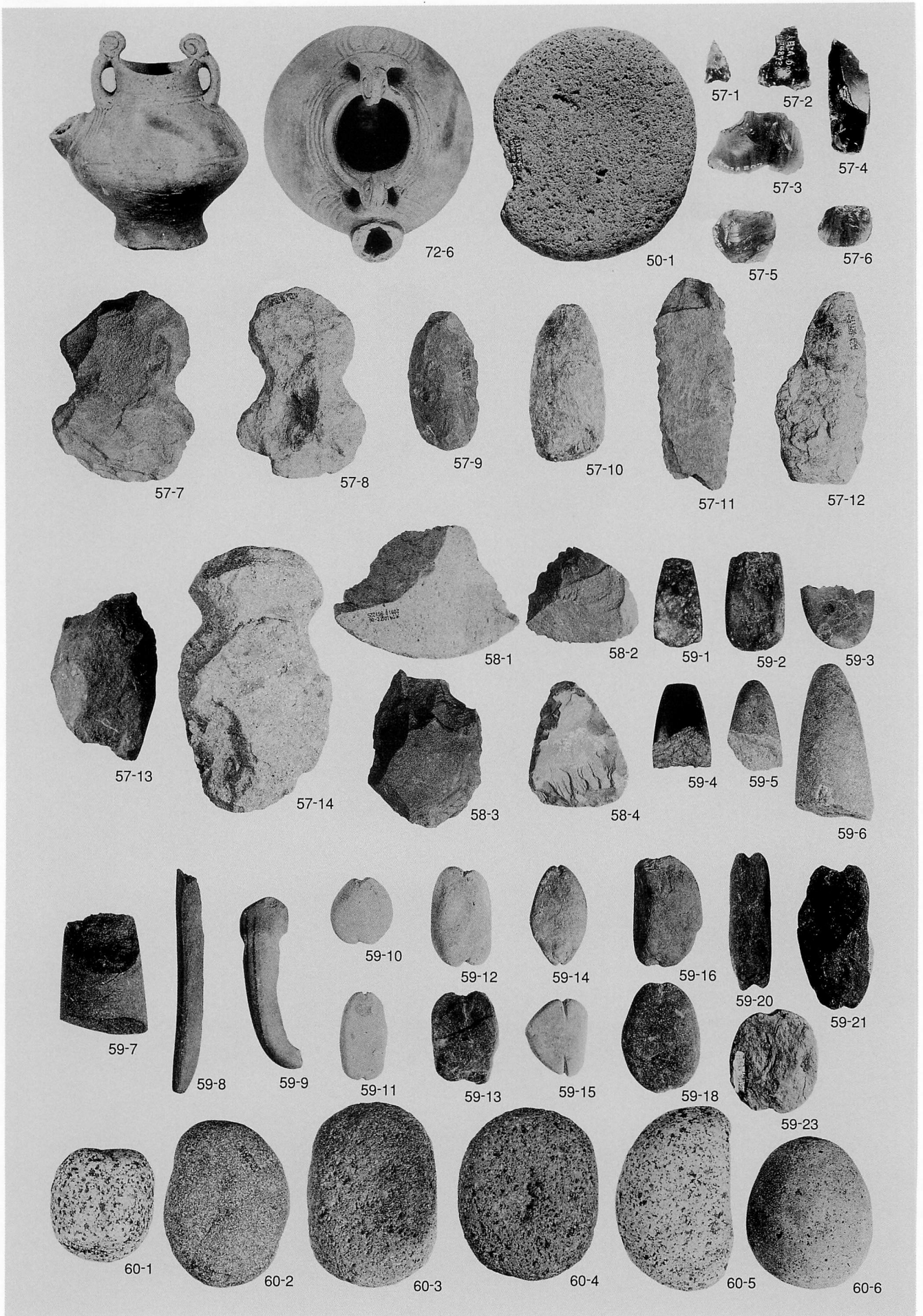


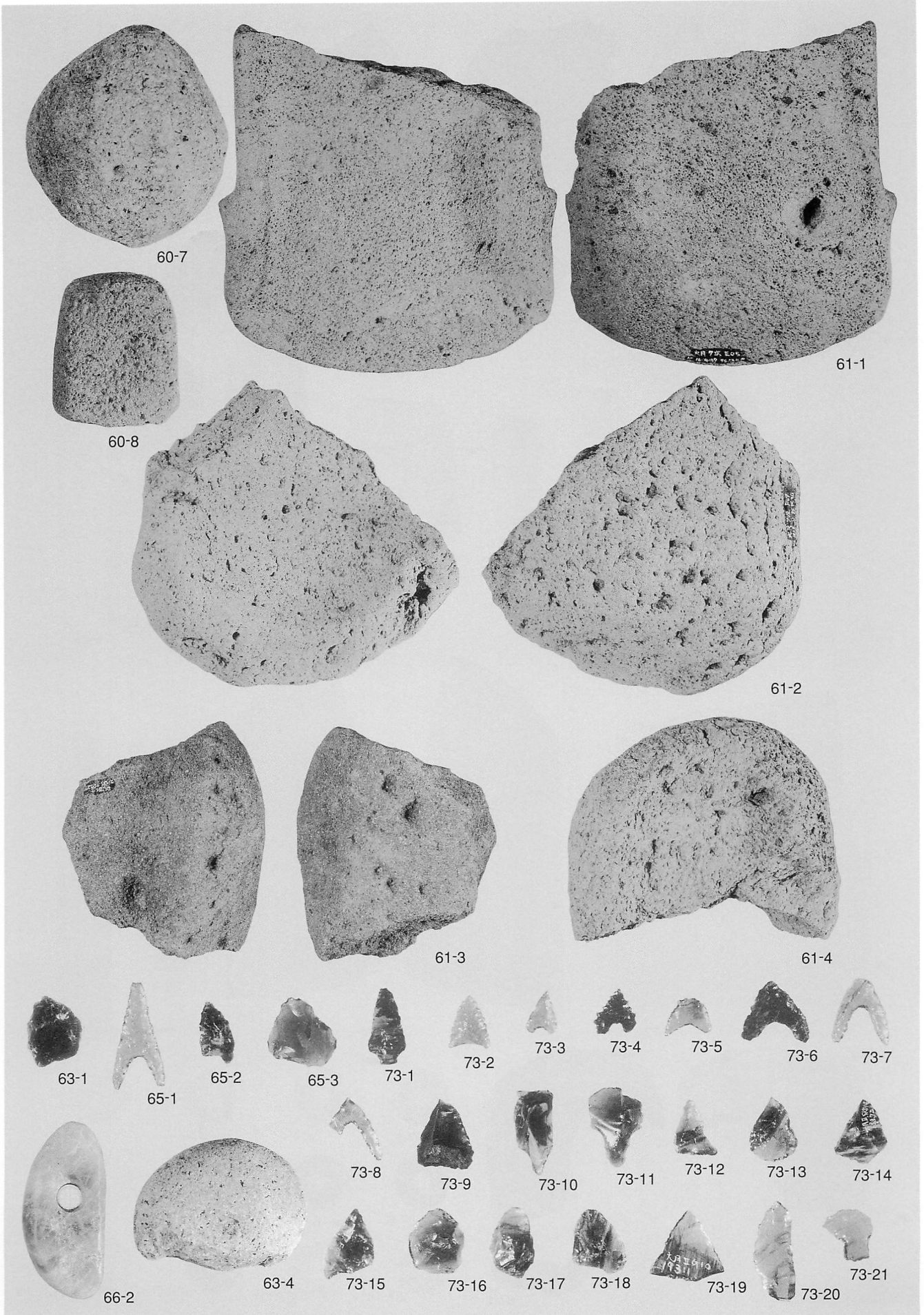
ピット群検出状況

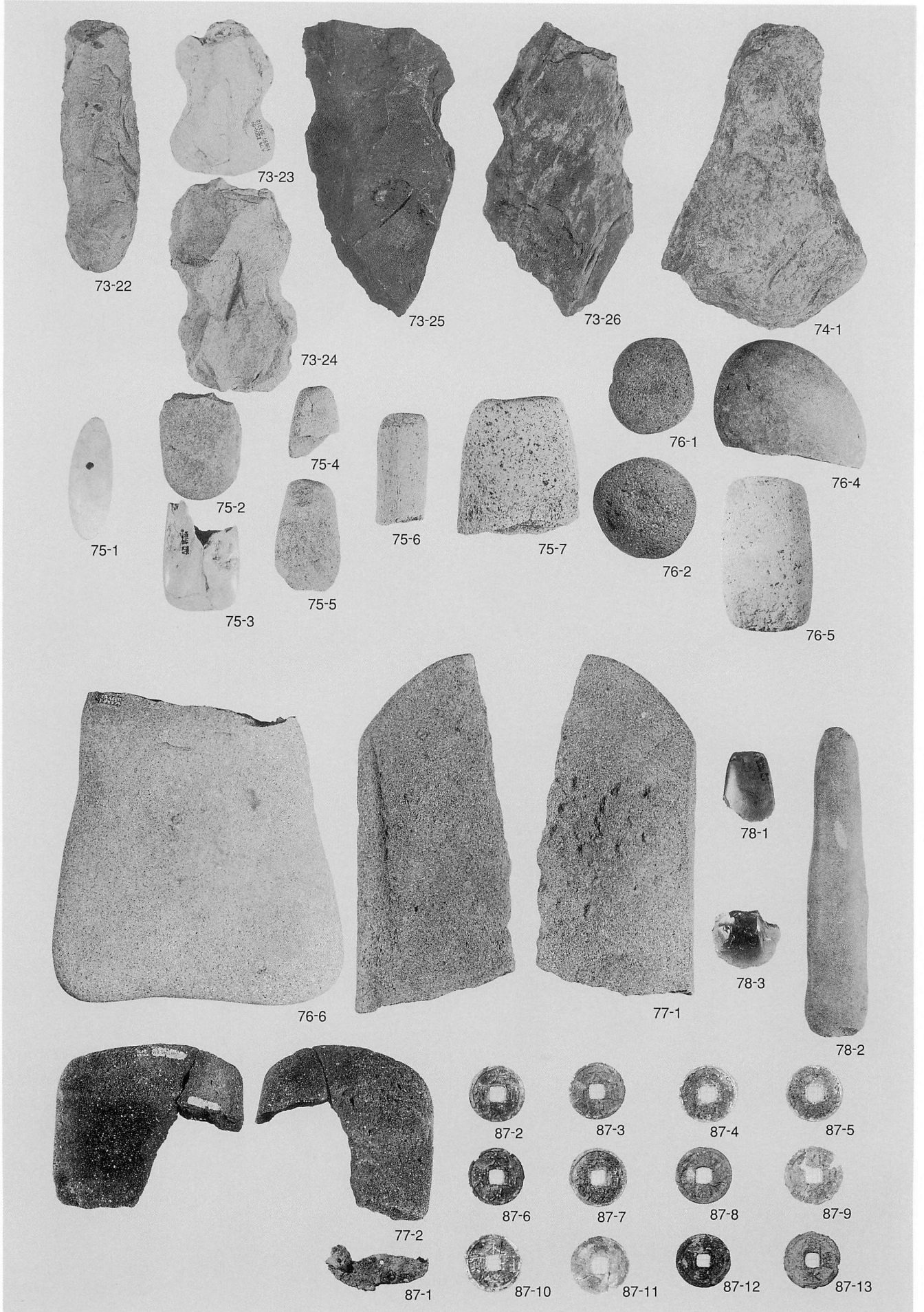


磨製石斧出土状況

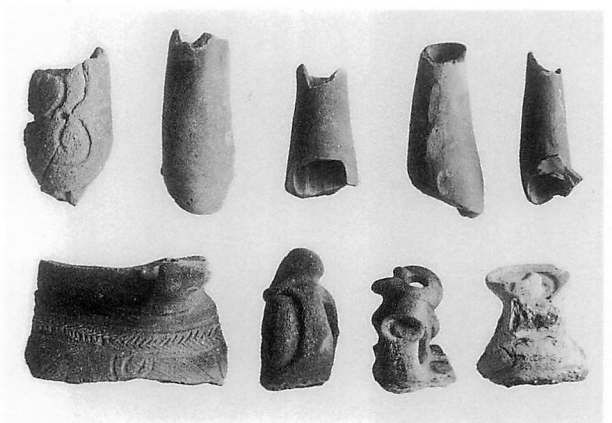
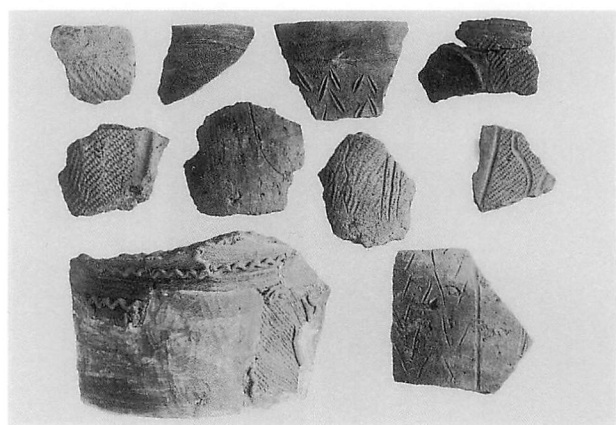
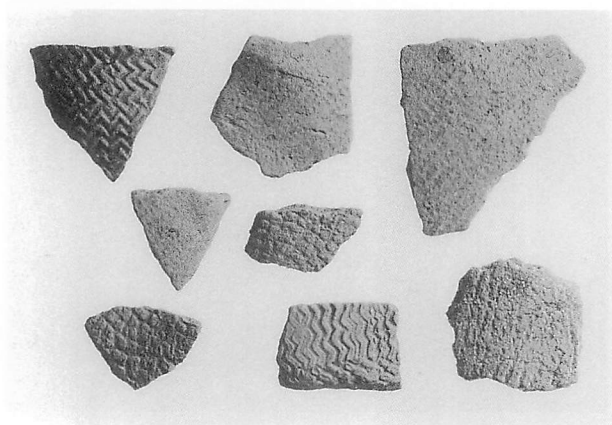




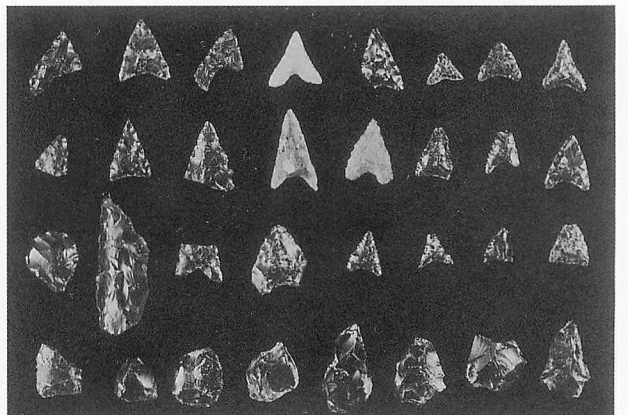
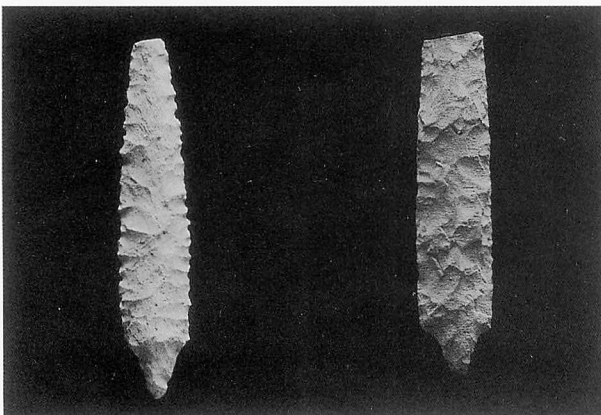
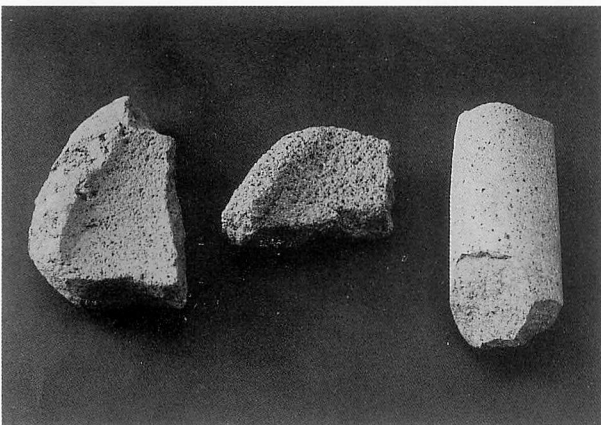
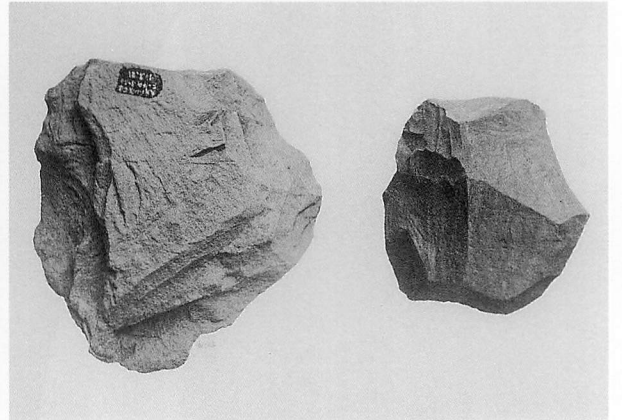
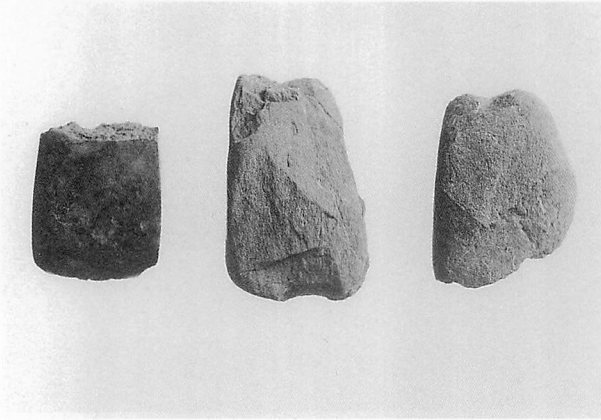
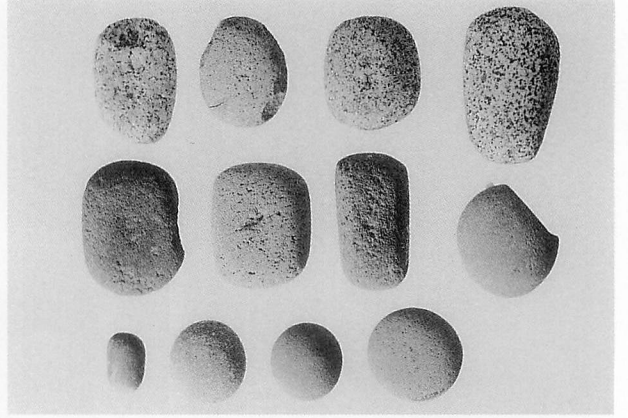
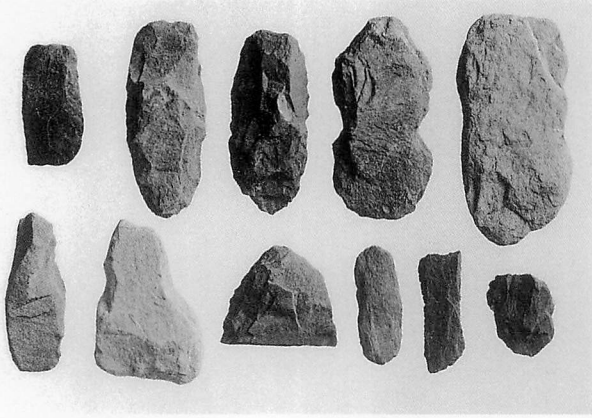








第8次調査出土土器



# 報告書抄録

ふりがな	おおつきいせきだい7・8じちょうさ
書名	大月遺跡第7・8次調査
副題	大月バイパス建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第159集
著者名	小林公治・笠原みゆき
発行者	山梨県教育委員会・建設省関東地方建設局甲府工事事務所
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根 923 055-266-3016
印刷所	(株)少国民社
発行日	平成12年(2000年)3月31日

## 大月遺跡(第7・8次調査)概要

ふりがな	おおつきいせき(だい7・8じちょうさ)
所在地	山梨県大月市大月二丁目10-1161・662外
	25,000分の1地形図 都留
	位置 東経138°56'38" 北緯35°36'19" 標高366m
	市町村コード19206 大月市遺跡番号44(大月市教育委員会1995掲載)
調査原因	大月バイパス新築工事
調査期間	第7次調査1995年9月25日～1996年1月19日、1997年9月25日～1998年2月13日 第8次調査1996年6月5日～1996年8月30日、1996年12月4日～1997年1月21日
調査面積	2,482㎡
縄文時代草創期・早期・中期・後期	
種別	集落(精神的活動場、生活残滓廃棄場)
主な遺構	大規模配石群、敷石住居跡1軒、土坑50基、焼土遺構24ヶ所、集石6ヶ所、ピット56ヶ所
主な遺物	縄文土器(早期・中期・後期)、土偶、翡翠大珠、有舌尖頭器、石錘、石棒
特記事項	縄文時代後期を中心とする膨大な量の土器と石器がかなり濃密な遺物包含層として形成されている。一方、遺構密度は低く、他地点での調査成果を踏まえてみると、この地点は居住地背後で主に精神的活動地および生活残滓の廃棄所として利用されたと考えられる。また脂肪分析により、注口土器、磨石・敲石類、石皿、の内容物・対象物を分析
奈良・平安時代	
種別	集落
主な遺構	掘立柱建物跡1棟、土坑52基、溝2条、ピット67ヶ所
主な遺物	土師器、須恵器
特記事項	建物遺構は掘立柱建物1棟で、出土遺物も極めて少ないが、建物の南に二重の区画溝。
中世	
種別	墓地か
主な遺構	土坑35基、溝4条、ピット75ヶ所
主な遺物	陶磁器、渡来銭、火打金
特記事項	主たる遺構は土坑で、これらの性格は不明であるが、墓塚などの機能が推測される。
近世	
種別	集落か
主な遺構	配石遺構3、ピット列
主な遺物	寛永通寶
特記事項	ピット列の性格等は不明。

本書は長期保存を考慮し、すべて中性紙を使用しています。

平成12年(2000年)3月25日 印刷

平成12年(2000年)3月31日 発行

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第159集

## 大月遺跡第7・8次調査

—大月バイパス建設に伴う発掘調査報告書—

編 集 山梨県埋蔵文化財センター

〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923

電 話 055(266)3016

発 行 山梨県教育委員会・建設省関東地方建設局甲府工事事務所

印 刷 株式会社 少国民社

〒400-0031 山梨県甲府市丸の内2-27-24

電 話 055(226)2125

